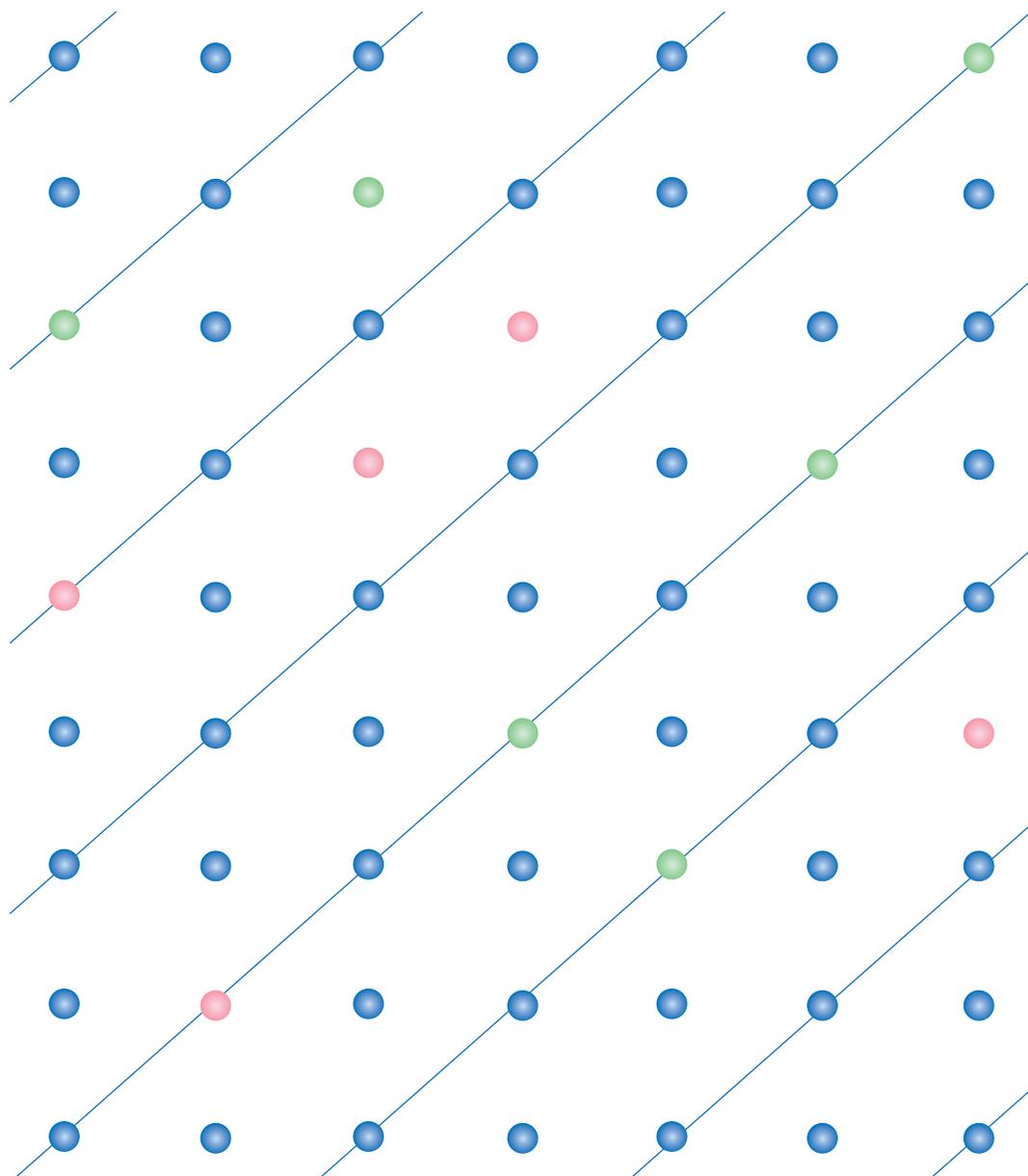


シラバス

2018年度

リハビリテーション学科

理学療法専攻・作業療法専攻・視機能療法専攻



平成医療短期大学

Heisei College of Health Sciences

建学の精神

「誠意と親切と広い心」を理念に、医療の基本的精神である科学と人間愛に基づき、医療の知識と技術向上に努め、地域医療福祉等に貢献できる人材を養成する。

教育の目的

1 全学の目的

建学の精神を理念として、豊かな一般教養の上に専門分野の実践的な学問及び技術を深く教授し、地域社会等に貢献し得る優秀な人材を養成する。

2 看護学科

深い人間愛をもち、高い倫理観の上に、高度化・多様化する医療・福祉に相応し得る次の知識・技術及び実践力をもつ看護師を養成する。

- (1) 一般教養と看護領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- (2) 高度化、多様化する医療環境の変化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- (3) 生命の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。

3 リハビリテーション学科理学療法専攻

深い人間愛をもち、高い倫理観の上に、高度化・多様化する医療・福祉に相応し得る次の知識・技術及び実践力をもつ理学療法士を養成する。

- (1) 一般教養と理学療法領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- (2) 高度化、多様化する医療環境の変化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- (3) 生命の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。

4 リハビリテーション学科作業療法専攻

深い人間愛をもち、高い倫理観の上に、高度化・多様化する医療・福祉に相応し得る次の知識・技術及び実践力をもつ作業療法士を養成する。

- (1) 一般教養と作業療法領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- (2) 高度化、多様化する医療環境の変化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- (3) 生命の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。

5 リハビリテーション学科視機能療法専攻

深い人間愛をもち、高い倫理観の上に、高度化・多様化する医療・福祉に相応し得る次の知識・技術及び実践力をもつ視能訓練士を養成する。

- (1) 一般教養と作業療法領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- (2) 高度化、多様化する医療環境の変化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- (3) 生命の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。

学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

1 全学方針

科学と人間愛を教育の根本として、一般教養の上に専門分野の実践的な学問及び技術を修得し、地域社会等に貢献し得る優秀な人材を養成することを教育目的として、次の能力を身につけるよう教育課程を編成する。この教育課程における所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認定し学位を授与する。

- (1) 全学共通の教養科目の履修を通して、社会的責任感、良好な人間関係、コミュニケーション能力、倫理観など、医療人として求められる教養を身につける。
- (2) 学修を通して、専門職として求められる専門知識、技術及び実践力を修得し、地域医療福祉に貢献できる力を身につける。
- (3) 学科・専攻課程の教育目的に基づく学修を通して、人間、医療福祉問題等を科学的、論理的に思考し、柔軟な発想による課題発見、解決のための知識、技術等を身につける。

2 看護学科

看護学科の教育目的に基づくカリキュラムを履修し、卒業に必要な単位を修め、次の能力等を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重した人間関係を構築できる。
- (2) 一般教養と看護領域の専門知識、技術及び実践力をもつ。
- (3) 良識、倫理観と責任感を持ち、患者、患者家族、チームを尊重し、責任をもって職務を実践できる。
- (4) 向上心と探究心をもって職務を実践できる。

3 リハビリテーション学科理学療法専攻

リハビリテーション学科理学療法専攻の教育目的に基づくカリキュラムを履修し、卒業に必要な単位を修め、次の能力等を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重した人間関係を構築して、理学療法を実践する。
- (2) 一般教養と理学療法領域の専門知識、技術及び実践力をもつ。
- (3) 良識、倫理観と責任感を持ち、患者、患者家族、チームを尊重し、責任をもって職務を実践できる。
- (4) 向上心と探究心をもって職務を実践できる。

4 リハビリテーション学科作業療法専攻

リハビリテーション学科作業療法専攻の教育目的に基づくカリキュラムを履修し、卒業に必要な単位を修め、次の能力等を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重した人間関係を構築して、作業療法を実践する。
- (2) 一般教養と作業療法領域の専門知識、技術及び実践力をもつ。
- (3) 良識、倫理観と責任感を持ち、患者、患者家族、チームを尊重し、責任をもって職務を実践できる。
- (4) 向上心と探究心をもって職務を実践できる。

5 リハビリテーション学科視機能療法専攻

リハビリテーション学科視機能療法専攻の教育目的に基づくカリキュラムを履修し、卒業に必要な単位を修め、次の能力等を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与する。

- (1) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重した人間関係を構築して、視機能療法を実践する。
- (2) 一般教養と作業療法領域の専門知識、技術及び実践力をもつ。
- (3) 良識、倫理観と責任感を持ち、患者、患者家族、チームを尊重し、責任をもって職務を実践できる。
- (4) 向上心と探究心をもって職務を実践できる。

教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

1 全学方針

人間愛と社会生活に求められる教養、倫理、責任感及びコミュニケーション能力を修得し、医療技術者としての専門知識、実践力及び課題解決能力を身につける。

- (1) 社会生活に求められる教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力を身につけるため、全学に総合教育科目を配置する。
- (2) 専門教育科目は、専門職の基礎知識である人体、疾病などの専門基礎を学び、それぞれの学科・専攻課程ごとに、次のとおり専門知識・技術及び実践力を修得する科目を配置する。

2 看護学科

専門教育科目

- (1) 看護の基礎知識と能力を修得するため、人体の理解、疾病及び社会構造などの科目を配置する。
- (2) 看護の領域の系統別に科目を配置し、それぞれの専門知識・技術を発展的に高めるようにする。
- (3) 看護の領域ごとに、知識応用力、専門職コミュニケーション能力を修得し、実践能力を高める実習科目を年次段階的に配置する。

3 リハビリテーション学科理学療法専攻

専門教育科目

- (1) 理学療法の基礎知識と能力を修得するため、人体の理解、疾病及び社会構造などの科目を配置する。
- (2) 理学療法の領域の系統別に科目を配置し、それぞれの専門知識・技術を発展的に高めるようにする。
- (3) 理学療法の領域ごとに、知識応用力、専門職コミュニケーション能力を修得し、実践能力を高める実習科目を年次段階的に配置する。

4 リハビリテーション学科作業療法専攻

専門教育科目

- (1) 作業療法の基礎知識と能力を修得するため、人体の理解、疾病及び社会構造などの科目を配置する。
- (2) 作業療法の領域の系統別に科目を配置し、それぞれの専門知識・技術を発展的に高めるようにする。
- (3) 作業療法の領域ごとに、知識応用力、専門職コミュニケーション能力を修得し、実践能力を高める実習科目を年次段階的に配置する。

5 リハビリテーション学科視機能療法専攻

専門教育科目

- (1) 視機能療法の基礎知識と能力を修得するため、人体の理解、疾病及び社会構造などの科目を配置する。
- (2) 視機能療法の領域の系統別に科目を配置し、それぞれの専門知識・技術を発展的に高めるように配置する。
- (3) 視機能療法の領域ごとに、知識応用力、専門職コミュニケーション能力を修得し、実践能力を高める実習科目を年次段階的に配置する。

履修要領

リハビリテーション学科

理学療法専攻

作業療法専攻

視機能療法専攻

履修要領

1. 教育課程の編成の基本的方針

本学は、知識、技能両面において教養ある医療技術者を育成すると共に、多様化する社会に順応できるよう、人間、社会、文化、語学といった観点における学問を学び、また、医療に携わるものとして不可欠なコミュニケーション能力や、社会人としての基盤構築のための科目を編成しています。

さらに、核専門分野の科目についても学術的に編成した上で細分化し、それぞれが体系的な学問として学ぶことができる配置となっています。

これにより、一人の社会人として、そして医療に拘わるものとしての資質と技術を磨き、専門性ととんだ医療に順応できる医療技術者の育成を目指しています。

本学の教育課程は「総合教育科目」と「専門教育科目」に大別し、「総合教育科目」は「教養教育科目」と「基礎教育科目」に、「専門教育科目」は「専門基礎科目」「専門科目」「統合科目」に区分して、科目軍による教育が有機的かつ系統的に行われるように配慮されています。

2. 「総合教育科目」の考え方

「総合教育科目」には、大半の科目についての両学科学生が合同で受講できるよう、科目立てして配慮しています。職種は違うが同じ医療人との観点から捉えた場合、両職種に共通した知識として蓄えたい分野があることから、それらに関する科目を配置しています。

まず「教養教育科目」には、現代社会を取り巻く様々な要素について考察する力を養うために、また看護師、理学療法士、作業療法士、視能訓練士として、保健、医療、福祉の分野で貢献するための礎となる科目を配置しています。医療技術者として活躍するためには、社会の多様な事象や考え方に対して理解を深め、受け止めつつ自らの考えを確立し、なおかつ相手の立場に立って考えることが出来る感性と、洞察力が求められます。よってこれらに関する科目を配置し、人を科学と社会に関連付けながら学べるように編成しています。

次に、「基礎教育科目」には、「専門教育科目」を学び、理解を深めるための基盤となる社会の仕組みを理解することや、読み、書き、思考力の形成、コミュニケーション能力の育成に主眼を置いた科目群を配置しています。

3. 「専門教育科目」の考え方

「専門教育科目」は、両学科がそれぞれ独自性をもった科目群で構成しています。

リハビリテーション学科の各専攻に配置した「専門基礎科目」には、理学療法士、作業療法士、視能訓練士としての基礎的知識を得る上で、必要不可欠である基礎医学に関する科目群を配置しています。

「専門科目」には、医療技術に精通した理学療法士、作業療法士、視能訓練士を育成するために必要である科目群を系統立てて配置しています。これらを学ぶ中で、教育目標としている施設や地域を問わず医療技術者としての高いコミュニケーション能力と倫理的判断力、豊かな人間性を兼ね備えた人材を育成するために、教員との関わりが多く持てる演習を多く取り入れています。

本学の教育課程及び授業科目は、次表のとおりです。

◎リハビリテーション学科 理学療法専攻

区分		授業科目	単位数		卒業要件	
			必修	選択		
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	生物学	2		2
			物理学		2	
			化学		2	
			情報科学		2	
			人間工学		2	
		人間と社会	環境と人間		2	
			社会学		2	
			人間関係論		2	
			ボランティア論		2	
			哲学		2	
	基礎教育科目	コミュニケーション	教育学		2	2
			心理学		2	
			生命倫理学	2		
		外国語	基礎演習	1		3
			文章表現法	1		
			コミュニケーション学	1		
専門基礎科目	人体の構造	英語Ⅰ（教養英語）	1		1	
		英語Ⅱ（日常英会話）		1		
		英語Ⅲ（専門英語）		1		
		ドイツ語		1		
		中国語		1		
	人体の機能	解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）	1		5	
		解剖学Ⅱ（内臓系）	1			
		解剖学Ⅲ（神経系）	1			
		解剖学演習（体表解剖・上肢）	1			
		解剖学演習（体表解剖・下肢）	1			
心身の発達	生理学Ⅰ（動物的機能）	1		6		
	生理学Ⅱ（植物的機能）	1				
	生理学演習	1				
	運動学総論	1				
疾病の成り立ち	臨床運動学	1		9		
	運動学演習	1				
	人間発達学	1				
	病理学概論	2				
	内科学	1				
障害の成り立ち	整形外科学	1		2		
	神経内科学	1				
	精神医学	2				
保健・医療・福祉の連携	小児科学	2		1		
	リハビリテーション医学	2				
	老年医学		1			
	スポーツ医学		1			
	保健医療論	1				
	社会福祉学	1				
	医療安全管理論	1				
	理学療法総論	1				
	理学療法演習	1				
	運動療法総論	1				
専門教育科目	基礎理学療法学	理学療法基礎用語	1		7	
		理学療法研究方法論	1			
		理学療法特論Ⅰ	1			
		理学療法特論Ⅱ	1			
		卒業研究		2		
	理学療法評価学	クリニカルリーディング		2	2	
		運動器系検査法	1			
		神経系検査法	1			
		動作・画像解析学	1			
		理学療法評価学演習	2			
理学療法治療学	高齢者機能障害学	2		20		
	脳・神経機能障害学Ⅰ（総論）	1				
	脳・神経機能障害学Ⅱ（各論）	1				
	骨・関節機能障害学（上肢）	1				
	骨・関節機能障害学（下肢・体幹）	1				
	内部機能障害学（循環器系）	1				
	内部機能障害学（代謝・呼吸器系）	1				
	発達機能障害学	1				
	物理学療法（温熱療法）	1				
	物理学療法（電気・牽引・水治療法）	1				
	義肢装具学	2				
	日常生活活動学	2				
	理学療法総合セミナーⅠ	1				
	理学療法総合セミナーⅡ	1				
	脳・神経系理学療法治療技術	1				
骨・関節系理学療法治療技術	1					
内部系理学療法治療技術	1					
地域理学療法学	地域理学療法学	2		4		
	生活環境論	2				
	臨床実習Ⅰ（基礎）	1				
臨床実習	評価実習前セミナー	1		19		
	臨床実習Ⅱ（評価）	3				
	臨床実習Ⅲ（総合前期）	7				
	臨床実習Ⅳ（総合後期）	7				
合計					99	

◎リハビリテーション学科 作業療法専攻

区分		授業科目	単位数		卒業要件	
			必修	選択		
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	生物学	2		2
			物理学		2	
			化学		2	
			情報科学		2	
			人間工学		2	
			環境と人間		2	
		人間と社会	社会学		2	
			人間関係論		2	
			ボランティア論		2	
			哲学		2	
			教育学		2	
			心理学		2	
	基礎教育科目	コミュニケーション	生命倫理学	2		2
			基礎演習	1		
			文章表現法	1		
		外国語	コミュニケーション学	1		3
			英語Ⅰ（教養英語）	1		
			英語Ⅱ（日常英会話）		1	
専門基礎科目	人間の構造	英語Ⅲ（専門英語）		1	1	
		ドイツ語		1		
		中国語		1		
		解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）	1			5
		解剖学Ⅱ（内臓系）	1			
		解剖学Ⅲ（神経系）	1			
	解剖学演習（体表解剖・骨）	1				
	解剖学演習（体表解剖・筋）	1				
	生理学Ⅰ（動物的機能）	1		6		
	生理学Ⅱ（植物的機能）	1				
	生理学演習	1				
	運動学総論	1				
	臨床運動学	1				
	運動学演習	1				
	心身の発達	人間発達学	1		1	
		病理学概論	2			
		内科学	1			9
	整形外科	1				
神経内科学	1					
精神医学	2					
小児科学	2					
障害の成り立ち	リハビリテーション医学	2		3		
	老年医学	1				
	保健医療論	1			3	
保健・医療・福祉の連携	社会福祉学	1				
	医療安全管理論	1				
	作業療法総論	1		7		
基礎作業療法学	作業療法研究方法論	1				
	基礎作業学	1				
	基礎作業学実習Ⅰ（和紙工芸・七宝・木工）	1				
	基礎作業学実習Ⅱ（陶芸・革細工・手芸）	1				
	卒業研究	2				
	作業療法評価学概論	1		5		
作業療法評価学	作業療法評価学Ⅰ（身体機能）	1				
	作業療法評価学Ⅱ（精神機能、活動、環境）	1				
	作業療法評価学演習Ⅰ（身体機能）	1				
	作業療法評価学演習Ⅱ（精神機能、活動、環境）	1				
	作業療法治療技術理論	1			1	
	作業治療学	認知症予防論		1		
作業行動理論			1			
精神障害治療論			1			
ニューロリハビリテーション論			1			
整形外科系障害治療論			1			
日常生活・環境アセスメント論			1			
専門教育科目	作業治療学	老年期障害学	1		18	
		中枢神経障害学	1			
		高次脳機能障害学	1			
		整形外科系障害学	1			
		内部機能障害学	1			
		義肢装具学	1			
		発達機能障害学Ⅰ（総論）	1			
		発達機能障害学Ⅱ（各論）	1			
		日常生活活動学	1			
		生活技術学演習	1			
		応用生活技術学演習	1			
		精神障害学Ⅰ（総論）	1			
		精神障害学Ⅱ（各論）	1			
		作業療法学総合演習Ⅰ（基礎）	1			
		作業療法学総合演習Ⅱ（専門）	1			
		作業療法総合セミナーⅠ（評価）	1			
		作業療法総合セミナーⅡ（評価と介入①）	1			
		作業療法総合セミナーⅢ（評価と介入②）	1			
地域作業療法学	地域作業療法学Ⅰ（制度・支援・連携）	1		4		
	地域作業療法学Ⅱ（実践・就労支援）	1				
	生活環境・福祉機器学	2				
臨床実習	臨床実習Ⅰ（基礎）	1		20		
	評価実習前セミナー	1				
	臨床実習Ⅱ（評価）	4				
	臨床実習Ⅲ（総合前期）	7				
	臨床実習Ⅳ（総合後期）	7				
合計					98	

◎リハビリテーション学科 視機能療法専攻

区分		授業科目	単位数		卒業要件			
			必修	選択				
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	生物学	2		2		
			物理学					
			化学	2				
			情報科学	2				
			人間工学	2				
		環境と人間	2					
		人間と社会	社会学	2				
			人間関係論	2				
	ボランティア論		2					
	基礎教育科目	コミュニケーション	哲学	2		4		
			教育学	2				
			心理学	2				
			生命倫理学	2				
		外国語	基礎演習	1		3		
			文章表現法	1				
			コミュニケーション学	1				
英語Ⅰ（教養英語）			1					
専門基礎科目	人体の構造	英語Ⅱ（日常英会話）		1	1			
		英語Ⅲ（専門英語）		1				
		ドイツ語		1				
	人体の機能	中国語		1	1			
		解剖学Ⅰ（骨・筋肉・循環・内分泌・消化器等）	2					
	心身の発達	解剖学Ⅱ（神経系）	1		3			
生理学Ⅰ（動物的機能）		1						
基礎視能矯正学	人体の機能	生理学Ⅱ（植物的機能）	1		2			
		人間発達学	1					
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	保育学	2		10			
		病理学概論	2					
		健康と保健	1					
		幾何光学	1					
		医療統計学	1					
		一般臨床医学	1					
		神経内科学	1					
		精神医学	2					
臨床心理学	1							
視覚機能の基礎と検査機器	視覚機能の基礎と検査機器	視器の解剖と生理学Ⅰ（眼球・眼球付属器他）	1		9			
		視器の解剖と生理学Ⅱ（視路・眼運動系他）	1					
	視器の病理学	1						
	視覚生理学Ⅰ（基礎）	1						
	生理光学Ⅰ（基礎）	1						
	視機能検査学概論	1						
	視機能検査学Ⅰ（眼科一般検査）	1						
	視機能検査学Ⅱ（眼位検査）	1						
	視機能検査学Ⅲ（両眼視機能検査）	1						
	公衆衛生学	1						
	保健医療福祉と視能障害のリハビリテーションの理念	社会福祉学	1			6		
		医療安全管理論	1					
		医学概論	1					
		障害者概論	1					
視覚障害リハビリテーション		1						
視機能療法学概論		1						
基礎視能矯正学	基礎視能矯正学	基礎視能矯正学Ⅰ（眼球運動、他）	1		9			
		基礎視能矯正学Ⅱ（眼位、両眼視）	1					
		視覚生理学Ⅱ（応用）	1					
		生理光学Ⅱ（眼球光学）	1					
		生理光学Ⅲ（屈折・調整）	1					
		薬理学	1					
		基礎視能矯正学特論Ⅰ（理解と生理、視覚生理）	1					
		基礎視能矯正学特論Ⅱ（生理光学）	1					
		視機能療法学実験研究		1				
		医療情報学		1				
		視能検査学	視能検査学	視覚生理学演習Ⅰ（視野検査他）		1		10
				視覚生理学演習Ⅱ（電気生理）		1		
				生理光学演習Ⅰ（屈折検査）		1		
				生理光学演習Ⅱ（屈折矯正）		1		
眼薬理学	1							
視機能検査学演習Ⅰ（眼科一般検査）	1							
視機能検査学演習Ⅱ（両眼視機能検査）	1							
視機能検査学演習Ⅲ（眼位検査）	1							
視機能検査学演習Ⅳ（眼運動系検査）	1							
画像診断学	1							
視能障害学	視能障害学	眼疾病学Ⅰ（眼球、眼球付属器他）	1		6			
		眼疾病学Ⅱ（遺伝性眼疾患、小児眼疾患）	1					
		神経眼科学	1					
		視機能障害学Ⅰ（神経疾患、前眼部疾患他）	1					
		視機能障害学Ⅱ（網膜絡膜疾患、視路疾患他）	1					
		視機能障害学特論	1					
視能訓練学	視能訓練学	視機能療法関係法規	1		10			
		視機能訓練学概論	1					
		視機能訓練学Ⅰ（視機能訓練学、基礎）	1					
		視機能訓練学Ⅱ（視機能訓練学、斜視）	1					
		視機能訓練学Ⅲ（視機能訓練学、弱視）	1					
		視機能訓練学Ⅳ（視機能訓練学、ロービジョン）	1					
		視機能訓練学Ⅴ（視機能訓練学、総括）	1					
		視機能訓練学演習	1					
		視機能訓練学特論Ⅰ（基礎）	1					
		視機能訓練学特論Ⅱ（応用）	1					
臨地実習	臨地実習	臨地実習Ⅰ	3		14			
		臨地実習Ⅱ	11					
		合計	11		98			

4. 履修方法等

1) 学期

学年は、4月1日から3月31日までで、その学年は、次の学期に分かれています。

前学期	4月1日から9月30日まで
後学期	10月1日から3月31日まで

2) 授業

① 授業時間割

授業は、学期ごとに週単位で編成された授業時間割表により実施します。

授業時間割表は、毎学期の授業開始1週間前に掲示するとともに配布します。

なお、授業時間割表の変更、休講、補講等がある場合は、その都度学生用掲示板に掲示しますので始業前等には必ず確認してください。

② 授業時間

1 時限	2 時限	3 時限	4 時限	5 時限
9:00 ~ 10:30	10:45 ~ 12:15	13:15 ~ 14:45	15:00 ~ 16:30	16:45 ~ 18:15

③ 集中授業

集中授業は、原則として夏季休業中及び冬季休業中に行われます。具体的な開講日・時限等は、その都度掲示等により通知します。

④ 休講

大学又は担当教員のやむを得ない理由により、休講することがあります。休講の場合はその都度掲示により通知します。また、休講の掲示がなく、始業時刻から30分を経過しても担当教員が教室に来られない場合は、事務室に連絡し指示を受けてください。

⑤ 補講

休講した授業科目は、補講を行うことがあります。補講は掲示によって通知しますので、履修者は通常の授業と同様に受講してください。

3) 履修方法

学則、教育課程表及び授業時間割表の定めるところに従い、各自が履修計画を検討し計画的に各科目を履修しなければなりません。

<履修上の注意事項>

ア. 必修科目、選択必修科目を含めて、卒業に必要な単位数以上を履修登録、修得してください。

イ. 同一時限に複数の授業科目を履修することはできません。

ウ. 既に単位を修得した授業科目は、再び履修することはできません。

4) 履修登録

学生は、各年度の各学期に履修する選択科目について、本学の定める期日までに履修登録届を提出し、承認を得なければなりません。必修科目については、自動的に履修登録されますので、履修登録届は不要です。

履修登録がされていないと、授業に出席しても試験の受験資格が得られませんから、十分に注意してください。

学生は、履修登録をして承認を得た後においては、任意に履修科目を変更し、又は届け出た科目の履修を放棄することはできません。

<履修登録の上限単位数 (CAP 制) >

CAP 制とは、授業科目の単位修得に必要な学修時間を確保する観点から、各学年において履修登録できる単位数の上限を定めた制度です。

本学では、全学科・全専攻において1年間に履修登録できる単位数の上限を55単位としています。

5) 授業の出・欠席の取り扱い

- ① 原則として、授業開始前に出・欠席の確認を行います。
- ② 出欠席の取り扱いは次の各号によりますが、遅刻・早退・欠課・欠席等の該当事項が生じた場合は、本学所定の用紙により、「遅刻・早退・欠課・欠席届及び公認願」を提出しなければなりません。
 - ア. 出席は、本学の定めた出席すべき日時に本学授業に出席した場合をいいます。
 - イ. 欠席は、本学の定めた出席すべき日時に本学授業に出席しなかった場合をいいます。
 - ウ. 欠課は、本学授業に出席した日のうちで、各授業時間において遅刻並びに早退に該当する範囲を超えた場合をいいます。
 - エ. 遅刻は、授業開始時刻、本学行事の日にあつては定められた登校時刻又は集合時刻の20分以内の遅れをいいます。
 - オ. 早退は、授業終了前、本学行事の日にあつては定められた解散時刻前20分以内に退出した場合をいいます。
 - カ. 同一科目において遅刻、早退2回をもって1時限の欠課となります。
- ③ 公認の取り扱いは、次の各号によりますが、公認願を事務室へ提出し学長が認めた場合に限ります。
 - ア. 授業中の負傷・病気に伴う治療の場合
 - イ. 忌引きによる場合

父母	兄弟姉妹	祖父母	伯叔父母
7日	5日	3日	2日

ただし、遠隔地に赴く場合は、必要最低限の日数を認めることができる。

- ウ. 伝染病発生並びに罹患による登校停止の場合。
 - エ. 本人の責めによらない不可抗力の場合
- ※公欠は本学が欠席事由を認めたものではあるが、授業の出席とみなすものではありません。
なお、公欠として認められたものは、授業開講数には含みません。
- ④ 各届・願は、本学所定の用紙により、原則として事前に事務室へ提出し、学長の承認を受けなければなりません。やむを得ない場合には、事後速やかに届け出るものとし、遅くとも3日以内（土・日・祝等含まず）に事務室へ提出しなければなりません。なお、②の遅刻・早退届けについては、当日教員に直接提出してください。

5. 選択科目の履修人数について

選択科目のうち、次に掲げる科目については、授業方法の形態及び教室の座席数の関係上、履修人数の制限を設けます。履修希望者が制限人数を超えた場合は、学内での抽選により履修者を決定します。

科目名	制限の人数
情報科学	40名
英語Ⅱ（日常英会話）A	40名
英語Ⅱ（日常英会話）B	60名
英語Ⅱ（日常英会話）C	40名

6. 臨地・臨床実習科目の履修に関する条件

実習科目を履修するためには、次表のとおり履修前提条件を満たしている必要があります。
履修前提条件を満たしていない人は、履修できませんので注意してください。

<リハビリテーション学科理学療法専攻実習科目の履修前提条件>

実習科目名	年次	履修条件科目（単位修得済み科目）
臨床実習Ⅱ（評価）	2	1年次、2年次必修科目すべて、かつ選択科目を含めて72単位以上
臨床実習Ⅲ（総合前期）	3	臨床実習Ⅱ（評価）
臨床実習Ⅳ（総合後期）	3	臨床実習Ⅲ（総合前期）

<リハビリテーション学科作業療法専攻実習科目の履修前提条件>

実習科目名	年次	履修条件科目（単位修得済み科目）
臨床実習Ⅱ（評価）	2	1年次、2年次必修科目すべて、かつ選択科目を含めて69単位以上
臨床実習Ⅲ（総合前期）	3	臨床実習Ⅱ（評価）
臨床実習Ⅳ（総合後期）	3	臨床実習Ⅲ（総合前期）

<リハビリテーション学科視機能療法専攻実習科目の履修前提条件>

実習科目名	年次	履修条件科目（単位修得済み科目）
臨床実習Ⅰ	2	1年次、2年次前期までに修得すべき必要単位数（選択を含めて）全て
臨床実習Ⅱ	3	1年次、2年次までに修得すべき必要単位数（選択を含めて）全て

7. 試験、成績評価及び単位の授与

1) 試験の種類

試験は、原則として下記の種類があります。ただし、課目によっては授業時間中に随時期間外試験を行うことがあります。

試験は各授業科目の担当教員が行い、試験を受けることができる者は、当該授業科目の授業時間数の3分の2以上出席した者とします。

① 定期試験

前学期、後学期授業終了後に1週間行います。

② 期間外試験

前学期試験、後学期試験の期間以外に行うことがあります。

③ レポート試験

上記の試験に代わり、レポートの提出を求められることがあります。詳細は担当教員の指示に従ってください。

④ 追試験

病気、その他正当な理由により試験を受けられなかった場合、願い出が認められた者に対し追試験を実施します。

⑤ 再試験

試験及び追試験に不合格となった者について、授業担当教員は1階に限り再試験を行うことができます。ただし、理学療法専攻、作業療法専攻については、次頁の【理学療法専攻および作業療法専攻に適用】記載の条件に基づいて実施します。

2) 追試験の手続き

追試験の受験を希望する者は、当該試験の終了から1週間以内に追試験願を事務室に提出しなければなりません。

なお、受験できなかった理由がわかる書類（病気やけがの場合は医師の診断書、その他忌引きや事故等による場合は証明できる書類等）の添付が必要です。

願い出が認められた場合は、担当教員の指示に従って受験することとなります。

なお、追試験を欠席した場合は、特別な事情がない限りその後の追試験は行いません。

3) 再試験の手続き

再試験を希望する者は、定められた期日までに再試験願に再試験料（1科目につき3,000円）を添えて申請し、学長の承認を得なければなりません。

なお、再試験を欠席した場合は、特別な事情がない限りその後の再試験は行いません。

4) 受験上の注意

ア. 座席は、別途指定された席についてください。

イ. 学生証は、写真の面を上にして通路側の机の上に置いてください。なお、学生証を携帯していない者、有効期限の切れた学生証持参の者は受験できません。ただし、当日事務室にて当日のみ有効の受験特別許可証を発行します。手数料は1,000円です。

ウ. 試験に必要な筆記用具、消しゴム等以外のものを机の上に置かないでください。

エ. 監督者の指示に従ってください。指示に従わない者には退場を命じ、その試験は無効とします。

オ. 遅刻は、試験開始後30分までを認め、それ以後の入室は認めません。

カ. 退室は、試験開始後30分経過するまでは認めません。

キ. 試験実施中は、スマホ・携帯電話及び腕時計のアラーム等の電源を切ってください。

ク. 不正行為を行った者には退室を命じ、当該科目または以降の全科目の受験を認めません。また、当該学期の履修科目の一部または全部の単位を認定しません。詳細は学生便覧の「平成医療短期大学試験等における不正行為に対する取扱基準」でご確認ください。

また、不正行為と見なされてしまう可能性のある行為（例：筆記用具や消しゴムの貸し借り等）は、決して行わないでください。

5) 成績評価

成績の評価は次のとおりです。(学則第 26 条第 2 項)

成績は、本人に優、良、可、不可の評価をもって通知します。

成績評価が合格の者に対して、所定の単位を与えます。各試験の評価は、次のとおりです。

評価	前学期、後学期、期間外、 及びレポート試験等	追試験	再試験
優	100 点～ 80 点	なし	なし
良	79 点～ 70 点	100 点～ 70 点	なし
可	69 点～ 60 点	69 点～ 60 点	100 点～ 60 点
不可	59 点以下	59 点以下	59 点以下

(平成 28 年度以降入学者)

成績は、本人に秀、優、良、可、不可の評価をもって通知します。

成績評価が合格の者に対して、所定の単位を与えます。各試験の評価は、次のとおりです。

評価	前学期、後学期、期間外、 及びレポート試験等	追試験	再試験
秀	100 点～ 90 点	なし	なし
優	89 点～ 80 点	なし	なし
良	79 点～ 70 点	100 点～ 70 点	なし
可	69 点～ 60 点	69 点～ 60 点	100 点～ 60 点
不可	60 点未満	60 点未満	60 点未満

<実習科目>

出席が当該実習科目の授業時間数の 5 / 6 以上を対象とし、成績評価は、秀 (平成 28 年度入学者から適用)、優、良、可、不可とします。出席が当該実習科目の授業時間数の 5 / 6 に満たない場合は、補習実習を認める場合があります。

この場合は本学所定の申請用紙により、補習実習願を事務室に提出し、実習担当教員と学長の承認を得なければなりません。

< GPA > *グレード・ポイント・アベレージ

GPA とは、各科目の成績を一定の基準で換算して、全体成績を数値で表記したものです。

[GPA 算出方法] *小数第三位四捨五入

(平成 27 年度以前の入学者)

$$\frac{([\text{優}] \text{ 修得単位数} \times 3) + ([\text{良}] \text{ 修得単位数} \times 2) + ([\text{可}] \text{ 修得単位数} \times 1) + ([\text{不可}] \text{ 修得単位数} \times 0)}{\text{総修得単位数} + (\text{不可} \cdot \text{失格}) \text{ 単位数}}$$

(平成 28 年度以降入学者)

$$\frac{([\text{秀}] \text{ 修得単位数} \times 4) + ([\text{優}] \text{ 修得単位数} \times 3) + ([\text{良}] \text{ 修得単位数} \times 2) + ([\text{可}] \text{ 修得単位数} \times 1) + ([\text{不可}] \text{ 修得単位数} \times 0)}{\text{総修得単位数} + (\text{不可} \cdot \text{失格}) \text{ 単位数}}$$

* GPA には、各期の GPA と入学からその時点までの通算 GPA があり、各期の成績表には療法の GPA が掲載されます。

* 不可・失格について再履修で単位修得した場合は、過去の不可・失格の評価は通算 GPA には算入されません。

* GPAは履修登録されたすべての科目が対象になります。よって、選択科目を必要単位数以上に履修申請した場合も、すべて対象になります。

* 入学前既修得単位（単位認定科目）はGPA対象外です。

< GPAに基づく個別指導、退学勧告 >（平成28年度入学者から適用）

成績不振の基準を、学期GPA1.5未満とし、該当する学生には次の各号により個別面談・指導等を行います。

- ① 学期GPAが1.5未満の場合は、指導教員による個別面談・指導を行います。
- ② 2期連続GPAが1.5未満の場合は、保護者同席のうえ指導教員による個別面談・指導を行います。
- ③ 3期連続または通算4学期のGPAが1.5未満の場合は、学長が退学勧告できます。

6) 成績発表

成績を手渡しすることで発表とします。その際は必ず学生証を持参してください。

発表日時、場所等は掲示によりお知らせします。

なお、再試験の申し込みは成績発表の当日以降に行います。時間、場所等は掲示によりお知らせします。

【理学療法専攻及び作業療法専攻に適用】

1) 再試験の条件

- ・ 専門教育科目（専門基礎科目・専門科目）（※対象外科目を除く）については、原則として、試験及び追試験に各期3科目まで不合格者となった者に限り1回のみ再試験を行うことができます。4科目以上不合格（追試験を含む）となった者には再試験を行うことはできず、下記2)により、次年次科目の履修は不可（以下「留年」という。）となります。

※<対象外科目>

次の科目は再試験受験制限となる3科目の対象外とします。

理学療法専攻…運動学演習、生理学演習、評価実習前セミナー、臨床実習科目

作業療法専攻…運動学演習、生理学演習、評価実習前セミナー、作業療法総合セミナーⅠ、臨床実習科目

- ・ 専門教育科目（専門基礎科目・専門科目）以外の科目の試験及び追試験に不合格となった者については、科目数にかかわらず、原則として1回に限り再試験を行うことができます。

2) 進級・仮進級

- ・ 原則として、当該学年に配当されている科目の単位を全て修得した場合に進級できます。ただし、次の条件のもとで仮進級が認められ、次年次科目を履修できます。

<仮進級の条件等>

- ・ 試験の結果、成績保留となった科目が年次で3科目以下であること。ただし、失格科目がある場合、臨床実習科目が不合格の場合は適用外とする。
- ・ 仮進級した場合は、成績保留科目における仮進級者試験によって成績判定します。
 - ※仮進級者試験を受ける年次の授業の出席時間数は受験資格としません。
 - ※仮進級者試験の成績評価は、再試験に準じて行います。
 - ※仮進級試験は1科目につき3,000円の試験料が必要となります。
- ・ 進級または仮進級の条件を満たさない場合は留年となり、次年次科目の履修はできず、当該学年の単位未修得科目を再履修することとなります。

<臨床実習Ⅱ（評価）の履修前提条件>

- ・ P12に記した臨床実習Ⅱ（評価）の履修条件科目（単位修得済み科目）には仮進級科目も含まれます。よって、2年後期試験後に成績保留が3科目までの人は、後期の臨床実習Ⅱを履修できます。

※なお、次の科目は上記成績保留3科目の対象外とします。

理学療法専攻…評価実習前セミナー

作業療法専攻…評価実習前セミナー、作業療法総合セミナーⅠ

8. 単位について

1) 単位の計算方法

学則第24条により、次のように定めています。

第24条 授業科目の単位数は、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により計算するものとする。

- 一 講義については、15時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については、30時間の授業をもって1単位とする。
- 二 演習については、30時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については、15時間の授業をもって1単位とする。
- 三 実験、実習及び実技については、45時間の授業をもって1単位とする。ただし、別に定める授業科目については、30時間の授業をもって1単位とする。
- 四 講義、演習、実験、実習又は実技のうち二つ以上の方法の併用により授業を行う場合にあっては、その組み合わせに応じ、次の表の換算時間により計算した総時間数が45時間となる授業をもって1単位とする。

授業の種類	授業1時間当たりの換算時間
講義	3時間
演習	1.5時間
実習・実験・実技	1時間

2) 単位の考え方

1)に記載されているように、1単位の学修時間を45時間としながら、実際の講義については15時間（30時間）で1単位としています。これは、45時間の中に講義以外の予習・復習等の時間が含まれるとする考え方によるものです。

9. 卒業要件、学位の授与及び国家試験

1) 卒業要件

本学を卒業するためには、本学に3年以上在学し、本学学則の別表1に定める授業科目の次の表に示す単位を修得しなければなりません。

＜リハビリテーション学科 理学療法専攻の卒業要件単位数＞

		区 分	必 修	選 択	合 計
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	2単位	2単位以上	4単位以上
		人間と社会	2単位	4単位以上	6単位以上
	基礎教育科目	コミュニケーション	3単位	—	3単位
		外国語	1単位	1単位以上	2単位以上
専門教育科目	専門基礎科目	人体の構造	5単位	—	5単位
		人体の機能	6単位	—	6単位
		心身の発達	1単位	—	1単位
		疾病の成り立ち	9単位	—	9単位
		障害の成り立ち	2単位	1単位以上	3単位以上
		保健・医療・福祉の連携	3単位	—	3単位
	専門科目	基礎理学療法学	7単位	2単位以上	9単位以上
		理学療法評価額	5単位	—	5単位
		理学療法治療学	20単位	—	20単位
		地域理学療法学	4単位	—	4単位
		臨床実習	19単位	—	19単位
		合 計		89単位	10単位以上

＜リハビリテーション学科 作業療法専攻の卒業要件単位数＞

		区 分	必 修	選 択	合 計
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	2単位	2単位以上	4単位以上
		人間と社会	2単位	4単位以上	6単位以上
	基礎教育科目	コミュニケーション	3単位	—	3単位
		外国語	1単位	1単位以上	2単位以上
専門教育科目	専門基礎科目	人体の構造	5単位	—	5単位
		人体の機能	6単位	—	6単位
		心身の発達	1単位	—	1単位
		疾病の成り立ち	9単位	—	9単位
		障害の成り立ち	3単位	—	3単位
		保健・医療・福祉の連携	3単位	—	3単位
	専門科目	基礎作業療法学	7単位	—	7単位
		作業療法評価学	5単位	—	5単位
		作業治療学	19単位	1単位以上	20単位
		地域作業療法学	4単位	—	4単位
		臨床実習	20単位	—	20単位
		合 計		90単位	8単位以上

<リハビリテーション学科 視機能療法専攻の卒業要件単位数>

区 分		必 修	選 択	合 計	
総合教育科目	教養教育科目	人間と科学	2 単位	4 単位以上	6 単位以上
		人間と社会	—	4 単位以上	4 単位以上
	基礎教育科目	コミュニケーション	3 単位	—	3 単位
		外国語	1 単位	1 単位以上	2 単位以上
専門教育科目	専門基礎科目	人体の構造	3 単位	—	3 単位
		人体の機能	2 単位	—	2 単位
		心身の発達	3 単位	—	3 単位
		疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	10 単位	—	10 単位
		視覚機能の基礎と検査機器	9 単位	—	9 単位
		保健医療福祉と視能障害リハビリテーションの理念	6 単位	—	6 単位
	専門科目	基礎視能矯正学	9 単位	1 単位以上	10 単位以上
		視能検査学	10 単位	—	10 単位
		視能障害学	6 単位	—	6 単位
		視能訓練学	10 単位	—	10 単位
		臨地実習	14 単位	—	14 単位
	合 計		90 単位	10 単位以上	98 単位以上

2) 学位の授与及び国家試験

所定の単位を修得すると、リハビリテーション学科各専攻は「短期大学士（理学療法学）」（英訳名：Associate of Science in Physical Therapy）、「短期大学士（作業療法学）」（英訳名：Associate of Science in Occupational Therapy）、「短期大学士（視機能療法学）」（英訳名：Associate of Science in Orthoptics）の各学位が授与され、理学療法士、作業療法士、視能療法士の各国家試験の受験資格が得られます。

これらの国家試験は、厚生労働省により年1回実施されます。

カリキュラムマップ<リハビリテーション学科理学療法専攻>

建学の精神

「誠意と親切と広い心」を理念に、医療の基本的精神である科学と人間愛に基づき、医療の知識と技術向上に努め、地域医療福祉等に貢献できる人材を養成する。

建学の精神に基づく教育目的

全学の目的…建学の精神を理念として、豊かな一般教養の上に専門分野の実践的な学問及び技術を深く教授し、地域社会等に貢献し得る優秀な人材を養成する。

- ①一般教養と理学療法領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- ②高度化・多様化する医療環境の変化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- ③生活の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。

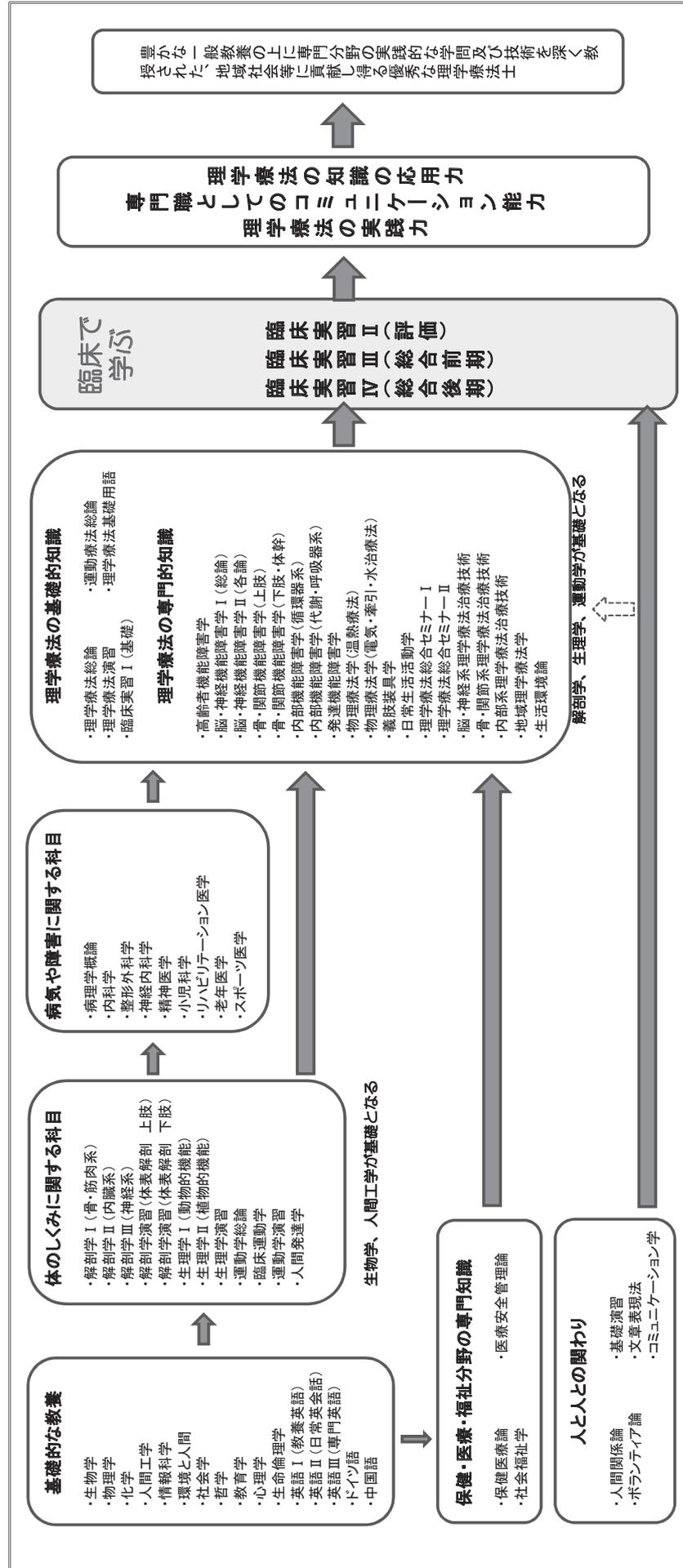


カリキュラム・ポリシー 全学方針	教育目的に基づくカリキュラム・ポリシー		1年次		2年次		3年次		学習成果	ディプロマ・ポリシー	
	全学方針	学科方針	前期	後期	前期	後期	前期	後期		全学方針	ディプロマ・ポリシー
社会生活に求められる教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力を身につけるため、全学に総合教育科目を配置する。	人間と科学 人間と社会 コミュニケーション 外国語	生物学 物理学 化学 社会学 人間関係論 ボランティア論 基礎演習 文章表現法 英語Ⅰ(教養英語)	情報科学 環境と人間 哲学 教育学 心理学 コミュニケーション学 英語Ⅱ(日常英会話) 英語Ⅲ(専門英語) ドイツ語 中国語	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	生命倫理学	(1) 全学共通の教養科目の履修を通して、社会的責任感、良好な人間関係、コミュニケーション能力、リーダーシップ、異文化理解能力、医療人としての使命感を身につける。 (2) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (3) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重し、人間関係を構築して、理学療法を實踐する。	理学療法専攻
理学療法の基礎知識と能力を修得し、その後の職業活動に必要となる知識、技術及び社会構造などの科目を記述する。	人間の構造	解剖学Ⅰ(骨・筋肉系) 解剖学Ⅱ(内臓系) 解剖学演習(体表解剖 上肢) 生理学Ⅰ(動物の機能) 運動学総論	解剖学Ⅱ(神経系) 解剖学演習(体表解剖 下肢) 生理学Ⅱ(植物の機能) 生理学演習 臨床運動学	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	理学療法の基礎知識・能力の修得	(1) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (2) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (3) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重し、人間関係を構築して、理学療法を實踐する。	理学療法専攻
専門教育科目は、専門職の基礎知識である人体・疾病などの専門基礎を学び、それぞれ、専攻課程ごとに、次のとおり専門知識、技術及び実践力を修得する科目を配置する。	基礎理学療法学 理学療法評価学 理学療法治療学	理学療法総論 理学療法演習 理学療法基礎用語 理学療法評価学 理学療法治療学	理学療法総論 理学療法演習 理学療法基礎用語 理学療法評価学 理学療法治療学	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	理学療法の基礎知識・能力の修得	(1) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (2) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (3) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重し、人間関係を構築して、理学療法を實踐する。	理学療法専攻
理学療法の領域の系統別に科目を配置し、それらの専門知識、技術を発展的に高めるようにする。	基礎理学療法学 理学療法評価学 理学療法治療学	理学療法総論 理学療法演習 理学療法基礎用語 理学療法評価学 理学療法治療学	理学療法総論 理学療法演習 理学療法基礎用語 理学療法評価学 理学療法治療学	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	理学療法の基礎知識・能力の修得	(1) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (2) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (3) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重し、人間関係を構築して、理学療法を實踐する。	理学療法専攻
理学療法の領域ごとに、知識応用力、専門職能力を高める実習科目を年次段階的に配置する。	地域理学療法学 臨床実習	生体運動学 臨床実習Ⅰ(基礎) 臨床実習Ⅱ(評価) 臨床実習Ⅲ(総合前期) 臨床実習Ⅳ(総合後期)	生体運動学 臨床実習Ⅰ(基礎) 臨床実習Ⅱ(評価) 臨床実習Ⅲ(総合前期) 臨床実習Ⅳ(総合後期)	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	前期 後期	理学療法の基礎知識・能力の修得	(1) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (2) 学修を通して、専門知識、技術及び実践力を身につける。 (3) 豊かな人間性とコミュニケーション能力を身につけ、お互いの立場を尊重し、人間関係を構築して、理学療法を實踐する。	理学療法専攻

※ディプロマ・ポリシーの番号は、P2の該当番号。

科目関連図

各科目がどのように関連しているかを理解して学習をすすめる。
 <リハビリテーション学科理学療法専攻>



到達目標評価項目(学習成果)および評価基準

<リハビリテーション学科理学療法専攻>

評価項目 学習成果	評価基準			適用科目	学校としての学習成果の評価
	3 (非常に優れている)	2 (優れている)	1 (基準に達している)		
教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	生物学 物理学 化学 情報科学 人間工学 環境と人間 社会学 人間関係論 ボランティア論 哲学 教育学 心理学 生命倫理学 基礎演習 文章表現法 コミュニケーション学 英語Ⅰ(教養英語) 英語Ⅱ(日常英会話) 英語Ⅲ(専門英語) ドイツ語 中国語	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
理学療法の基礎知識・能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	解剖学Ⅰ(骨・筋肉系) 解剖学Ⅱ(内臓系) 解剖学Ⅲ(神経系) 解剖学演習(体表解剖 上肢) 解剖学演習(体表解剖 下肢) 生理学Ⅰ(動物的機能) 生理学Ⅱ(植物的機能) 生理学演習 運動学総論 臨床運動学 運動学演習 人間発達学 病理学概論 内科学 整形外科学 神経内科学 精神医学 小児科学 リハビリテーション医学 老年医学 スポーツ医学 保健医療論 社会福祉学 医療安全管理論	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
理学療法の専門知識・技術の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	理学療法総論 理学療法演習 運動療法総論 理学療法基礎用語 理学療法研究方法論 理学療法学特論Ⅰ 理学療法学特論Ⅱ 卒業研究 クリニカルリレーズニング 運動器系検査法 神経系検査法 動作・画像解析学 理学療法評価学演習 高齢者機能障害学 脳・神経機能障害学Ⅰ(総論) 脳・神経機能障害学Ⅱ(各論) 骨・関節機能障害学(上肢) 骨・関節機能障害学(下肢・体幹) 内部機能障害学(循環器系) 内部機能障害学(代謝・呼吸器系) 発達機能障害学 物理療法学(温熱療法) 物理療法学(電気・牽引・水治療法) 義肢装具学 日常生活活動学 理学療法総合セミナーⅠ 理学療法総合セミナーⅡ 脳・神経系理学療法治療技術 骨・関節系理学療法治療技術 内部系理学療法治療技術 地域理学療法学 生活環境論	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
理学療法の知識応用力・専門職コミュニケーション能力・実践力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	臨床実習Ⅰ(基礎) 評価実習前セミナー 臨床実習Ⅱ(評価) 臨床実習Ⅲ(総合前期) 臨床実習Ⅳ(総合後期)	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。

カリキュラムマップ<リハビリテーション学科作業療法専攻>

建学の精神

「誠意と親切と広い心」を理念に、医療の基本的精神と人間愛に基づき、医療の知識と技術向上に努め、地域医療福祉等に貢献できる人材を養成する。



建学の精神に基づく教育目的

- ① 全学の目的…建学の精神を理念として、豊かな一般教養の上に専門分野の実践的な学問及び技術を深く教授し、地域社会等に貢献し得る優秀な人材を養成する。
- ② リハビリテーション学科作業療法専攻…深い人間愛をもち、高い倫理観の上に、高度化・多様化する医療・福祉に相応し得る次の知識・技術及び実践力をもち作業療法士を養成する。
- ③ 一般教養と作業療法領域の専門知識、技術及び実践力を養う。
- ④ 高度化・多様化する医療環境の進化等に主体的に対応できる実践力を養う。
- ⑤ 生命の尊重と人間愛に基づく行動とチームと協働する良好な人間関係を築ける能力を養う。



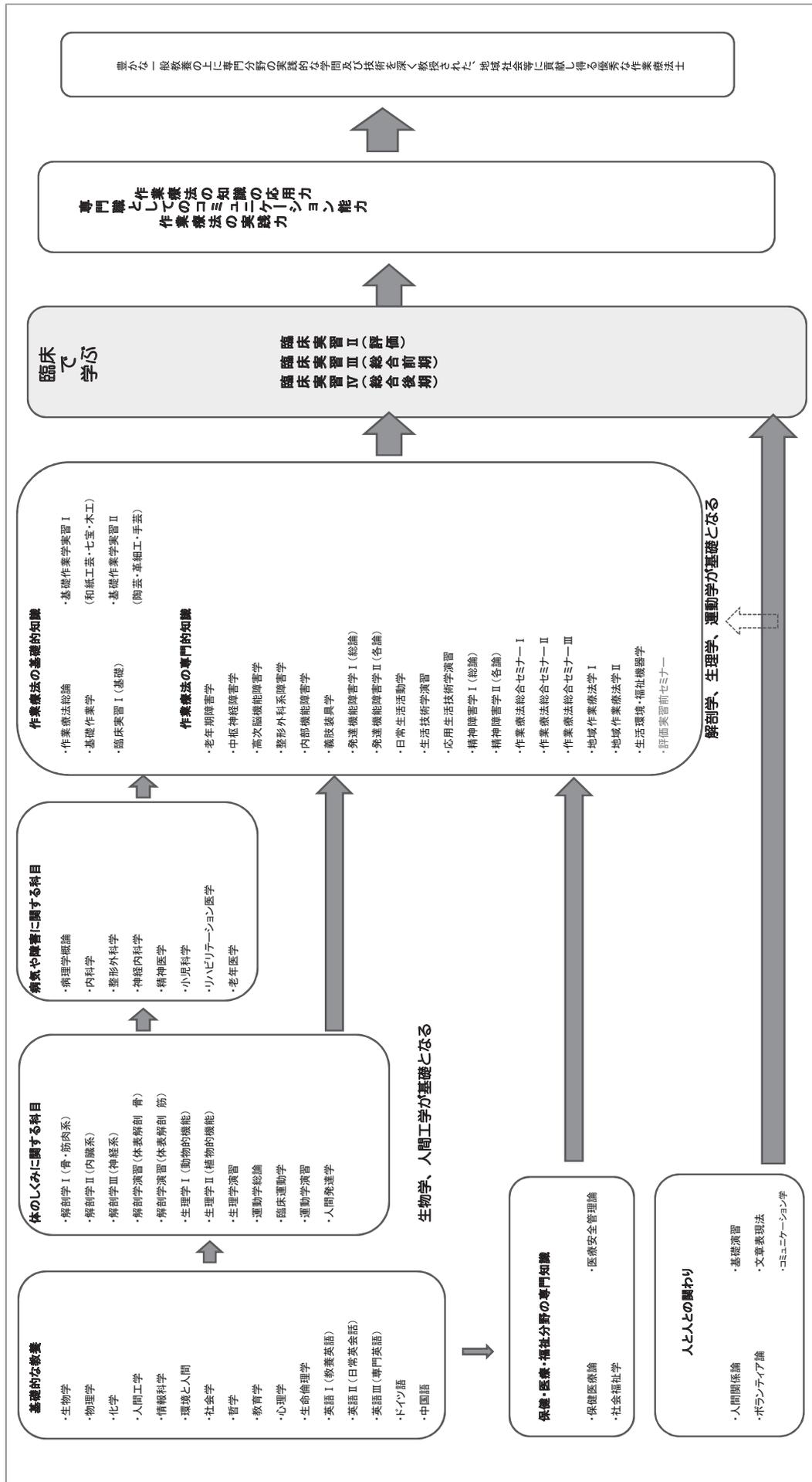
※ディプロマ・ポリシーの番号は、P2の該当番号。

カリキュラム・ポリシー 全学方針	1年次		2年次		3年次		学習成果	全学方針	ディプロマ・ポリシー
	前期	後期	前期	後期	前期	後期			
社会生活に求められる教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力を身につけるため、全学に総合教育科目を配置する。	人間と科学	生物学 物理学 化学 人工工学	情報科学 環境と人間				(10) 全学共通の教育科目の履修を通じて、主体的責任感、良好な人間関係、コミュニケーション能力など、医療倫理観を身につける教育を身につける。	(10)	41) 豊かな人間性とコミュニケーション能力の向上を重視した人間関係を構築して、作業療法を實踐する。
	人間と社会	社会学 人間関係論 ボランティア論 基礎演習 文筆表現法 英語Ⅰ(教養英語)	哲学 教育学 心理学 コミュニケーション学 英語Ⅱ(日常英会話) 英語Ⅲ(専門英語) ドイツ語 中国語	生命倫理学					
作業療法の基礎知識と、人体の理解、疾病及び社会構造などの科目を配重する。	人体の構造	解剖学Ⅰ(骨・筋肉系) 解剖学Ⅱ(内臓系) 解剖学演習(体表解剖・骨) 生理学Ⅰ(動物的機能) 運動学総論 人間発達学	解剖学Ⅲ(神経系) 解剖学演習(体表解剖・筋) 生理学Ⅱ(植物的機能) 生理学演習 臨床運動学 解剖学総論 精神医学 小児科学	運動学演習			作業療法の基礎知識・能力の修得	(12)	42) 学修を通して、専門職として求められる専門知識、技術及び実践力を修得し、地域医療福祉に貢献できる力を身につける。 43) 良識・倫理観と責任感をもち、患者、患者家族、チームを尊重し、誠意をもって職務を實踐できる。
	疾病の成り立ち	免疫学 病原生物学 疫学 保健・医療・福祉の連携	病理学 精神医学 小児科学	卒業研究					
専門教育科目は、専門職の基礎知識である人体・疾病などの専門基礎を学び、それぞれ別の専門知識・技術を身につけ、次々と応用専門知識・技術及び実践力を修得する科目を配重する。	基礎作業療法学	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法専攻総合演習Ⅱ(基礎) 作業療法専攻総合演習Ⅲ(専門)	(13)	42) 学修を通して、専門職として求められる専門知識、技術及び実践力を修得し、地域医療福祉に貢献できる力を身につける。 43) 良識・倫理観と責任感をもち、患者、患者家族、チームを尊重し、誠意をもって職務を實踐できる。
	作業療法評価学	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法総論 基礎作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)			
作業療法の領域の系統別に科目を配重し、それぞれの専門知識・技術を体系的に高めるようにする。	地域作業療法学	地域作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	地域作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	地域作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	地域作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	地域作業療法Ⅰ(福祉・福祉・福祉)	作業療法の専門知識・技術の修得	(14)	42) 学修を通して、専門職として求められる専門知識、技術及び実践力を修得し、地域医療福祉に貢献できる力を身につける。 43) 良識・倫理観と責任感をもち、患者、患者家族、チームを尊重し、誠意をもって職務を實踐できる。
	臨床演習	臨床演習Ⅰ(基礎) 臨床演習Ⅱ(演習)	臨床演習Ⅰ(基礎) 臨床演習Ⅱ(演習)	臨床演習Ⅰ(基礎) 臨床演習Ⅱ(演習)	臨床演習Ⅰ(基礎) 臨床演習Ⅱ(演習)	臨床演習Ⅰ(基礎) 臨床演習Ⅱ(演習)			

科目関連図

各科目がどのように関連しているかを理解して学習をすすめる。

<リハビリテーション学科作業療法専攻>



到達目標評価項目(学習成果)および評価基準

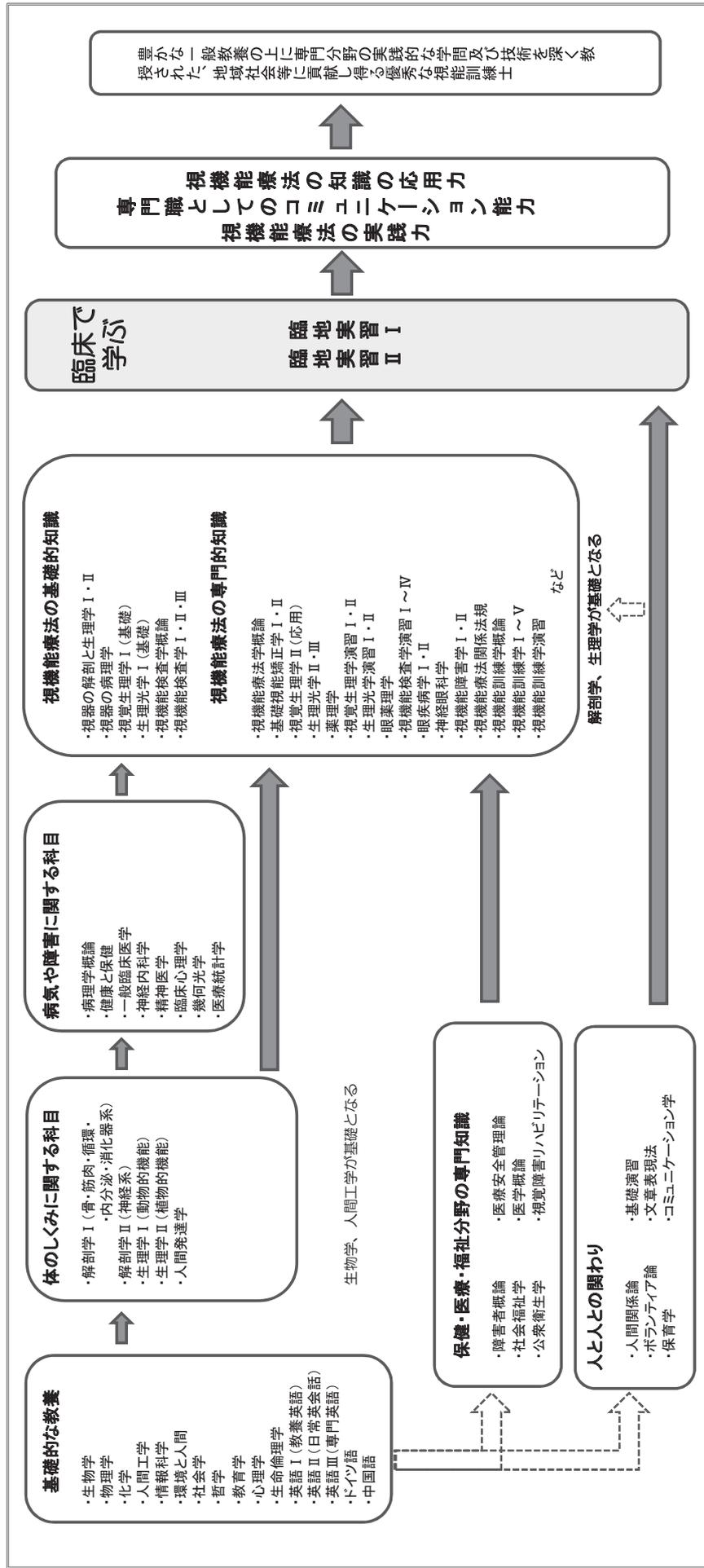
<リハビリテーション学科作業療法専攻>

評価項目 学習成果	評価基準			適用科目	学校としての学習成果の評価
	3 (非常に優れている)	2 (優れている)	1 (基準に達している)		
教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	生物学 物理学 化学 情報科学 人間工学 環境と人間 社会学 人間関係論 ボランティア論 哲学 教育学 心理学 生命倫理学 基礎演習 文章表現法 コミュニケーション学 英語Ⅰ(教養英語) 英語Ⅱ(日常英会話) 英語Ⅲ(専門英語) ドイツ語 中国語	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
作業療法の基礎知識・能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	解剖学Ⅰ(骨・筋肉系) 解剖学Ⅱ(内臓系) 解剖学Ⅲ(神経系) 解剖学演習(体表解剖 骨) 解剖学演習(体表解剖 筋) 生理学Ⅰ(動物的機能) 生理学Ⅱ(植物的機能) 生理学演習 運動学総論 臨床運動学 運動学演習 人間発達学 病理学概論 内科学 整形外科学 神経内科学 精神医学 小児科学 リハビリテーション医学 老年医学 保健医療論 社会福祉学 医療安全管理論	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
作業療法の専門知識・技術の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	作業療法総論 作業療法研究方法論 基礎作業学 基礎作業学実習Ⅰ(和紙工芸, 七宝, 木工) 基礎作業学実習Ⅱ(陶芸, 草細工, 手芸) 卒業研究 作業療法評価学概論 作業療法評価学Ⅰ(身体機能) 作業療法評価学Ⅱ(精神機能・活動・環境) 作業療法評価学演習Ⅰ(身体機能) 作業療法評価学演習Ⅱ(精神機能・活動・環境) 作業療法治療技術理論 認知症予防論 作業行動理論 精神障害治療論 ニューロリハビリテーション論 整形外科系障害治療論 日常生活・環境アセスメント論 老年期障害学 中枢神経障害学 高次機能障害学 整形外科系障害学 内部機能障害学 義肢装具学 発達機能障害学Ⅰ(総論) 発達機能障害学Ⅱ(各論) 日常生活活動学 生活技術学演習 応用生活技術学演習 精神障害学Ⅰ(総論) 精神障害学Ⅱ(各論) 作業療法学総合演習Ⅰ(基礎) 作業療法学総合演習Ⅱ(専門) 作業療法総合セミナーⅠ(評価) 作業療法総合セミナーⅡ(評価と介入①) 作業療法総合セミナーⅢ(評価と介入②) 地域作業療法学Ⅰ(制度・支援・連携) 地域作業療法学Ⅱ(実践・就労支援) 生活環境・福祉機器学	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
作業療法の知識応用力・専門職コミュニケーション能力・実践力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	臨床実習Ⅰ(基礎) 評価実習前セミナー 臨床実習Ⅱ(評価) 臨床実習Ⅲ(総合前期) 臨床実習Ⅳ(総合後期)	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。

科目関連図

各科目がどのような関連しているかを理解して学習をすすめる。

＜リハビリテーション学科視機能療法専攻＞



到達目標評価項目(学習成果)および評価基準

<リハビリテーション学科視機能療法専攻>

評価項目 学習成果	評価基準			適用科目	学校としての学習成果の評価
	3 (非常に優れている)	2 (優れている)	1 (基準に達している)		
教養・倫理・責任感及びコミュニケーション能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	生物学 物理学 化学 情報科学 人間工学 環境と人間 社会学 人間関係論 ボランティア論 哲学 教育学 心理学 生命倫理学 基礎演習 文章表現法 コミュニケーション学 英語Ⅰ(教養英語) 英語Ⅱ(日常英会話) 英語Ⅲ(専門英語) ドイツ語 中国語	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
視機能療法の基礎知識・能力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	解剖学Ⅰ(骨・筋肉・循環・内分泌・消化器系等) 解剖学Ⅱ(神経系) 生理学Ⅰ(動物的機能) 生理学Ⅱ(植物的機能) 人間発達学 保育学 病理学概論 健康と保健 幾何光学 医療統計学 一般臨床医学 神経内科学 精神医学 臨床心理学 視器の解剖と生理学Ⅰ(眼球・眼球付属器他) 視器の解剖と生理学Ⅱ(視路・眼運動系他) 視器の病理学 視覚生理学Ⅰ(基礎) 生理光学Ⅰ(基礎) 視機能検査学概論 視機能検査学Ⅰ(眼科一般検査) 視機能検査学Ⅱ(眼位検査) 視機能検査学Ⅲ(両眼視機能検査) 公衆衛生学 社会福祉学 医療安全管理論 医学概論 障害者概論 視覚障害リハビリテーション	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
視機能療法の専門知識・技術の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	視機能療法学概論 基礎視能矯正学Ⅰ(眼球運動、他) 基礎視能矯正学Ⅱ(眼位、両眼視) 視覚生理学Ⅱ(応用) 生理光学Ⅱ(眼球光学) 生理光学Ⅲ(屈折・調節) 薬理学 基礎視能矯正学特論Ⅰ(解剖と生理、視覚生理) 基礎視能矯正学特論Ⅱ(生理光学) 視機能療法学実験研究 医療情報学 視覚生理学演習Ⅰ(視野検査他) 視覚生理学演習Ⅱ(電気生理) 生理光学演習Ⅰ(屈折検査) 生理光学演習Ⅱ(屈折矯正) 眼薬理学 視機能検査学演習Ⅰ(眼科一般検査) 視機能検査学演習Ⅱ(両眼視機能検査) 視機能検査学演習Ⅲ(眼位検査) 視機能検査学演習Ⅳ(眼運動系検査) 画像診断学 眼疾病学Ⅰ(眼球、眼球付属器他) 眼疾病学Ⅱ(遺伝性眼疾患、小児眼疾患他) 神経眼科学 視機能障害学Ⅰ(神経疾患、前眼部疾患他) 視機能障害学Ⅱ(網脈絡膜疾患、視路疾患他) 視機能障害学特論 視機能療法関係法規 視機能訓練学概論 視機能訓練学Ⅰ(視機能訓練学、基礎) 視機能訓練学Ⅱ(視機能訓練学、斜視) 視機能訓練学Ⅲ(視機能訓練学、弱視) 視機能訓練学Ⅳ(視機能訓練学、ロービジョン) 視機能訓練学Ⅴ(視機能訓練学、総括) 視機能訓練学演習 視機能訓練学特論Ⅰ(基礎) 視機能訓練学特論Ⅱ(応用)	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。
視機能療法の知識応用力・専門職コミュニケーション能力・実践力の修得	当該分野のGPA 2.50～4.00	当該分野のGPA 2.00～2.49	当該分野のGPA 1.00～1.99	臨地実習Ⅰ 臨地実習Ⅱ	当該分野の学生のGPA平均値が左記1～3のいずれに該当するかにより評価。

リハビリテーション学科

教養教育科目

基礎教育科目

◎リハビリテーション学科理学療法専攻

◆総合教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ	
教養教育科目	人間と科学	生物学	1年次前学期	江村正一	29
		物理学	1年次前学期	中村 琢	30
		化学	1年次前学期	武藤吉徳	31
		情報科学	1年次後学期	加藤直樹	32
		人間工学	1年次前学期	山田宏尚	33
		環境と人間	1年次後学期	杉原利治	34
	人間と社会	社会学	1年次前学期	伊原亮司	35
		人間関係論	1年次前学期	神戸博一	36
		ボランティア論	1年次前学期	森田政裕	37
		哲学	1年次後学期	竹内章郎	38
		教育学	1年次後学期	森田政裕	39
		心理学	1年次後学期	大井修三	40
		生命倫理学	3年次前学期	谷口泰弘(理、作)、塚田敬義ほか(視)	41・42
基礎教育科目	コミュニケーション	基礎演習（理学療法専攻）	1年次前学期	辻 圭一、石田裕保、藤橋雄一郎、植木 努	43
		基礎演習（作業療法専攻）	1年次前学期	加藤清人、河村章史、永井貴士、世良龍哉、竹中孝博、市田博子、浅野莉沙	44
		基礎演習（視機能療法専攻）	1年次前学期	松田育子、野原尚美	45
		文章表現法	1年次前学期	弓削 繁	46
		コミュニケーション学	1年次後学期	近藤ひろえ	47
	外国語	英語Ⅰ（教養英語）	1年次前学期	西澤康夫（看、理）、長尾裕子（作、視）	48・49
		英語Ⅱ（日常英会話）A	1年次後学期	西澤康夫	50
		英語Ⅱ（日常英会話）B	1年次後学期	ミルボド・セイエド・モハマド	51
		英語Ⅱ（日常英会話）C	1年次後学期	長尾裕子（作、視）	52
		英語Ⅲ（専門英語）	1年次後学期	ミルボド・セイエド・モハマド	53
		ドイツ語	1年次後学期	末永 豊	54
		中国語	1年次後学期	橋本永真子	55

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目 人間と科学		生物学			江村 正一	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> すべての生物の基本構造である「細胞」についての理解をもとに、遺伝、発生、生命の進化と多様性などについて学び「生命」とは何かを考える。生物学で得た知識と理解が、将来、医療に携わるために修めなければならない、他の多くの科目の基礎となる。特に解剖学と生理学の学習にとって直接関係のある事象が多く出て来ますので、その部分については特に理解を深めてください。</p> <p><学修の到達目標> ①細胞・組織について理解できる。②遺伝・発生について理解できる。③進化・多様性について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当する部分を丁寧に読み、それぞれの章で何を学ばよいか、何を学びたいかを、記録しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 事前学習で疑問に思ったことは理解・納得できたかを確認する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 細胞とその構造について 細胞膜の構造と機能について 細胞の増殖について 遺伝情報とその伝達について ヒトの遺伝と先天性異常について 生殖について 発生について 呼吸系・消化系について 循環系・免疫系について 神経系について 内分泌系について 生命の進化と多様性について ヒトの起源と進化について 生物と環境について 人体の仕組みを学ぶことから生命とは何かを理解する 定期試験（レポート） 							
評価基準・評価方法							
定期試験結果（100%）							
使用教科書				参考図書			
高畑・増田・北田 著、系統看護学講座 基礎分野生物学（第9版）2013年2月発行、医学書院				適宜、参考資料を配布する。			
備考							
レポートにコメントを記入し返却する。 E-mail s.emura@heisei-iryuu.ac.jp							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		物理学			中村 琢	非常勤講師	
人間と科学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> この授業は物理学の様々な分野について短時間で概括的に学習するものである。特に看護やリハビリテーションなど医療・看護の職に就く際には物理学の知識は必須であり、本授業では現場で働く際に役に立つ物理学の原理、原則についても扱う。後半では放射線についても扱い、実習を含める。授業の形態は座学だけでなく、グループワークなど、学習者の主体的な学び（アクティブラーニング）を取り入れる。</p> <p><学修の到達目標> ①物理学の学習内容について理解し、自分の言葉で説明できる。 ②学習した内容を活用して計算、思考、探究することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 毎回の授業で次の授業の内容と予習の方法について指示します。必要に応じて資料を配布するので目を通してください。 <必要時間>各回10分</p>				<p><内容> 授業でわからなかったことを次の授業で質問できるように復習してください。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 物理学の基礎知識 ① 2. 自然界の階層性 ① 3. 力学の基礎1 ① ② 4. 力学の基礎2 ① 5. 力学の基礎3 ① 6. 波動1 ① 7. 波動2 ① 8. 光と音の性質 ① 9. 電気と磁気 ① 10. 電流と電圧 ① 11. 原子と原子核 ① 12. 放射線の性質 ①、② 13. 放射線の利用と被ばく ①、② 14. 放射線の測定 ①、② 15. 放射線被ばく防護 ①、② <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>知識・理解、思考・判断・表現、技能、関心・意欲・態度の観点を総合的に判断する。 定期試験（50%）、時間内レポート・課題（30%）、授業参加度（20%）</p>							
使用教科書				参考図書			
なし				自然科学の基礎としての物理学、原康夫、学術図書出版社、2014年、体系看護学 基礎科目 物理学、平田雅子、メヂカルフレンド社、2006年			
備考							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オフィスアワー：講義終了後20分程度。 2. 質問等：講義時間中に受け付けます。 3. 電子メールアドレス :nakamura@gifu-u.ac.jp 							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		化学			武藤 吉徳	非常勤講師	
人間と科学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 化学は「物質」を理解することを目的とする。医療技術に関わる多くの装置や薬品、そして人体など全てのものが物質で構成されているので、化学の知識は医療分野の基礎として非常に重要である。この講義では、化学の基礎的な内容を無機化学、有機化学の全般に亘ってなるべくわかり易く解説するよう努める。また、医療に関連する事項をできる限り多く取り上げて、専門科目への橋渡しとなるようにしたい。</p> <p><学修の到達目標> ①生体物質や医薬品を構成する元素や化学結合の特徴が理解できる。 ②主要な有機化合物について、その構造や性質を説明できる。 ③医療の場で出会う様々な物質、薬品について科学的特性を把握できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 高校で学んだ理系科目（生物、化学、物理等）があれば、その復習をする。また、教科書を予習する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 教科書とノートを再読することにより、基礎事項や専門科目との関連性を再確認する。 <必要時間>各回60分</p>			
授 業 計 画							
1. 物質の特性 ① 2. 原子と分子 ① 3. 化学結合 ① 4. 物質の三態・溶液とコロイド ①③ 5. 塩化物 ①③ 6. 酸・アルカリ ①③ 7. 無機化合物 ①③ 8. 放射性元素 ①③ 9. 有機化合物概要 ② 10. 脂肪族炭化水素 ② 11. 酸素、窒素を含む有機化合物 ② 12. カルボン酸、その他 ② 13. 芳香族化合物 ② 14. 脂環・複素環化合物 ② 15. 生体物質 ① 定期試験 筆記							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
定期試験（100%）							
使用教科書				参考図書			
奈良雅之著 系統看護学講座 基礎分野 化学(第7版) 2018年1月(医学書院) ISBN978-4-260-03181-3				舟橋弥益男・渡辺昭次 著 「炭素化合物の世界」 東京教学社			
備 考							
授業中に質問の時間を取るほか、質問紙による質問には、次回の授業時に回答する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		情報科学			加藤 直樹	非常勤講師	
人間と科学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 社会で活躍する人として、医療をはじめとした情報化に対する知識・技能を身に付けることが重要となっている。情報科学において基礎となるデジタル化とネットワークによる情報の蓄積・交換を中心として、情報システムを活用した仕事の効率化、質の向上について検討するとともに、情報システム活用における動向について調査する。また、問題解決に情報手段を活用するための能力を向上させるためのグループワークを行う。</p> <p><学修の到達目標> 情報通信技術の要素を基にして、知識基盤社会について、その特徴を説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 必要に応じて事前に購読しておくべき資料や、調査による考えの整理等を行うこと。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 学習を振り返りながらジャーナルを記述することを求めます。 <必要時間>各回30分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 情報科学の基礎を学ぶために 2. 情報技術の技能とタッチタイピング 3. 情報社会の特徴をコンビニエンスストアから読み解く 4. 情報革命と呼ばれる理由を考える 5. 情報社会において活躍できる人の能力を検討する 6. 情報手段を活用した学びについて考える 7. いろいろな情報のデジタル化の手順を説明する 8. デジタル化による社会の変革を事例をもとにして考える 9. 知識基盤社会における知的所有権について説明する 10. 情報社会に特有となる問題を列挙して整理する 11. 情報社会における倫理について考える 12. 情報社会における医療の可能性を例示する 13. 第4次産業革命について考える 14. 知識基盤社会における人の能力について考える 15. 情報通信技術と知識基盤社会の特徴について説明できるように学習を整理する レポート 							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
知識・技能は、情報技術に関する基礎的な事項を重視し、授業での操作、発言、レポート等を。思考・判断・表現力は、問題の整理や調査、考えの深まりをレポートにより評価する。(80%) 主体性・多様性・協働性は、授業における態度面から評価する。(20%)							
使用教科書				参考図書			
				大内東、岡部成玄、栗原正仁編著、情報学入門 - 大学で学ぶ情報科学・情報活用・情報社会 -、コロナ社、東京			
備 考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		人間工学			山田 宏尚	非常勤講師	
人間と科学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 人間が普段無意識に行っている身体運動や生命維持活動は、筋肉・骨格・内臓・血管など身体の各部位に働く力やモーメントをはじめとした物理学的メカニズムによって成立している。本講義では、医療行為の具体例に基づいて、身体活動の物理学的なメカニズムを学習する。</p> <p><学修の到達目標> ①人間の身体活動に関わる物理学の基礎を身につけることができる。 ②実際の医療福祉の現場において、物理学的根拠に基づく治療行為を実践できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に沿って教科書の範囲を予習する。</p> <p><必要時間>各回40分</p>				<p><内容> 教科書、授業内容を書き留めたノート、小テストの結果などを用いて復習する。また、必要に応じて参考書を読み、授業内容の理解を深める。</p> <p><必要時間>各回40分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 重いものを持つにはどうしたらよいか (1) 3. 重いものを持つにはどうしたらよいか (2) 4. 看護ボディメカニクスの物理 (1) 5. 看護ボディメカニクスの物理 (2) 6. 身近な圧力 (1) 7. 身近な圧力 (2) 8. 力・モーメントの応用 9. 呼吸器と吸引の物理 10. 点滴静脈内注射の物理 11. 循環器の物理 12. 感覚器の物理 (1) 13. 感覚器の物理 (2) 14. 体温制御の物理 15. 圧力・感覚・熱の応用 (目標①・②への到達) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>・評価基準：知識の修得度と計算能力（目標①）、応用的思考能力（目標②） ・評価方法：定期試験（70%）、小テスト・宿題・授業態度（30%）で評価する。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>・書 名：看護学生のための物理学 第5版 ・著 者：佐藤和良 ・出 版 社：医学書院</p>				適宜紹介する			
備 考							
<p>・毎回の授業で小テストを実施し、随時宿題を課す。 ・オフィスアワー：講義前後の時間に非常勤講師室で待機する。 ・質問：講義中やオフィスアワーに直接、それ以外にメール（yamada@gifu-u.ac.jp）で随時受け付ける。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		環境と人間			杉原 利治	非常勤講師	
人間と科学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 資源・環境問題を解決し、持続可能な社会を構築することが、21世紀最大の課題である。しかし、そのためのアプローチの方法は、まだ、見出されていない。この講義では、環境問題は人間の問題であるとの観点に立ち、環境と人間の関係を、生活と情報によってむすびつけ、環境問題を根本的にとらえなおし、環境問題の解決法を考え、持続可能な社会を展望する。また、人間の成長・発達や脳疾患のリハビリ等に対して、環境が果たす重要な役割を考察する。</p> <p><学修の到達目標> ①受講者ひとりひとりが、自分で問題解決の手がかりを、考え、見出すことができる。 ②既存の考え方や方法にとらわれることなく、自分自身の考え方をもち、発展させることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> それぞれの授業時間で扱う、教科書の各章を事前に読む。 <必要時間>各回20分</p>				<p><内容> 授業時に配布されたプリントを読む。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 環境問題とは何か？①② 環境問題の原点、水俣病の問題を、生産、消費、環境から考える。① 家庭生活から環境問題の本質を探る。①② 衣生活から環境を考える。① 食生活から環境を考える。① 簡易生ゴミ分解器を製作し、その活用法を考える。① 河川環境と人間の関係を考える。① 情報から環境と人間を考える。①② 情報環境が人間をつくる。①② 脳障害者の発達、脳疾患のリハビリを、環境と情報の観点から捉えなおす。② 環境教育のあり方を考える。①② アーミッシュと現代社会を比較する。①② 近代のライフスタイルを再考する。② 生態学の意味を考える。①② 環境と情報から、持続可能な社会を展望する。② <p>定期試験（レポート）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価基準は、知識・理解、思考・判断、授業態度の総合であるが、特に、各自のオリジナルな思考を重視する。評価方法は、レポート（50%）、小テスト（30%）、授業態度等（20%）による。</p>							
使用教科書				参考図書			
『21世紀の情報とライフスタイル』、杉原利治、論創社、2016							
備考							
毎回の授業では、開始時に、前回提出されたレポート数編をプリント配布し、それぞれの論点を評価して、それらを生かして授業を展開する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		社会学			伊原 亮司	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> この講義は、現代社会のあり方について学ぶ。なかでも、ほとんどの人にとって切実なテーマである<働くこと>に焦点をあてて、現代社会のあり方を理解する。わたしたちは、人生の早い段階から<働くこと>を意識させられ、その準備をするように煽られている。しかし、働く場の実態については無知なまま、耳に優しい言葉ばかりを聞かされる。本講義は、現代社会における労働の現実を理解し、自分たちの働き方を見直すことを目的とする。医療関連の仕事に就く予定である受講者は、「就活」にはさほど困らないかもしれない。しかし、働き出してから、「いじめ」、「うつ病」、「過労死」といった様々な問題に直面する。医療従事者は「感情労働者」ともいわれ、専門知識のみならず、コミュニケーションの仕方や感情の表出の仕方など、人格に関わる側面が重視される。感情労働に付随する問題点を理解し、「うつ病」や過労死から自分の身を守る術を習得して欲しい。</p> <p><学修の到達目標> 1. 現代社会における働く場の実態を理解できる 2. その際に、いかなる視点から「現実」を切り取ればいいのか、分析枠組みを理解することができる 3. 自分自身で職場の実態を捉えられるようになる 4. <働くこと>に対する自分のスタンスを考えることができる 5. その際、狭義の「能力」の形成に励むだけでなく、自分の「身の守り方」にも留意することができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 次回の講義で学ぶ章を指定するので、事前に読んでおくこと。 <必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 講義で学んだことを新聞やテレビのニュースなどと照らし合わせて、他の事例を理解すること <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション-<働くこと>とは 2. 従来の社会と働き方-「日本的経営」と「企業社会」 3. 労働社会の変容-学校、会社、家庭の関係 4. 働く場の実態Ⅰ-過労死・過労自殺 5. 組織や役割への過剰適応 6. 働く場の実態Ⅱ-「うつ病」 7. 感情労働の特質 8. 働く場の実態Ⅲ-「ハラスメント」 9. 経営合理化と過度のプレッシャー 10. 働く場の実態Ⅳ-職場秩序の悪化 11. 非正規雇用の増大 12. 新しい働き方とは 13. 社会貢献という働き方 14. 働くということを考え直す 15. 労働を規制する、勤勉さを相対化する 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
授業への参加（20%）、レポート（20%）、テスト（60%）などから総合的に評価。							
使用教科書				参考図書			
伊原亮司『私たちはどのように働かされるのか』（こぶし書房、2015年）				講義中に適宜紹介する			
備 考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		人間関係論			神戸 博一	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>この人間関係論では、日常生活や職場、家族、医療の現場などで起こる様々な人間関係のあり方について理解し、より良い人間関係を築くために、まず人間関係の基本的な意義・視点から、職場での人間関係論、生涯の人間発達や学習と人間関係、患者さんと人間として対話する方法などについて学び、さらに人間関係を円滑に進めるための方法として、コミュニケーションの基礎・基本から学びます。</p> <p><学修の到達目標>テキストの内容について、学生自身が考え、十分に理解し、そこから実践できるレベルを目標とします。</p> <p>①人間関係の意義・視点について考えることができる。 ②職場の人間関係と対処法について理解できる。 ③生涯の人間発達や学習と人間関係について知り、応用できる。 ④ケアの共感から同感への展開、援助するための人間観を理解できる。 ⑤患者さんと対話する方法を身に付け、実践できる ⑥コミュニケーションの基礎、基本の理解できる。 ⑦非言語的コミュニケーションの重要性について理解できる。 ⑧いじめ、引きこもりなどと人間関係の問題を理解できる。 ⑨患者さんとの接し方について実践できる。 ⑩インターネット、携帯の功罪について知り、日ごろから実践できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 以下の授業計画は、教科書、テキストの節、項目を記しています。講義の実際の進行に従い、前もって読んでおいて欲しい。特に、当日の予定の節、項目の中では「何が問題、課題となっているのか」を念頭に置いて読むこと。 <必要時間>各回10分</p>				<p><内容> 講義の板書ノートを参照し、「何が問題、課題なのか」、「問題の答えは何か」「問題から答えまでの論理展開は」「キーワードの意味」など理解するよう努めること。板書ノートの◎を付けた箇所は、繰り返し学習することをお勧めします。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<p>教科書『系統看護学講座 基礎分野 人間関係論』（長谷川浩編）を利用し、特にその第1章と第3章を中心に学ぶ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. シラバスを利用した、成績評価の試験、学習対策、成績評価の基準など、人間関係の意義について ① 2. 職場における人間関係について－メーヨーのホーソン実験 ② 3. 人間関係のトラブル対処法とモラル調査について ② 4. 人間の発達と人間関係について－エリクソンの理論を中心に ③ 5. 学習と人間関係について ③ 6. 社会化・個性化と人間関係について ③ 7. 援助と人間関係について ④ 8. 看護における人間関係のとらえ方 ④ 9. 患者さんを援助するのに必要な人間観について ④ 10. 患者さんとの対話のためのガイドラインについて ⑤ 11. コミュニケーションの基本概念と基本構造－マスコミとパーソナルコミュニケーション、記号 ⑥ 12. 言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーション ⑦ 13. コミュニケーションのゆがみ－社会問題としてのいじめ、虐待 ⑧ 14. 援助のためのコミュニケーション－カウンセリング技法 ⑨ 15. 現代のコミュニケーション－携帯電話（スマホ）の功罪など ⑩ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
持ち込み物なしの筆記試験（100%）							
使用教科書				参考図書			
『系統看護学講座 基礎分野 人間関係論』（長谷川浩編）3版 医学書院 2018年（以前のものでも可）				特に指摘しない。教科書の章ごとに、その最後に「参考文献」一覧が提示されているので、必要に応じ、利用する。			
備考							
授業の前後の時間帯に非常勤講師室を訪問することをお勧めします。1年後期「コミュニケーション学」がありますが、本講義と内容的なかわりが強く、「事前学習」と位置付けられるでしょう。講義がある程度進展した段階で小テスト（10分ぐらい）を予告し、実施します。この小テストは、持ち込みなしで実施し、次回以降の授業で返却の際、正解や解答について解説します。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		ボランティア論			森田 政裕	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 本講義においては、1990年代中頃より日本社会に普及・定着したボランティア活動について、普及・定着の社会的背景、ボランティア活動がボランティア本人にもつ意味・意義、ボランティア活動が社会にもつ意味・意義、そしてボランティア活動によって切り拓かれる新たな社会のあり方等について概括的認識を得るとともに、そうした認識に基づいて現代社会の諸問題・課題の解決に主体的・能動的に参画しようとする、ボランティアとしての態度・心構えを形成することを目標とする。</p> <p><学修の到達目標> ①ボランティア活動について理解する。 ②ボランティア活動が現代社会においてもっている意味・意義を理解する。 ③ボランティア活動がボランティア本人にもっている意味・意義を理解する。 ④ボランティア活動を通じて社会に参画しようとする主体的・能動的な市民としての態度・心構えを形成する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 新聞の地方欄（県内欄）に、県や各市町村レベルで行われているボランティア活動（NPO活動）の記事が載っている。そうした記事に日頃から注意しておいてください。 <必要時間>30分程度</p>				<p><内容> 参考図書を一読しておくことをお勧めする。 <必要時間>30分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動とは 2. ボランティア・ボランティア活動の捉え方の変化 3. ボランティア・ボランティア活動の捉え方の変化の背景① - 福祉国家体制の転換 - 4. ボランティア・ボランティア活動の捉え方の変化の背景② - 豊かな社会における個人の生き方の変化 - 5. ボランティア活動がボランティア本人にもつ意味・意義① - 社会的存在であることの自覚 - 6. ボランティア活動がボランティア本人にもつ意味・意義② - 自己発見・自己実現の場 - 7. ボランティア活動が青少年の人間形成にもつ意味・意義① - 多様な人間関係を経験する場 - 8. ボランティア活動が青少年の人間形成にもつ意味・意義② - 社会参画の場 - 9. ボランティア活動が社会にもつ意味・意義① - 社会的問題・課題への取り組みの先駆性 - 10. ボランティア活動が社会にもつ意味・意義② - 「交換」中心社会の見直しの可能性 - 11. ボランティア活動と NPO（非営利組織） 12. ボランティア活動・NPO活動のソーシャル・ガバナンス 13. ボランティア活動の課題① - ボランティアの責任 - 14. ボランティア活動の課題② - 社会的評価の難しさ - 15. ボランティア活動と自分 - 振り返りと今後の展望 - <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>授業参加度（20％）と試験（80％）の総合評価による。 なお、試験についてはノート持込可（コピーノート不可）とする。</p>							
使用教科書				参考図書			
使用しない				<ul style="list-style-type: none"> ・金子郁容『ボランティア—もうひとつの情報社会—』（岩波新書） ・経済企画庁『平成12年度国民生活白書—ボランティアが深める好縁—』（内閣府 HP トップページの白書・年次報告書からダウンロード可能） ・尾田雅夫・吉田忠彦『非営利組織論』（2009年、有斐閣アルマ） 			
備 考							
授業終了後、気軽に声をかけてください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		哲学			竹内 章郎	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要及び到達目標> 自由・平等・友愛（共同性）は、近代社会全般の基礎とされるが、この講義では、自由と共同性との関連も重視しながら、平等とはいかなることかの解明を中心に、格差や不平等が広まる現実を根本から（ラディカルに）理解することを目指したい。近代思想史や哲学史の理解も、そのための手段であるという位置づけで、講義をしたと考えている。</p> <p><学修の到達目標> 1. 大きな問題を根本から考える姿勢を身に着けるために、抽象度の高い言葉を理解しこれがある程度使えるようにする。 2. 近代思想・近代哲学の基本を一定程度理解できるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 講義で扱う教科書の部分を事前に読破する</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 講義終了ごとに、その部分の教科書に基づいて復習する</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
1. ガイダンス（全体の進行について、教科書の使い方など）				教科書		iii～vii頁	
2. 現代において平等を問うことの意味				〃		1～14頁	
3. 平等はなぜ避難されることが多いのか？ 平等の根本的定義		(1)		〃		14～31頁	
4. 〃		(2)		〃		33～44頁	
5. 平等論の深化・拡大、不平等と一体の平等に関する歴史		(1)		〃		44～54頁	
6. 〃		(2)		〃		54～68頁	
7. 〃		(3)		〃		ここまですを振り返って	
8. 〃		(4)		教科書		63～93頁	
9. 悪平等はなぜ生まれたのか？ 伝統的平等論の意義と問題		(1)		〃		93～117頁	
10. 〃		(2)		〃		119～143頁	
11. 新たな能力論的平等論と新たな機会平等論		(1)		〃		143～166頁	
12. 〃		(2)		〃		167～185頁	
13. 新たな平等論の体系の構築に向けて		(1)		〃		185～200頁	
14. 〃		(2)		〃		200～215頁	
15. 〃		(3)		〃			
定期試験							
評価基準・評価方法							
授業への取り組みと定期試験の結果による							
使用教科書				参考図書			
竹内章郎『平等の哲学：新しい福祉思想の扉をひらく』 大月書店				必要に応じて講義中に紹介する			

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		教育学			森田 政裕	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 本講義においては、様々な社会的場面における周囲の他者等との交渉＝相互作用を通じて諸個人が意図的ないし無意図的に人間形成を行っていく社会化の過程に着目し、社会・文化的存在としての人間は家庭や学校における教育だけで作り上げられるものではなく、家族・仲間・地域社会・学校・職場等の種々の人間・社会関係を通じて一生涯にわたり形成され続けるものであるという認識を明確にするとともに、そうした認識に基づき社会に積極的に関わり、諸世代の人々及び自分自身の社会化の過程について理解を深めることを目標とする。同時に、教育と呼ばれる意図的な社会化の場面に主体的・能動的に関与しようとする態度・心構えを形成し、教育者の立場から社会に参加していこうとする積極的な態度・心構えを形成することをもう一つの目標とする。</p> <p><学修の到達目標> ①教育の概念との対比から、社会化の概念について理解する。 ②社会化の方法について具体的に理解する。 ③ライフ・サイクルの各ライフ・ステージにおいて行われる社会化について理解する。 ④人の一生涯にわたる社会化の過程を通じて人生行路の大筋が定まることの適切な理解の上に、自分自身及び他者の社会化を主体的・能動的にコントロールしようとする態度・心構えを形成する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 新聞の社会面、家庭面、文化面に子供の人間形成にかかわる各種記事が載ることがある。そうした記事に日頃から注意しておいてください。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 現代日本の子どもの社会化の状況に対する危機感から、子どもの社会力形成の必要性をうったえた、参考図書を読むことが望ましい。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
1. 教育の概念 2. 社会化の概念 3. 教育と社会化の概念の重なりとズレ 4. 社会化の方法① - 学習の型の視角から - 5. 社会化の方法② - 役割の学習・内面化の視角から - 6. 社会化の方法③ - 役割の学習・内面化と自我形成の視角から - 7. 核家族集団における子どもの基礎的社会的化① - 核家族の役割システムの学習・内面化 - 8. 核家族集団における子どもの基礎的社会的化② - 口唇依存期・愛情依存期 9. 核家族集団における子どもの基礎的社会的化③ - 潜在期・成熟期 - 10. 核家族集団における子どもの基礎的社会的化④ - 近代家族の揺らぎと社会全体による子育て - 11. 仲間集団と子どもの社会的化① - 仲間集団の諸類型 - 12. 仲間集団と子どもの社会的化② - 仲間集団が子どもの社会的化にもつ意義 - 13. 学校・学級集団と子どもの社会的化① - 学校の社会的化機能 - 14. 学校・学級集団と子どもの社会的化② - 学校の人材の選別・配分機能 - 15. 生涯学習・生涯教育の理念と生涯学習社会の実現 定期試験							
評価基準・評価方法							
授業参加度（20％）と試験（80％）の総合評価による。 なお、試験についてはノート持込可（コピーノート不可）とする。							
使用教科書				参考図書			
使用しない				・門脇厚司『子どもの社会力』（岩波新書） ・門脇厚司『社会力を育てる－新しい「学び」の構想－』（岩波新書）			
備 考							
授業終了後に、気軽に声をかけてください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		心理学			大井 修三	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>心理学を正しく理解していると、人と人が関わる場所では、相手の理解に強力な武器となる。なぜなら、①心理学は他者理解の学問だからである。医療従事者と患者さん、医療従事者同士、日常の人間関係など。しかし、「心理学」という言葉は知っていても、心理学を正しく理解している人はなかなかいない。それは、心理学をきちんと勉強した人がなかなかいないということである(授業1)。そこで本授業では、②相手の心を理解するということはどういうことか(授業2、3、4、5、6、7)、③一人一人違うということはどういうことか(授業8、9、10、11)、④相手に目的に向かって動いてもらうということはどういうことか(授業12、13、14、15)、の3点を中心に、医療現場で他者との関係をうまく成立させることに役に立つ心理学の話をする。なるべく日常の状況に合わせた事例を紹介しながら、他者理解に必要な視点を育む。</p> <p><学修の到達目標>これらの授業を通して、相手の「心」を直接把握することができないこと、相手の「心」は推測でしか扱えないこと、同じ状況でも人によって違う心が推測されること、自分の心を相手にわかってもらうためには推測し易い情報を提供しなければならないこと、その上で相手との人間関係を考えなければいけないことを理解して、人間関係に活用することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 将来の自らの医療現場における人間関係(患者と自分の仕事、同僚とのやり取り、医師とのやり取りなど)を想定し、その関係の中で必要となる「相手の心」をどう考えることが可能なかを考えておくこと。毎回の授業に臨むにあたって、配布するテキストを読んで理解すると同時に、疑問を作って、授業中に解決するようにする。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 本授業では、相手の「心」を理解すること、一人一人違うこと・同じこと、人に行動させるのに必要なことを学ぶ。したがって、授業で学習した内容を、現実の場における人間関係で実践すること。本授業の内容は、医療現場だけでなく、家族とのやり取り、映画で出てくる人間関係、恋人の考え、すべてに使えるが、唯一苦手なのが「自分の心」だということも、実感する。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション:「行動」を説明する「心」:授業の概要、評価の方法① 2. 「心」を知る方法:直接覗くことはできない「心」① 3. 「心」を知る方法:「行動」から「心」を推測する② 4. 「心」を知る方法:「心」の推測には「行動」と「刺激」の情報が必要② 5. 「相手の心」は私の中に出来上がる:相手の「心」は主観的解釈② 6. 現象の主観的な理解② 7. 科学的学問としての心理学② 8. 心理学の中心テーマ:個人差③ 9. 個人差を規定する要因1:遺伝③ 10. 個人差を規定する要因2:環境③ 11. 個人差を規定する要因3:遺伝と環境の相互作用③ 12. 要求・行動とフロイト理論④ 13. 行動を出現させるもの:動因と誘因④ 14. 動機づけの機能④ 15. 要求の生得性と習得性④ <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価は、毎回授業で紹介される内容を理解し、自らの身近な事象に利用できるようになってきているかで見ると。そのための参考資料は、試験結果(90%)、毎回の授業で提出するコミュニケーションカード(10%)である。</p>							
使用教科書				参考図書			
教科書は特に用いない。 (授業に必要な資料は、授業時間中に配付する。)				適宜、紹介する。			
備 考							
<p>毎回の授業の終わりにコミュニケーションカードを提出してもらう。ここには授業内容のまとめと同時に授業中に解決できなかった質問も書いてよい。その質問には、翌授業回で解説する。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		生命倫理学			谷口 泰弘	非常勤講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		3年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> バイオエシックス（生命倫理学）の基礎的な事項を学ぶ。現代の医療においては医師だけではなく、多くの医療に関係する職種が協力し、チーム医療を担っている。それぞれの職種に高い倫理観が求められている。本講義では、バイオエシックスに係る歴史的背景から最新の医療に関する倫理的問題群にいたるまで、デジタル教材を活用しながら講義形式で分かり易く解説する。</p> <p><学修の到達目標> 医療専門職に不可欠な倫理観を身につけるため、バイオエシックスに係る問題群について、倫理的・法的・社会的問題として捉え、思考し行動に移せる能力を修得する。①バイオエシックスの歴史的背景等から、人間の尊厳を理解する。②講義の各論から、医療に係る倫理的問題の本質を見極め、立場の違いを理解したうえで、解決に向けた多角的な思考ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に記載した各单元について、事前に教科書を読み、分からない単語などを予め調べておくことが望ましい。</p> <p><必要時間>各回45分</p>				<p><内容> 補足資料として配られたプリントと教科書等の内容と照らし合わせて、何が問題になっているかを整理して考えると良い。関連教科として社会学、人間関係論、哲学などがある。</p> <p><必要時間>各回45分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. バイオエシックス総論①（ガイダンス、基礎概念） 2. バイオエシックス総論②（歴史的背景 WW II 以前） 3. バイオエシックス総論③（歴史的背景 WW II 以後） 4. 自己決定と人間の尊厳（インフォームド・コンセント） 5. 倫理理論の考え方（応用倫理学からのアプローチ） 6. 生殖補助医療の問題①（人工授精、体外受精、代理母） 7. 生殖補助医療の問題②（出生前診断、着床前診断、人工妊娠中絶） 8. 遺伝子をめぐる問題（ヒトゲノムの利用、遺伝子特許、個人情報、エンハンスメント） 9. ライフサイエンス研究をめぐる問題（再生医療、ヒト ES 細胞研究、ヒト iPS 細胞研究） 10. 脳死・臓器移植をめぐる問題（脳死の定義、臓器移植法、移植システム） 11. 終末期をめぐる問題①（尊厳死、安楽死） 12. 終末期をめぐる問題②（治療中止、鎮静、緩和医療） 13. 医療と法律（医療事故関係、医療契約） 14. 広義のバイオエシックス（動物倫理、環境倫理） 15. 研究をめぐる倫理（研究不正、倫理委員会、オーサーシップ、利益相反等） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験を実施して評価する（80%）。ミニレポート等の提出物の内容も評価に入れる（20%）							
使用教科書				参考図書			
改訂版 生命倫理・医事法、塚田敬義 / 前田和彦編、医療科学社（2018年）、3300円 ISBN: 978-4-86003-497-9							
備考							
適宜、補足資料を配布し、理解が深まるよう講義する。 特段、オフィスアワーは設けませんが、講義終了後に教室に残り質問等について対応する（この時間を活用してください）。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
教養教育科目		生命倫理学			○塚田 敬義、 近藤邦代、青木郁子	非常勤講師 教授、講師	
人間と社会							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○				3年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択			○				
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> バイオエシックス（生命倫理学）の基礎的な事項を学習する。現代の医療においては医師だけではなく、多くの医療に関係する職種が協力し、チーム医療を担っている。それぞれの職種に高い倫理観が求められている。本講義では、バイオエシックスに係る歴史的背景から最新の問題群にいたるまで、デジタル教材を活用しながら講義形式で分かり易く解説するとともに医療の現場を想定した事項のグループワークを行う。</p> <p><学修の到達目標> 医療専門職に不可欠な倫理観を身につけるため、バイオエシックスに係る問題群について、倫理的・法的・社会的問題として捉え、思考し行動に移せる能力を修得する。</p> ①バイオエシックスの歴史的背景等から、人間の尊厳の尊さを理解し、説明することができる。 ②講義の各論から、問題の本質を見極め、立場の違いを理解したうえで、解決に向けた多角的な思考ができる。 ③医療の現場を想定したグループワークを通じて、患者、家族、看護師のそれぞれの立場から倫理的な思考ができる。							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に記載した各単元について、事前に教科書を読み、分からない単語などを予め調べておくことが望ましい。</p> <p><必要時間> 毎回45分</p>				<p><内容> 補足資料として配られたプリント、教科書及び演習の内容と照らし合わせて、何が問題になっているかを整理して考えるといい。関連教科として社会学、人間関係論、哲学などがある。</p> <p><必要時間> 毎回45分</p>			
授業計画							
1. バイオエシックス総論①（ガイダンス、基礎概念、歴史的背景 WW II 以前） 2. バイオエシックス総論②（歴史的背景 WW II 以後） 3. 自己決定と人間の尊厳（インフォームド・コンセント）① 4. 自己決定と人間の尊厳（インフォームド・コンセント）② 5. 生殖補助医療の問題①（人工授精、体外受精、代理母） 6. 脳死・臓器移植をめぐる問題（脳死の定義、臓器移植法、移植システム） 7. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ① 8. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ② 9. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ③ 10. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ④ 11. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ⑤ 12. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ⑥ 13. 生の始まりに関わる倫理問題と生の終わりに関わる倫理問題を考える GW ⑦ 14. 終末期をめぐる問題（尊厳死、安楽死、治療中止、鎮静、緩和医療） 15. 広義のバイオエシックス（動物倫理、環境倫理）と研究をめぐる倫理 定期試験 筆記						【塚田】 【塚田】 【塚田】 【塚田】 【塚田】 【塚田】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【近藤・青木】 【塚田】 【塚田】	
評価基準・評価方法							
定期試験（50%）、グループワークでの参加度と発表（50%）を参考に総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
改訂版 生命倫理・医事法、塚田敬義／前田和彦編、医療科学社（2018年）、3300円 ISBN: 978-4-86003-497-9							
備考							
適宜、補足資料を配布し、理解が深まるよう講義する。 特段、オフィスアワーは設けないが、講義終了後に質問等について対応する（この時間を活用してください）。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 コミュニケーション		基礎演習			○辻 圭一、石田 裕保、 藤橋 雄一郎、植木 努	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では、学生生活のあり方、レポートの書き方など身近なテーマから、社会的マナーやルール、あるいは社会人として知るべきテーマについて論じ、社会のルールをしっかりと理解することを目的とする。教員から教授するだけでなく、課題を投じてグループディスカッションを行ったり、テーマに応じたレポート作成を行う。これらの体験を通じ、学生同士で互いの言動について気付くことができるようになる。様々な能動的活動の中で社会的スキルの向上を目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①学生生活のあり方が理解できる ②話し合いを通じて他者の考え方が理解できる ③体験を通じて機能障害、能力障害、社会的不利が理解できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 日頃から新聞や本を読んで長文の読み書きに慣れておく事。テレビで医学・医療を題材にしたものにはなるべく観ておく事。 <必要時間>各回30～60分</p>				<p><内容> 各自で毎回の講義後に、ノートなどに内容をまとめておく事。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション、自己紹介（石田、藤橋、辻、植木） 学生生活のあり方、レポートの書き方と提出方法（辻） 教育について～教育の3領域～（辻） 社会的マナー<礼儀>やルール（辻） コミュニケーションスキル<グループディスカッション>（藤橋） メディアと医学<インターネットやテレビ等の情報の有用性について>（辻） グループワーク1<テーマ：教養・社会性・医療と経済>発表および討論（辻） グループワーク2<テーマ：福祉・労働の意義・人間関係>発表および討論（辻） 理学療法士の世界<日本理学療法士協会、理学療法士の仕事、就職>（辻） 良き医療職、医療人とは何かについて考える（辻） 障がい者体験、身体と物理的作用の体験（石田、植木） 車椅子の基礎知識<操作・種類・車椅子スポーツ>（藤橋） 車椅子体験 準備<オリエンテーション>（石田、藤橋、辻、植木） 車椅子体験（石田、藤橋、辻、植木） 理学療法士の専門性を理解する（辻） 							
到達目標① 到達目標② 到達目標③							
評価基準・評価方法							
受講態度（40%）、レポート1（30%）、レポート2（30%）							
使用教科書				参考図書			
適宜、資料を配布する							
備考							
講義内容に質問があれば、研究室に問い合わせる事。 <辻研究室 k.tsuji@heisei-iryuu.ac.jp >							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 コミュニケーション		基礎演習			加藤 清人、○河村 章史 永井 貴士、竹中 孝博 世良 龍哉、市田 博子、浅野 莉沙	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 学内ルールや学習方法、レポートの書き方、プレゼンテーション、社会的ルール、マナーなどについて学ぶ。特に、学習方法に関する演習では、医療従事者に求められる知識・技術を修得するための基盤づくりを行い、学習習慣の定着につなげる。これらの演習を通してルールやマナー、コミュニケーションに関してその実践を経験する。</p> <p><学修の到達目標> ①学校生活を送る上でのルールやマナーを理解し実践できる。 ②社会人・医療職として求められる常識、ルール、マナーなどを習得する。 ③グループ討論、プレゼンテーションのスキルを向上させ、他者の意見を傾聴し自身の意見を発信できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 演習のオリエンテーション等で配布する資料で指示する。 <必要時間>各回60分程度</p>				<p><内容> 整理ノート、シェア学習時に課題を呈示する。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
1. オリエンテーション、学内生活の過ごし方 2. 学習方法のオリエンテーション 3. 単語学習 4. 整理ノート学習 5. 個別学習 (1) 6. 個別学習 (2) 7. レポートの書き方 8. グループ演習のオリエンテーション 9. 第1試行・・・③ 10. 調べ学習の演習 (1) 11. 調べ学習の演習 (2) 12. シェア学習 (1) 13. シェア学習 (2) 14. シェア学習 (3) 15. 第2試行				到達目標①② 到達目標③ 到達目標①② 到達目標①②③ 到達目標③ 到達目標①②③ 到達目標③			
評価基準・評価方法							
受講態度（20%）、課題（80%）で評価・判定する。							
使用教科書				参考図書			
PT・OT 国家試験共通問題頻出キーワード1800.南江堂2013 PT・OT 基礎から学ぶ解剖学ノート第3版.医歯薬出版.2018 PT・OT 基礎から学ぶ生理学ノート第3版.医歯薬出版.2018 PT・OT 基礎から学ぶ運動学ノート第2版.医歯薬出版.2016				杉原素子編：作業療法学全書〔改訂第3版〕第1巻 作業療法概論（共同医書出版社）			
備考							
演習内で質問の時間を設ける。また演習外でも適宜メール等で質問を受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 コミュニケーション		基礎演習			○松田 育子 野原 尚美	准教授 教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 病院眼科において、眼科診療および視能訓練士の仕事を見学し、視能訓練士の患者や仕事に対する思い、必要な能力、その能力を身につけるために学生として何をどのように学ぶべきか、ということを各自整理していく。そのことにより、それぞれが目指すゴールを明確にする。整理して書く課題、グループ討議、討議内容の報告を通して、他者のものの見方、考え方、価値観に触れ、多様な生き方を知るとともに自分を振り返ることを目的とする。</p> <p><学修の到達目標> ①大学生として常識をわきまえた行動がとれる。社会人としてのマナー、ルールが理解できる ②自分の考え方、意見を整理し発信していける。他人の考え方や意見に耳を傾け理解できる ③マイゴール、自分のやるべきことを明確にできる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 普段から、人に何かを伝える、あるいは、人を深く知ることを意識して、プレゼンテーションやコミュニケーション技法を身につけられるように努力してみてください。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 課題をこまめにまとめていくことを義務付けて下さい。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 見学実習の心得、課題学習について 2. 病院眼科 見学実習 3. { 整理して書く課題 : 見学実習について記録に残す 4. { 5. { グループ討議に関する課題 : テーマに沿ってグループ討議 6. { 7. { グループ討議内容の報告 8. { 9. キャリアアンカー : 仕事の価値観を知る 10. 取材調査方法を学ぶ : 記者会見方式による取材方法を学ぶ 11. 取材の実践 : 視能訓練士を対象とした取材を計画する 12. 取材の実践 : 実際に取材する 13. 取材の実践 : 取材した内容をまとめ、報告会に向け準備をする 14. 取材報告 15. 取材報告内容から、各自、目指す視能訓練士像やゴールを明確にする 							
評価基準・評価方法							
課題作成、グループ討議への積極性、報告会発表、取材内容により総合評価する。							
使用教科書				参考図書			
適宜資料を配付する							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 コミュニケーション		文章表現法			弓削 繁	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 将来医療や介護等の世界で働く皆さんにとって、的確なことばによるコミュニケーションと、要を得た文章による業務の記録や提言などは大切な職務の一つになります。そこでこの講義では、毎回はじめに自分の国語力を知り基礎力を養うために、「自己診断テスト」を行います。そして教科書に沿って文章表現の基礎を学び、手紙・実用文・作文・論説文・レポートなどの書き方を実践的に身につけていきます。</p> <p><学修の到達目標> ①国語に関する基礎知識を豊かにし、文章表現の基礎力を養う。 ②専門科目の理解に必要な国語力と、論理的なレポート作成力を身につける。 ③社会人・職業人に求められる国語力・文章表現力の向上を図り、資格試験に対応できるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に教科書を読み、付されている問題を解いてくること。文章作成問題については時間内に書き上げられるよう、内容と構成を考えてくること。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 返却された自己診断テストの間違いをチェックし、正しく理解しておくこと。学習内容を復習するとともに、宿題になった文章課題を完成させること。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 講義の内容と方法についての説明と、ことばと文章の機能に関する概説 文章を書くための基礎知識－原稿用紙の使い方 学修目標①に相応 文章を書く時の注意点－悪文の種類とその直し方 目標① レポートの様式－頭書き・文献の引用・注記・典拠など 目標①② レポートの用語と文体－話しことばと書きことば、常体と敬体、など 目標①② 作文・論作文・論文の書き方 目標② 論理的な文章構成－帰納法と演繹法、頭括法と尾括法、三段構成と四段構成、など 目標①② 作文または小論文の作成－授業前半の総括として 目標①② 敬語の基礎知識－敬語の種類と用法 目標①③ 敬語使用上の注意点－相手との関係性と場面 目標①③ 手紙の種類と様式－頭語と結語、時候・安否の挨拶、主文と末文、など 目標①③ 手紙文の作成－礼状・挨拶状を書く 目標①③ 公用文の種類と様式－案内状・紹介状・会議録など 目標①③ 就職等に必要書類の書き方－履歴書・エントリーシートなど 目標①③ 社会問題をテーマにした小論文の作成－全体の総括として 目標①②③ 定期試験 筆記（国語の基礎知識に関する問題と論述問題から成る） ※毎時はじめに自己診断テストを行い、各自自己採点する。 							
評価基準・評価方法							
自己診断テストでは学習意欲と理解力を評価し、提出課題では文章作成の基礎力を、また定期試験では国語の基礎学力と論理的な文章構成力を、所期の到達目標に照らして評価する（定期試験直前の勉強では対応できないので、不断の努力を怠らないこと）。評価方法は、定期試験を60%、自己診断テストと提出課題を40%とする。							
使用教科書				参考図書			
『日本語表現法』、改訂第2版、庄司達也ほか編、翰林書房、2016年				必要に応じて講義中に紹介する。			
備 考							
自己診断テストは毎回必ず回収、評価して返却するので、必ず提出すること。また文章作成課題は問題箇所を指摘して返却するので、正しい表現に書き直すこと。 教科書に課題用の原稿用紙が綴じ込まれているので毎回忘れずに持ってくること。 質問や相談などは月曜日と火曜日の授業前後に対応しますが、事前連絡があれば他の日時で構いません。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 コミュニケーション		コミュニケーション学			近藤 ひろえ	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要>コミュニケーションの重要性を理解し、医療現場において、患者さん・利用者さん・医療スタッフとの間でよりよい人間関係を構築するための具体的なコミュニケーション能力を身につける。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①非言語コミュニケーションの重要性を理解し、実践できる</p> <p>②年代が違う人への挨拶、返事など、日常的なコミュニケーションができる</p> <p>③自分の気持ち・考えなどを明確に相手に伝えることができる</p> <p>④相手の言葉の背景にある気持ちや考えを想像しコミュニケーションすることができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>・前回の授業内容を振り返る</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容></p> <p>・授業で学んだこと・気づいたことを実際の生活の中で、試す。</p> <p>・試した上で疑問点を次回授業で質問できるように準備する。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授 業 計 画							
1. ノンバーバルコミュニケーションの重要性	ノンバーバル（非言語）コミュニケーションの重要性を学ぶ						
2. 医療スタッフとして求められるコミュニケーション	医療スタッフとして当たり前求められるコミュニケーションスキルを自分がどの程度できているのか気づく						
3. 価値観の違いを感じる	相手と自分の価値観の違いに気づき、その違いをどのように受け入れてコミュニケーションをすることが必要かを学ぶ						
4. 伝え方の基本①	なぜミスコミュニケーションが起こるのか、仕組みを学ぶ。どのように説明することが必要かを学ぶ						
5. 伝え方の基本②	「4. 伝え方の基本①」の続きとして、具体的な伝え方のスキルを体験しながら学ぶ						
6. 伝え方の基本③	「4. 伝え方の基本①」の続きとして、実際に説明する場面を想定してロールプレイングをする。自分の良い点や今後の課題を見つける						
7. 自己理解①	他者とのコミュニケーションを円滑にするために、自分のことをどのように捉えているかが重要であることを学ぶ						
8. 自己理解②	「6.自己理解①」の続きとして、自分の強みや弱みを知りそれを活かす考え方を学ぶ						
9. 興味・関心を持つ	コミュニケーションに欠かせない他者への興味・関心力の重要性を学ぶ。興味・関心を示すことができるような質問力について学ぶ						
10. 伝えにくいことを伝える	「言いにくいけれど、伝えなければならないこと」を先輩・患者様などに伝える手法を学ぶ						
11. 接遇用語の基本①	医療スタッフとして知っておかなければならない、敬語・クッション言葉などの接遇用語を学ぶ						
12. 接遇用語の基本②	前回の授業で学んだことをワークなどで実践する						
13. チームワーク	チームで仕事する上で必要な考え方を学ぶ。自分自身がチームでどんな役割・立ち位置にいることが多いかなどに気づく						
14. コミュニケーション実践① ケーススタディ	今まで学んできたことを医療場面のケーススタディを考えることで復習する						
15. コミュニケーション実践② ケーススタディ	今まで学んできたことを医療場面のケーススタディを考えることで復習する						
	定期試験 筆記						
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
<ul style="list-style-type: none"> ・授業態度（授業への関わり方） 60% ・レポートの内容（1回レポート提出） 20% ・後期試験 20% 							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> ・近藤ひろえ 著 2018年版「コミュニケーション学 ワークブック」 				<ul style="list-style-type: none"> ・授業の進行に伴って、その都度紹介する。 ・適宜、教材として使用するプリントなども配付する。 			
備 考							
<ul style="list-style-type: none"> ・自分のコミュニケーションの問題・悩みなどなんでもいいので課題をもって授業に臨んでください。 ・オフィスアワー：授業中に質問の時間を取るほか、質問紙による質問には、次回の授業時に回答する。 <p>Eメールアドレスは、初回講義時間内にお知らせする。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語 I (教養英語)			西澤 康夫	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 日・英語の語順を対比し、英文法の基本を学び、初級～中級程度の英語の読解力を養うこと 2. 英語の母音と子音の発音に習熟し、初級程度の単語や文を正しく聞き分ける聴解力を身につけること 3. 五文型について学び、中級程度の英文の構造を正しく理解し、正確に和訳できる力を身に付けること 4. 英和辞典の使い方に慣れ、自力で英文を読むための基本ツールとして使いこなせるようになること 5. 動詞の活用、自動詞と他動詞、複文について学び、基本的な英文を話し、書く力を身に付けること 6. 前置詞、冠詞、to 不定詞、現在分詞、過去分詞を正しく使えるようになるために、基本例文を学ぶこと 7. 仮定法について基本を学び、多くの例文を通じてその使い方に慣れること 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<内容> 使用するテキストの英文をまず自分で読んでおき、理解できないところがないか、あらかじめチェックしておくこと。授業中の説明を聞いても分からないときは質問すること。 <必要時間> 毎回60分				<内容> 授業中の説明についてのメモを見ながら、要点を整理してきちんと正確にノートに記述しておくこと。不明な個所があれば、次回の授業で質問すること。 <必要時間> 毎回60分			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業概要、学修目標について説明し、英語を学ぶ意味、日・英語の語順の違いに意識を喚起する 2. 英文法の基本である八品詞についてそれぞれの特色を学び、英文法を学習するための土台を固める。 3. 英語の文構造を説明できる五文型について学び、英文を理解する基本を例文の分析を通じて学ぶ。 4. 八品詞と文型の関係について学び、文の主語と動詞が、あらゆる文の意味を大略決定することを学ぶ。 5. 単語の構成素である母音と子音について学び、日・英語の発音の基本的な相違に対する意識を高める。 6. 個々の母音、および子音について個別に発音を学び、単語の中で実際に発音する訓練をする。 7. 英単語のスペリングとその発音との関係を学び、知らない単語の発音を予測する訓練をする。 8. 音節及びアクセントについて学ぶことによって、単語を理解可能なレベルで発音できるように訓練する。 9. 英文のイントネーションを学ぶことによって、英文に感情を乗せて話せるための基本を身に付ける。 10. 前置詞+名詞=前置詞句という公式概念を使って、英語表現の微妙な使い分けについて学ぶ。 11. to 不定詞の三つの使い方に慣れ、例文を通じて英語表現の幅を広げる方法を学ぶ。 12. 仮定法、すなわち仮想表現について学び、豊富な例文を通じてそれを自在に使えるよう慣れ親しむ。 13. 冠詞の種類と使い方について学び、常に冠詞を正しく使うことができるようになるための練習をする。 14. 接頭語、および接尾辞について学び、派生語を通じて語彙を増やす方法に習熟する。 15. 特定の接頭語や接尾辞を使って、単語の品詞変換、反意語の作成方法について学ぶ。 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
私語を慎み、予習を怠らず、授業中はきちんとノートを取り、宿題を次週に提出し、分からないところを素直に質問する態度、授業参加度（40%）と筆記試験の成績（60%）で評価する。							
使用教科書				参考図書			
循環型で学ぶ英語リーディング演習 Reading Cycle、金星堂、2016年初版発行							
備 考							
英和辞典、もしくは電子辞書を購入し、授業中にいつでも参照できるように持参すること。また、授業の予習や復習にそれらの辞書を参照すること。ただし、英和辞典や電子辞書に代わるものとして、スマホでインターネット上の辞書、例えば weblio などを使用することは可とする。宿題の提出は、所属学科、学籍番号、氏名を記入したルーズリーフ1～2枚程度を使用して提出すること。ノートによる宿題の提出は不可。教員による点検の終わった宿題は、原則として次週に返却するものとする。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語 I (教養英語)			長尾 裕子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○	○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では英語の読解能力を向上させることをねらいとする。身近なトピックスを題材を使ったテキストを使用し、英語の語彙、語法、表現等を学ぶことにより大学レベルの読解力を養うことを目指します。</p> <p><学修の到達目標> 辞書を引くことにより インターネットなどで英語検索をした文章が読めたり、自分の分野の論文が読めるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 前もって次に学ぶチャプターのわからない単語の意味を辞書で引いておく</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> その日に学んだことを復習し、単語やイディオムの意味を頭にいれておく</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. Fringe Science 3. Indie Films 4. Nuclear Power 5. The World Cup 6. Cloud Computing 7. Centeneraries 8. Mardi Gras 9. Medical Tourism 10. How safe are cell phones? 11. Kickstarter 12. Juresalem 13. The Serengeti 14. Fair Trade 15. Mobile Apps <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
授業参加度40%、筆記試験60%を総合的に判断する							
使用教科書				参考図書			
<p>タイトル：Reading Pass Intro 著者：Andrew E. Bennett 出版社：南雲堂</p>							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語Ⅱ（日常英会話）A			西澤 康夫	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択	○	○					
授業概要・学修の到達目標							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 初級の基本的な日常の英語を聞いて、一定程度聞き取りが出来るようにする。 2. 日常の英語の中でよく使われる表現に着目し、ペアーで使う練習をする。 3. 身近な話題について書かれた小さなエッセイを幾つか読み、基本態な英語に慣れる。 4. 与えられた短い日常英語の例文を、対応する和訳を参考にしながら、50以上暗唱する。 5. 英文メールに慣れ、自分でもメール文を書ける自信をつける。 6. Dialogue（対話）を読んだり、聞いたりして、理解できるように練習する。 7. テキストの対話文をペアーで練習し、自分で積極的に発話する態度を身に付ける。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<内容> 日常の英語を素材にしたテキストの予習をし、基本暗唱英文を、テストに備えて、毎回一定量、暗唱しておくこと。 <必要時間>各回60分				<内容> 教室で学んだ対話文の音読をし、英語の定着を図る。暗唱英文テストの検証をし、間違いをたどす。 <必要時間>各回60分			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の受け方についてガイダンスを受け、テキストの Unit1 の Dialgue、Reading、Writing を学ぶ。 2. Unit1 の Reading の解説、Writing のパラグラフの構造について学び、暗唱英文の英文を学ぶ。 3. Unit2 の Dialgue、Reading、Writing を学び、動詞 + to 不定詞・動名詞について学び、小テストを受ける。 4. Unit3 の Dialogue、Reading、Writing を学び、見た目や性格を表す形容詞を学び、小テストを受ける。 5. Unit4 の Dialogue、Reading、Writing を学び、be 動詞、一般動詞の過去形を学び、小テストをうける。 6. Unit5 の Dialgoue、Reading、Writing を学び、現在進行形と過去進行形を学び、小テストを受ける。 7. Unit6 の Dialogue、Reading、Writing を学び、命令形について学び、小テストを受ける。 8. Unit7 の Dialogue、Reading、Writing を学び、比較級と最上級について学び、小テストを受ける。 9. Unit8 の Dialogue、Reading、Writing を学び、存在や所有を表す表現を学び、小テストを受ける。 10. Unit9 の Dialogue、Reading、Writing を学び、未来を表す表現について学び、小テストを受ける。 11. Unit10 の Dialogue、Reading、Writing を学び、現在完了形の4つの用法を学び、小テストを受ける。 12. Unit11 の Dialgue、Reading、Writing を学び、提案、義務を表す助動詞を学び、小テストを受ける。 13. Unit12 の Dialogue、Reading、Writing を学び、Wh 疑問文と間接疑問文を学び、小テストを受ける。 14. Unit13 の Dialogue、_Reading、Writing を学び、可算名詞と不可算名詞について学び、小テストを受ける。 15. Unit14 の Dialogue、Reading、Writing を学び、Yes/No 疑問文、Wh 疑問文を学び、小テストを受ける。 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
予習復習、宿題をきちんと行い、私語なく受講し、暗唱英文等の小テストを受ける授業参加度（50%）と、定期試験の結果（50%）で評価する。							
使用教科書				参考図書			
English Beams: Essential Skills for Talking and Writing 金星堂、2016年、1月発行							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語Ⅱ（日常英会話）B			ミルボド・セイエド・モハマド	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択	○	○					
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では、英語によるコミュニケーション能力を総合的に向上させることをねらいとする。その際、英語の伝達的な機能のみにとどまらず、文化・社会とのかかわりについても考慮する。毎回さまざまな言語活動を行い、英語の持つ多様な機能や働きを考えることも目的の一つとする。</p> <p><学修の到達目標> 英語の受信能力（リーディング・ライティング）だけではなく、発信能力（リスニング・スピーキング）を高める。また、英語の伝達的な機能のみではなく、英語と文化・社会とのかかわりなどへの理解を高め、多様な情報を様々な方向から理解・解釈する力の育成を目指す。授業終了時には英語の受信能力及び発信能力が向上し、実践することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・事前の準備に取り組むこと ・テキストを読み、理解を深めること ・学習内容を周知すること <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> ・指導者が提示した内容を踏まえて復習すること ・事後活動に積極的に参加すること <必要時間> 毎回30分</p>			
授業計画							
<p>(皆さんの英語力とテキストの難易度をすり合わせ、無理のない進み方で行う。)</p> <ol style="list-style-type: none"> Week 1: Introductions / Family: Pairwork activity Week 2: Food, Time: Questions & conversations Week 3: House & Home, Music: Questions & conversations Week 4: Transportation, Sports: Questions & conversations Week 5: Numbers, Best friends: Questions & conversations Week 6: TV, Work: Questions & conversations Week 7: Vacation, School: Questions & conversations Week 8: Movies, Money: Questions & conversations Week 9: Restaurants, Animals: Questions & conversations Week 10: Shopping, Health & Fitness: Questions & conversations Week 11: Fashion, Travel: Questions & conversations Week 12: Books, Newspaper, Sickness: Questions & conversations Week 13: Holidays, Fears: Questions & conversations Week 14: Dating, Marriage: Questions & conversations Week 15: Review all topics <p>試験</p>							
評価基準・評価方法							
授業参加態度・小テスト・・・40%、理解度判定・・・60%							
使用教科書				参考図書			
<p>テキスト：TOPIC TALK 著者：David Martin 出版社：EFL Press（埼玉）</p>							
備考							
<p>学生がテキストの内容をよく理解するために各ユニットをスライドプレゼンテーションで説明する。 授業でDVD 日常英会話入門も使用し会話の練習を行う。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語Ⅱ（日常英会話）C			長尾 裕子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択			○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義は英語のコミュニケーション能力を高めるための授業で、英会話能力を養うことを目的とする。身近で起こることを英語で表現したり、ペアで会話練習をしたりすることにより、英語で話すことの楽しさを味わえるようにしたいと思います。</p> <p><学修の到達目標> 友達と簡単な会話が英語ででき、英語の質問に即答できるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書を読んで 内容を理解し声に出してよんでくること <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 学習したことを復習し、会話練習をする <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. I'm a student. Self Introduction 2. What' your phone number? 3. That's my wallet. 4. Review 5. Do you like hip hop? 6. What do you do for fun? 7. Can you play the guitar? 8. Review 9. What's she wearing? 10. Are there any windows? 11. The bank is on the corner. 12. Review 13. Do we have any milk? 14. Where were you yesterday? 15. What did you do? Review 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
授業中の応答40%、筆記試験60%を総合的に判断する							
使用教科書				参考図書			
タイトル：Smart Choice 3rd Edition、Starter 著 者：Ken Wilson, Thomas Healy 出 版 社：Oxford University Press							
備 考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		英語Ⅲ（専門英語）			ミルボド・セイエド・モハマド	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では、ホスピタル・イングリッシュによるコミュニケーション能力を総合的に向上させることをねらいとする。発音や聞き取りの練習により、スピーキングやリスニングの能力を育成する。「読む」「聞く」「話す」という3つの技能を育て、英語の運用能力を総合的に養う。</p> <p><学修の到達目標> 毎回さまざまな医療に関する言語活動を行い、英語の持つ多様な機能や働きを考えることを目指す： ①正しい発音と適切なパターンで発話することができる。 ②医療英語によるコミュニケーションに必要なリスニング力を身につけ、状況の聞き取りができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18,21,24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・事前の準備に取り組むこと ・テキストを読み、理解を深めること ・学習内容を周知すること <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> ・指導者が提示した内容を踏まえて復習すること ・事後活動に積極的に参加すること <必要時間> 毎回30分</p>			
授業計画							
<p>(皆さんの英語力とテキストの難易度をすり合わせ、無理のない進み方で行う。)</p> <ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション Lesson 1 Reception Desk (救急外来受付) Lesson 2 Examination Room (診察室) Lesson 3 Giving Injection (注射をする) Lesson 4 Explanation to a Family Member (患者の家族への説明) Lesson 5 Self-Introduction and First Meal (自己紹介と初めての食事) Lesson 6 Orientation to the Ward (入院病棟を案内する) Lesson 7 Asking Height, Weight, and Temperature (身長、体重、体温を訪ねる) Lesson 8 Obtaining the Patient's History (患者歴をとる) 小テスト Lesson 9 Checking the Patient's Condition (患者の状態をチェックする) Lesson 10 Blood Test Explanation (血液検査の説明) Lesson 11 Drawing a Blood Sample (採血) Lesson 12 Explaining about the Operation: Basic Procedures (手術についての説明: 基本的手順) Lesson 13 Explaining about the Operation: Anesthesia (手術についての説明: 麻酔) Lesson 14 Taking the Patient into Surgery (手術室への搬送) <p>試験</p>							
評価基準・評価方法							
授業参加態度・小テスト・・・40%、理解度判定・・・60%							
使用教科書				参考図書			
タイトル: Essential English For Nurses 著者: Paul Zito & Masako Hayano 出版社: 日総研							
備考							
学生がテキストの内容をよく理解するために各ユニットをスライドプレゼンテーションで説明する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目		ドイツ語			末永 豊	非常勤講師	
外国語							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> ドイツ語のアルファベット、発音の仕方から人称代名詞、名詞、動詞、疑問詞など基本的なことがらを学ぶ。理解をたしかにするために、随時小試験をする。 詩の朗読を練習し、学期末に暗唱朗読をする。折をみて代表的なドイツの歌を聴く</p> <p><学修の到達目標> 新しいことを知ることのたのしさを知る ドイツ語の基本的な表現を理解し、習得する</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 先の学習項目に目を通しておくこと</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 短時間でも学習したことがらを見直しておく</p> <p><必要時間>各回15分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション（日本語になったドイツ語、ドイツ語圏の国々、暗唱朗読のことなど） 2. アルファベット、発音Ⅰ 3. アルファベット、発音Ⅱ 4. 発音で気をつけること、あいさつなど。朗読練習の開始 5. ドイツ中世都市の成立。朗読練習 6. わたしは行く、あなたは行くなど。朗読練習 7. ～～は、～～の、～～に、～～をⅠ。朗読練習 8. ～～は、～～の、～～に、～～をⅡ。朗読練習 9. 私は眠る、あなたは眠るなど。朗読練習 10. 誰が、何が、いつ、なぜ、どこへなど。朗読練習 11. 誰が、何が、いつ、なぜ、どこへなどⅡ。朗読練習 12. 「ロマンチック街道」とはどんな街道か。朗読練習 13. 雨にもかかわらず、車で、トンネルを通過してなど。朗読練習 14. テーブルの上に、テーブルの上へなど。暗唱朗読実施 15. 曜日、月名、四季など。暗唱朗読実施 <p>定期試験 筆記</p>							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
<p>理解度、積極性を重視 定期試験（50%）、小試験（20%）、暗唱朗読（20%）、受講の様子（10%）で総合的に評価</p>							
使用教科書				参考図書			
プリント教材を使用				必要に応じて紹介			
備 考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
基礎教育科目 外国語		中国語			橋本 永貢子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択	○	○	○	○			
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 現代中国語の初歩を学ぶ。基礎的な中国語の習得を通じて、中国語が一言語としてどのような特徴を持っているのかを学び、また、中国人とコミュニケーションをとる場合に必要な知識や中国語の背景にある中国の文化や社会についても理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①発音記号が読めるようになること ②基礎的な文法を習得し、簡単な日常会話ができるようになること</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18、21、24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書付録のCDを聞いて予習しておくこと</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 教科書付録のCDを聞いて復習しておくこと 授業中に指示された課題に取り組むこと</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 中国語の概要と四声 2. 母音 (1) 3. 母音 (2) 子音 (1) 4. 子音 (2) 5. 発音のまとめ 6. 挨拶のしかた 7. “A是B”の文 (1) 8. “A是B”の文 (2)、動詞述語文 (1) 9. 動詞述語文 (2) 10. 存在を表す文 (1) 11. 存在を表す文 (2)、所在を表す文 (1) 12. 所在を表す文 (2) 13. 助動詞のある文 (1) 14. 助動詞のある文 (2) 15. まとめ <p>定期試験 筆記 到達目標①は、全ての回を通して定着を図る。②は6回以降で学修していく。</p>							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
発音とリスニングを重視する。毎回の授業における理解度や発音の状況（20%）と学期中数回行う小テスト（30%）、および期末テストの結果（50%）から総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
『医療系学生のための初級中国語』 山田真一 著 2009 白帝社							
備 考							
小テストについては、次の授業の際に採点したものを返却しまた解説する。 連絡先メールアドレス：ran@gifu-u.ac.jp							

リハビリテーション学科

理学療法専攻

◎リハビリテーション学科理学療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ	
専門 基 礎 科 目	人体の構造	解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）	1年次前学期	千田隆夫	59
		解剖学Ⅱ（内臓系）	1年次前学期	江村正一	60
		解剖学Ⅲ（神経系） ※	1年次後学期	近藤直実、堀 信宏、河村章史、大場かおり、藤橋雄一郎	61
		解剖学演習（体表解剖 上肢）	1年次前学期	田島嘉人	62
		解剖学演習（体表解剖 下肢）	1年次後学期	田島嘉人	63
	人体の機能	生理学Ⅰ（動物的機能）	1年次前学期	川島 卓	64
		生理学Ⅱ（植物的機能）	1年次後学期	川島 卓	65
		生理学演習 ※	1年次後学期	河合克尚、藤橋雄一郎、植木 努	66
		運動学総論	1年次前学期	堀 信宏	67
		臨床運動学	1年次後学期	曾田直樹	68
		運動学演習 ※	2年次前学期	曾田直樹、大場かおり、田島嘉人、石田裕保	69
	心身の発達	人間発達学	1年次前学期	大森正英	70
	疾病の成り立ち	病理学概論 ※	1年次後学期	武内康雄、山本容正	71
		内科学 ※	2年次前学期	平野智久、山本眞由美、坂 義人、高田信幸、近藤直実、古田弥生	72
		整形外科学	2年次前学期	西本 裕	73
		神経内科学 ※	2年次前学期	下畑享良、木村暁夫、林 祐一、山田 恵、吉倉延亮、竹腰 顕	74
		精神医学	2年次前学期	宮地幸雄	75
		小児科学 ※	2年次前学期	近藤直実、近藤富雄、堀田 亮	76
	障害の成り立ち	リハビリテーション医学	1年次後学期	西本 裕	77
		老年医学	1年次後学期	岡野幸雄	78
		スポーツ医学	1年次後学期	松岡敏男	79
保健・医療・福祉の連携	保健医療論	1年次前学期	松岡敏男	80	
	社会福祉学	1年次前学期	竹内章郎	81	
	医療安全管理論	1年次後学期	伊川順子	82	

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

◎リハビリテーション学科理学療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ
基礎理学療法学	理学療法総論	1年次前学期	長谷部武久	83
	理学療法演習	1年次前学期	石田裕保、藤橋雄一郎、辻圭一、植木努	84
	運動療法総論	1年次後学期	長谷部武久、河合克尚	85
	理学療法基礎用語	1年次前学期	藤橋雄一郎	86
	理学療法研究方法論	2年次後学期	長谷部武久	87
	理学療法学特論Ⅰ	※ 3年次前学期	河合克尚、大場かおり、石田裕保、藤橋雄一郎、辻圭一	88
	理学療法学特論Ⅱ	※ 3年次後学期	河合克尚、大場かおり、石田裕保、藤橋雄一郎、辻圭一	89
	卒業研究	3年次前学期	曾田直樹、大場かおり、田島嘉人	90
	クリニカルリーズニング	※ 3年次前学期	堀信宏、長谷部武久、曾田直樹	91
理学療法評価学	運動器系検査法	※ 2年次前学期	曾田直樹、藤橋雄一郎、辻圭一、植木努	92
	神経系検査法	※ 2年次前学期	河合克尚、辻圭一、石田裕保	93
	動作・画像解析学	※ 2年次前学期	堀信宏、石田裕保	94
	理学療法評価学演習	2年次後学期	曾田直樹、河合克尚、大場かおり、田島嘉人、石田裕保、藤橋雄一郎、辻圭一、植木努	95
理学療法治療学	高齢者機能障害学	2年次前学期	堀信宏	96
	脳・神経機能障害学Ⅰ（総論）	※ 2年次前学期	堀信宏、大場かおり	97
	脳・神経機能障害学Ⅱ（各論）	※ 2年次後学期	堀信宏、大場かおり	98
	骨・関節機能障害学（上肢）	2年次後学期	田島嘉人	99
	骨・関節機能障害学（下肢・体幹）	2年次前学期	曾田直樹	100
	内部機能障害学（循環器系）	※ 2年次前学期	長谷部武久、河合克尚	101
	内部機能障害学（代謝・呼吸器系）	※ 2年次後学期	長谷部武久、河合克尚	102
	発達機能障害学	2年次後学期	松田充弘	103
	物理療法学（温熱療法）	2年次前学期	大場かおり	104
	物理療法学（電気・牽引・水治療法）	2年次後学期	辻圭一	105
	義肢装具学	※ 2年次後学期	石田裕保、篠田信之	106
	日常生活活動学	※ 2年次前学期	大場かおり、石田裕保	107
	理学療法総合セミナーⅠ	2年次前学期	長谷部武久、石田裕保、辻圭一、藤橋雄一郎、植木努	108
	理学療法総合セミナーⅡ	2年次後学期	長谷部武久、石田裕保、辻圭一、藤橋雄一郎、植木努	109
	脳・神経系理学療法治療技術	※ 3年次前学期	堀信宏、藤橋雄一郎	110
	骨・関節系理学療法治療技術	※ 3年次前学期	曾田直樹、田島嘉人	111
内部系理学療法治療技術	3年次前学期	河合克尚	112	
地域理学療法学	地域理学療法学	2年次後学期	堀信宏	113
	生活環境論	1年次後学期	植木努	114
臨床実習	臨床実習Ⅰ（基礎）	1年次後学期	堀、長谷部、曾田、河合、大場、田島、石田、辻、藤橋、植木	115
	評価実習前セミナー	2年次後学期	曾田、河合、大場、田島、石田、藤橋、辻、植木	116
	臨床実習Ⅱ（評価）	2年次後学期	堀、長谷部、曾田、河合、大場、田島、石田、辻、藤橋、植木	117
	臨床実習Ⅲ（総合前期）	3年次前学期	堀、長谷部、曾田、河合、大場、田島、石田、辻、藤橋、植木	118
	臨床実習Ⅳ（総合後期）	3年次後学期	堀、長谷部、曾田、河合、大場、田島、石田、辻、藤橋、植木	119

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

リハビリテーション学科

理学療法専攻

専門基礎科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）			千田 隆夫	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 成人の骨は約200個あり、関節でつながって筋の収縮によって動く。骨と関節と筋をあわせて運動器と呼ぶ。快適な日常生活を営むには、骨と関節と筋の働きが非常に重要である。骨・関節・筋に障害が起こると、動作や運動が制約される。理学療法・作業療法の多くは、運動器の働きを正常に戻すために行われている。したがって、理学療法士・作業療法士をめざす諸君にとっては、運動器の知識は非常に重要である。この授業では、人体の骨・関節・筋の概略について学び、様々な人体の運動への骨・関節・筋の関わりについて理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①全身の骨格を構成する個々の骨の名称、数、形状、構造上の特徴を知り、筋・血管・神経・内臓との関係を理解する。②骨と骨の連結様式を知り、それに基づく関節の運動を理解する。③全身の骨格筋の名称、起始・停止、形状、作用、支配神経を知り、様々な運動にどの筋がどのように関与するかを理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今回の講義で出てくる骨、関節、筋の図を、指定のカラーリングブックで探し、その位置と形を大まかに把握しておく。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 講義で出てきた骨、関節、筋の位置、形、特徴をカラーリングブックの解説文を読みながら、着色した図で確認する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 骨の一般構造・骨化・機能 2. 関節の一般構造・種類・運動 3. 脊柱を構成する骨と関節 4. 胸郭を構成する骨と関節 5. 上肢を構成する骨と関節 6. 下肢を構成する骨と関節 7. 頭蓋を構成する骨と関節① 8. 頭蓋を構成する骨と関節② 9. 筋の構造・機能 10. 頭部の筋 11. 頸部の筋 12. 胸腹部の筋 13. 背部の筋 14. 上肢の筋 15. 下肢の筋 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、授業態度（20%）を総合的に判断して評価する。							
使用教科書				参考図書			
人体解剖カラーリングブック Twietmeyer・McCracken 著 天野修、千田隆夫、鳥橋茂子監訳 丸善出版、2017年				<ol style="list-style-type: none"> 1) カラーイラストで学ぶ 集中講義 解剖学、坂井建雄編集、メディカルビュー社 2) トートラ解剖学 Tortora・Nielsen 著 小沢一史、千田隆夫、高田邦昭、依藤 宏監訳、丸善出版 			
備 考							
講義以外に、Eメール（tsenda@gifu-u.ac.jp）でも質問等を受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅱ（内臓系）			江村 正一	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 心臓をはじめとした循環器系、気管支、肺などの呼吸器系、食道・胃・腸などの消化器系および内分泌腺と尿生殖器について学ぶ。いくつかの臓器が一体となって機能し、生命が維持されていることを理解する。</p> <p><学修の到達目標> 循環器・呼吸器・消化器・内分泌線・泌尿器・生殖器について理解することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当する部分を丁寧に読み、それぞれの章で何を学ばよいか、何を学びたいかを、記録しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 事前学習で疑問に思ったことは理解・納得できたかを確認する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人体の構造 / 生きていくことの出来る最小単位・細胞について、組織について 2. 循環器系Ⅰ / 心臓について 3. 循環器系Ⅱ / 動脈について 4. 循環器系Ⅲ / 門脈について 5. 循環器系Ⅳ / 静脈・リンパ管について 6. 呼吸器系Ⅰ / 鼻・喉頭・気管と気管支について 7. 呼吸器系Ⅱ / 肺について 8. 消化器系Ⅰ / 口腔・食道について 9. 消化器系Ⅱ / 胃・小腸・大腸について 10. 消化器系Ⅲ / 肝臓・胆嚢・膵臓について 11. 内分泌腺 / 視床下部・下垂体・甲状腺・上皮小体・副腎について 12. 泌尿器 / 腎臓・尿管・膀胱について 13. 発生 14. 生殖器 / 男女生殖器について 15. 各内臓が密接な関係にあることを理解する <p>筆記試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験結果（100%）							
使用教科書				参考図書			
入門人体解剖学 藤田恒夫著 改訂第5版 南江堂				適宜、参考資料を配布する。			
備考							
試験の模範解答を掲示する。 E-mail s.emura@heisei-iryuu.ac.jp							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅲ（神経系）			○近藤直実、堀 信宏 河村章史、大場かおり 藤橋雄一郎	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 解剖学Ⅲ（神経系）では主に中枢、末梢、自律神経系と感覚器について学びます。理学療法士、作業療法士にとって神経解剖の知識は、将来対象となる脳血管障害やパーキンソン病、多発性硬化症、脊髄損傷といった身体機能障害を理解する基礎となるだけでなく、認知症や高次脳機能障害といった認知面の基礎にもなります。また、臨床（国家試験でも）中枢神経系の画像に触れる機会が増え、解剖を基に治療プランを作成している。以上より、構造と機能の理解は必要不可欠です。</p> <p><学修の到達目標> ①ニューロンの基本構造や脳、脊髄、脊髄神経、脳神経、自律神経の構造について理解する。 ②上肢に分布する腕神経叢の枝や、下肢に分布する腰神経叢の枝の走行と障害を受けやすい部位を説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 該当する教科書の内容を確認し、新しい用語について調べる。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業ごとで、何処が重要な内容なのかを必ず見直す。小テストの内容を必ず復習する。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 臨床に繋がる神経解剖学： <近藤> 目標①② 神経系総論： 神経の区分、神経の構成、髄膜と脳室系 <藤橋> 目標① 中枢神経系： 脊髄、脳幹 <堀> 目標① 中枢神経系： 小脳 <堀> 目標① 中枢神経系： 大脳（間脳、大脳皮質の構造） <堀> 目標① 中枢神経系： 大脳皮質（大脳皮質の機能局在） <堀> 目標① 中枢神経系： 神経路（体性感覚神経路、平衡覚の神経路） <藤橋> 目標① 中枢神経系： 神経路（錐体路系、錐体外路系） <藤橋> 目標① 末梢神経系： 脊髄神経（自律神経） <藤橋> 目標① 末梢神経系： 末梢神経系： 脊髄神経（腕神経叢、腰神経叢、仙骨神経叢） <河村> 目標② 末梢神経系： 脳神経： I - VI脳神経 <大場> 目標① 脳神経： VII - XII脳神経 <大場> 目標① 感覚器： 皮膚、視覚、平衡感覚 <大場> 目標① <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
各担当が行う小テストを基に出題する。期末試験100%（参加度・態度・小テストを加味する）							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 解剖学 第4版、野村嶺編集、医学書院、2015 病気がみえる 7 脳・神経（第2版）、医療情報科学研究所編集、MEDIC MEDIA、2017				プロメテウス解剖学アトラス第3版、坂井建雄ら監訳、医学書院、2014			
備考							
範囲が広いので、各担当が行う小テストをしっかりと取り組み、覚えること。解らない内容は後回しにせず、その都度整理につとめることが大切です。この神経系解剖は、2年生の神経系疾患の基礎になるので、ここをしっかりと勉強しておく、後の学修に有益になる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		解剖学演習（体表解剖 上肢）			田島 嘉人	教授	
人体の構造							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 解剖学演習（体表解剖）では、理学療法士として必要な皮膚からの視察・触察の技術を学ぶ。具体的には筋の形状、起始停止を確認し、その走行と役割を確認する。関節を構成する靭帯・関節包などから生じる問題について考察を加える。理学療法士はこの視診や触診を基に障害部位の評価や治療を行う職種である。二次元的に学んだ知識を三次元的に捉え、治療対象部位を適切に視察・触察する能力を身につける事、患者様に可能な限り負担のない形で治療を行える事が本演習の目的である。小テストを頻回に実施し、知識の習得度合いについて確認を行っていく。又、同時に医療に携わる者として基本的態度を身につけることができるようにする。</p> <p><学修の到達目標> ①治療対象部位を適切に視察・触察する知識、技術を身につけることができる ②患者様に可能な限り負担のない形で治療を行える臨床対応力を身につけることができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 予定されている骨部位、筋などの軟部組織（シラバスや講義での次回予告などを参考）について、解剖書などでその概要を把握しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> ①骨部位、筋などの軟部組織のそれぞれの特徴（起始・停止・支配神経など）について確実に知識を習得する。 ②実技練習を行い、触診技術を習得する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<p>1. 解剖学用語 運動学基礎 触診技術の基本 ① 2. 肩関節 骨 肩甲棘 肩峰 内側縁 外側縁 上角 下角 ① 3. 肩関節 骨 烏口突起 肩鎖関節 胸鎖関節 大結節 小結節 鎖骨 ① 臨床対応力とは ② 4. 肩関節 筋 小円筋 大円筋 ①② 5. 肩関節 筋 棘上筋 棘下筋 肩甲下筋 烏口腕筋 ① 6. 肩関節 筋 三角筋 僧帽筋 ①② 7. 肩関節 筋 大・小菱形筋 大胸筋 小胸筋 ①② 8. 肩関節 筋 前鋸筋 広背筋 肩甲挙筋 ①② 9. 肘関節 骨 外側上顆 内側上顆 橈骨頭 上腕筋 上腕二頭筋 ①② 10. 肘関節 筋 上腕三頭筋 ①② 11. 手関節 骨 橈骨尺骨茎状突起 手根骨 ①② 12. 前腕 筋 円回内筋 前腕屈筋群 ①② 13. 前腕 筋 前腕伸筋群 腕橈骨筋 ①② 14. 前腕手 筋 総指伸筋 浅指屈筋 深指屈筋 虫様筋 ①② 15. 前腕 筋 長母指外転筋 短母指伸筋 長母指伸筋 長母指屈筋 ①②</p> <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
小テスト、実技チェックリスト、臨床対応力（被検者などに対する態度・言葉使い）、期末試験（筆記・実技）100%評価については第1回講義で詳細に明示します。評価方法で分からないところがあればいつでも確認してください。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> ・運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢）改訂第2版 林 典雄 著（メジカルビュー社） ・プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論・運動器系 第3版 監訳 坂井 建雄ほか（医学書院） 				<ul style="list-style-type: none"> ・配布資料（体表サブブックなど） ・ビジュアル版 筋肉と関節のしくみがわかる事典 竹井 仁 著（西東社） 			
備 考							
臨床における全ての治療の基本である体表解剖の知識は、いわば臨床において知っていて当たり前前の知識であることを認識し、ひたすら努力して習得するようにして下さい。覚える内容は明瞭です。ただ、量が多いため毎日の積み重ねが大変重要になります。授業では”治療者”としての知識を持ちながら”患者”に接するよう心がけてください。毎回小テストを実施し、できる限り早く返却します。覚えきれていないところ、理解していないところを確認して次につなげるようにして下さい。授業時間内に理解できないところがあれば、できる限り早く質問にきてください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学演習（体表解剖 下肢）			田島 嘉人	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 解剖学演習（体表解剖）では、理学療法士として必要な皮膚からの視察・触察の技術を学ぶ。具体的には筋の形状、起始停止を確認し、その走行と役割を確認する。関節を構成する靭帯・関節包などから生じる問題について考察を加える。理学療法士はこの視診や触診を基に障害部位の評価や治療を行う職種である。二次元的に学んだ知識を三次元的に捉え、治療対象部位を適切に視察・触察する能力を身につける事、患者様に可能な限り負担のない形で治療を行える事が本演習の目的である。小テストを頻回に実施し、知識の習得度合いについて確認を行っていく。又、同時に医療に携わる者として基本的態度を身につけることができるようにする。</p> <p><学修の到達目標> ①治療対象部位を適切に視察・触察する知識、技術を身につけることができる ②患者様に可能な限り負担のない形で治療を行える臨床対応力を身につけることができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 予定されている骨部位、筋などの軟部組織（シラバスや講義での次回予告などを参考）について、解剖書などでその概要を把握し、講義DVDで視聴、実技練習しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> ①骨部位、筋などの軟部組織のそれぞれの特徴（起始・停止・支配神経など）について確実に知識を習得する。 ②実技練習を行い、触診技術を習得する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1.	股関節	骨	骨盤（上前腸骨棘、下前腸骨棘、JL、上後腸骨棘、坐骨結節、大転子、RNL）			①②	
2.	股関節	筋	大殿筋 中殿筋 梨状筋			①②	
3.	股関節	筋	長内転筋 大内転筋 薄筋			①②	
4.	股関節	筋	縫工筋 大腿筋膜張筋 腸腰筋 スカルパ三角			①②	
5.	膝関節	骨	膝（膝蓋骨、膝蓋靭帯、脛骨粗面、内転筋結節）腓骨頭、近位脛腓			①②	
6.	膝関節	筋	大腿四頭筋			①②	
7.	膝関節	筋	グループワーク			①②	
8.	膝関節	筋	大腿二頭筋 半腱様筋 半膜様筋 膝窩筋			①②	
9.	足関節	骨	足（内外果、遠位脛腓、距骨、距骨頭、載距突起、踵骨、舟状骨粗面）足部（第1中足骨、第5中足骨粗面）			①②	
10.	足関節	筋	前脛骨筋 長母指伸筋 長指伸筋			①②	
11.	足関節	筋	後脛骨筋 長母指屈筋 長指屈筋			①②	
12.	足関節	筋	ヒラメ筋 腓腹筋 長腓骨筋 短腓骨筋			①②	
13.	体 幹	骨	乳様突起 外後頭隆起 胸骨柄 頸切痕 多裂筋			①②	
14.	体 幹	筋	各脊椎棘突起 多裂筋			①②	
15.	触診について		臨床における触診			①②	
			定期試験				
評価基準・評価方法							
小テスト、実技チェックリスト、臨床対応力（被検者などに対する態度・言葉使い）、期末試験（筆記・実技）100%評価については第1回講義で詳細に明示します。評価方法で分からないところがあればいつでも確認してください。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 運動療法のための機能解剖学的触診技術(下肢・体幹)改訂第2版 林 典雄 著 (メジカルビュー社) プロメテウス解剖学アトラス 解剖学総論・運動器系 第3版 監訳 坂井 建雄ほか (医学書院) 				<ul style="list-style-type: none"> 配布資料（体表サブブックなど） ビジュアル版 筋肉と関節のしくみがわかる事典 竹井 仁 著 (西東社) 			
備 考							
臨床における全ての治療の基本である体表解剖の知識は、いわば臨床において知っていて当たり前前の知識であることを認識し、ひたすら努力して習得するようにして下さい。覚える内容は明瞭です。ただ、量が多いため毎日の積み重ねが大変重要になります。授業では“治療者”としての意識を持ちながら“患者”に接するよう心掛けて下さい。毎回小テストを実施し、できる限り早く返却します。覚えきれていないところ、理解していないところを確認して次につなげるようにして下さい。授業時間内に理解できないところがあれば、できる限り早く質問に来て下さい。y.tajima@heisei-iryu.ac.jp							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		生理学 I (動物的機能)			川島 卓	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 生理学の外界に対して反応する機能(動物的機能)全般について講義する。</p> <p><学修の到達目標> ①末梢神経系と中枢神経系の働きを学び人の感覚情報をもとにいかに関節が起こされるかを理解する。 ②正常な生理機能の理解をもとに、神経障害などに伴う各種病態症状についての原因を正しく理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間を利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 生理学について	細胞機能の基礎	体液組成、細胞の構造、細胞の物質移動					
2. 細胞の興奮発生	神経細胞	興奮移動 膜電位 興奮の伝導					
3. 筋の収縮	骨格筋の構造	筋肉の収縮 筋収縮力学 筋のエネルギー発生					
4. シナプス伝達	神経筋伝達	平滑筋 中枢神経系の情報伝達 神経伝達物質 シナプスの可塑性					
5. 自立神経系	交感神経・副交感神経	の内臓諸器官への作用					
6. 脊髄	脊髄反射	誘発筋電図					
7. 脳幹 小脳①	脳幹の姿勢反射	小脳の神経回路					
8. 小脳② 基底核	小脳と大脳協調	小脳障害 基底核の神経経路 基底核障害					
9. 大脳	運動の起動と出力						
10. 体性感覚							
11. 味覚 嗅覚 聴覚	前庭感覚						
12. 視覚①	網膜 視物質	視覚の中核					
13. 視覚②	感覚としての視覚	眼球運動					
14. 脳の高次機能1	大脳の神経回路と機能	連合野機能 言語機能					
15. 脳の高次機能2	大脳辺縁系 視床下部	記憶 睡眠 脳波					
	定期試験						
評価基準・評価方法							
定期試験の成績を主体(90%以上)に、授業中の質疑態度なども加えて成績評価をおこなう。							
使用教科書				参考図書			
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				・神経科学-脳の探求 ベヤーズ 他 西村書店 ・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著/理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院			
備考							
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																															
専門基礎科目 人体の機能		生理学Ⅱ（植物的機能）			川島 卓	非常勤講師																															
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																														
		理学	作業	視機能																																	
必修		○			1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義																														
選択																																					
授業概要・学修の到達目標																																					
<p><概要> 生理学の生命維持に関する機能（植物的機能）全般について講義する。</p> <p><学修の到達目標> 生命機能維持にはどうしても必要な人体の植物的機能の知識と理解を深める。これを学ぶことにより病態症状の原因を正確に理解ができるようになる。同時にいろいろな専門科目習得のための基礎知識となる。</p>																																					
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。																																
事前学習				事後学習																																	
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間を利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>																																	
授業計画																																					
<table border="0"> <tr> <td>1. 血液①</td> <td>血漿と血漿タンパク質 赤血球</td> </tr> <tr> <td>2. 血液②</td> <td>白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解</td> </tr> <tr> <td>3. 心臓①</td> <td>心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節</td> </tr> <tr> <td>4. 心臓②</td> <td>心筋の収縮 心電図 心臓の収縮</td> </tr> <tr> <td>5. 循環①</td> <td>血管系の区分 血圧調節</td> </tr> <tr> <td>6. 循環②</td> <td>静脈系の循環 動脈血圧 循環調節</td> </tr> <tr> <td>7. 循環③</td> <td>特殊部位の循環 ; 呼吸① 呼吸のメカニズム</td> </tr> <tr> <td>8. 呼吸②</td> <td>肺のガス交換 呼吸運動の調節</td> </tr> <tr> <td>9. 消化と吸収①</td> <td>消化管の構造と神経支配 消化管運動</td> </tr> <tr> <td>10. 消化と吸収②</td> <td>消化液の分泌 栄養素の分解吸収</td> </tr> <tr> <td>11. 内分泌①</td> <td>ホルモン 視床下部 下垂体</td> </tr> <tr> <td>12. 内分泌②</td> <td>甲状腺 副腎 膵臓 性ホルモン</td> </tr> <tr> <td>13. 腎機能</td> <td>ネフロン構造、糸球体ろ過 体液調節</td> </tr> <tr> <td>14. 生殖</td> <td>男性・女性生殖生理 妊娠</td> </tr> <tr> <td>15. 代謝と栄養</td> <td>日常の生理学</td> </tr> </table> <p>定期試験</p>								1. 血液①	血漿と血漿タンパク質 赤血球	2. 血液②	白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解	3. 心臓①	心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節	4. 心臓②	心筋の収縮 心電図 心臓の収縮	5. 循環①	血管系の区分 血圧調節	6. 循環②	静脈系の循環 動脈血圧 循環調節	7. 循環③	特殊部位の循環 ; 呼吸① 呼吸のメカニズム	8. 呼吸②	肺のガス交換 呼吸運動の調節	9. 消化と吸収①	消化管の構造と神経支配 消化管運動	10. 消化と吸収②	消化液の分泌 栄養素の分解吸収	11. 内分泌①	ホルモン 視床下部 下垂体	12. 内分泌②	甲状腺 副腎 膵臓 性ホルモン	13. 腎機能	ネフロン構造、糸球体ろ過 体液調節	14. 生殖	男性・女性生殖生理 妊娠	15. 代謝と栄養	日常の生理学
1. 血液①	血漿と血漿タンパク質 赤血球																																				
2. 血液②	白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解																																				
3. 心臓①	心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節																																				
4. 心臓②	心筋の収縮 心電図 心臓の収縮																																				
5. 循環①	血管系の区分 血圧調節																																				
6. 循環②	静脈系の循環 動脈血圧 循環調節																																				
7. 循環③	特殊部位の循環 ; 呼吸① 呼吸のメカニズム																																				
8. 呼吸②	肺のガス交換 呼吸運動の調節																																				
9. 消化と吸収①	消化管の構造と神経支配 消化管運動																																				
10. 消化と吸収②	消化液の分泌 栄養素の分解吸収																																				
11. 内分泌①	ホルモン 視床下部 下垂体																																				
12. 内分泌②	甲状腺 副腎 膵臓 性ホルモン																																				
13. 腎機能	ネフロン構造、糸球体ろ過 体液調節																																				
14. 生殖	男性・女性生殖生理 妊娠																																				
15. 代謝と栄養	日常の生理学																																				
評価基準・評価方法																																					
①定期試験の成績（90%以上）に授業中の質疑態度などを加えて総合的に判断して成績評価をおこなう。																																					
使用教科書				参考図書																																	
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				<ul style="list-style-type: none"> ・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著 / 理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院 																																	
備考																																					
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。																																					

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		運動学総論			堀 信宏	教授	
人体の機能							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 運動学は人の身体運動の仕組みに関する学問です。動作や活動の改善を求める理学療法士・作業療法士にとって基礎となります。「骨・関節・筋・神経」の解剖と、運動を解釈するための「力学」、日常生活の基本となる「姿勢・歩行」を学びます。これら複数の視点から捉える事で人の動作や活動の仕組みが解り、障害者が「何故動けないのか」見えてくる。</p> <p><学修の到達目標> ①骨・筋・関節・神経といった人体の構造と、姿勢・歩行の基礎を学び、異常姿勢・異常歩行を説明できるようにする。 ②関節運動や動作を捉える「力学の基礎」を学び、国家試験レベルの計算が解けるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 新しい言葉が沢山出てきます。シラバスに沿って、専門用語の確認を行う。</p> <p><必要時間>各回20分</p>				<p><内容> ワークシートを配布します。ワークシートに沿って学習内容をまとめて下さい。授業終了直前、または次回授業開始時に重要な箇所の復習する。必ず見直すこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 身体運動の軸と面、および運動の名称（方向） 2. 運動器の構造と機能（骨） 3. 運動器の構造と機能（関節） 4. 運動器の構造と機能（筋） 5. 運動器の構造と機能（筋の収縮） 6. 運動器の構造と機能（神経） 7. 生体力学の基礎1（運動の法則、仕事、速度など） 8. 生体力学の基礎2（てこ、剛体など） 9. 生体力学を用いた計算 10. 姿勢（重心、支持基底面） 11. 姿勢（姿勢制御・バランス） 12. 正常歩行1（歩行周期、歩幅、ケイデンスなど） 13. 正常歩行2（歩行時の関節の動き、筋活動、重心移動など） 14. 異常歩行 15. 運動学習 <p>中間試験を2回、定期試験1回、合計3回実施</p>							
評価基準・評価方法							
<p>中間試験1回目 + 中間試験2回目 + 期末試験の合計3回試験を行う。範囲はそれぞれシラバスの1～6、7～9、10～15です。再試験は全範囲となる。中間試験2回分と期末試験の合計点を総得点（100%）として評定する。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>基礎運動学第6版補訂、中村隆一他著、医歯薬出版、2003 15レクチャーシリーズ理学療法作業療法テキスト運動学、小島悟責任編集、中山書店、2012</p>				<p>ビジュアル版筋肉と関節の仕組みがわかる事典、竹井仁監修、西東社、2013、PTOT 基礎から学ぶ運動学ノート、中島雅美、医歯薬出版、2016</p>			
備 考							
<p>本講義は内容が濃く、範囲が広いので3つに分けて、知識の修得を目指す。それぞれのテスト範囲毎にしっかり取り組むこと。再試験は範囲が広がる（シラバス1～15）ので注意すること。ワークシートと授業後の復習を活用すること。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名			
専門基礎科目		臨床運動学			曾田 直樹	教授			
人体の機能									
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態		
		理学	作業	視機能					
必修		○	○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義		
選択									
授業概要・学修の到達目標									
<p><概要> ヒトの関節の特徴をバイオメカニクスの観点からその動きを理解することを目的とする。またその理論に基づき骨関節機能障害学や骨関節治療技術、病態運動学、動作分析への応用を学習できることを期待する。</p> <p><学修の到達目標> ①上肢の解剖学について理解できる。 ②下肢の解剖学について理解できる。 ③上肢の運動学について理解できる。 ④下肢の運動学について理解できる。</p>									
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。				
事前学習				事後学習					
<p><内容> 講義予定の関節について前期で学習した解剖学、運動学を復習する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 講義内容の理解と暗記をする。 <必要時間>各回60分</p>					
授業計画									
<ol style="list-style-type: none"> 概論：筋の走行と軸と面の関係、筋肉の役割について 肩関節：肩甲上腕関節の機能 肩関節：第2肩関節の役割について 肩関節：肩甲胸郭関節の役割について 肘関節：肘関節に付着する靭帯について 肘関節：回内・回外運動のメカニズム 手関節：掌屈・背屈のメカニズム 手関節：手関節の靭帯・筋肉 股関節：下肢のアライメント、股関節に付着する靭帯 股関節：股関節周囲筋の役割 膝関節：特徴的な動き・アライメント 膝関節：筋肉、半月板の役割 足関節：骨の構造、底屈・背屈のメカニズム 足関節：靭帯・筋肉について 上肢および下肢の解剖学と運動学について <p>定期試験</p>					到達目標①②③④				
					到達目標①③				
					到達目標②④				
					到達目標①②③④				
評価基準・評価方法									
<p>評価基準：知識・理解、学修態度・意欲を重視 評価方法：中間試験（45%）、期末試験（45%）、態度・意欲（小テスト、授業参加度など）にて総合的に判断する。</p>									
使用教科書				参考図書					
<p>・筋骨格系のキネシオロジー 原著：Donald A 監訳：島田智明ら 医歯薬出版株式会社</p>									
備考									
オフィスアワー：月曜日12：15～13：15									

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		運動学演習			○曾田直樹、大場かおり 田島嘉人、石田裕保	教授、准教授 教授、准教授	
人体の機能							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 運動学総論、臨床運動学で学んだ知識を演習によって確認する。生体が運動や動作を実施したときの反応を測定し、データを用いて研究報告レポートを作成する。測定機器は理学療法士に関連の深いものを使用しますので、その取り扱いに習熟できるよう努力して下さい。レポート作成においては、基礎知識と実際の測定データを比較し自分なりの考察をすることで、運動についての理解が深まる。</p> <p><学修の到達目標> ①グループ活動を通じて協力、報告、連絡、相談の重要性を学ぶ。 ②平衡機能・筋力・歩行分析を測定する意義を説明できる。 ③平衡機能・筋力・歩行分析を機器を用いて評価することができる。 ④平衡機能・筋力・歩行分析の結果の意味を考察することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 演習で取り扱うのは、今後臨床実習で必要になる知識であり、国家試験でも問われる内容です。1年生で学習した運動学・臨床運動学・解剖学などの内容を復習しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 運動学の基礎知識の定着に努めましょう。レポート作成のスキルや文献要約の力を臨床実習に活かせるように、文献を読む等の自己研さんを積むこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動学演習オリエンテーション 2. 演習内容の説明 3. レポート作成について 4. 重心動揺（意義） 5. 重心動揺（測定方法） 6. 重心動揺（実施） 7. 重心動揺（論文作成） 8. 筋機能測定（意義） 9. 筋機能測定（測定方法） 10. 筋機能測定（実施） 11. 筋機能測定（論文作成） 12. 歩行分析（意義） 13. 歩行分析（測定方法） 14. 歩行分析（実施） 15. 歩行分析（論文作成） 							
評価基準・評価方法							
評価基準および評価方法：グループ活動への取り組み状況（10%）、研究レポートの内容（90%）							
使用教科書				参考図書			
備考							
オフィスアワー 曾田 月曜日12：15～13：15 大場 火曜日16：30～17：30 田島 水曜日16：30～17：30 石田 火曜日16：30～17：30							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 心身の発達		人間発達学			大森 正英	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 人間の胎生期から老年期までの身体的発達と心理的発達の主要な現象を取り上げ講義する。新生児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、中年期、老年期の基本的な特徴について、生物学的な面のみならず社会とのかかわりの中で複雑に発達していく過程に関する理解を深め、医療関係者として必要な知識、応用技術を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①人間の発達段階の特徴を理解する②小児期の重要性を広く理解する③発達と環境、文化との関連を正しく認識する④青年期の特徴と重要性について理解を深める⑤中年期～老年期の変化の実態を把握する⑥学んだ知識を実生活ならびに医療関連の仕事に生かす この授業は卒業認定・学位授与に必要。カリキュラムマップを参照すること。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 特に指定した時以外は必要ないが、素早い書写能力を鍛えておくこと。板書したものをただ書き写すだけでなく、講義内容をもどンドン書き込んで充実したノートを作成することを望みたい。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> この講義は幅広く生物学、小児科学、医学、心理学、社会科学など多岐にわたる内容からなり、ノートに書く量も多いので、1回ごとに内容を確認し、復習しておくこと。 <必要時間>各回40分以上</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 人間の発達の特徴 ①、⑥ 人間の本能と行動 ①、③ 胎生期から誕生へ ①、② 乳幼児の発育と発達 ①、②、③ 子どもの身体発育発達に影響する因子 ②、③ 身体発育の指標 ①、②、③ 子どもの心の発達 ①、②、③ 幼児～学童の運動機能 ①、② 小児栄養 ①、②、⑥ 小児期の発達障害、疾病 ①、⑥ 青年期の身体的、心理的発達 ①、④ 中年期における心身の変化と人間としての成長、発達 ①、⑤ 老年期における心身の変化と日常生活 ⑤、⑥ 老化の進展と健康 ①、⑤、⑥ 超高齢社会の人間発達学 ①、⑤、⑥ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価基準：専門的な知識の修得と講義内容の理解を重視。専門用語を用いて現象を理解し、説明する能力を評価する。従って、試験問題には、記述問題を半数出題する。評価方法：筆記試験ならびに適時提出を求める課題（レポート）によって行う。評価割合はそれぞれ90%、10%</p>							
使用教科書				参考図書			
竹下研三著：人間発達学 ヒトはどう育つのか 2009年 中央法規 ISBN978-4-8058-3096-3				その都度、講義時間に紹介する。			
備考							
<p>修得すべき知識が多いので、個々の知識を体系化し、相互に関連づけて記憶するように努めること。課題や試験問題に対する解説はその都度行う。在学時の質問は随時、受け付ける。メール等による質問も歓迎するが、学務課経由でお願いしたい。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		病理学概論			○武内 康雄 山本 容正	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 病気を引き起こす原因を、病気の捉え方の歴史的移り変わりとともに概論で解説する。次いで、病気の状態を大きく、代謝異常、循環障害、炎症と免疫、進行性病変、腫瘍、老化、先天異常と奇形に分類し、それぞれの病的状態に見られる変化を分かりやすく解説する。</p> <p><学修の到達目標> ①変性と化生、炎症と免疫、循環障害の病態病理の概要を説明できる。 ②代謝障害、遺伝子異常、先天異常の概要を説明できる。 ③腫瘍の病理学的分類を説明でき、腫瘍発生のメカニズムや治療法を説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 講義当日のテーマを知り、教科書の該当部分を読むことを期待する。 <必要時間>各回20分</p>				<p><内容> 授業終了当日または次回までに、講義内容を振り返り、知識の習得を確認することを期待する。 <必要時間>各回45分</p>			
授 業 計 画							
1. 病気と病理学 2. 細胞の異常－変性、化生、再生、修復 3. 先天異常 4. 循環障害 (1) 循環系の働き、出血と凝固 5. 循環障害 (2) 虚血と梗塞、血圧異常、疾患と病態 6. 代謝異常 7. 老化 8. 感染と感染症 (1) 感染症と病原体 9. 感染と感染症 (2) 感染症の発症と防御機構 10. 免疫機構と免疫異常 (1) 免疫機構と疾患 11. 免疫機構と免疫異常 (2) 再生医療 12. 炎症 13. 腫瘍 (1) 腫瘍の分類 14. 腫瘍 (2) 癌の特性 15. 腫瘍 (3) 腫瘍マーカー診断、治療 定期試験 筆記				①②【武内】 ①【武内】 ②【武内】 ①【武内】 ①【武内】 ②【武内】 ①②③【武内】 ①【山本】 ①【山本】 ①【山本】 ①【山本】 ①【山本】 ③【武内】 ③【武内】 ③【武内】			
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
期末筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
小林正伸著 「なるほどなっとく!病理学病態形成の基本的なしくみ」(2017年4月1版2刷) (南山堂)				大橋健一、谷澤 徹、藤原正親、柴原純二著 「系統看護学講座 専門基礎分野 病理学 疾病のなりたちと回復の促進①」 (医学書院)			
備 考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		内科学			平野智久、山本眞由美 古田弥生、坂 義人 高田信幸、○近藤直実	教授 他	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 内科系疾患などの病態・診察・診断・治療について、およびそのアプローチを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 各論としては循環器系、代謝、内分泌系、消化器系、腎臓疾患、呼吸器系、血液疾患など、実際の理学療法に関連性の高い疾患を中心に学修し、概要を説明することができる。 近年重要性が増している予防医学についての基礎知識の概要説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書などを読んで予習を行う。わからない点をピックアップしておく。 <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> 授業で習ったことをしっかり復習する。その際、教科書やノートを整理する。 <必要時間> 毎回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 循環器分野① 心臓の解剖、生理や虚血性心疾患、不整脈などについて学習する。(平野) 循環器分野② (平野) 循環器分野③ (平野) 代謝・内分泌分野① 糖尿病の病態・機序・合併症・治療について学ぶ (山本) 代謝・内分泌分野② 肥満・メタボリック症候群を中心に代謝疾患について学ぶ (山本) 代謝・内分泌分野③ 内分泌疾患の種類と機序について学ぶ (間脳・下垂体、甲状腺、副腎を中心に) (山本) 消化器分野① 生体維持の基本となる消化器疾患について学ぶ。(古田) 消化器分野② (古田) 腎臓器疾患① 腎臓機能障害について学習する。(坂) 腎臓器疾患② (坂) 呼吸器分野① 呼吸器機能の基礎と呼吸器疾患全般について学ぶ。(高田) 呼吸器分野② (高田) 呼吸器分野③ (高田) 呼吸器分野④ (高田) 血液疾患 血液疾患について学ぶ。(近藤) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験 (90%)、小テスト (10%)							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野「内科学」第3版 (医学書院)							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		整形外科学			西本 裕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 運動器の外傷、疾患について、病因、経過、診断法、治療法を概説する。</p> <p><学修の到達目標> ①骨、関節、靭帯、筋肉、末梢血管、脊髄、末梢神経の損傷、障害について述べるができる。 ②筋、骨格系の感染症、腫瘍、先天異常、発育障害、関節リウマチ、骨粗鬆症を含む代謝疾患、退行性疾患など整形外科的疾患について述べるができる。 ③特に、脊椎固定術、人工関節置換術を中心に生体内人工材料にとって必要な条件、体内での経過について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 解剖学、生理学、病理学概論の知識の確認</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> 講義内容の整理と確認</p> <p><必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動器の外傷、障害 総論 ① 2. 上肢の外傷、障害 ① 3. 下肢の外傷、障害 ① 4. 区画症候群、複合性局所疼痛症候群 ① 5. 体幹の外傷、障害 ① 6. 脊髄損傷 ① 7. 骨関節感染症 ② 8. 関節リウマチ ② 9. 関節退行性疾患 ② 10. 循環障害、骨端症 ② 11. 先天異常、発育障害、神経筋疾患、側弯症 ② 12. 骨粗鬆症を含む代謝疾患 ② 13. 骨・軟部腫瘍 ② 14. 脊椎退行性疾患、絞扼性神経障害 ② 15. 生体内人工材料 ③ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
毎回のミニテスト（50%）、定期試験（50%）							
使用教科書				参考図書			
標準整形外科学 第13版 医学書院 ISBN978-4-260-02537-9							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		神経内科学			下畑享良、○木村暁夫 林 祐一、山田 恵 吉倉延亮、竹腰 顕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 神経内科で扱う神経疾患の病態・診断・治療法について学び、理解を深める。 個々の神経疾患における障害部位・認められる神経学的異常所見・異常検査所見に関し理解を深める。 個々の神経疾患の治療の現状およびリハビリテーションの意義・注意点を理解する。</p> <p><学修の到達目標> ①個々の神経疾患の疾患名と病態に関し理解し、診断・治療法に関して具体的に説明できる。 ②個々の神経疾患におけるリハビリテーションの必要性和施行時の注意点を理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1) 使用教科書の各授業に関連した項目に目を通す 2) 神経解剖に関する教材（参考図書参照）にあたり、中枢神経末梢神経、筋の構造や神経伝達路（錐体路・錐体外路・脊髄視床路など）の役割や場所を理解する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 1) 各授業で配布される添付資料に目を通し、関連する内容や不明な点に関し、参考図書などをを用い学習する 2) 各授業内容に関連する国家試験問題に目を通す <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経変性疾患Ⅰ（パーキンソン病）（下畑） 2. 神経変性疾患Ⅱ（パーキンソン関連疾患）（下畑） 3. 神経変性疾患Ⅲ（脊髄小脳変性症）（林） 4. 神経変性疾患Ⅳ（運動ニューロン疾患）（下畑） 5. 認知症（アルツハイマー型認知症）（吉倉） 6. 認知症（非アルツハイマー型認知症）（吉倉） 7. 免疫性神経疾患（重症筋無力症など）（木村） 8. 免疫性神経疾患（多発性硬化症など）（木村） 9. 末梢神経障害Ⅰ（山田） 10. 末梢神経障害Ⅱ（山田） 11. 筋疾患Ⅰ（林） 12. 筋疾患Ⅱ（林） 13. 頭部外傷・脊髄損傷（竹腰） 14. 脳腫瘍（竹腰） 15. 脳炎・脳症（木村） <p>定期試験 筆記 到達目標①②は、すべての授業に関連する</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、授業への取り組み姿勢（20%）など総合的に判断							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 神経内科学（第4版）				<ul style="list-style-type: none"> ・臨床のための脳局所解剖学（中外医学社） ・神経内科ハンドブック 鑑別診断と治療第5版（医学書院） ・全ての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた、考え方とその対応（羊土社） 			
備考							
理学療法士 作業療法士国家試験問題解答と解説（医師薬出版編）							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		精神医学			宮地 幸雄	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○		○	2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 精神疾患についての基本的知識並びに精神疾患を罹患した人との基本的な援助方法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 臨床場面で援助方法の基本が活用できるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当部分を確認する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業の最後に毎回講師がまとめをするので、それを復習する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人が生きるということについてを考える。 2. 自殺について 3. 精神医学の歴史について 4. こころの発達と防衛機制について 5. 臨床心理検査について 6. よくみられる精神症状について－その1 7. よくみられる精神症状について－その2 8. 統合失調症について－その1 9. 統合失調症について－その2 10. 感情障害について 11. 心因性精神障害について 12. 知的障害・発達障害について 13. 心理療法について 14. チームアプローチについて 15. 医療従事者の姿勢について <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験で評価する							
使用教科書				参考図書			
上島国利ほか著「精神医学テキスト－精神障害の理解と治療のために」改訂第4版 南江堂 2017年							
備考							
講師は臨床心理士。非医師であるが、精神科病院での事例を提示し臨床現場の話をしてみたい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		小児科学			○近藤 直実 近藤 富雄 堀田 亮	教授 臨床教授 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 小児はただ単に体の小さな成人ではなく、つねに成長発達をする存在である。罹患しやすい疾患についても年齢によって異なる。このような小児の特徴を理解することが重要である。</p> <p><学修の到達目標> ①胎児・新生児期および小児特有の生理・病態生理を理解し、説明することができる。 ②胎児から子供の誕生、そして成長し次世代の子供を持つまでをひとつの Life cycle と捉え、この成長過程における生理と病態生理を理解し、説明することができる。 ③子供の Common Disease、特有な疾患を理解し説明することができる。すなわち、子供がよく罹患する疾患、頻度は低いが子供特有な疾患について病態・診断・治療、予防法を学ぶ。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書などを読んで予習を行う。わからない点をピックアップしておく。 <必要時間>毎回30分</p>				<p><内容> 授業で習ったことをしっかり復習する。その際、教科書やノートを整理する。 <必要時間>毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 小児科概論 成長と発達（近藤直、以下10まで） 成長と発達 新生児と疾患 先天異常 遺伝病 神経、筋疾患 神経、筋疾患 循環器疾患 消化器疾患、内分泌疾患 血液疾患、腫瘍性疾患 腎、泌尿器疾患、目、耳の疾患 等 呼吸器疾患（近藤富） 感染症（近藤富） アレルギー免疫疾患（近藤富） こころの病気、障害（堀田） 発達、心理検査（堀田） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、小テスト（20%）							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野「小児科学」第4版（医学書院）							
備 考							
資料などにて補足説明を行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 障害の成り立ち		リハビリテーション医学			西本 裕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要></p> <p>①疾病と障害の違い、障害のとらえ方を理解する (1、2、4)。 ②脳血管障害のリハビリテーションについて理解する (3、5-8)。 ③内部障害のリハビリテーションについて理解する (9、10) ④運動器リハビリテーションについて理解する (11、12) ⑤感覚器障害のリハビリテーションについて理解する (13) ⑥リハビリテーションの根拠について考察し、創造的な思考を養う (14、15)。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>医療、福祉の領域でリハビリテーション医学の立場を説明することができ、実践時にどのように応用されているかについて述べるができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>教科書の該当部分を確認</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容></p> <p>講義内容の整理と確認</p> <p><必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> リハビリテーションの実際 ① 運動学・生理学 ① 脳卒中のリハビリテーション (ADL 障害、QOL について) ② 障害分類、FIM (Functional Independence Measure) ① 高次脳機能障害 ② 運動療法 ② 嚥下障害のリハビリテーション ② 排尿障害のリハビリテーション ② 心疾患のリハビリテーション ③ 呼吸器のリハビリテーション ③ 切断と義足・義手 ④ 装具・杖と車椅子 ④ 平衡機能障害・聴力障害・視力障害 ⑤ 障害者スポーツ ⑥ 廃用症候群 ⑥ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
毎回のミニテスト (50%)、定期試験 (50%)							
使用教科書				参考図書			
リハビリテーション総論 改訂第3版 診断と治療社 椿原彰夫 ISBN 978-4-7878-2345-8				義肢装具のチェックポイント 第8版 医学書院 日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会 ISBN 978-4-260-01744-2			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		老年医学			岡野 幸雄	非常勤講師	
障害の成り立ち							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択		○					
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 老化と疾病は密接な関係にあり、その両面から障害を捉えなければならない。この講義では老化についての生理学的変化や能力的変化を整理し、老年期症候群、認知症、廃用症候群など高齢者特有の疾患について解説する。さらに種々の疾患について高齢者の特徴を概説するとともに、容易に寝たきりに移行しうる危険性が高いことについて触れる。</p> <p><学修の到達目標> ①高齢者の生理的・病的変化を理解し、老年症候群の症状を10以上挙げて説明できる。②高齢者に多い循環器・呼吸器・消化器・骨運動器・精神・神経・内分泌・血液免疫・腎泌尿器・皮膚口腔・耳鼻咽喉・眼疾患について、疾患を挙げて説明できる。③高齢者の医療・看護・介護・福祉について理解し、リハビリテーション・終末期医療について説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 講義当日のテーマを知り、教科書の該当部分を読むことを期待する。 <必要時間>各回20分程度</p>				<p><内容> 授業終了当日または次回までに、講義内容を振り返り、知識の習得を確認することを期待する。 <必要時間>各回45分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 老化と老年病の考え方、加齢に伴う生理機能の変化 2. 加齢に伴う運動機能・精神心理面の変化、性差医療からのアプローチ 3. 高齢者の定義および人口動態、高齢者との接し方、高齢者の機能評価 4. 高齢者の薬物療法の考え方、高齢者に多い症候と老年症候群 5. 老年症候群、循環器疾患 6. 循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、骨・運動器疾患 7. 呼吸器疾患、消化器疾患、骨・運動器疾患 8. 骨・運動器疾患、神経疾患 9. 精神疾患、内分泌代謝疾患 10. 内分泌代謝疾患、血液免疫疾患 11. 腎疾患、泌尿器疾患、皮膚・口腔疾患 12. 感染症、耳鼻咽喉疾患、眼疾患 13. 東洋医学・老年学からのアプローチ、社会学・経済学から見た高齢社会 14. 高齢者の医療、看護、介護・福祉、保健、高齢者のリハビリテーション 15. 高齢者の退院支援、高齢者の終末期医療 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
期末筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
大内尉義編 標準理学療法学・作業療法学－専門基礎分野－老年学（第4版）医学書院				適時紹介する。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 障害の成り立ち		スポーツ医学			松岡 敏男	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択		○					
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>スポーツ医学は医学面とスポーツ科学の両面からの大事な学問であることを理解し、医学に関する知識を深める。 スポーツ選手の競技力向上に関するコンディショニング作りを理解を深める。 医療現場ではアスレティックリハビリテーションとしてのリハビリテーションに理解を深める。外科的及び内科的なスポーツ疾患に理解を深める。 運動時の身体的変化・効果を理解する（運動生理学の理解） <学修の到達目標>スポーツの現場で競技力向上に役立てるコンディショニング作りの方法を学ぶ。 スポーツ医療現場ではリハビリテーションのノウハウを学び、実践できる。スポーツ全般（スキル、メカニズム、フィットネス）の動作と障害の関係性に関することを理解できる。 スポーツ全般的な生理学の基礎知識（神経、筋、代謝、循環、内分泌、栄養）を理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> シラバスの内容に従って内容を把握し、事前に予習をしてください。スポーツ医学を理解するためには聞きなれない言葉があるとその学習の理解を狭めます。スポーツ医学・スポーツ科学の知識や共通理解を深めるためにもシラバスに掲載されている事項に関して予習が必要です。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 必ず講義の復習を行い、講義の内容の理解と共に総合的な理解を深める。解剖・生理学の基礎的な知識を活かし、運動機能を十分に理解し、スポーツ医学全般にそしてスポーツ傷害などのメカニズムを理解してください。復習することで総合的により理解が深まるため、必ず行ってください。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. スポーツ医学概論（スポーツドクター、アスレチックトレーナーについて） 2. スポーツと運動生理学（運動による神経・筋の変化） 3. スポーツと運動生理学（運動による呼吸・循環・内分泌・代謝の変化） 4. スポーツ心理（メンタルトレーニングの必要性）について 5. スポーツ栄養学について 6. ドーピング（アンチ・ドーピング）について 7. トレーニング理論・トレーニング実践について 8. コンディショニング（オーバートレーニング・テーピング・アイシング）について 9. 運動処方（メディカルチェック・アスレティックリハビリテーション）について 10. 子供・女性・高齢者のスポーツ医学について 11. スポーツと内科的疾患（突然死・熱中症など）について 12. 内科的疾患と運動・スポーツについて 13. スポーツと外科的疾患（部位別疾患） 14. スポーツと外科的疾患（部位別疾患） 15. 特殊環境の傷害・スポーツ救急について 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
テスト（100%）							
使用教科書				参考図書			
スポーツ指導者のためのスポーツ医学 改訂第2版 小出清一 ほか（南江堂）				授業中に補足のプリントを配付します。			
備考							
資料、パワーポイントを使用し、説明を行います。 オフィスアワー：授業終了後に質問の時間を取ります。また質問紙による質問には、次回の授業時に回答します。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		保健医療論			松岡 敏男	非常勤講師	
保健・医療・福祉の連携							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (15時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 現在、健康や医療に関する情報が氾濫している。多くの情報が正しいのか、自分に本当に役にたつのか、またどのようなことを取り入れ、実践すれば健康を維持、向上させることができるのか戸惑うばかりである。健康に良いとされていることであっても間違った方法を実践すれば健康を害することもある。また生活習慣により引き起こされる疾病も多く、日常生活の重要性を考えさせられる。学生時代に正しい健康観を学ぶことで、よりよいライフスタイルを身につけ、健康生活を実践できるようにすることと、医療に関するいろいろな問題について講義を行う。</p> <p><学修の到達目標> 学生として将来に継続できる健康感を身につける（知識）。よりよい生活習慣を身につけることを学び、実践できるように努力する。活力ある学生生活とはどのようなものかを理解する。医療制度に関心を持ち、自分で解決できることを考える。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 健康・医療に関することを事前に考えて、調べること。健康・医療に関して関連している色々な分野を自分なりに調べまとめる。講義を通じて自分なりの健康感を確立する努力をする。講義に対してどのような疑問点でも良いので、考えること。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 健康・医療という身近な問題をテーマにしていますが、納得するだけの授業ではなく、関連することを積極的に調べ、実践する姿勢で学習（復習）を行うこと。また自分で関連事項に関して事後に纏め、幅広い知識にする。ぜひとも学び総合的に考えをまとめ、実践し活かせるようにすること。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 健康について（健康感・医療・福祉など） 健康について（睡眠、日光浴、タバコ、温泉） 健康について ウォーキング・ジョギング 運動の効果 運動処方・療法 ダイエットの功罪 生活習慣病－肥満、糖尿病 生活習慣病－高血圧、脂質異常、高尿酸血症 高齢者・中年の健康・生活について 医療・保健に関して 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
テスト（100％）により評価する。							
使用教科書				参考図書			
教科書は使用しない。				毎回授業に関するプリントを配付する。シラバスに掲げている関係事項についていろいろな書物や参考に記事などを調べること。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		社会福祉学			竹内 章郎	非常勤講師	
保健・医療・福祉の連携							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 後学期	1単位 (15時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 現在、社会福祉を含む社会保障全体が、大きな転換点にある。それは、社会保障を支える福祉国家体制それ自体の「危機」という大きな問題からくるものであるが、同時に、社会保障の基盤である社会権（法）の基本的理解の問題や資本主義市場と社会保障との関係などにも及ぶ問題から生じていることもある。この講義ではそうした大きな問題を、社会福祉の現場実践と関係づけて捉えることを通じて、社会福祉・社会保障の本質を解明したい。</p> <p><学修の到達目標> 1. 社会福祉を含む社会保障の現実を、その基礎に立ち返って理解する。 2. 大きな制度的問題と社会福祉実践の現実とを結び付けて理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に配布する講義資料を熟読すること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 終了し講義ごとに、配布資料に基づいて必ず復習をすること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> ガイダンス（全体の進行について）、社会福祉と社会保障との関連について（善き生存としての福祉を中心に） 日本の社会保障・社会福祉の基礎：憲法25条（13条との関連）：プログラム規定・義務規定 / 行政裁量の理解 福祉国家体制の由来、措置制度と契約制度、福祉職と医療職、福祉の民営化・市場化問題 権利としての社会保障（1）：市民権と社会権との相違、私的所有と市民権 権利としての社会保障（2）：社会権の基礎、憲法14条との関連、申請主義の問題 福祉六法体制とそれ以降、戦後日本の社会保障制度の流れ 貧困問題と生活保護、社会手当制度、労災保険制度、雇用保険制度、年金保障制度 障害者福祉制度、子ども手当制度、高齢者福祉制度（公的介護保険制度） 							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
最終のレポートによって評価する。講義内容の正確な理解に加えて、内容を表現する文章力も評価の対象とする。							
使用教科書				参考図書			
教科書は使用せず、竹内が作成したレジュメ及び資料にそって講義を行う。				必要に応じて、講義中に紹介する			
備 考							
資料及びレジュメは、すべて、最初の講義時に配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 保健・医療・福祉の連携		医療安全管理論			伊川 順子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 安全はあらゆる分野においても最も肝要な事である。特に近年、医療安全は医療界の最優先課題となっている。ここでは、医療安全と医療事故の問題に焦点をあて学習を進めたい。まず安全管理とは何かを理解し、その上で具体的な方法論を学ぶ。講義内容は、安全プログラムの中から感染防止・制御、環境安全・衛生、ヒューマンエラー、事故発生時の対応を取り上げる。</p> <p><学修の到達目標> 安全性の確保に結びつけられる知識と、リスク感性の向上につなげる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 医療に関するマスコミ報道（新聞・テレビ・ラジオ・ネット等の情報）に関心を持つ <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 振り返り学習（自分だったらどうするか？相手はどのように考えるか？） <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 医療安全の概要と動向 2. 医療における安全管理とは 3. 感染予防と安全管理 4. 医療従事者と個人情報「保護法令 5. 看護実践と危険予防の必要性（KYT） 6. 医療者に必要な基礎的法知識 7. 医療安全管理とコミュニケーション 8. 医療安全を高める組織的な取り組み 9. 5S活動 SBAR（コミュニケーションスキル） 10. 医療安全対策：接遇 11. 事故発生時の体制づくり 12. 医療杏ン確保の考え方・手法（RCAの基礎知識） 13. 危機管理（クレーマー・クレーム対応） 14. 医療安全総集（新聞報道・医療安全かるた） 15. 課題検討（まとめ） 定期試験 							
評価基準・評価方法							
履修態度（20%）、筆記試験（80%）での総合評価							
使用教科書				参考図書			
特別使用しないが、必要時書籍紹介 毎回、パワーポイント使用				系統看護学講座 総合分野 医療安全（医学書院） RCAの基礎知識と活用事例、等その他適宜紹介 学研 e ナーシング 厚生労働省の医療安全研修資料			
備考							
関連する教科と結びつけて学習し、単に知識にとどまらず実践的能力として身につけてほしい。よって、積極的に学び取る姿勢で臨んでほしい。グループワークなども取り入れ出来るだけ参加型授業形態をとり、共に楽しく学べる授業としたい。（大声での雑談等で、授業を乱す学生は状況により退室）							

リハビリテーション学科

理学療法専攻

専門科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎理学療法学		理学療法総論			長谷部 武久	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> この講義を通じて、理学療法の対象となる「障害」の概略、その「障害」に対する運動療法について運動生理学の観点から学び見識を深める。そして理学療法の過程に関する理解が深まるとともに、理学療法士を目指す動機が更に高まることを期待する。この科目は専門科目「理学療法基礎用語」「運動療法総論」を学ぶ上での基礎となる。</p> <p><学修の到達目標> ①「障害」について述べることができる ②理学療法の過程について述べるができる ③運動療法の理論的背景（運動生理学）を理解できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に基づいて資料を配付するので、事前にその内容を確認すること。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 専門科目「理学療法基礎用語」で学んだ知識と関連させて復習すること。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション（授業の進め方、成績評価について） 理学療法士及び作業療法士法（目標①） 理学療法の対象（目標①②） 障害について（機能障害）（目標①） 障害について（能力障害）（目標①） 障害について（社会的不利益）（目標①） 理学療法の対象疾患（目標①） 理学療法の過程（目標②） 運動療法と物理療法（目標②） エネルギー代謝と酸素摂取量（目標③） 運動負荷と酸素摂取量（目標③） 正常循環機能と運動負荷に伴う生理的变化（目標③） 正常呼吸機能と運動負荷に伴う生理的变化（目標③） 正常末梢機能と運動負荷に伴う生理的变化（目標③） 運動処方（目標③） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
小テスト10%、筆記試験90%							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 運動療法学 中山書店 				<ul style="list-style-type: none"> 基礎運動学 第6版 医歯薬出版 			
備考							
<p>授業終了後やメールにて質問を受け付ける。 E-mail: t.hasebe@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎理学療法学		理学療法演習			石田裕保、藤橋雄一郎 辻圭一、○植木 努	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 学生主体による学習形態での学習を行う。理学療法を受ける患者を想定したシナリオから、自ら疑問を持ち自己学習による解決を目指すことで、学習方法を知り遂行する能力を身につける事を目的とする。またその体験を通じて将来、医療に携わる人間としての資質(態度)を身に付けられるよう、学生相互の交流・理解が行えるよう工夫する。</p> <p><学修の到達目標> ①自己学習の習慣をつける ②問題解決能力を身につける ③理学療法の業務を理解する</p>							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 肩関節や肘関節の解剖や運動学などについて、他の科目で習った内容の復習を行ってから授業に臨むこと。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> グループで挙げた学習項目について教科書や文献を用いて、自己学習用紙にまとめること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> PBLについて コアタイムの進め方と自己学習方法について プレゼンテーション方法について 肩関節コースシナリオ①コアタイム 肩関節コースシナリオ①自己学習内容のディスカッション 肩関節コースシナリオ②コアタイム 肩関節コースシナリオ②自己学習内容のディスカッション 肩関節コースシナリオ③コアタイム・・・①②③ 肩関節コースシナリオ③自己学習内容のディスカッション 発表準備 肩関節コース グループ発表 肘関節コース・手関節コース シナリオ①コアタイム 肘関節コース・手関節コース シナリオ①自己学習内容のディスカッション 肘関節コース・手関節コース シナリオ②コアタイム 肘関節コース・手関節コース シナリオ②自己学習内容のディスカッション 発表準備 肘関節コース・手関節コース グループ発表 肩関節コース・肘関節コース・手関節コースのレポート作成 定期試験 							
<p>到達目標①②</p> <p>到達目標①②③</p>							
評価基準・評価方法							
コアタイム評価(50%) 自己学習課題(25%) グループ発表(15%) レポート(10%)							
使用教科書				参考図書			
プリント資料配布する。				適時紹介する。			
備考							
<p>講義は少人数に分かれて行う。グループ等は随時連絡する。 特にディスカッション参加、自己学習課題の提出が重要になる。自分の意見や考えを他者に伝える能力が医療職として必ず必要になります。その能力を養えるよう積極的に講義に参加すること。 グループ発表についてはその場でフィードバックを行います。その他教員がいるときはいつでも質問は受け付けます。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎理学療法学		運動療法総論			○長谷部 武久 河合 克尚	教授 教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 「理学療法総論」「理学療法演習」「理学療法基礎用語」で修得した理学療法（運動療法）についての知識や考え方をもとに、PBL方式によるグループ学習（症例検討）等を通して自己学習能力およびコミュニケーション能力を養う。また「解剖学演習」で学ぶ下肢の解剖学の知識を関節可動域訓練や筋力増強訓練など理学療法の臨床に応用する。</p> <p><学修の到達目標> ①自己学習能力およびコミュニケーション能力を身につける ②下肢関節の解剖学的知識を踏まえて、その疾患・外傷に対するリハビリテーションに展開できる ③今まで学んだ解剖学・生理学的知識を運動療法に応用できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 各関節の初回時に資料を配付するので、事前にその内容を確認すること。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> グループで話し合われた内容に関して、必ず自己学習をした上で次回のディスカッションに参加すること。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション・股関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ① 2. 股関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ② 3. 股関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ③ 4. 股関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ④ 5. グループ発表 6. 膝関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ① 7. 膝関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ② 8. 膝関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ③ 9. 膝関節疾患の理学療法（症例検討）に関する PBL ④ 10. グループ発表（目標①②） 11. 下肢関節疾患に対する理学療法について（レポート課題）（目標②） 12. 運動療法の理論的背景① 13. 運動療法の理論的背景② 14. 理学療法評価体験（2年生と合同） 15. 運動療法の実際（目標②③） 定期試験 筆記 							
<p>到達目標①②</p> <p>到達目標③</p>							
評価基準・評価方法							
レポート50%、グループ学習への参加度50%							
使用教科書				参考図書			
・15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 運動療法学 中山書店				・基礎運動学 第6版 医歯薬出版			
備考							
<p>授業終了後やメールにて質問を受け付ける。 t.hasebe@heisei-iryuu.ac.jp k.kawai@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		理学療法基礎用語			藤橋 雄一郎	准教授	
基礎理学療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では、使用教科書「リハビリテーション総論」を基に講義を行う。医療・医学、特に理学療法（リハビリテーション）に関する用語・知識・理解を深め、医学書籍等に記載されている内容の理解を深める。また、理学療法士の役割、業務内容、必要な知識、人間性などの領域等についても触れる。</p> <p><学修の到達目標> ①理学療法について理解する ②理学療法（医療）専門用語について理解する ③理学療法（医療）専門用語を用いた説明をすることができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 初めて聞く医療用語が頻出する。より充実した時間を得るために、教科書を一読し不明な用語等は調べておくこと。 <必要時間>各回20分</p>				<p><内容> 講義内容を再確認する。専門科目や臨床実習前に本講義を再確認しておくこと。 <必要時間>各回20分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション これから学ぶ理学療法（医療）とは 医療人（理学療法士）に求められること リハビリテーション・理学療法の歴史 理学療法（医療）関連職種 理学療法（運動療法・物理療法）について 理学療法の領域（急性期、回復期、維持期） 疾患と障害構造（国際生活機能分類） 理学療法の進め方 理学療法における対象者評価Ⅰ 理学療法における対象者評価Ⅱ 補装具・自助具について 関連法規・制度（医療保健・介護保険）について 理学療法に関連する様々な用語（姿勢、症状、訓練など） 理学療法の対象疾患Ⅰ（中枢神経疾患、神経筋疾患） 理学療法対象疾患Ⅱ（運動器系、呼吸・循環器疾患） <p>定期試験 筆記</p>							
<p>到達目標①②</p> <p>到達目標①②③</p> <p>到達目標①②</p> <p>到達目標①②③</p>							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験85%、小テスト10%（随時実施）、授業参加度5%で判定します。							
使用教科書				参考図書			
PT・OT・ST・ナースを目指すひとのためのリハビリテーション総論 改訂第3版 要点整理と用語解説 椿原彰夫 編著 診断と治療社 ISBN 9784787823458 2017年12月				<ul style="list-style-type: none"> 15レクチャーシリーズ 理学療法概論（中山書店） セラピストのための概説リハビリテーション（文光堂） 			
備考							
<p>質問等、随時受け付ける。 担当教員メールアドレス：y.fujihashi@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎理学療法学		理学療法研究方法論			長谷部 武久	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 3年次選択科目「卒業研究」を見据えて、研究計画の立案及び研究を進める上で必要となる基礎的知識について学ぶ。研究計画及び方法、研究における客観性・信頼性・妥当性の意味、計測値の意味と統計学の重要性など、研究基本概念について理解する。</p> <p><学修の到達目標> ①研究を行う意義、そして研究デザインについて述べることができる ②論文・文献を検索することができる ③研究計画を立案できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 資料を配付するので、事前にその内容を確認すること。</p> <p><必要時間>各回15分</p>				<p><内容> グループで話し合われた内容に関して、必ず自己学習をした上で次回のディスカッションに参加すること。</p> <p><必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、研究を行う意味や論文の種類について 2. 科学的根拠に基づいた理学療法 3. 論文・文献検索の方法 4. 論文の構成・研究デザインに関するグループ学習① 5. 論文の構成・研究デザインに関するグループ学習② 6. 論文の構成・研究デザインに関するグループ学習③ 7. 論文の構成・研究デザインに関するグループ発表と小テスト 8. 論文の妥当性や信頼性に関するグループ学習① 9. 論文の妥当性や信頼性に関するグループ学習② 10. 論文の妥当性や信頼性に関するグループ学習③ 11. 論文の妥当性や信頼性に関するグループ発表と小テスト 12. 研究で用いられる数値や統計手法に関するグループ学習① 13. 研究で用いられる数値や統計手法に関するグループ学習② 14. 研究で用いられる数値や統計手法に関するグループ学習③ 15. 研究で用いられる数値や統計手法に関するグループ発表と小テスト <p>定期試験 筆記</p>						<p>} 到達目標①</p> <p>} 到達目標②</p> <p>} 到達目標①②</p> <p>} 到達目標②③</p> <p>} 到達目標①②③</p>	
評価基準・評価方法							
レポート50%、小テスト50%							
使用教科書				参考図書			
資料を配布する				<ul style="list-style-type: none"> ・ 内山靖 編集 標準理学療法学 専門分野 理学療法研究法 第3版 医学書院 ・ 適宜紹介する 			
備 考							
<p>課題レポートはメールにて提出。提出後、速やかにメールにて返却する。 授業終了後やメールにて質問を受け付ける。 E-mail; t.hasebe@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																										
専門科目 基礎理学療法学		理学療法学特論 I			○河合、大場、石田 藤橋、辻	-																										
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																									
		理学	作業	視機能																												
必修		○			3年次 前学期	1単位 (30時間)	演習 (オムニバス)																									
選択																																
授業概要・学修の到達目標																																
<p><概要> 理学療法学特論 I では、理学療法の基礎となる解剖・生理・運動学をはじめとして、2年次までの各科目で習得した知識の整理を図り、それぞれの知識を理学療法と関連付けて考える。そのために、授業時間毎に課題や確認テストを実施し理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①神経系（中枢・末梢）の解剖とその機能を深め、理学療法に応用できる。 ②運動学 神経伝達や運動力学の理解を深める。 ③ヒトの運動学的発達過程を捉えること。また理学療法の対象となる代表的小児疾患の病態を把握する。 ④呼吸器系・循環器系の解剖や機能（特に運動時の生体反応）の理解を深め、理学療法に応用できる。 ⑤中枢神経の機能について基礎知識を整理し、高次脳機能の仕組みと障害のさらなる理解に発展させる。</p>																																
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。																											
事前学習				事後学習																												
<p><内容> 解剖学・生理学・運動学を中心に2年次までの復習をしておくこと。</p> <p><必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 臨床実習Ⅲ・Ⅳにおいて、対象疾患について必要な専門基礎知識を整理するとともに、専門知識との関連性を確認する。</p> <p><必要時間>各回15分</p>																												
授業計画																																
<table border="0"> <tr> <td>1. 解剖学（神経系）（藤橋）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標①</td> </tr> <tr> <td>2. 解剖学（神経系）（藤橋）</td> </tr> <tr> <td>3. 解剖学（神経系）（藤橋）</td> </tr> <tr> <td>4. 運動学（石田）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標②</td> </tr> <tr> <td>5. 運動学（石田）</td> </tr> <tr> <td>6. 運動学（石田）</td> </tr> <tr> <td>7. 人間発達学・小児科学（辻）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>8. 人間発達学・小児科学（辻）</td> </tr> <tr> <td>9. 人間発達学・小児科学（辻）</td> </tr> <tr> <td>10. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標④</td> </tr> <tr> <td>11. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）</td> </tr> <tr> <td>12. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）</td> </tr> <tr> <td>13. 生理学（動物機能）（大場）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標⑤</td> </tr> <tr> <td>14. 生理学（動物機能）（大場）</td> </tr> <tr> <td>15. 生理学（動物機能）（大場）</td> </tr> </table> <p>定期試験</p>								1. 解剖学（神経系）（藤橋）	}	到達目標①	2. 解剖学（神経系）（藤橋）	3. 解剖学（神経系）（藤橋）	4. 運動学（石田）	}	到達目標②	5. 運動学（石田）	6. 運動学（石田）	7. 人間発達学・小児科学（辻）	}	到達目標③	8. 人間発達学・小児科学（辻）	9. 人間発達学・小児科学（辻）	10. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）	}	到達目標④	11. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）	12. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）	13. 生理学（動物機能）（大場）	}	到達目標⑤	14. 生理学（動物機能）（大場）	15. 生理学（動物機能）（大場）
1. 解剖学（神経系）（藤橋）	}	到達目標①																														
2. 解剖学（神経系）（藤橋）																																
3. 解剖学（神経系）（藤橋）																																
4. 運動学（石田）	}	到達目標②																														
5. 運動学（石田）																																
6. 運動学（石田）																																
7. 人間発達学・小児科学（辻）	}	到達目標③																														
8. 人間発達学・小児科学（辻）																																
9. 人間発達学・小児科学（辻）																																
10. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）	}	到達目標④																														
11. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）																																
12. 解剖学（内臓系）、生理学（植物機能）（河合）																																
13. 生理学（動物機能）（大場）	}	到達目標⑤																														
14. 生理学（動物機能）（大場）																																
15. 生理学（動物機能）（大場）																																
評価基準・評価方法																																
<p>評価方法は、定期試験（100%）とする。 （確認テストは授業内容の理解を確認するために実施し、定期試験にも出題する。）</p>																																
使用教科書				参考図書																												
<ul style="list-style-type: none"> ・基礎運動学（医歯薬出版） ・2年次までに使用した教科書全般 				<ul style="list-style-type: none"> ・クエスチョンバンク（MEDICMEDIA） ・理学療法士作業療法士国家試験過去問題集2018 共通問題、専門問題（久美 株式会社） ・ポケットマスター PT/OT 国試必修ポイント2018（医歯薬出版） 																												
備考																																
<p>確認テストに対するフィードバック（解説）は授業内に行います。 質問等がある場合は、授業終了後やオフィスアワーを積極的に活用して下さい。</p>																																

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎理学療法学		理学療法学特論Ⅱ			○河合、大場、石田 藤橋、辻	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			3年次 後学期	1単位 (30時間)	演習 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 理学療法学特論Ⅱでは、専門基礎および専門知識に関する各科目で習得した知識の定着を図り、これらの知識を応用して理学療法と関連付けて考える。そのために、授業時間毎に課題や確認テストを実施し、専門基礎および専門知識の理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> 3年次前期までに習得した専門基礎および専門知識の理解を深め、理学療法に応用できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 臨床実習Ⅲ・Ⅳにおいて、対象疾患について必要な専門基礎知識を整理するとともに、専門知識との関連性を確認しておくこと。</p> <p><必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 臨床で活かせるように、専門基礎および専門知識を理学療法の臨床場面と関連付けて考えられるようにする。そのために、臨床実習Ⅲ・Ⅳでの経験と統合し、理学療法についての理解を深める。</p> <p><必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 理学療法評価学（河合） 基礎理学療法学（河合） 内部機能障害学（河合） 運動療法（基本介入手段）（大場） 物理療法学（大場） 精神医学、臨床心理学（大場） 義肢装具学（石田） 日常生活動作学（石田） 生活環境論（石田） 脳・神経機能障害学（藤橋） 脳・神経機能障害学（藤橋） 神経筋系障害学（藤橋） 運動機能学（辻） 骨・関節機能障害学（辻） 発達機能障害学（辻） <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価方法は、定期試験（100%）とする。 （確認テストは授業内容の理解を確認するために実施し、定期試験にも出題する。）</p>							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 基礎運動学 第6版（医歯薬出版） 2年次までに使用した教科書全般 				<ul style="list-style-type: none"> クエスチョンバンク（MEDICMEDIA） 理学療法士作業療法士国家試験過去問題集2018（久美 株式会社） ポケットマスター PT/OT 国試必修ポイント2018（医歯薬出版） 			
備考							
<p>授業ではグループワークを行います。積極的に取り組んで下さい。 質問等がある場合は、授業中やオフィスアワー等を活用して下さい。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		卒業研究			○曾田 直樹 大場 かおり 田島 嘉人	教授 准教授 教授	
基礎理学療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					3年次 前学期	2単位 (30時間)	演習
選択		○					
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 卒業研究では、これまでに履修した知識と技術を基に研究課題を決め、各種研究手法に沿った測定や調査を実施、分析、検証を加え、教員の指導の下研究論文を完成させる。論文作成に至るまでの調査の方法、手続き、実施法、結果の統計処理、文献検索の方法等を指導する。講義を通じて、研究者および高度な臨床実践者としての基本的能力を修得することを目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①研究計画の立案、実施し、論文作成まで行うことができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 各回の課題（テーマ決め・文献収集・実験）について文献などで深く追求しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 各回の課題について失敗や不備について反省し、改善する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（卒業研究の概要、研究活動の意義、論文の書き方について） 2. 統計について、文献検索について、研究に必要な機器について 3. 研究テーマについて 4. 研究テーマについて 5. 予備実験または文献収集 6. 予備実験または文献収集 7. 実験または文献収集 8. 実験または文献収集 9. 実験または文献収集 10. 実験または文献収集 11. 論文作成 12. 論文作成 13. 論文作成 14. 論文作成 15. 論文作成 							
評価基準・評価方法							
評価基準および評価方法：論文の完成度（100%）							
使用教科書				参考図書			
備考							
オフィスアワー	曾田	月曜日12：15～13：15					
	大場	火曜日16：30～17：30					
	田島	水曜日16：30～17：30					

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		クリニカルリーズニング			○堀 信宏 長谷部 武久 曾田 直樹	教授 教授 教授	
基礎理学療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					3年次 前学期	2単位 (30時間)	演習 (オムニバス)
選択		○					
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 理学療法を実施するに当たり、患者の持つ障害を把握し、問題点を明らかにする事は重要である。その為の情報収集手段として評価がある。評価は、単に疾病だけでなく障害を持つ前の状況、活動歴、スポーツ歴などが影響し、退院後の生活に影響する。そのような視点に基づきゴールの設定、治療プラン、住宅改造、家族指導などの必要性が見えてくるものである。正確な測定法の実施から実際のプランを導く為の考え方・視点を学習す。内部疾患、中枢疾患、整形疾患の3系統に分けて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 症例検討を通じて様々な問題解決へ導くための理学療法診断が行えるようにする。 設問を解釈しながら臨床に必要な知識を整理する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 各障害学、治療技術、物理療法学などを復習しておくこと。その知識を用いて、検討を加える。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 実習、国家試験に役立てるため、資料の整理に努めること。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 下肢疾患の症例に対して (曾田) 2. 下肢疾患の症例に対して (曾田) 3. 上肢疾患の症例に対して (曾田) 4. 上肢疾患の症例に対して (曾田) 5. その他の整形外科疾患の症例に対して (曾田) 6. 頭部外傷 (堀) 7. パーキンソン病の症例検討 (堀) 8. 運動学習 (堀) 9. Pusher 症候群と半側空間無視 (堀) 10. 痙縮治療 (堀) 11. リスク管理 ① (長谷部) 12. リスク管理 ② (長谷部) 13. 生活習慣病の考え方 (長谷部) 14. 心疾患 (長谷部) 15. 呼吸器疾患 (長谷部) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験90% (内訳は整形疾患分野 (30%)、神経疾患分野 (30%)、内部疾患分野 (30%)) 及び授業態度・参加度 (10%) とし評定する。							
使用教科書				参考図書			
資料配布				ケースで学ぶ理学療法臨床思考 臨床能力スキルアップ (文光堂)			
備 考							
講義内容によってはディスカッションを行う。積極的な参加を期待する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名				
専門科目 理学療法評価学		運動器系検査法			○曾田直樹、藤橋雄一郎、 辻圭一、植木 努	教授、准教授、 教授、講師				
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態			
		理学	作業	視機能						
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)			
選択										
授業概要・学修の到達目標										
<p><概要> 人間の生活は基本的な運動機能をベースに、必要な動作を用いて営まれている。その機能自体が障害されることは動作・活動の制限を生じ、社会生活が危ぶまれ得る事につながる。本講義はそれら運動機能の働きを評価する。具体的には、関節可動域測定、形態測定（四肢長、周径）、感覚検査（体性感覚、特殊感覚、疼痛）などである。各々の検査法の意義・原理を理解し、検査技術を修得する。</p> <p><学修の到達目標> ①四肢の関節可動域の目的を理解し測定することができる。 ②四肢の形態測定の目的を理解し行うことができる。 ③感覚検査の目的を理解し行うことができる。 ④整形外科的検査の目的を理解し行うことができる。</p>										
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。					
事前学習				事後学習						
<p><内容> 授業計画を確認し、教科書を一読しておくこと、講義内容の関節の運動学を確認しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 講義で習った実技の意義・目的を再確認し、技術が向上するよう時間を見つけ練習すること。 <必要時間>各回60分</p>						
授業計画										
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 関節可動域（曾田・藤橋）：目的 2. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節屈曲・伸展・内転・外転 3. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節内旋・外旋・水平内転・水平外転 4. 関節可動域（曾田・藤橋）：肘関節屈曲・伸展、手関節掌屈・背屈・橈屈・尺屈 5. 関節可動域（曾田・植木）：股関節屈曲・伸展・外転・内転・内旋・外旋 6. 関節可動域（曾田・植木）：膝関節屈曲・伸展 7. 関節可動域（曾田・植木）：足関節背屈・底屈、内反・外反 8. 関節可動域（曾田・植木）：体幹、別法 9. 形態測定（辻）：目的、方法を理解し、実技を行う。 10. 感覚検査（藤橋）：上行性・下行性伝導路の解剖・生理学を理解する。 11. 感覚検査（辻）：表在感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 12. 感覚検査（辻）：深部感覚および複合感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 13. 整形外科検査（曾田・植木）：体幹・上肢疾患検査 14. 整形外科検査（曾田・植木）：下肢疾患検査 15. 疾患別検査法：疾患を想定し、検査を行う 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;"> <p>到達目標①</p> <p>到達目標②</p> <p>到達目標③</p> <p>到達目標④</p> <p>到達目標①～④</p> </td> </tr> </table>								<ol style="list-style-type: none"> 1. 関節可動域（曾田・藤橋）：目的 2. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節屈曲・伸展・内転・外転 3. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節内旋・外旋・水平内転・水平外転 4. 関節可動域（曾田・藤橋）：肘関節屈曲・伸展、手関節掌屈・背屈・橈屈・尺屈 5. 関節可動域（曾田・植木）：股関節屈曲・伸展・外転・内転・内旋・外旋 6. 関節可動域（曾田・植木）：膝関節屈曲・伸展 7. 関節可動域（曾田・植木）：足関節背屈・底屈、内反・外反 8. 関節可動域（曾田・植木）：体幹、別法 9. 形態測定（辻）：目的、方法を理解し、実技を行う。 10. 感覚検査（藤橋）：上行性・下行性伝導路の解剖・生理学を理解する。 11. 感覚検査（辻）：表在感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 12. 感覚検査（辻）：深部感覚および複合感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 13. 整形外科検査（曾田・植木）：体幹・上肢疾患検査 14. 整形外科検査（曾田・植木）：下肢疾患検査 15. 疾患別検査法：疾患を想定し、検査を行う 定期試験 	}	<p>到達目標①</p> <p>到達目標②</p> <p>到達目標③</p> <p>到達目標④</p> <p>到達目標①～④</p>
<ol style="list-style-type: none"> 1. 関節可動域（曾田・藤橋）：目的 2. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節屈曲・伸展・内転・外転 3. 関節可動域（曾田・藤橋）：肩関節内旋・外旋・水平内転・水平外転 4. 関節可動域（曾田・藤橋）：肘関節屈曲・伸展、手関節掌屈・背屈・橈屈・尺屈 5. 関節可動域（曾田・植木）：股関節屈曲・伸展・外転・内転・内旋・外旋 6. 関節可動域（曾田・植木）：膝関節屈曲・伸展 7. 関節可動域（曾田・植木）：足関節背屈・底屈、内反・外反 8. 関節可動域（曾田・植木）：体幹、別法 9. 形態測定（辻）：目的、方法を理解し、実技を行う。 10. 感覚検査（藤橋）：上行性・下行性伝導路の解剖・生理学を理解する。 11. 感覚検査（辻）：表在感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 12. 感覚検査（辻）：深部感覚および複合感覚の目的と方法を理解し、実技を行う。 13. 整形外科検査（曾田・植木）：体幹・上肢疾患検査 14. 整形外科検査（曾田・植木）：下肢疾患検査 15. 疾患別検査法：疾患を想定し、検査を行う 定期試験 	}	<p>到達目標①</p> <p>到達目標②</p> <p>到達目標③</p> <p>到達目標④</p> <p>到達目標①～④</p>								
評価基準・評価方法										
<p>評価基準：知識、技術、理解、学修態度、意欲を重視する。 評価方法：期末テスト（筆記・実技）70%、小テスト20%、参加度10%。</p>										
使用教科書				参考図書						
理学療法評価学（改訂第5版）（金原出版株式会社） 2016 理学療法評価学 市橋則明 文光堂 2016										
備 考										
オフィスアワー	曾田	月曜日12：15～13：15								
	藤橋	水曜日16：30～17：30								
	辻	月曜日16：30～17：30								
	植木	火曜日16：30～17：30								

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		神経系検査法			○河合 克尚 辻 圭一 石田 裕保	教授 教授 准教授	
理学療法評価学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 人間の生活は、基本的な運動機能をベースに、必要な動作を用いて営まれている。その動作は、神経系の働きによって調整・制御されている。本科目では、それら神経系の働きを評価する方法を学ぶ。具体的には、徒手筋力検査、筋緊張、反射、脳神経、高次脳機能などの検査法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①徒手筋力検査法の意義・原理を理解し、検査技術を身に付ける。 ②脳神経検査および高次脳機能検査の意義・原理を理解し、検査技術を身に付ける。 ③反射検査の意義を理解し、検査技術を身に付ける。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 徒手筋力検査法では筋の走行と作用、筋緊張・反射・脳神経検査では神経系の解剖・生理学の理解が必要です。1年次で学んだ解剖学演習や解剖学・生理学の復習をしておくこと。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 後学期に開講される理学療法評価学演習や評価実習前セミナーを通して、知識・技術の向上に努める。また、臨床実習Ⅱ（評価）において実際の対象者に実施することにより、知識・技術の習熟を目指すこと。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 徒手筋力検査法の意義・原理、徒手筋力検査の測定方法：肘関節屈曲・伸展（河合） 徒手筋力検査の測定方法：肩関節屈曲・外転・伸展（河合） 徒手筋力検査の測定方法：肩関節外旋・内旋・水平内転・水平外転（河合） 徒手筋力検査の測定方法：前腕回内・回外、手関節背屈・掌屈、手指（河合） 徒手筋力検査の測定方法：膝関節屈曲・伸展、股関節屈曲・伸展（河合） 徒手筋力検査の測定方法：股関節外転・内転・外旋・内旋（河合） 徒手筋力検査の測定方法：足関節背屈・底屈、足部内がえし・外がえし（河合） 徒手筋力検査の測定方法：体幹屈曲・伸展・回旋、骨盤挙上（河合） 徒手筋力検査の測定方法：頭頸部、肩甲骨（河合） 脳神経の診かた：脳神経検査法の方法を理解し、実技を行う（辻） 高次脳機能の診かた：失認と失行について、検査方法を理解し、実技を行う（辻） 高次脳機能の診かた：失語、認知症、意識障害について検査方法を理解し、実技を行う（辻） 筋緊張の診かた：協調性検査、筋トーン検査 メカニズムを理解し実技を行う（石田） 反射の診かた：反射検査、姿勢反射検査 メカニズムを理解し実技を行う（石田） 反射の診かた：反射検査、姿勢反射検査 メカニズムを理解し実技を行う（石田） <p>定期試験</p>							
到達目標① 到達目標② 到達目標③							
評価基準・評価方法							
評価方法は、小テスト（40%）、定期試験（60%）とする。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 新徒手筋力検査法（協同医書出版社） ベッドサイドの神経の診かた（南山堂） 理学療法評価学 改訂第5版（金原出版） 				適宜紹介する			
備考							
講義と実技を行います。実技の際は、動きやすい服装で臨んで下さい。質問等がある場合は、講義終了後やオフィスアワーを積極的に活用して下さい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		動作・画像解析学			○堀 信宏 石田 裕保	教授 准教授	
理学療法評価学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 本講義では、運動器疾患や中枢疾患の代表的なレントゲン、CT、MRI 画像の見方や解説を教授する。また、姿勢分析、バランス検査、動作分析、歩行分析などを行っていく。姿勢、動作、歩行の分析とは、理学療法評価の一手段として位置づけられている。その為、運動学的視点を持って人における動きを観察し分析できるようになることも目的としている。</p> <p><学修の到達目標> 堀担当分：筋収縮と身体活動の力学的結びつきを理解する。バランス能力評価方法を理解・実施できるようになること。 石田担当分：X-p や MRI 画像を診ることが出来るようになること。基本動作の成り立ちを理解することが出来るようになること。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 人の動きを文章化します。運動学総論、臨床運動学で学んだ知識を正しく理解し使用できるようになっておきましょう <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> レポート作成時、多くの文献を読みましょう。 <必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動学的動作解析 固定筋と動筋 背臥位から長座位における筋活動 (堀) 2. 運動学的動作解析 筋活動とモーメント スクワットにおける筋活動 (堀) 3. バランス機能の見方 TUG/FRT/姿勢反射 (堀) 4. バランス機能の見方 BBS (堀) 5. CT/MRI の見方 整形疾患のレントゲンの見方 (石田) 6. 観察による動作分析の仕方 基礎 (石田) 7. 観察による動作分析の仕方 レポートの書き方とデモンストレーション (石田) 8. 「寝返り」動作分析・レポート作成 (石田) 9. 「寝返り」触診・レポート作成 (石田) 10. 「起き上がり」動作分析・レポート作成 (石田) 11. 「起き上がり」触診・レポート作成 (石田) 12. 「起き上がり」動作分析・レポート作成 (石田) 13. 「立ち上がり」動作分析・レポート作成 (石田) 14. 「立ち上がり」触診・レポート作成 (石田) 15. 「立ち上がり」動作分析・レポート作成 (石田) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
課題レポート (40%)、筆記試験 (60%) を総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
動作分析臨床活用講座 バイオメカニズムに基づく臨床推論の実践、石井慎一郎、メディカルビュー、2013				臨床評価指標入門 適応と解釈のポイント (協同医書) 観察による歩行分析 (医学書院) 筋骨格系のキネシオロジー (医歯薬出版株式会社)			
備考							
動作分析は、臨床実習（卒後は臨床）で日常的に必要なとされる評価能力です。そのことを意識して取り組んでください。 専門職としての「眼」を養うこと。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法評価学		理学療法評価学演習			曾田、○河合、田島 大場、石田、辻 藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	2単位 (60時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 理学療法評価学演習では、前学期で習得した各評価（検査）項目を中心に、症例に即した評価（検査）の実技練習を行う。その成果を客観的臨床能力試験（OSCE）を通して確認し、理学療法評価（検査）技術の定着と向上に努める。また、評価（検査）技術だけでなく、コミュニケーションの取り方についても学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①運動器疾患に即した評価（検査）を理解し、基本的な評価技術を身に付ける。 ②神経系疾患に即した評価（検査）を理解し、基本的な評価技術を身に付ける。 ③他者とのコミュニケーション能力の向上を図る。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 2年次前学期で学んだ各評価（検査）の意義と実技について、復習しておくこと。また、1年次後学期のコミュニケーション学で学んだコミュニケーションの基礎についても、復習しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 2年次後学期の臨床実習Ⅱ（評価）では、患者様に理学療法検査を実施する。臨床対応能力を高め、臨床実習Ⅲ・Ⅳ（総合実習）への礎とすること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 理学療法評価について（総論） 理学療法評価の演習（運動器系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（運動器系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（運動器系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（運動器系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（運動器系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（運動器系検査） OSCE（運動器系検査） 理学療法評価の演習（神経系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（神経系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（神経系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（神経系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（神経系検査） コミュニケーション技法、理学療法評価の演習（神経系検査） OSCE（神経系検査） 							
<p>到達目標①③</p> <p>到達目標②③</p>							
評価基準・評価方法							
評価方法は、グループ活動への参加度（20%）、レポート（20%）、OSCE（60%）とする。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 理学療法評価学 改訂第5版（金原出版） ベッドサイドの神経の診かた 第18版（南山堂） 標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学（医学書院） 				適宜紹介する			
備考							
<p>実技演習が中心の科目です。臨床実習に臨む際と同様、服装や身だしなみを整えるようにして下さい。 演習課題に対するフィードバックは、演習中およびOSCE後に担当教員から行います。 質問等がある場合は、演習中や授業終了後、オフィスアワーを積極的に活用して下さい。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		高齢者機能障害学			堀 信宏	教授	
理学療法治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 高齢者機能障害学では、高齢者に発生しやすい認知症、老年期症候群などの疾患、老化のメカニズムと、加齢に伴う様々な機能・能力障害について学習する。更に、転倒予防や高齢者の運動療法、リスク管理など将来の臨床に結び付く内容を教授する。その他にも家族に対する指導、高齢者に対する接し方などディスカッションを通じて検討・修得する。</p> <p><学修の到達目標> 高齢者が、複数の疾患を持つ対象であることを理解する。 理学療法士として、高齢者の特性を考慮し、様々な疾患について在宅生活についてディスカッションを行う。思考過程の修得も目指します。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 該当する教科書の範囲を、事前に読んでおくこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> ワークシートを配付する。教科書と併用して重要な点の整理しておくこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ライフステージと高齢者像、高齢社会の課題と展望 2. 加齢に伴う心身機能の変化：高齢者の身体的特徴 3. 加齢に伴う心身機能の変化：高齢者の認知・精神的特徴、p 32認知症 4. 加齢に伴う心身機能の変化：高齢者の認知・精神的特徴 対応について 5. 老年症候群：フレイル、低栄養、寝たきり（廃用症候群） 6. 老年症候群：転倒 7. 高齢者の生活機能評価 8. p 10高齢者の心理：人生曲線 9. 高齢者に対する接し方 10. 高齢者の理学療法を実施する上での留意事項 11. 高齢者の理学療法を実施する上での留意事項：介護予防プランの作成1 12. 高齢者の理学療法を実施する上での留意事項：介護予防プランの作成2 13. 症例検討課題 14. 死生観 15. 地域高齢者と理学療法士：地域理学療法へ 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
筆記試験95%、提出物5%							
使用教科書				参考図書			
シンプル理学療法シリーズ 高齢者理学療法学テキスト 山田和政編集、南江堂、2017				終末期リハビリテーション（荘道社） 運動療法学各論高齢者の機能障害に対する運動療法（文光堂） 高齢者リハビリテーション実践マニュアル（メディカルビュー）			
備考							
積極的な参加を期待する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		脳・神経機能障害学Ⅰ（総論）			○堀 信宏 大場 かおり	教授 准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 脳・神経機能障害学Ⅰ（総論）では、1年次で行った神経系、および脳血管系の解剖を復習するとともに、主にリハビリテーションの対象疾患として代表的な脳血管障害における臨床所見の解説、およびその検査方法について説明する。この科目で得た知識は理学療法士にとって必須であり、平行して開講される「神経系検査法」の基礎になりますので十分に理解しておくこと。</p> <p><学修の到達目標> 中枢神経（脳・脊髄）の解剖・生理学の知識定着、中枢神経疾患の病理、臨床症状の関係について理解する。臨床でもっとも遭遇する可能性の高い、脳血管障害の評価法と治療のアウトラインを修得する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 該当する教科書の内容を確認し、新しい用語について調べ、解剖学Ⅲと運動学（反射）の復習 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 授業ごとで、何処が重要な内容なのかを必ず見直す。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 中枢神経系理学療法の基礎知識（大場） 2. 脳の構造と機能（大場） 3. 脊髄の構造と機能（大場） 4. 運動と感覚の中枢機能と構造（大場） 5. 脳の損傷と病態・回復（1）（堀） 6. 脳の損傷と病態・回復（2）（堀） 7. 脳血管障害における医学管理（堀） 8. 脳血管障害におけるリハビリテーションの流れ（大場） 9. 中枢神経障害の運動の特徴（1）（大場） 10. 中枢神経障害の運動の特徴（2）（大場） 11. 脳血管障害後片麻痺患者の評価の考え方（堀） 12. 脳血管障害後片麻痺患者の運動機能評価（堀） 13. 脳血管障害後片麻痺患者のその他の評価（堀） 14. 脳血管障害における理学療法の実践（1）（堀） 15. 脳血管障害における理学療法の実践（2）（堀） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
期末試験100%（授業参加度を加味する）。各担当が実施する小テストは重要な点のまとめとなる。							
使用教科書				参考図書			
理学療法テキスト 神経障害理学療法学Ⅰ、石川朗編集、中山書店、2011 理学療法テキスト 神経障害理学療法学Ⅱ、石川朗編集、中山書店、2012 病気がみえる7脳・神経、医療情報科学研究所編集、MEDIC MEDIA、2017				マーティン神経解剖学テキストとアトラス（西村書店） ベットサイドの神経のみかた（南山堂） 絵で見る脳と神経（医学書院）			
備考							
脳血管障害は将来出会う障害の中でも、トップクラスの頻度とされます。障害像を掴むように努めてください。解らない内容を後回しにせず、その都度整理につとめることが大切です。3年の臨床実習、国家試験では、脳の機能解剖と合わせて理解していることが大切になります。コツコツ理解するように努めてください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		脳・神経機能障害学Ⅱ（各論）			○堀 信宏 大場 かおり	教授 准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 脳・神経機能障害学Ⅱ（各論）では、前学期で学習した総論の内容をベースに、脳血管障害における臨床所見の解説、およびその検査方法について説明する。その他の神経系疾患についても病理、臨床所見、治療について学習する。この科目で得た知識は学年末の臨床実習に必要な知識ですので、十分に学習すること。</p> <p><学修の到達目標> 脳血管障害の評価法と治療のアウトラインを修得する。 神経系疾患についての基礎知識を、解剖学や病理学との関連を踏まえて修得する。また、臨床所見や治療法についての理解を深める。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 脳・神経機能障害学Ⅰ（総論）を復習する。 授業ごとの配布プリントやテキストの見直しをする。</p> <p><必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 病態と評価は重要です。混乱しないように整理する。 他の授業で学習したこととの繋がりが見つけられるようにしておくこと。</p> <p><必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 脳血管障害における合併症（1）（大場） 脳血管障害における合併症（2）（大場） 高次脳機能障害（1）（大場） 高次脳機能障害（2）（大場） パーキンソン病の病態（堀） パーキンソン病に対する理学療法（堀） 運動失調症の病態、理学療法（大場） 頭部外傷・脳腫瘍の病態（堀） 頭部外傷・脳腫瘍に対する理学療法（堀） 多発性硬化症（重症筋無力症含む）の病態、理学療法（堀） 筋萎縮性側索硬化症の病態、理学療法（堀） 脊髄損傷のアウトライン（堀） ギランバレー症候群、シャルコ・マリー・トゥース病の病態（大場） 画像診断（大場） 中枢神経疾患患者におけるADL（大場） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>期末試験100%（授業参加度を加味する）。各担当が実施する小テストは重要な点のまとめとなる。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>理学療法テキスト 神経障害理学療法学Ⅰ、石川朗編集、中山書店、2011 理学療法テキスト 神経障害理学療法学Ⅱ、石川朗編集、中山書店、2012 病気がみえる 7 脳・神経、医療情報科学研究所編集、MEDIC MEDIA、2017</p>				<p>マーティン神経解剖学テキストとアトラス（西村書店） ベットサイドの神経のみかた（南山堂） 絵で見る脳と神経（医学書院）</p>			
備考							
<p>中枢難病は国家試験の出題が多い疾患です。障害像を掴むように努めてください。 前期総論とおなじですが、解らない内容を後回しにせず、コツコツ理解するように努めてください。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名										
専門科目 理学療法治療学		骨・関節機能障害学（上肢）			田島 嘉人	教授										
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態									
		理学	作業	視機能												
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義									
選択																
授業概要・学修の到達目標																
<p><概要> 骨・関節機能障害学（上肢）では、上肢の機能解剖学（運動学・解剖学）等基礎知識の確認を行うと共に、主要な整形外科、外科疾患である上肢の関節の骨折及び軟部組織損傷、変形性関節症などの病態理解を深める。また、各整形外科的検査法をはじめとする評価結果を踏まえ、結果をどのように解釈するのか、理学療法をどのような流れで展開させるのかなどを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①臨床推論→評価項目抽出→検査→考察→問題点の抽出の流れを把握することができる ②主要な上肢の整形外科疾患の病態を理解することができる ③実習における報告連絡相談の方法について体験してできるようにする</p>																
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。											
事前学習				事後学習												
<p><内容> 機能解剖学（運動学・解剖学）等の基礎知識を確認する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 各回の課題（PBL・レポート）に基づいて、学習を進める。 <必要時間>各回60分</p>												
授業計画																
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. 総論 2. 整形外科領域における評価 No.1 3. PBL（肩関節病態運動学）No.1 4. PBL（肩関節病態運動学）No.2 5. PBL（肩関節病態運動学）No.3 6. PBL（肩関節病態運動学）No.4 7. PBL（肩関節病態運動学）No.5 8. PBL（肩関節病態運動学）No.6 9. PBL（手関節病態運動学）No.1 10. PBL（手関節病態運動学）No.2 11. PBL（手関節病態運動学）No.3 12. PBL（手関節病態運動学）No.4 13. 肘関節病態について 14. 整形外科領域における評価 No.1 15. 整形外科領域における評価 No.2 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②③</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②</td> </tr> </table>								1. 総論 2. 整形外科領域における評価 No.1 3. PBL（肩関節病態運動学）No.1 4. PBL（肩関節病態運動学）No.2 5. PBL（肩関節病態運動学）No.3 6. PBL（肩関節病態運動学）No.4 7. PBL（肩関節病態運動学）No.5 8. PBL（肩関節病態運動学）No.6 9. PBL（手関節病態運動学）No.1 10. PBL（手関節病態運動学）No.2 11. PBL（手関節病態運動学）No.3 12. PBL（手関節病態運動学）No.4 13. 肘関節病態について 14. 整形外科領域における評価 No.1 15. 整形外科領域における評価 No.2 定期試験	}	到達目標①	}	到達目標①②③	}	到達目標②	}	到達目標①②
1. 総論 2. 整形外科領域における評価 No.1 3. PBL（肩関節病態運動学）No.1 4. PBL（肩関節病態運動学）No.2 5. PBL（肩関節病態運動学）No.3 6. PBL（肩関節病態運動学）No.4 7. PBL（肩関節病態運動学）No.5 8. PBL（肩関節病態運動学）No.6 9. PBL（手関節病態運動学）No.1 10. PBL（手関節病態運動学）No.2 11. PBL（手関節病態運動学）No.3 12. PBL（手関節病態運動学）No.4 13. 肘関節病態について 14. 整形外科領域における評価 No.1 15. 整形外科領域における評価 No.2 定期試験	}	到達目標①	}	到達目標①②③	}	到達目標②	}	到達目標①②								
評価基準・評価方法																
グループディスカッション参加度（40%）、レポート（期限提出）（30%）、期末試験（30%）																
使用教科書				参考図書												
関節機能解剖学に基づく整形外科運動療法ナビゲーション 改訂第2版 上肢 編集：整形外科リハビリテーション学会（メジカルビュー社）																
備考																
骨関節機能障害の理解に必要な解剖学、運動学、疾患学などの知識の応用と実習に必要な臨床推論から問題点の抽出までの臨床における理学療法の考え方を学びます。分からないこと、理解できないことがあれば、すぐに質問してください。 y.tajima@heisei-iryuu.ac.jp																

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		骨・関節機能障害学（下肢・体幹）			曾田 直樹	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 骨・関節機能障害学（下肢・体幹）では、理学療法を実施する機会が多い下肢・体幹の運動学、歩行における役割を学ぶ。また各関節に生じやすい疾病（大腿骨頸部骨折、THAなど）を中心に、運動学的見地を交えて障害を捉える方法について学ぶ。臨床運動学や骨関節治療技術と関連する。</p> <p><学修の到達目標> ①歩行における下肢・体幹の役割を理解できる。 ②下肢・体幹の疾患についての病態を理解し、その理学療法を理論的に説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次に学習した臨床運動学をはじめ運動学総論、下肢の解剖について確認する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 学習した内容の理解さらには応用できるように復習する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 足関節の病態運動学 2. 足関節の歩行時の役割 3. 足関節疾患の病態を考える 4. 足関節疾患の運動療法（理論と実際） 5. 膝関節の病態運動学 6. 膝関節の歩行時の役割 7. 膝関節疾患の病態を考える 8. 膝関節疾患の運動療法（理論と実際） 9. 股関節の病態運動学 10. 股関節の歩行時の役割 11. 股関節疾患の病態を考える 12. 股関節疾患の運動療法（理論と実際） 13. 腰椎の運動学 14. 腰椎疾患の病態を考える 15. 腰椎疾患の運動療法（理論と実際） 定期試験 筆記				到達目標①② 到達目標① 到達目標② 到達目標② 到達目標①② 到達目標① 到達目標② 到達目標② 到達目標①② 到達目標① 到達目標② 到達目標② 到達目標①② 到達目標② 到達目標②			
評価基準・評価方法							
<p>評価基準：知識・理解、学修態度・意欲を重視 評価方法：定期試験（90%）、態度・意欲（10% 小テスト、授業参加度など）にて総合的に判断する。</p>							
使用教科書				参考図書			
・関節機能解剖学に基づく整形外科運動療法ナビゲーション 下肢（メジカルビュー） ・標準理学療法学 骨関節理学療法学（医学書院）				・筋骨格系のキネシオロジー 原著：Donald A 監訳：島田智明ら 医歯薬出版株式会社			
備考							
オフィスアワー 月曜日12：25～13：15							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名													
専門科目 理学療法治療学		内部機能障害学（循環器系）			○長谷部 武久 河合 克尚	教授 教授													
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態												
		理学	作業	視機能															
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）												
選択																			
授業概要・学修の到達目標																			
<p><概要> 同時期に開講される「内科学」の知識を基に、主に心筋梗塞や狭心症などの冠動脈疾患が引き起こす障害像の把握、必要な評価項目の選択、評価を実施する際の留意点などについて学ぶ。具体的には情報収集をはじめ、心電図検査、運動負荷試験などの意義・原理を理解する。理学療法がどのような流れで展開されるのか、治療までの全体像を捉えられるようにする。</p> <p><学修の到達目標> ①循環器系の解剖と生理について述べるができる ②虚血性心疾患に対する評価および理学療法について述べるができる ③心不全に対する評価および理学療法について述べるができる</p>																			
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。														
事前学習				事後学習															
<p><内容> 「解剖学Ⅱ」「生理学Ⅱ」で学んだ循環器系の解剖や生理について復習すること。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 病態については必ず復習を行うこと。グループで話し合われた内容に関して、必ず自己学習をした上で次のディスカッションに参加すること。</p> <p><必要時間>各回60分</p>															
授業計画																			
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. 循環器系の解剖と生理【河合】 2. 運動耐容能とその評価【河合】 3. 心電図の診方【河合】 4. 心電図の診方【河合】 5. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 10. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 11. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】 15. グループ発表 定期試験 筆記 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標③</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②③</td> </tr> </table>								1. 循環器系の解剖と生理【河合】 2. 運動耐容能とその評価【河合】 3. 心電図の診方【河合】 4. 心電図の診方【河合】 5. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 10. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 11. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】 15. グループ発表 定期試験 筆記	}	到達目標①	6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】	}	到達目標②	7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】	}	到達目標③	12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】	}	到達目標②③
1. 循環器系の解剖と生理【河合】 2. 運動耐容能とその評価【河合】 3. 心電図の診方【河合】 4. 心電図の診方【河合】 5. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】 7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 10. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 11. 循環器疾患の運動療法【長谷部】 12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】 15. グループ発表 定期試験 筆記	}	到達目標①																	
6. 虚血性心疾患の病態、検査と治療【河合】	}	到達目標②																	
7. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 8. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】 9. 心不全の病態、検査と治療【長谷部】	}	到達目標③																	
12. PBL方式のグループ学習①（症例検討）【長谷部・河合】 13. PBL方式のグループ学習②（症例検討）【長谷部・河合】 14. PBL方式のグループ学習③（症例検討）【長谷部・河合】	}	到達目標②③																	
評価基準・評価方法																			
グループ活動への参加度（10%）、定期試験（90%）とする																			
使用教科書				参考図書															
・15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 中山書店				適宜紹介する															
備考																			
<p>授業終了後に質問を受け付ける。メールによる質問も可。 t.hasebe@heisei-iryuu.ac.jp k.kawai@heisei-iryuu.ac.jp</p>																			

科目区分		授業科目名			担当教員	職名													
専門科目 理学療法治療学		内部機能障害学（代謝・呼吸器系）			長谷部 武久 ○河合 克尚	教授 教授													
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態												
		理学	作業	視機能															
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）												
選択																			
授業概要・学修の到達目標																			
<p><概要> 2年次前期に学んだ「内科学」の知識を基に、糖尿病などの代謝系疾患、肺気腫などの閉塞性肺疾患を引き起こす障害像の把握、必要な評価項目の選択、評価を実施する際の留意点などについて学ぶ。また、理学療法がどのような流れで展開されるのか、治療までの全体像を捉えられるようにする。</p> <p><学修の到達目標> ①糖尿病などの代謝系疾患に対する評価および理学療法について理解する。 ②閉塞性肺疾患などの呼吸器疾患に対する評価および理学療法について理解する。 ③呼吸器疾患に対するフィジカルアセスメントの技術を身に付ける。</p>																			
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。														
事前学習				事後学習															
<p><内容> 代謝・呼吸器系の解剖および生理学の復習をすること。 また、内科学（代謝系疾患、呼吸器疾患の病態）についても復習をすること <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 授業内容を復習し、臨床実習Ⅱ（評価）や3年次の内部系理学療法治療技術に繋げる <必要時間>各回60分</p>															
授業計画																			
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. 代謝系疾患（メタボリックシンドローム）の病態【長谷部】 2. 糖尿病の病態【長谷部】 3. 糖尿病の治療【長谷部】 4. 代謝系疾患の評価【長谷部】 5. 代謝系疾患の理学療法【長谷部】 6. 呼吸器系の解剖学・運動学【河合】 7. 呼吸器系の生理学【河合】 8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】 10. 呼吸理学療法【河合】 11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】 14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標③</td> </tr> </table>								1. 代謝系疾患（メタボリックシンドローム）の病態【長谷部】 2. 糖尿病の病態【長谷部】 3. 糖尿病の治療【長谷部】 4. 代謝系疾患の評価【長谷部】 5. 代謝系疾患の理学療法【長谷部】 6. 呼吸器系の解剖学・運動学【河合】 7. 呼吸器系の生理学【河合】 8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】 10. 呼吸理学療法【河合】 11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】 14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 定期試験	}	到達目標①	8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】	}	到達目標②	11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】	}	到達目標①②	14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】	}	到達目標③
1. 代謝系疾患（メタボリックシンドローム）の病態【長谷部】 2. 糖尿病の病態【長谷部】 3. 糖尿病の治療【長谷部】 4. 代謝系疾患の評価【長谷部】 5. 代謝系疾患の理学療法【長谷部】 6. 呼吸器系の解剖学・運動学【河合】 7. 呼吸器系の生理学【河合】 8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】 10. 呼吸理学療法【河合】 11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】 14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 定期試験	}	到達目標①																	
8. 呼吸不全の病態と呼吸器疾患【河合】 9. 呼吸理学療法のための評価【河合】	}	到達目標②																	
11. 症例検討【長谷部・河合】 12. 症例検討【長谷部・河合】 13. 症例検討【長谷部・河合】	}	到達目標①②																	
14. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】 15. 呼吸理学療法のためのフィジカルアセスメント【長谷部・河合】	}	到達目標③																	
評価基準・評価方法																			
グループ活動への参加度10%、定期試験90%																			
使用教科書				参考図書															
・15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 中山書店 内部障害理学療法学 呼吸 中山書店				適宜紹介する															
備考																			
授業終了後に質問を受け付ける。メールによる質問も可。 t.hasebe@heisei-iryuu.ac.jp k.kawai@heisei-iryuu.ac.jp																			

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		発達機能障害学			松田 充弘	非常勤講師	
理学療法治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 成人の障害は、一度獲得した機能の回復となるが、小児での障害に対しては、障害に応じて発達を築き上げていく必要がある。発達を促していくために必要な、正常発達について、主に運動に注目して学習する。小児特有の疾患である脳性麻痺・二分脊椎・筋ジストロフィー症について、障害の特徴・評価・治療について学習する。特に脳性麻痺については、タイプによる特徴・問題点・治療方法について詳しく学習する。</p> <p><学修の到達目標> ①姿勢・運動の障害の分析が質的に行うことができる。 ②正常運動発達を理解し、肢体不自由児の発達の問題点や理学療法的な理解ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 姿勢・運動の分析の為には、解剖学・運動学の知識が必要である為、事前に理解を深めておく。初回の授業で資料をほぼ渡しますので、事前に一通り読んでおいて下さい。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 1回の講義での内容が多い為、資料や板書の内容を読み直し理解を深める。用語などでわからないものについては、質問や調べるなどして理解しておく。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 発達障害学概論・正常発達概論（小児期で理学療法の対象になる疾患について） 2. 正常発達 新生児期～6ヶ月（出生してから、どのようにして頤が座るのか？どのようにして座れるようになるのか？） 3. 正常発達 7ヶ月～12ヶ月（どのようにして歩行を獲得するのか？） 4. 脳性麻痺概論（脳性麻痺の原因・特徴・問題点について） 5. 評価概論（脳性麻痺を中心に評価方法について） 6. 評価（姿勢筋緊張の評価、姿勢・動作分析について 座位バランス等の簡単な実技も行う） 7. 評価（日常生活動作の評価について） 8. 脳性麻痺類型別痙直型両麻痺（障害の特徴について） 9. 脳性麻痺類型別痙直型両麻痺（問題点、理学療法について） 10. 脳性麻痺類型別痙直型四肢麻痺（障害・問題点・理学療法について） 11. 脳性麻痺類型別片麻痺（障害の特徴について） 12. 脳性麻痺類型別片麻痺（問題点・理学療法について） 13. 脳性麻痺類型別アテトーゼ（障害の特徴について） 14. 脳性麻痺類型別アテトーゼ（問題点・理学療法について） 15. 二分脊椎・筋ジストロフィー症（障害・問題点・理学療法について） <p>試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
プリントを配布します。				講義の際に紹介します。			
備考							
板書を多くしますので、ノートなどを準備して下さい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		物理療法学（温熱療法）			大場 かおり	准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義・実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 物理療法は物理的手段で生体の自然治癒力を高めるものである。理学療法の治療体系での位置づけを学び、熱エネルギーが生体に与える生理学的作用・治療効果・治療目的・適応と禁忌について学習する。さらに物理療法機器を実際に使い、使用方法、使用上の注意、安全確保について演習を行なう。</p> <p><学修の到達目標> ①効果的かつ安全な物理療法技術について理解し習得する。 ②温熱や寒冷が人体にもたらす生理学的、物理的影響を理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 中学、高校で学習した「熱」の単元を復習しておくこと、理解が深まる。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 後学期の臨地実習では患者様に物理療法を行なう機会があるので、基礎知識を整理しておくこと。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 物理療法について：物理療法の総説（定義、歴史、効果、リスク管理） 熱の物理学：温熱療法を実施する上で理解が必要な物理学 熱の生理学：温熱療法が生体に与える生理学的影響について 温熱療法総論：温熱療法の種類、適応、禁忌 ホットパック療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 パラフィン浴療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 超短波療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 極超短波療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 超音波療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 超音波療法・赤外線療法：物品の説明、使用方法、適応、禁忌、リスク管理 温熱療法演習：各論で学んだ機器、療法の体験 温熱療法演習：各論で学んだ機器、療法の体験 寒冷療法：寒冷療法が生体に与える生理学的影響について、適応、禁忌 寒冷療法演習：寒冷療法の体験 寒冷療法演習：寒冷療法の体験 <p>定期試験</p>						<p>到達目標①</p> <p>到達目標②</p> <p>到達目標①②</p>	
評価基準・評価方法							
<p>演習後のレポート（10%）、筆記試験（90%）の総合評価。 試験では、特に熱の生理学的・物理学的影響、物理療法の適応と禁忌について、知識が定着しているかはかる。レポートは提出期限厳守とし、期限を過ぎたものは評価対象にならない。</p>							
使用教科書				参考図書			
物理療法学改訂第2版 松澤正著 2012年 金原出版							
備考							
<p>質問は随時受け付けますのでしり込みせずに聞いてください。メールでもOKです。 k.ooba@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		物理療法学（電気・牽引・水治療法）			辻 圭一	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 電気・牽引・水治療法の講義では、治療に利用する光線、電気、牽引、水の特性と、それぞれが持つエネルギーが生体に与える生理学的作用および治療効果や治療目的、適応と禁忌について学習する。また、自然科学におけるエネルギーの物理的作用についても言及する。実習では物理療法機器を実際に用い、使用方法、使用上の注意、安全確保を学習する。講義を通じて医療従事者の基本的態度を身につけ、効果的かつ安全な治療行為の習得を目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①各療法が生体に作用する原理が理解できる。 ②適応となる疾病や禁忌となる疾病を理解できる。 ③機器や手技を体験し、特性が理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今回の講義に該当する教科書の章を一通り読んでおくこと。 <必要時間>各回20分</p>				<p><内容> 講義中に配布された資料に再度目を通し、特に呼称や名称、数値は覚えるように努力すること。 <必要時間>各回20分</p>			
授業計画							
1. 光線療法概論（光・波長・周波数について） 2. 光線療法概論（電磁波・可視光線・放射線について） 3. 紫外線療法（原理・物理的特性・機器の説明・適応と禁忌） 4. レーザー光線療法（原理・物理的特性・機器の説明・適応と禁忌） 5. 水治療法（水の力学的作用・機器の説明・適応と禁忌） 6. 牽引療法（牽引療法の原理・機器の説明・適応と禁忌） 7. 電気療法（電気の基礎、電圧・電流・抵抗について） 8. 電気療法（電気生理学） 9. 電気療法（電気療法の生体への影響） 10. 電気療法（電気療法の実際（低周波治療・TENS・SSP・干渉波・FES・TES）） 11. 筋電図バイオフィードバック療法（方法、適応、注意点について） 12. 疼痛の分類、マッサージ療法の理論 13. 実習1.（水治療法・牽引療法） 14. 実習2.（光線療法・電気療法） 15. 実習3.（マッサージ療法） 定期試験 筆記						到達目標①	
						到達目標①②	
						到達目標①	
						到達目標②	
						到達目標①②	
						到達目標③	
評価基準・評価方法							
中間テスト（30%） 期末テスト（70%）							
使用教科書				参考図書			
物理療法学 改訂第2版 金原出版株式会社							
備考							
本講義にノートは必要ありません。それに代わるレジュメを配布します。 レジュメは中間試験と期末試験の勉強に必要となるので、講義中に十分な書き込みをし大切に保管する事。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		義肢装具学			○石田 裕保 篠田 信之	准教授 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 義肢装具学では、切断者の術前評価・術後管理から各義肢の目的・機能等を学ぶ。義肢のチェックアウト（異常歩行）を行えるようにする。(担当；篠田 14時間；7コマ) 装具の種類・機能・使用目的などを学ぶ。動作に必要な運動機能と装具の物理的特性との関連を理解することにより、障害に応じた装具の選択、チェックアウトを確認できるようにする。(担当；石田 16時間；8コマ)</p> <p><学修の到達目標> ①病態を理解し、適切な義肢を処方出来るようにする。 ②障害を理解し、適切な装具を処方することができるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 義肢学・装具学ともに講義前に授業計画内容と教科書を照らし合わせて範囲を一読して下さい。</p> <p><必要時間>毎回15分</p>				<p><内容> 学んだ知識を整理しノートに簡潔にまとめるようにして下さい。講義で習った義肢及び装具の名称や機能、使用目的をしっかりと覚えてください。</p> <p><必要時間>毎回15分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 義肢学総論 義肢全般の考え方・ヒストリー【ビデオ、プロジェクター使用】（1～7は篠田担当、到達目標①） 切断の原因及び切断部位、切断部位の選択、切断術、断端ケア 各ドレッシング方法について ソフトドレッシング 実技、幻肢、幻肢痛、浮腫 義肢の基本事項、義足、異常歩行、チェックアウト、大腿、下腿 義足、継手の機能と種類、チェックアウト大腿・下腿 義足、継手の機能と種類、チェックアウト大腿・下腿、膝継手の立脚相、遊脚相の役目、足部 大腿義足 下腿義足（膝・サイム足根） 装具学総論 歴史・定義・目的・種類・分類・材料・制作過程（法制度）・E B M（8以降は石田担当、到達目標②） 短下肢装具 長下肢装具・股装具・膝装具 靴型装具 下肢装具のチェックアウト 体幹装具・側彎症装具 上肢装具と自助具 車椅子・歩行補助具 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
小テスト（10%）、課題（10%）、期末試験（80%）を総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
<p>【義肢学】15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 中山書店</p> <p>【装具学】15レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 中山書店</p>				<p>【義肢学】切断と義肢 初版（医歯薬出版）</p> <p>【装具学】義肢装具学 第4版（医学書院）・装具治療マニュアル／装具学 第3版（医歯薬出版）</p>			
備考							
<p>講義は、座学形式で行なう。ビデオを使用したり、実技を行ったりする。 適宜プリント資料を配付する。 小テストは、事前に連絡し行う。小テストの解説を行う。質問がある場合は、オフィスアワーなどに来てください。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名			
専門科目 理学療法治療学		日常生活活動学			大場 かおり ○石田 裕保	准教授 准教授			
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態		
		理学	作業	視機能					
必修		○			2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)・ 演習		
選択									
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標									
<p><概要> 理学療法では日常生活活動の改善を主要な治療目標としている。その基礎知識として概念、目標、範囲を整理し、障害構造 (ICF) などを教授する。脳血管障害、脊髄損傷、慢性疼痛など日常生活に支障を生じる主要な疾患を想定し、日常生活障害を具体化し治療目標を見つけ出すことができるように教授する。また、様々な ADL 評価方法や動作分析の方法を教授する。実習で直接的に患者様に関わる時に必要となる「動作介助」の実技を適時取り入れ、指導方法、介助技術〔言葉の使い方、介助の程度、介助の方法〕を教授する。又、生活範囲を広げていく為に必要な補装具や福祉用具の使用法についても教授する。主に車椅子、杖の使い方、段差・階段移動等を中心に指導を進める。</p> <p><学修の到達目標> ① ADL の概念について理解する。 ②動作介助の実技を習得する。 ③評価方法を理解する。</p>									
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。				
事前学習				事後学習					
<p><内容> 講義前に授業計画内容と教科書を照らし合わせて範囲を一読して下さい。 <必要時間>毎回15分</p>				<p><内容> 学習ノートを作成し、日々学んだことを簡潔にまとめるようにして下さい。 <必要時間>毎回15分</p>					
授業計画									
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%; vertical-align: top;"> 1. オリエンテーション 概論 日常生活活動学とは (石田) 2. ADL と APDL について (石田) 3. できる ADL・している ADL、ICF、ICIDH について (石田) 4. 更衣動作、浴槽への移乗、環境整備、座位保持装置 (石田) 5. 脊髄損傷の評価方法 ASIA、Zancolil など (石田) 6. <実技> 歩行器、車椅子、車椅子の取り扱いについて (石田・大場) 7. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 1人介助 (石田・大場) 8. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 2人介助 (石田・大場) 9. <実技> 動作介助、背臥位⇄腹臥位 (石田・大場) 10. <実技> 床からの立ち上がり (石田・大場) 11. <実技> 杖・松葉杖歩行 (石田・大場) 12. <実技> トランスファー 整形疾患、中枢疾患 (石田・大場) 13. ADL 評価法 (BI、カットなど) (石田) 14. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 15. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 定期試験 </td> <td style="width: 30%; vertical-align: middle; font-size: 2em;">} 到達目標① } 到達目標③ } 到達目標② } 到達目標③ </td> </tr> </table>								1. オリエンテーション 概論 日常生活活動学とは (石田) 2. ADL と APDL について (石田) 3. できる ADL・している ADL、ICF、ICIDH について (石田) 4. 更衣動作、浴槽への移乗、環境整備、座位保持装置 (石田) 5. 脊髄損傷の評価方法 ASIA、Zancolil など (石田) 6. <実技> 歩行器、車椅子、車椅子の取り扱いについて (石田・大場) 7. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 1人介助 (石田・大場) 8. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 2人介助 (石田・大場) 9. <実技> 動作介助、背臥位⇄腹臥位 (石田・大場) 10. <実技> 床からの立ち上がり (石田・大場) 11. <実技> 杖・松葉杖歩行 (石田・大場) 12. <実技> トランスファー 整形疾患、中枢疾患 (石田・大場) 13. ADL 評価法 (BI、カットなど) (石田) 14. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 15. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 定期試験	} 到達目標① } 到達目標③ } 到達目標② } 到達目標③
1. オリエンテーション 概論 日常生活活動学とは (石田) 2. ADL と APDL について (石田) 3. できる ADL・している ADL、ICF、ICIDH について (石田) 4. 更衣動作、浴槽への移乗、環境整備、座位保持装置 (石田) 5. 脊髄損傷の評価方法 ASIA、Zancolil など (石田) 6. <実技> 歩行器、車椅子、車椅子の取り扱いについて (石田・大場) 7. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 1人介助 (石田・大場) 8. <実技> トランスファー 車いす⇄ベッド 2人介助 (石田・大場) 9. <実技> 動作介助、背臥位⇄腹臥位 (石田・大場) 10. <実技> 床からの立ち上がり (石田・大場) 11. <実技> 杖・松葉杖歩行 (石田・大場) 12. <実技> トランスファー 整形疾患、中枢疾患 (石田・大場) 13. ADL 評価法 (BI、カットなど) (石田) 14. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 15. ADL 評価法 (FIM・SIAS) (大場) 定期試験	} 到達目標① } 到達目標③ } 到達目標② } 到達目標③								
評価基準・評価方法									
レポート (10%)、小テスト (10%)、期末試験 (80%) をもって総合的に判断する。 期末試験は実技・記述を行う。									
使用教科書				参考図書					
<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活活動学・生活環境学～第4版 (医学書院) ・新イラストによる安全な動作介助のてびき第3版 (医歯薬) ・脳卒中の機能評価 SIAS と FIM 基礎編 (金原出版) 				講義の際、適宜紹介します。					
備 考									
主に ADL 評価方法と動作介助実技を行う。実技の際は講義内で指定した服装で行うこと。 座学と実技の講義を行うため、講義によって使用教室が異なる。(事前に連絡します) 適宜プリント資料を配付する。小テストの解説を行う。質問がある場合は、オフィスアワーなどに来てください。									

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		理学療法総合セミナーⅠ			長谷部、○石田 辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）、運動学総論、臨床運動学で学んだ知識をもとに、理学療法評価のひとつである歩行分析を学ぶ。この科目で学んだ知識は2年次の後学期に開講される「理学療法総合セミナーⅡ」、「評価実習前セミナー」、「臨床実習Ⅱ（評価）」に発展する。</p> <p><学修の到達目標> ①動作分析の意義・方法について理解する ②正常歩行の成り立ち・メカニズムについて理解する ③実習に必要な異常歩行の線画作成や文章化を出来るようにする</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次科目「解剖学Ⅰ」、「運動学総論」、「臨床運動学」の十分な復習を行った上で授業に臨むこと。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 講義内容やレポート指導の内容は必ず復習すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 動作分析とは（石田） 評価意義 観察から評価へどのように関連付けるのか？（石田） 正常歩行の運動学的事項の確認（石田） 正常歩行の線画作成（石田） 正常歩行の線画作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 正常歩行の線画作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 正常歩行の観察文章化（石田） 正常歩行の観察文章化（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 正常歩行の観察文章化（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 異常歩行の線画作成（石田） 異常歩行の線画作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 異常歩行の線画作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 異常歩行の観察文章化（石田） 異常歩行の観察文章化（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 異常歩行の観察文章化（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） <p>定期試験</p>							
<p>到達目標①</p> <p>到達目標②</p> <p>到達目標③</p>							
評価基準・評価方法							
レポート（20%）、期末試験（80%）を総合して判断する。							
使用教科書				参考図書			
基礎運動学第6版 中村隆一ほか（医歯薬出版） 臨床運動学第3版 中村隆一ほか（医歯薬出版）				観察による歩行分析 沢 月城慶一ほか（医学書院）			
備考							
1年生に学んだ知識の復習、学び直しのいい機会です。分からない事がある場合は、すぐに解決するようにしてください。 随時、質問を受け付けます。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		理学療法総合セミナーⅡ			長谷部、○石田 辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 「理学療法総合セミナーⅠ」で学んだ正常歩行や異常歩行の線画・観察文章をもとに、理学療法の臨床思考（動作から考えられる問題点の抽出、考察及び統合と解釈）を身につけることを目的とする。この科目で学んだ知識は、2年次の後学期の「評価実習前セミナー」、「臨床実習Ⅱ（評価）」と関連する。</p> <p><学修の到達目標> ①実習に必要な態度を学ぶ。 ②実習のレポート作成に必要な知識について学び、異常歩行の問題点を抽出できるようにする。 ③実習中のレポート作成で必要となるパソコン操作が習得できるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 理学療法総合セミナーⅠでのレポート内容などを再度確認し、授業に臨むこと。 <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> レポート指導された内容については必ず確認し、問題解決すること。 <必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 臨床での歩行分析について TPO SOAP（石田） 到達目標① 2. 片麻痺患者の歩行分析（石田） 3. 片麻痺患者の歩行分析（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 4. 片麻痺患者の歩行分析（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 5. レポート書式説明および作成（石田） 6. レポート書式作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 7. レポート書式作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 8. レポート書式作成（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 9. 問題点抽出（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 10. 考察および統合と解釈（石田） 11. 考察および統合と解釈（石田、長谷部、藤橋、辻、植木） 12. 記録と報告について POS SOAP（石田） 13. レポートの書き方（石田） 14. レポートの書き方（石田） 15. レジュメの書き方（石田） <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
レポート（20%）、期末試験（80%）を総合して判断する。							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学 専門分野 臨床実習とケーススタディ（医学書院）				ケースで学ぶ理学療法臨床思考 臨床推論能力スキルアップ（文光堂）			
備考							
この講義では、パソコンを使用しますので、各自事前に用意してください。 分からないことは、事前に調べそれでも理解できない時にはいつでも質問に来て下さい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 理学療法治療学		脳・神経系理学療法治療技術			○堀 信宏 藤橋 雄一郎	教授 准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			3年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 脳・神経系理学療法治療技術では、主に脳血管障害、脊髄損傷に対する具体的な治療手技を学ぶ。動作介助をはじめ、神経筋促通法、関節可動域訓練などについて学ぶ。中でも脳血管障害者は理学療法の対象疾患として臨床上非常に高い頻度で遭遇する。その為、体系化された様々な治療手技について学ぶだけでなく、脳の多様な機能を反映した様々な臨床症状、リスクを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 脳血管の解剖学的理解と、損傷による病理的变化を修得する。 評価 (アセスメント) / 投薬 / 離床基準 / 可動域訓練 / 動作介助など、実践的な内容を修得する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 脳・神経機能障害学Ⅰ・Ⅱの講義内容を確認する。また、臨床実習Ⅱ (評価) での脳・神経系疾患の病態等、復習する。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 臨床実習Ⅲ (総合前期) とⅣ (総合後期) につなげられるように整理する。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳解剖生理と脳血管障害の病態 1 (堀) 2. 脳解剖生理と脳血管障害の病態 2 (堀) 3. 脳画像の診方 (堀) 4. 評価 (意識障害・眼球運動) (堀) 5. 評価 (運動・バランス・感覚・筋緊張) (堀) 6. 薬剤 (堀) 7. 離床の流れとポイント (堀) 8. 関節可動域訓練 (堀) 9. 姿勢保持・動作介助・ADL 指導 (堀) 10. その他の治療 (CI、ミラー、バイオフィードバック) (堀) 11. その他の治療 (PNF) (堀) 12. 脳卒中ガイドライン (藤橋) 13. 脳血管障害者の住環境整備 (藤橋) 14. 脳血管障害の装具療法 (藤橋) 15. 脊髄損傷 (藤橋) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験 (95%)、課題レポート (5%) を総合的に評価します。							
使用教科書				参考図書			
脳卒中急性期における看護ケアとリハビリテーション完全ガイド、飯田祥ら著、慧文社、2015 病気がみえる 7 脳・神経、医療情報科学研究所編集、MEDIC MEDIA、2017				脳卒中理学療法の理論と技術 (メディカルビュー) 理学療法テキスト神経障害理学療法学Ⅰ、石川朗編集、中山書店、2011 理学療法テキスト神経障害理学療法学Ⅱ、石川朗編集、中山書店、2012			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																																							
専門科目 理学療法治療学		骨・関節系理学療法治療技術			○曾田 直樹 田島 嘉人	教授 教授																																							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																																						
		理学	作業	視機能																																									
必修		○			3年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)																																						
選択																																													
授業概要・学修の到達目標																																													
<p><概要>骨・関節系理学療法治療技術では、臨床運動学で学んだ四肢・脊椎の基礎知識を基に臨床上遭遇しやすい骨・関節障害、スポーツ障害に対する病態、理学療法の考え方および治療手技を体系的に学ぶ。具体的には解剖学、生理学の観点からの“痛み”に関する講義、臨床的体表解剖、ストレッチなどの基本的テクニックについてはデモンストレーションと実技体験を実施する。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>① 変形性股関節についてその病態、理学療法の考え方を説明することができる。</p> <p>② 脊椎疾患についてその病態、理学療法の考え方を説明することができる。</p> <p>③ 関節リウマチについてその病態、理学療法の考え方を説明することができる。</p> <p>④ 臨床での評価、治療における体表解剖、ストレッチ、徒手療法の活用方法を説明することができる</p> <p>⑤ ④における基本的な技術を対象者に実施することができる</p>																																													
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。																																								
事前学習				事後学習																																									
<p><内容></p> <p>2年次に学習した骨関節機能障害学はじめとする骨・関節機能に関する科目の復習をする。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容></p> <p>学修した内容の理解およびその応用ができるように学習する。</p> <p><必要時間>各回60分</p>																																									
授業計画																																													
<table border="0"> <tr> <td>1. 変形性股関節症の病態について</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標①</td> </tr> <tr> <td>2. 変形性股関節症の運動療法について</td> <td>到達目標②</td> </tr> <tr> <td>3. 脊椎疾患の病態について</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標③</td> </tr> <tr> <td>4. 脊椎疾患の運動療法について</td> <td>到達目標①②</td> </tr> <tr> <td>5. 関節リウマチの病態について</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標④</td> </tr> <tr> <td>6. 関節リウマチの運動療法について</td> <td>到達目標④⑤</td> </tr> <tr> <td>7. 変形性疾患の運動療法</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標④</td> </tr> <tr> <td>8. 整形外科領域の理学療法</td> <td>到達目標④⑤</td> </tr> <tr> <td>9. 臨床的体表解剖Ⅰ</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標④</td> </tr> <tr> <td>10. 臨床的体表解剖Ⅱ</td> <td>到達目標④⑤</td> </tr> <tr> <td>11. 徒手療法の基礎Ⅰ</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標④</td> </tr> <tr> <td>12. 徒手療法の基礎Ⅱ</td> <td>到達目標④⑤</td> </tr> <tr> <td>13. ストレッチⅠ</td> <td rowspan="2">}</td> <td>到達目標④</td> </tr> <tr> <td>14. ストレッチⅡ</td> <td>到達目標④⑤</td> </tr> <tr> <td>15. 筋膜リリースの基礎</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>定期試験 筆記</p>								1. 変形性股関節症の病態について	}	到達目標①	2. 変形性股関節症の運動療法について	到達目標②	3. 脊椎疾患の病態について	}	到達目標③	4. 脊椎疾患の運動療法について	到達目標①②	5. 関節リウマチの病態について	}	到達目標④	6. 関節リウマチの運動療法について	到達目標④⑤	7. 変形性疾患の運動療法	}	到達目標④	8. 整形外科領域の理学療法	到達目標④⑤	9. 臨床的体表解剖Ⅰ	}	到達目標④	10. 臨床的体表解剖Ⅱ	到達目標④⑤	11. 徒手療法の基礎Ⅰ	}	到達目標④	12. 徒手療法の基礎Ⅱ	到達目標④⑤	13. ストレッチⅠ	}	到達目標④	14. ストレッチⅡ	到達目標④⑤	15. 筋膜リリースの基礎		
1. 変形性股関節症の病態について	}	到達目標①																																											
2. 変形性股関節症の運動療法について		到達目標②																																											
3. 脊椎疾患の病態について	}	到達目標③																																											
4. 脊椎疾患の運動療法について		到達目標①②																																											
5. 関節リウマチの病態について	}	到達目標④																																											
6. 関節リウマチの運動療法について		到達目標④⑤																																											
7. 変形性疾患の運動療法	}	到達目標④																																											
8. 整形外科領域の理学療法		到達目標④⑤																																											
9. 臨床的体表解剖Ⅰ	}	到達目標④																																											
10. 臨床的体表解剖Ⅱ		到達目標④⑤																																											
11. 徒手療法の基礎Ⅰ	}	到達目標④																																											
12. 徒手療法の基礎Ⅱ		到達目標④⑤																																											
13. ストレッチⅠ	}	到達目標④																																											
14. ストレッチⅡ		到達目標④⑤																																											
15. 筋膜リリースの基礎																																													
評価基準・評価方法																																													
<p>評価基準：知識・理解、学修態度・意欲を重視</p> <p>評価方法：定期試験（90%）、態度・意欲（10% 小テスト、授業参加度など）にて総合的に判断する。</p>																																													
使用教科書				参考図書																																									
<ul style="list-style-type: none"> ・運動療法のための機能解剖学的触診技術（上肢） 林 典雄 著（メジカルビュー社） ・運動療法のための機能解剖学的触診技術（下肢・体幹） 林 典雄 著（メジカルビュー社） ・プロメテウス解剖学アトラス 監訳 坂井 建雄ほか（医学書院） 				<ul style="list-style-type: none"> ・整形外科運動療法ナビゲーション 下肢・体幹（メジカルビュー） ・標準理学療法学 骨関節理学療法学（医学書院） 																																									
備 考																																													
オフィスアワー 水曜日16：30～17：30																																													

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		内部系理学療法治療技術			河合 克尚	教授	
理学療法治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			3年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 循環器系では運動耐容能向上や末梢循環障害に対する運動療法を、呼吸器系では呼吸介助手技や呼吸筋トレーニングを、代謝系については糖尿病やメタボリックシンドロームに対する予防・改善プログラムなど、疾患・症状に応じた運動療法を学ぶ。その他、救命処置や吸引法についても演習を通して学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①呼吸器疾患の具体的な運動療法や治療手技について理解する。 ②循環器疾患の具体的な運動療法について理解する。 ③代謝系疾患の具体的な運動療法について理解する。 ④内部系理学療法における科学的根拠および最新の知見を理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 内部機能障害学の復習をしておいて下さい。 理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 P.35～44 (Lecture4)、P.143～164 (Lecture14・15) 理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸 P.47～56 (Lecture5)、P.153～162 (Lecture15) <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 小テストを実施しますので、授業内容をしっかり復習しておきましょう。また、臨床実習での経験を通して、内部系理学療法の知識・技術を整理しましょう。 <必要時間>各回15分</p>			
授業計画							
1. 呼吸理学療法のための評価		2. 呼吸理学療法のための評価		}		到達目標①	
3. 呼吸器疾患の理学療法		4. 呼吸器疾患の理学療法					
5. 運動耐容能とその評価		6. 運動耐容能とその評価		}		到達目標②	
7. 循環器疾患の理学療法		8. 循環器疾患の理学療法					
9. 代謝系疾患の理学療法		10. 代謝系疾患の理学療法		}		到達目標③	
11. 気道内分泌物吸引法		12. 救命処置の流れ（心肺蘇生法と AED の使用）					
13. 文献抄読		14. 文献抄読		}		到達目標④	
15. 文献抄読		定期試験					
評価基準・評価方法							
評価方法は、グループ活動への参加度（10%）、小テスト（30%）、定期試験（60%）とする。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝、呼吸（中山書店） 配付資料 				その都度紹介します。			
備考							
小テストに対するフィードバック（解説）は授業内に行います。 質問等がある場合は、授業終了後やオフィスアワーを積極的に活用して下さい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		地域理学療法学			堀 信宏	教授	
地域理学療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 地域で生活を行う障害者は身体機能だけでなく、生活環境やキーパーソンの有無、医療・福祉サービスの可否などの要因により、生活の質（QOL）が異なってくる。地域理学療法学では障害を持つ方の在宅生活を様々な視点から検討する。各種サービスや保険といった地域理学療法に密着した情報についても学習する。施設、病院から退所・退院した患者さんにとって必要な環境整備、家族指導、諸制度の有効活用などについて学ぶ。後半は「在宅生活」をKeywordとした症例検討を実施する。</p> <p><学修の到達目標> 各種施設や、サービスの内容について理解する。将来就職先として「どのような施設、サービスで、どのような業務を行うのか」を知る理学療法士として疾患の特性を考慮し、様々な疾患について在宅生活についてディスカッションを行う。思考過程の修得を目指します。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 主に高齢者が対象となります。高齢者機能障害学で高齢者の特徴を復習しておくこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 前半は介護保険のしくみや各サービスなどを学び、後半は高齢者の在宅生活を検討する。整理に努めておくこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域リハビリテーションの概念・定義 2. 地域リハビリテーションの広がりと社会的背景、障害児・者施策の推移：障害者総合支援法 3. 地域包括ケアシステムと地域連携 4. 介護保険制度 5. 病期と回復期リハビリテーション病棟、療養病床 6. 介護保険下の入所サービスの展開、施設のリスクマネジメント 7. 介護保険下の通所サービス、訪問における理学療法の展開 8. 訪問のリスクマネジメント 9. 短期入所施設 10. 症例検討1：パーキンソン病の在宅生活 11. 症例検討2：脊髄小脳変性症の在宅生活① 12. 症例検討2：脊髄小脳変性症の在宅生活② 13. 症例検討3：リウマチ疾患の在宅生活 14. 症例検討4：筋ジストロフィー症の在宅生活 15. 地域における健康増進、生活者としての対象者 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
期末試験100%							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学 地域理学療法学第4版、牧田光代編集、医学書院、2017				地域リハビリテーション論 Ver5（三輪書店） シンプル理学療法シリーズ高齢者理学療法学テキスト（南江堂）			
備考							
症例検討では障害者が在宅生活を送るために何が必要なのか考えます。「自分が担当者だったら・・・」という思いで臨んで下さい。 積極的な参加を期待する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		生活環境論			植木 努	講師	
地域理学療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 理学療法士の役割は障害を治療するだけではありません。障害者の自立・社会参加を促す為には、そうした人々を取り巻く生活環境を整える必要があります。そのため障害や疾病を有する人の健やかな生活を支援するために生活環境要因との関連性を理解し、理学療法士として必要な知識・技術を身につける事を目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①生活環境と日常生活動作（ADL）、生活の質（QOL）との関係性を理解する ②生活環境評価の手順や評価のポイントを理解する ③住宅改修における理学療法士の関わり方や考え方を理解し、臨床において適切な改善計画を立案できるようになる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に沿って教科書の内容を確認する。</p> <p><必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 講義内容を踏まえ、自分を取り巻く生活環境に存在する問題点を探ることを意識し様々な状況で対応できる視点を身につける。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生活環境学の概念 2. 生活環境と障害 3. 生活環境の評価 4. 生活環境改善計画の実際（手すり・廊下） 5. 生活環境改善計画の実際（玄関・段差） 6. 生活環境改善計画の実際（階段・浴室とトイレに共通すること） 7. 生活環境改善計画の実際（トイレ・浴室） 8. 生活環境と法的諸制度（住宅改修に関連する介護保険制度） 9. 生活環境における実際（1）住宅環境調査 10. 生活環境における実際（2）住宅環境調査 11. 生活環境における実際（3）改善計画（グループワーク） 12. 生活環境における実際（4）改善計画（グループワーク） 13. 住宅環境調査結果および改善計画プレゼンテーション 14. 住宅環境調査結果および改善計画プレゼンテーション 15. 生活環境を支える福祉・リハビリテーション関連用具 定期試験 						到達目標① 到達目標② 到達目標③ 到達目標②	
評価基準・評価方法							
グループワーク参加度（5%）、プレゼンテーション内容（5%）、筆記試験（90%）							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学（第5版） 編集：鶴見隆正、隆島研吾 医学書院 2017年				授業中にプリントを配布します。			
備考							
改善計画プレゼンテーションにおいては発表後にフィードバックを行う。 その他質問があるときはいつでも受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅰ（基礎）			○堀、長谷部、曾田 河合、大場、田島 石田、辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			1年次 後学期	1単位 (45時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床の理学療法に触れる初めての学外臨床実習で、1年次科目の補完授業として2回実施する。前学期では理学療法士の役割、責任、医療人としてのマナーを経験する。後学期では理学療法士の職能について障害者との関わりを中心に考えるほか、患者に対する検査の一部を体験をするなど、これから学ぶ専門的学習に向けての準備とする。</p> <p><学修の到達目標> 実習を通じて自らの適性について考える機会とするほか、自らの経験を整理し理学療法士に対する興味や職業意識を培う。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 「生理学演習」で学んだ血圧測定、脈拍測定、「基礎運動学」で学んだ正常歩行の復習</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 理学療法士の職業意識を高める。正常歩行や正常動作について知識を整理するほか、担当症例の動作について復習する。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染症予防、個人情報などの指導を行う。</p> <p>前学期：学外施設で理学療法業務を見学し自らの適性や施設における理学療法の位置づけについて考える。（1日間）</p> <p>後学期：学外施設で、医療従事者として望ましいコミュニケーション、立ち居振る舞いについて考え実践する。担当症例への問診や視診を通じて障害を持つことについての考えを深める。（5日間） （課題内容：担当症例の歩行の模倣と文章化、血圧・脈拍測定、専門用語についての学習）</p> <p>実習報告会：レジュメを作成し発表を行う。学生間で意見交換を実施する。</p>							
評価基準・評価方法							
担当実習指導者の評定（臨床実習評価表を用いる）の結果、学内での実習後症例検討会の内容を基に学内で認定する。							
使用教科書				参考図書			
基礎運動学（医歯薬出版） 理学療法作業療法テキスト運動学（中山書店）				臨床実習要項			
備考							
社会（施設）での実習となります。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なることを意識し注意して下さい。 実習はケーシー服を着用します。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		評価実習前セミナー			○曾田、河合、大場、田島 石田、辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 評価実習前セミナーでは小グループに分かれ、教員がファシリテーターとして、学生の主体性を持った学習を奨励していく。その中で理学療法評価の意義を理解し、特定の疾患に限らず広範囲に用いられる理学療法評価の基本的な検査・測定手技・移乗介助および評価の記載方法を習得する。</p> <p><学修の到達目標> ① 患者像から歩行分析、文章化、評価項目の抽出、統合と解釈の一連の流れの学習 ② 基本的な検査・測定手技および評価の記載方法を習得する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今までに学んだ評価方法や疾患と障害の関係などを復習する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 学修した理学療法評価の方法とその意義を理解する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 演習（バイタルサイン・問診・コミュニケーション） 2. 演習（四肢長・周径測定） 3. 演習（関節可動域測定） 4. 演習（徒手筋力検査） 5. 演習（深部反射・病的反射検査） 6. 演習（表在・深部覚検査・痛みの評価） 7. 演習（整形疾患の検査） 8. 演習（筋緊張検査） 9. 演習（平衡機能検査） 10. 演習（失調症検査） 11. 演習（運動麻痺検査） 12. 演習（高次脳機能検査） 13. 演習（移乗介助 人工股関節患者） 14. 演習（移乗介助 対麻痺・四肢麻痺患者） 15. 演習（動作介助 片麻痺患者）						到達目標①②	
評価基準・評価方法							
評価基準および評価方法：症例レポート（80%）、知識（口頭試問）、実技試験（10%）、実習評価表での評価（5%）、グループ学習の参加度（5%）							
使用教科書				参考図書			
理学療法評価学（改訂第5版）（金原出版株式会社） 2016 理学療法評価学 市橋則明 文光堂 2016							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅱ（評価）			○堀、長谷部、曾田 河合、大場、田島 石田、辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			2年次 後学期	3単位 (135時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床実習Ⅱは臨床実習指導者の指導の下で基本的な評価方法を修得する。具体的には各検査の実施、検査結果を解釈し問題点抽出、ゴールの立案までの過程を実践する。また、適切な記録、指導者への報告・連絡・相談といった理学療法士として必要な資質（態度）を症例の評価を通じて学んでいく。</p> <p><学修の到達目標> 実習終了後に報告会を行い、未経験の症例についても知見を広げると共に、様々な視点に基づく問題解決法獲得を目指す。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 運動器系検査法、神経系検査法、動作・画像解析学、理学療法評価学演習で学んだ各評価方法の復習</p> <p><必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 各症例から得た検査結果を基に、どの様な問題点が浮かび上がるのか、「検査結果→問題点」までのプロセスを習得する。また日々の実習で疑問に感じたことや分からなかったことについて、自己学習を進める。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染症予防、個人情報などの指導を行う。4週間の学外実習を実施する。 （課題内容：担当症例に関する情報収集、実習指導者の指導・監督下での検査・測定の実施、基本動作の介助、症例レポート、課題レポートの作成）</p> <p>実習報告会：レジュメを作成し発表を行う。学生間で意見交換を実施する。</p>							
評価基準・評価方法							
<p>担当実習指導者の評定（臨床実習評価表を用いる）の結果、学内での実習後症例検討会の内容を基に学内で認定する。 必要に応じ、実習に必要と思われる知識、技術の確認テストを実施し、判定に加える。</p>							
使用教科書				参考図書			
2年次に使用したテキスト全般				臨床実習要項			
備考							
<p>社会（施設）での実習となります。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なることを意識し注意して下さい。実際に障害者の方に接する機会が増えます。安全管理、専門職として取るべき態度などは、実習要件として重視します。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅲ（総合前期）			○堀、長谷部、曾田 河合、大場、田島 石田、辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			3年次 前学期	7単位 (315時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> これまでに学んだ基本的な評価方法を用い、理学療法計画立案、様々な医療現場での活動参加を実践する。また、必要に応じた理学療法計画の変更、他部門からの情報収集、記録・報告、医療従事者としての適切な人間関係の構築等、より臨床的な思考過程や実践的な内容を臨床実習指導者の下で学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 医療専門職として責任ある態度・行動が取れるようになることを目標とする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 運動器系検査法、神経系検査法、動作・画像解析学、理学療法評価学演習での評価、各障害学での知識、技術、思考過程を復習する。</p> <p><必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 「検査結果→問題点」までのプロセスに加え、予後予測、リスク管理、治療法について知識を整理し、次回の実習に備える。また日々の実習で疑問に感じたことや分からなかったことについて自己学習を進める。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染症予防、個人情報などの指導を行う。7週間の学外実習を実施する。 （課題内容：担当患者などの情報収集、実習指導者の指導・監督下での検査・測定の実施、症例レポート、課題レポートの作成、実習指導者の許可・監督下における理学療法計画の実施、治療過程に応じた計画の変更）</p> <p>実習報告会：レジュメを作成し発表を行う。学生間で意見交換を実施する。</p>							
評価基準・評価方法							
<p>担当実習指導者の評定（臨床実習評価表を用いる）の結果、学内での実習後症例検討会の内容を基に学内で認定する。 必要に応じ、実習に必要と思われる知識、技術の確認テストを実施し、判定に加える。</p>							
使用教科書				参考図書			
解剖学・生理学・運動学をはじめとして、2年次・3年次で使用した教科書全般				臨床実習要項			
備考							
<p>社会（施設）での実習となります。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なることを意識し注意して下さい。実際に障害者の方に接する機会が増します。安全管理、門職として取るべき態度などは、実習要件として重視します。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅳ（総合後期）			○堀、長谷部、曾田 河合、大場、田島 石田、辻、藤橋、植木	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○			3年次 後学期	7単位 (315時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 施設・病院等で担当症例のゴール設定までの理学療法評価を行い、臨床実習指導者の下、理学療法計画を作成し、実施する。また様々な臨床現場での活動に参加する。これまで学んだ知識、技術、臨床的な思考過程を更に発展させる機会とする。</p> <p><学修の到達目標> 医療専門職として責任ある態度・行動が取れるようになることを目標とする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.18のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 運動器系検査法、神経系検査法、動作・画像解析学、臨床実習Ⅲでの評価、各障害学での知識、技術、思考過程を復習する。 <必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 同じ疾患であっても、年齢、性別、障害の程度が異なる事で、問題点、リスク管理などが変化することを想定し、多様な思考過程を得る。 <必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染症予防、個人情報などの指導を行う。7週間の学外実習を実施する。 （課題内容：担当患者などの情報収集、実習指導者の指導・監督下での検査・測定の実施、症例レポート、課題レポートの作成、実習指導者の許可・監督下における理学療法計画の実施、治療過程に応じた計画の変更）</p> <p>実習報告会：レジュメを作成し発表を行う。学生間で意見交換を実施する。</p>							
評価基準・評価方法							
<p>担当実習指導者の評定（臨床実習評価表を用いる）の結果、学内での実習後症例検討会の内容を基に学内で認定する。 必要に応じ、実習に必要と思われる知識、技術の確認テストを実施し、判定に加える。</p>							
使用教科書				参考図書			
解剖学・生理学・運動学をはじめとして、2年次・3年次で使用した教科書全般				臨床実習要項			
備考							
<p>社会（施設）での実習となります。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なることを意識し注意して下さい。実際に障害者の方に接する機会が増えます。安全管理、専門職として取るべき態度などは、実習要件として重視します。</p>							

リハビリテーション学科

作業療法専攻

◎リハビリテーション学科作業療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ	
専門 基礎 科目	人体の構造	解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）	1年次前学期	千田隆夫	123
		解剖学Ⅱ（内臓系）	1年次前学期	江村正一	124
		解剖学Ⅲ（神経系） ※	1年次後学期	近藤直実、堀 信宏、河村章史、大場かおり、藤橋雄一郎	125
		解剖学演習（体表解剖 骨）	1年次前学期	浅野莉沙、永井貴士、竹中孝博、市田博子	126
		解剖学演習（体表解剖 筋）	1年次後学期	浅野莉沙、永井貴士、竹中孝博、市田博子	127
	人体の機能	生理学Ⅰ（動物的機能）	1年次前学期	川島 卓	128
		生理学Ⅱ（植物的機能）	1年次後学期	川島 卓	129
		生理学演習 ※	1年次後学期	永井貴士、加藤清人、河村章史、世良龍哉、竹中孝博、市田博子、浅野莉沙、川島 卓	130
		運動学総論	1年次前学期	堀 信宏	131
		臨床運動学	1年次後学期	曾田直樹	132
		運動学演習 ※	2年次前学期	永井、加藤、河村、世良、竹中、市田、浅野	133
	心身の発達	人間発達学	1年次前学期	大森正英	134
	疾病の成り立ち	病理学概論	1年次後学期	松井永子	135
		内科学 ※	2年次前学期	平野智久、山本真由美、坂 義人、高田信幸、近藤直実、古田弥生	136
		整形外科学	2年次前学期	西本 裕	137
		神経内科学 ※	2年次前学期	下畑享良、木村暁夫、林 祐一、山田 恵、吉倉延亮、竹腰 顕	138
		精神医学	2年次後学期	宮地幸雄	139
		小児科学 ※	2年次前学期	近藤直実、近藤富雄、堀田 亮	140
	障害の成り立ち	リハビリテーション医学	1年次後学期	西本 裕	141
		老年医学	1年次後学期	岡野幸雄	142
	保健・医療・福祉の連携	保健医療論	1年次前学期	松岡敏男	143
社会福祉学		1年次後学期	竹内章郎	144	
医療安全管理論		1年次後学期	伊川順子	145	

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

◎リハビリテーション学科作業療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ
基礎作業療法学	作業療法総論	1年次前学期	加藤清人	147
	作業療法研究方法論 ※	2年次前学期	世良龍哉、河村章史	148
	基礎作業学 ※	1年次前学期	坂田崇好、村田美貴	149
	基礎作業学実習Ⅰ（和紙工芸、七宝、木工）	1年次前学期	世良龍哉、永井貴士、竹中孝博	150
	基礎作業学実習Ⅱ（陶芸、革細工、手芸）	1年次後学期	加藤清人、市田博子、浅野莉沙 他	151
	卒業研究	3年次前学期	加藤清人、河村章史、永井貴士、 世良龍哉、竹中孝博、市田博子、 浅野莉沙	152
作業療法評価学	作業療法評価学概論 ※	1年次後学期	竹中孝博、世良龍哉	153
	作業療法評価学Ⅰ（身体機能） ※	2年次前学期	浅野莉沙、加藤清人、竹中孝博、 市田博子、柳生浩平	154
	作業療法評価学Ⅱ（精神機能、活動、環境）	2年次前学期	河村章史 他	155
	作業療法評価学演習Ⅰ（身体機能）	2年次前学期	浅野莉沙、加藤清人、竹中孝博、 市田博子、柳生浩平	156
	作業療法評価学演習Ⅱ（精神機能、活動、環境）	2年次前学期	河村章史、中村恵一、大下伸子 他	157
作業治療学	作業療法治療技術理論 ※	1年次後学期	加藤清人、河村章史、世良龍哉、 永井貴士、竹中孝博、市田博子、 浅野莉沙	158
	認知症予防論	2年次前学期	加藤清人	159
	作業行動理論	2年次前学期	永井貴士	160
	精神障害治療論	2年次前学期	世良龍哉	161
	ニューロリハビリテーション論	2年次前学期	河村章史	162
	整形外科系障害治療論	2年次前学期	竹中孝博	163
	日常生活・環境アセスメント論	2年次前学期	市田博子、浅野莉沙	164
	老年期障害学	2年次後学期	加藤清人	165
	中枢神経障害学 ※	2年次後学期	河村章史、竹中孝博	166
	高次脳機能障害学	2年次後学期	河村章史	167
	整形外科系障害学 ※	2年次前学期	竹中孝博、川本 徹	168
	内部機能障害学 ※	2年次後学期	長谷部武久、市田博子	169
	義肢装具学 ※	2年次前学期	竹中孝博、菅原政範	170
	発達機能障害学Ⅰ（総論）	2年次前学期	渡邊雄介	171
	発達機能障害学Ⅱ（各論）	2年次後学期	渡邊雄介	172
	日常生活活動学	2年次前学期	浅野莉沙	173
	生活技術学演習	2年次前学期	永井貴士、浅野莉沙	174
	応用生活技術学演習	2年次後学期	佐藤篤史	175
	精神障害学Ⅰ（総論）	2年次前学期	世良龍哉	176
	精神障害学Ⅱ（各論） ※	2年次後学期	世良龍哉、片桐正博	177
	作業療法学総合演習Ⅰ（基礎）	3年次前学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野、花井、寺本、寺下 他	178
	作業療法学総合演習Ⅱ（専門）	3年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	179
	作業療法総合セミナーⅠ（評価）	2年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	180
作業療法総合セミナーⅡ（評価と介入①）	3年次前学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	181	
作業療法総合セミナーⅢ（評価と介入②）	3年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	182	
地域作業療法学	地域作業療法学Ⅰ（制度、支援、連携）	2年次後学期	永井貴士、市田博子	183
	地域作業療法学Ⅱ（実践、就労支援） ※	3年次前学期	加藤清人、小森健司	184
	生活環境・福祉機器学 ※	2年次後学期	市田博子、中津川匠、直井圭佑	185
臨床実習	臨床実習Ⅰ（基礎）	1年次前学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	186
	評価実習前セミナー	2年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野 他	187
	臨床実習Ⅱ（評価）	2年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	188
	臨床実習Ⅲ（総合前期）	3年次前学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	189
	臨床実習Ⅳ（総合後期）	3年次後学期	加藤、河村、永井、世良、竹中、市田、 浅野	190

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

リハビリテーション学科

作業療法専攻

専門基礎科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅰ（骨・筋肉系）			千田 隆夫	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 成人の骨は約200個あり、関節でつながって筋の収縮によって動く。骨と関節と筋をあわせて運動器と呼ぶ。快適な日常生活を営むには、骨と関節と筋の働きが非常に重要である。骨・関節・筋に障害が起こると、動作や運動が制約される。理学療法・作業療法の多くは、運動器の働きを正常に戻すために行われている。したがって、理学療法士・作業療法士をめざす諸君にとっては、運動器の知識は非常に重要である。この授業では、人体の骨・関節・筋の概略について学び、様々な人体の運動への骨・関節・筋の関わりについて理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①全身の骨格を構成する個々の骨の名称、数、形状、構造上の特徴を知り、筋・血管・神経・内臓との関係を理解する。②骨と骨の連結様式を知り、それに基づく関節の運動を理解する。③全身の骨格筋の名称、起始・停止、形状、作用、支配神経を知り、様々な運動にどの筋がどのように関与するかを理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今回の講義で出てくる骨、関節、筋の図を、指定のカラーリングブックで探し、その位置と形を大まかに把握しておく。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 講義で出てきた骨、関節、筋の位置、形、特徴をカラーリングブックの解説文を読みながら、着色した図で確認する。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 骨の一般構造・骨化・機能 2. 関節の一般構造・種類・運動 3. 脊柱を構成する骨と関節 4. 胸郭を構成する骨と関節 5. 上肢を構成する骨と関節 6. 下肢を構成する骨と関節 7. 頭蓋を構成する骨と関節① 8. 頭蓋を構成する骨と関節② 9. 筋の構造・機能 10. 頭部の筋 11. 頸部の筋 12. 胸腹部の筋 13. 背部の筋 14. 上肢の筋 15. 下肢の筋 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、授業態度（20%）を総合的に判断して評価する。							
使用教科書				参考図書			
人体解剖カラーリングブック Twietmeyer・McCracken 著 天野修、千田隆夫、鳥橋茂子監訳 丸善出版、2017年				<ol style="list-style-type: none"> 1) カラーイラストで学ぶ 集中講義 解剖学、坂井建雄編集、メディカルビュー社 2) トートラ解剖学 Tortora・Nielsen 著 小沢一史、千田隆夫、高田邦昭、依藤 宏監訳、丸善出版 			
備 考							
講義以外に、Eメール（tsenda@gifu-u.ac.jp）でも質問等を受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅱ（内臓系）			江村 正一	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 心臓をはじめとした循環器系、気管支、肺などの呼吸器系、食道・胃・腸などの消化器系および内分泌腺と尿生殖器について学ぶ。いくつかの臓器が一体となって機能し、生命が維持されていることを理解する。</p> <p><学修の到達目標> 循環器・呼吸器・消化器・内分泌線・泌尿器・生殖器について理解することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当する部分を丁寧に読み、それぞれの章で何を学ばよいか、何を学びたいかを、記録しておく。 <必要時間>各回 60分</p>				<p><内容> 事前学習で疑問に思ったことは理解・納得できたかを確認する。 <必要時間>各回 60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人体の構造 / 生きていくことの出来る最小単位・細胞について、組織について 2. 循環器系Ⅰ / 心臓について 3. 循環器系Ⅱ / 動脈について 4. 循環器系Ⅲ / 門脈について 5. 循環器系Ⅳ / 静脈・リンパ管について 6. 呼吸器系Ⅰ / 鼻・喉頭・気管と気管支について 7. 呼吸器系Ⅱ / 肺について 8. 消化器系Ⅰ / 口腔・食道について 9. 消化器系Ⅱ / 胃・小腸・大腸について 10. 消化器系Ⅲ / 肝臓・胆嚢・膵臓について 11. 内分泌腺 / 視床下部・下垂体・甲状腺・上皮小体・副腎について 12. 泌尿器 / 腎臓・尿管・膀胱について 13. 発生 14. 生殖器 / 男女生殖器について 15. 各内臓が密接な関係にあることを理解する <p>筆記試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験結果（100%）							
使用教科書				参考図書			
入門人体解剖学 藤田恒夫著 改訂第5版 南江堂				適宜、参考資料を配布する。			
備考							
試験の模範解答を掲示する。 E-mail s.emura@heisei-iryuu.ac.jp							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅲ（神経系）			○近藤直実、堀 信宏 河村章史、大場かおり 藤橋雄一郎	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 解剖学Ⅲ（神経系）では主に中枢、末梢、自律神経系と感覚器について学びます。理学療法士、作業療法士にとって神経解剖の知識は、将来対象となる脳血管障害やパーキンソン病、多発性硬化症、脊髄損傷といった身体機能障害を理解する基礎となるだけでなく、認知症や高次脳機能障害といった認知面の基礎にもなります。また、臨床（国家試験でも）中枢神経系の画像に触れる機会が増え、解剖を基に治療プランを作成している。以上より、構造と機能の理解は必要不可欠です。</p> <p><学修の到達目標> ①ニューロンの基本構造や脳、脊髄、脊髄神経、脳神経、自律神経の構造について理解する。 ②上肢に分布する腕神経叢の枝や、下肢に分布する腰神経叢の枝の走行と障害を受けやすい部位を説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 該当する教科書の内容を確認し、新しい用語について調べる。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業ごとで、何処が重要な内容なのかを必ず見直す。小テストの内容を必ず復習する。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 臨床に繋がる神経解剖学： <近藤> 目標①② 神経系総論： 神経の区分、神経の構成、髄膜と脳室系 <藤橋> 目標① 中枢神経系： 脊髄、脳幹 <堀> 目標① 中枢神経系： 小脳 <堀> 目標① 中枢神経系： 大脳（間脳、大脳皮質の構造） <堀> 目標① 中枢神経系： 大脳皮質（大脳皮質の機能局在） <堀> 目標① 中枢神経系： 神経路（体性感覚神経路、平衡覚の神経路） <藤橋> 目標① 中枢神経系： 神経路（錐体路系、錐体外路系） <藤橋> 目標① 末梢神経系： 脊髄神経（自律神経） <藤橋> 目標① 末梢神経系： 末梢神経系： 脊髄神経（腕神経叢、腰神経叢、仙骨神経叢） <河村> 目標② 末梢神経系： 脳神経： I - VI脳神経 <大場> 目標① 脳神経： VII - XII脳神経 <大場> 目標① 感覚器： 皮膚、視覚、平衡感覚 <大場> 目標① <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
各担当が行う小テストを基に出題する。期末試験100%（参加度・態度・小テストを加味する）							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 解剖学 第4版、野村嶺編集、医学書院、2015 病気がみえる 7 脳・神経（第2版）、医療情報科学研究所編集、MEDIC MEDIA、2017				プロメテウス解剖学アトラス第3版、坂井建雄ら監訳、医学書院、2014			
備考							
範囲が広いので、各担当が行う小テストをしっかりと組み、覚えること。解らない内容は後回しにせず、その都度整理につとめることが大切です。この神経系解剖は、2年生の神経系疾患の基礎になるので、ここをしっかりと勉強しておく、後の学修に有益になる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		解剖学演習（体表解剖 骨）			○浅野莉沙、永井貴士 竹中孝博、市田博子	助教、准教授 准教授、助教	
人体の構造							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法士として必要な人体の構造を理解するために、骨の名称や形状、関節構造の知識を学び、併せて皮膚上からの触診を行う。教科書上で学ぶ二次元的な知識を、被検者の体で三次元的に捉えることで理解を深める。また、作業療法士として対象者に接する際の基本的な配慮（態度や身なり等）を修得する。</p> <p><学修の到達目標> ①骨の名称や特徴について説明できる ②体表面から骨の形状を正確に触診できる ③他者の体に触れるため、相手への基本的配慮（身なり、態度、言葉遣い）ができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書や参考書、DVDを用いて概要を理解し、触診方法を確認しておく。 <必要時間>各回30～60分程度</p>				<p><内容> 骨の名称や形状、関節構造について復習する。実技練習を重ね、正確な触診技術を習得する。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション（肢位、運動、触診の手技について）（目標③に該当） 肩甲骨（①②③） 肩甲骨、鎖骨（①②③） 上腕骨（①②③） 上腕骨、尺骨、橈骨（①②③） 尺骨、橈骨（①②③） 手根骨（①②③） 手根骨、指骨（①②③） 胸骨、肋骨（①②③） 頭蓋骨、脊椎（①②③） 脊椎、骨盤（①②③） 骨盤、大腿骨（①②③） 大腿骨、脛骨（①②③） 脛骨、腓骨（①②③） 足根骨、趾骨（①②③） <p>小テスト（筆記）、中間試験（実技）、定期試験（筆記・実技）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価方法：定期試験（60%）、中間試験（20%）、小テスト（20%） 評価基準：講義日ごとに筆記小テストを行う。中間試験は実技試験を行う。定期試験は筆記試験と実技試験を行う。参加態度は、講義内の積極的な発表、演習の様子（ペア学生への配慮、余った時間に練習する等）で判断する</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>林典雄：『運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢』改訂第2版 メジカルビュー社 林典雄：『運動療法のための機能解剖学的触診技術 下肢・体幹』改訂第2版 メジカルビュー社</p>				<p>・解剖学アトラス ・適宜、補足資料を配布する</p>			
備考							
<p><メッセージ>触診技術は練習を積み重ねれば必ず上達する。事前にアポイントを取れば、授業外での自主練習時にアドバイスや触診の確認をすることも可能。積極的に練習することをおすすめする。 <質問・相談>質問や相談は適宜受け付ける。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学演習（体表解剖 筋）			○浅野莉沙、永井貴士 竹中孝博、市田博子	助教、准教授 准教授、助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 作業療法士として必要な人体の構造を理解するために、筋の走行や形状、作用といった知識を学び、併せて皮膚上からの触診を行う。教科書上で学ぶ二次元的な知識を、被検者の体で三次元的に捉えることで理解を深める。また、作業療法士として対象者に接する際の基本的な配慮（態度や身なり等）を修得する。</p> <p><学修の到達目標> ①筋の走行や形状、作用について説明できる ②体表面から筋を正確に触診できる ③他者の体に触れるため、相手への基本的配慮（身なり、態度、言葉遣い）ができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書や参考書、DVDを用いて概要を理解し、触診方法を確認しておく。 <必要時間>各回30～60分程度</p>				<p><内容> 筋の走行や作用について復習する。実技練習を重ね、正確な触診技術を習得する。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、肩甲上腕関節に関わる筋1（目標①②③に該当） 2. 肩甲上腕関節に関わる筋2（①②③） 3. 肩甲上腕関節に関わる筋3（①②③） 4. 肩甲胸郭関節に関わる筋1（①②③） 5. 肩甲胸郭関節に関わる筋2（①②③） 6. 肘関節に関わる筋1（①②③） 7. 肘関節に関わる筋2（①②③） 8. 手関節・手指に関わる筋1（①②③） 9. 手関節・手指に関わる筋2（①②③） 10. 手関節・手指に関わる筋3（①②③） 11. 手関節・手指に関わる筋4（①②③） 12. 手関節・手指に関わる筋5（①②③） 13. 股関節に関わる筋（①②③） 14. 膝関節に関わる筋（①②③） 15. 足関節・足趾に関わる筋（①②③） <p>小テスト（筆記）、中間試験（実技）、定期試験（筆記・実技）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価方法：定期試験（60%）、中間試験（20%）、小テスト（10%）、講義への参加態度（10%） 評価基準：講義ごとに筆記小テストを行う。中間試験は実技試験のみ、定期試験は筆記試験と実技試験を行う 参加態度は、講義内の積極的な発表、演習の様子（ペア学生への配慮、余った時間に練習する等）で判断する</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>林典雄：『運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢』改訂第2版 メジカルビュー社 林典雄：『運動療法のための機能解剖学的触診技術 下肢・体幹』改訂第2版 メジカルビュー社</p>				<p>・解剖学アトラス ・適宜、補足資料を配布する</p>			
備 考							
<p><メッセージ>触診技術は練習を積み重ねれば必ず上達する。事前にアポイントを取れば、授業外での自主練習時にアドバイスや触診の確認をすることも可能。積極的に練習することをおすすめする。 <質問・相談>質問や相談は適宜受け付ける。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		生理学 I (動物的機能)			川島 卓	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 生理学の外界に対して反応する機能(動物的機能)全般について講義する。</p> <p><学修の到達目標> ①末梢神経系と中枢神経系の働きを学び人の感覚情報をもとに運動が起こされるかを理解することができる。 ②正常な生理機能の理解をもとに、神経障害などに伴う各種病態症状についての原因を正しく理解することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間などを利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 生理学について	細胞機能の基礎	体液組成、細胞の構造、細胞の物質移動					
2. 細胞の興奮発生	神経細胞	興奮移動 膜電位 興奮の伝導					
3. 筋の収縮	骨格筋の構造	筋肉の収縮 筋収縮力学 筋のエネルギー発生					
4. シナプス伝達	神経筋伝達	平滑筋 中枢神経系の情報伝達 神経伝達物質 シナプスの可塑性					
5. 自立神経系	交感神経・副交感神経	内臓諸器官への作用					
6. 脊髄	脊髄反射	誘発筋電図					
7. 脳幹 小脳①	脳幹の姿勢反射	小脳の神経回路					
8. 小脳② 基底核	小脳と大脳協調	小脳障害 基底核の神経経路 基底核障害					
9. 大脳	運動の起動と出力						
10. 体性感覚							
11. 味覚 嗅覚 聴覚	前庭感覚						
12. 視覚①	網膜 視物質	視覚の中核					
13. 視覚②	感覚としての視覚	眼球運動					
14. 脳の高次機能1	大脳の神経回路と機能	連合野機能 言語機能					
15. 脳の高次機能2	大脳辺縁系 視床下部	記憶 睡眠 脳波					
	定期試験						
評価基準・評価方法							
定期試験の成績を主体(90%以上)に、授業中の質疑態度なども加えて成績評価をおこなう。							
使用教科書				参考図書			
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				・神経科学-脳の探求 ベヤーズ 他 西村書店 ・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著/理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院			
備考							
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		生理学Ⅱ（植物的機能）			川島 卓	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 生理学の生命維持に関する機能（植物的機能）全般について講義する。</p> <p><学修の到達目標> 生命機能維持にはどうしても必要な人体の植物的機能の知識と理解を深める。これを学ぶことにより病態症状の原因を正確に理解ができるようになる。同時にいろいろな専門科目習得のための基礎知識となる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間などを利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 血液①		血漿と血漿タンパク質 赤血球					
2. 血液②		白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解					
3. 心臓①		心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節					
4. 心臓②		心筋の収縮 心電図 心臓の収縮					
5. 循環①		血管系の区分 血圧調節					
6. 循環②		静脈系の循環 動脈血圧 循環調節					
7. 循環③		特殊部位の循環 ; 呼吸① 呼吸のメカニズム					
8. 呼吸②		肺のガス交換 呼吸運動の調節					
9. 消化と吸収①		消化管の構造と神経支配 消化管運動					
10. 消化と吸収②		消化液の分泌 栄養素の分解吸収					
11. 内分泌①		ホルモン 視床下部 下垂体					
12. 内分泌②		甲状腺 副腎 睪臓 性ホルモン					
13. 腎機能		ネフロン構造、糸球体ろ過 体液調節					
14. 生殖		男性・女性生殖生理 妊娠					
15. 代謝と栄養		日常の生理学					
定期試験							
評価基準・評価方法							
①定期試験の成績（90%以上）に授業中の質疑態度などを加えて総合的に判断して成績評価をおこなう。							
使用教科書				参考図書			
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著／理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院			
備考							
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		生理学演習			○永井貴士、加藤清人、河村章史、世良龍哉、竹中孝博、市田博子、浅野莉沙、川島卓	—	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	演習 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 生理学Ⅰ・Ⅱで学んだ知識を演習により確認する。動物の生理学では神経や筋の組織観察を基に、筋の活動や生化学反応の観察を行う。植物的生理学では、血圧、体温、心電図、呼吸機能の測定を行う。</p> <p><学修の到達目標> 作業療法の治療・評価にはこれらの生理学的な原理が用いられているため、演習を通して生理学の知識の確認を目標とする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 生理学Ⅰ・Ⅱで学んだことを事前に復習しておくこと。 生理学で用いられている単語を覚え、意味を理解しておくよう復習すること。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 期日までにレポートを提出すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 心電図 (永井) 3. 心電図 (永井) 4. 心電図 (永井) 5. 筋電図 (川島) 6. 筋電図 (川島) 7. 筋電図 (川島) 8. 高齢者の交感神経と成人の比較 (加藤 河村) 9. 高齢者の交感神経と成人の比較 (加藤 河村) 10. 高齢者の体温と成人の比較 (世良 竹中) 11. 高齢者の体温と成人の比較 (世良 竹中) 12. 高齢者の歩行と成人の比較 (市田 浅野) 13. 高齢者の歩行と成人の比較 (市田 浅野) 14. 高齢者の感覚と成人の比較 (加藤 永井) 15. 高齢者の感覚と成人の比較 (加藤 永井) 目標達成 							
評価基準・評価方法							
出席状況10%、レポート90%とし、総合的に判定する。							
使用教科書				参考図書			
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				適宜配布資料を用いる。			
備考							
準備するものは事前にオリエンテーションを行う。演習を通して、グループで考察をしていくため、能動的に学習することをすすめる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		運動学総論			堀 信宏	教授	
人体の機能							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 運動学は人の身体運動の仕組みに関する学問です。動作や活動の改善を求める理学療法士・作業療法士にとって基礎となります。「骨・関節・筋・神経」の解剖と、運動を解釈するための「力学」、日常生活の基本となる「姿勢・歩行」を学びます。これら複数の視点から捉える事で人の動作や活動の仕組みが解り、障害者が「何故動けないのか」見えてくる。</p> <p><学修の到達目標> ①骨・筋・関節・神経といった人体の構造と、姿勢・歩行の基礎を学び、異常姿勢・異常歩行を説明できるようにする。 ②関節運動や動作を捉える「力学の基礎」を学び、国家試験レベルの計算が解けるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 新しい言葉が沢山出てきます。シラバスに沿って、専門用語の確認を行う。</p> <p><必要時間>各回20分</p>				<p><内容> ワークシートを配布します。ワークシートに沿って学習内容をまとめて下さい。授業終了直前、または次回授業開始時に重要な箇所の復習をする。必ず見直すこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 身体運動の軸と面、および運動の名称（方向） 2. 運動器の構造と機能（骨） 3. 運動器の構造と機能（関節） 4. 運動器の構造と機能（筋） 5. 運動器の構造と機能（筋の収縮） 6. 運動器の構造と機能（神経） 7. 生体力学の基礎1（運動の法則、仕事、速度など） 8. 生体力学の基礎2（てこ、剛体など） 9. 生体力学を用いた計算 10. 姿勢（重心、支持基底面） 11. 姿勢（姿勢制御・バランス） 12. 正常歩行1（歩行周期、歩幅、ケイデンスなど） 13. 正常歩行2（歩行時の関節の動き、筋活動、重心移動など） 14. 異常歩行 15. 運動学習 <p>中間試験を2回、定期試験1回、合計3回実施</p>							
評価基準・評価方法							
<p>中間試験1回目 + 中間試験2回目 + 期末試験の合計3回試験を行う。範囲はそれぞれシラバスの1～6、7～9、10～15です。再試験は全範囲となる。中間試験2回分と期末試験の合計点を総得点（100%）として評定する。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>基礎運動学第6版補訂、中村隆一他著、医歯薬出版、2003 15レクチャーシリーズ理学療法作業療法テキスト運動学、小島悟責任編集、中山書店、2012</p>				<p>ビジュアル版筋肉と関節の仕組みがわかる事典、竹井仁監修、西東社、2013、PTOT 基礎から学ぶ運動学ノート、中島雅美、医歯薬出版、2016</p>			
備 考							
<p>本講義は内容が濃く、範囲が広いので3つに分けて、知識の修得を目指す。それぞれのテスト範囲毎にしっかり取り組むこと。再試験は範囲が広がる（シラバス1～15）ので注意すること。ワークシートと授業後の復習を活用すること。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		臨床運動学			曾田 直樹	教授	
人体の機能							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> ヒトの関節の特徴をバイオメカニクスの観点からその動きを理解することを目的とする。またその理論に基づき骨関節機能障害学や骨関節治療技術、病態運動学、動作分析への応用を学習できることを期待する。</p> <p><学修の到達目標> ①上肢の解剖学について理解できる。 ②下肢の解剖学について理解できる。 ③上肢の運動学について理解できる。 ④下肢の運動学について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 講義予定の関節について前期で学習した解剖学、運動学を復習する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 講義内容の理解と暗記をする。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 概論：筋の走行と軸と面の関係、筋肉の役割について ①、②、③、④ 肩関節：肩甲上腕関節の機能 ①、③ 肩関節：第2肩関節の役割について ①、③ 肩関節：肩甲胸郭関節の役割について ①、③ 肘関節：肘関節に付着する靭帯について ①、③ 肘関節：回内・回外運動のメカニズム ①、③ 手関節：掌屈・背屈のメカニズム ①、③ 手関節：手関節の靭帯・筋肉 ①、③ 股関節：下肢のアライメント、股関節に付着する靭帯 ②、④ 股関節：股関節周囲筋の役割 ②、④ 膝関節：特徴的な動き・アライメント ②、④ 膝関節：筋肉、半月板の役割 ②、④ 足関節：骨の構造、底屈・背屈のメカニズム ②、④ 足関節：靭帯・筋肉について ②、④ 上肢および下肢の解剖学と運動学について ①、②、③、④ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価基準：知識・理解、学修態度・意欲を重視 評価方法：中間試験（45%）、期末試験（45%）、態度・意欲（小テスト、出席率など）にて総合的に判断する。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>・筋骨格系のキネシオロジー 原著：Donald A 監訳：島田智明ら 医歯薬出版株式会社</p>							
備考							
オフィスアワー：月曜日12：15～13：15							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		運動学演習			○永井、加藤、河村、 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> (筋電) 日常生活には動作に伴って様々な筋活動が観察される。その筋活動を筋電図や観察を通して分析していく。 (歩行) 歩行に関する基本事項を整理した上で、実際に歩行動作中のデータを収集し、それに対して複数の処理・解析を行なった上で、成人と高齢者の特性を理解するための考察を行う。</p> <p><学修の到達目標> (筋電) ①日常生活動作に伴う筋活動を筋電計を通して正しく測定、観察にて分析ができるようになる。 (歩行) ②歩行の基本的知識を修得し、実際の歩行動作の分析ができる。 ③歩行に関連したデータを正確に収集でき、その解析についても妥当な内容で実践できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> (筋電) 解剖学演習・運動学の復習を行うこと (歩行) 運動学総論、臨床運動学での歩行に関する知識を復習した上で、演習に臨むこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> (筋電・歩行) 得た知識・技術を臨床実践で積極的に用いること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション 筋電測定 (1) (竹中) 筋電測定 (2) (竹中) 筋電測定 (3) (竹中) 筋電測定 (4) (加藤) 筋電測定 (5) (河村) 筋電測定 (6) (世良) データの整理と考察 (竹中) 歩行の基礎 (解剖・生理・運動学) (市田) 歩行のデータ収集 (1) (永井) 歩行のデータ収集 (2) (市田) 歩行のデータ収集 (3) (浅野) 歩行のデータ収集 (4) (市田) 歩行の解析 (市田) データの整理と考察 (市田) 							
評価基準・評価方法							
出席状況10%、レポート90%とし、総合的に判定する。							
使用教科書				参考図書			
<ul style="list-style-type: none"> 基礎運動学第6版補訂 医歯薬出版 配布資料 				適宜配布資料を用いる。			
備考							
準備するものは事前にオリエンテーションを行う。演習を通して、グループで考察をしていくため、能動的に学習することをすすめる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 心身の発達		人間発達学			大森 正英	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 人間の胎生期から老年期までの身体的発達と心理的発達の主要な現象を取り上げ講義する。新生児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、中年期、老年期の基本的な特徴について、生物学的な面のみならず社会とのかかわりの中で複雑に発達していく過程に関する理解を深め、医療関係者として必要な知識、応用技術を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①人間の発達段階の特徴を理解する②小児期の重要性を広く理解する③発達と環境、文化との関連を正しく認識する④青年期の特徴と重要性について理解を深める⑤中年期～老年期の変化の実態を把握する⑥学んだ知識を実生活ならびに医療関連の仕事に生かす この授業は卒業認定・学位授与に必要。カリキュラムマップを参照すること。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 特に指定した時以外は必要ないが、素早い書写能力を鍛えておくこと。板書したものをただ書き写すだけでなく、講義内容をもどンドン書き込んで充実したノートを作成することを望みたい。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> この講義は幅広く生物学、小児科学、医学、心理学、社会科学など多岐にわたる内容からなり、ノートに書く量も多いので、1回ごとに内容を確認し、復習しておくこと。 <必要時間>各回40分以上</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 人間の発達の特徴 ①、⑥ 人間の本能と行動 ①、③ 胎生期から誕生へ ①、② 乳幼児の発育と発達 ①、②、③ 子どもの身体発育発達に影響する因子 ②、③ 身体発育の指標 ①、②、③ 子どもの心の発達 ①、②、③ 幼児～学童の運動機能 ①、② 小児栄養 ①、②、⑥ 小児期の発達障害、疾病 ①、⑥ 青年期の身体的、心理的発達 ①、④ 中年期における心身の変化と人間としての成長、発達 ①、⑤ 老年期における心身の変化と日常生活 ⑤、⑥ 老化の進展と健康 ①、⑤、⑥ 超高齢社会の人間発達学 ①、⑤、⑥ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価基準：専門的な知識の修得と講義内容の理解を重視。専門用語を用いて現象を理解し、説明する能力を評価する。従って、試験問題には、記述問題を半数出題する。評価方法：筆記試験ならびに適時提出を求める課題（レポート）によって行う。評価割合はそれぞれ90%、10%</p>							
使用教科書				参考図書			
竹下研三著：人間発達学 ヒトはどう育つのか 2009年 中央法規 ISBN978-4-8058-3096-3				その都度、講義時間に紹介する。			
備考							
<p>修得すべき知識が多いので、個々の知識を体系化し、相互に関連づけて記憶するように努めること。課題や試験問題に対する解説はその都度行う。在学時の質問は随時、受け付ける。メール等による質問も歓迎するが、学務課経由でお願いしたい。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		病理学概論			松井 永子	臨床教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○	○	1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 病気を引き起こす原因を、病気の捉え方の歴史的移り変わりとともに概論する。ついで、病気の状態を、退行性病変、進行性病変、代謝異常、循環障害、免疫、炎症、感染症、腫瘍、放射線障害、老化、先天異常に分類し、それぞれの病的状態にみられる変化を解説する。</p> <p><学修の到達目標> この講義により、担当する患者さんの病態を理解し、より効果的な作業療法、視機能訓練につながることを目標とする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の当該箇所を読み、概要を理解する。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 配布プリントを利用しながら、内容の理解と習得をはかる。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 病理学概論および病因論 2. 退行性病変 3. 進行性病変 4. 代謝異常① 5. 代謝異常② 6. 循環障害① 7. 循環障害② 8. 免疫 9. 炎症 10. 感染症 11. 腫瘍① 12. 腫瘍② 13. 放射線障害 14. 老化 15. 先天異常、奇形 定期試験 							
評価基準・評価方法							
期末試験（80％）および授業中のレポート（20％）で成績評価を行う。							
使用教科書				参考図書			
小林正伸著「なるほど なっとく！ 病理学病態形成の基本的なしくみ」 南山堂							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門基礎科目 疾病の成り立ち		内科学			平野 智久 古田 弥生 高田 信幸	山本真由美 坂 義人 ○近藤直実	教授 他
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 内科系疾患などの病態・診察・診断・治療について、およびそのアプローチを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 各論としては循環器系、代謝、内分泌系、消化器系、腎臓疾患、呼吸器系、血液疾患など、実際の理学療法に関連性の高い疾患を中心に学修し、概要を説明することができる。 近年重要性が増している予防医学についての基礎知識の概要説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書などを読んで予習を行う。わからない点をピックアップしておく。 <必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> 授業で習ったことをしっかり復習する。その際、教科書やノートを整理する。 <必要時間> 毎回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 循環器分野① 心臓の解剖、生理や虚血性心疾患、不整脈などについて学習する。(平野) 循環器分野② (平野) 循環器分野③ (平野) 代謝・内分泌分野① 糖尿病の病態・機序・合併症・治療について学ぶ (山本) 代謝・内分泌分野② 肥満・メタボリック症候群を中心に代謝疾患について学ぶ (山本) 代謝・内分泌分野③ 内分泌疾患の種類と機序について学ぶ (間脳・下垂体、甲状腺、副腎を中心に) (山本) 消化器分野① 生体維持の基本となる消化器疾患について学ぶ。(古田) 消化器分野② (古田) 腎臓器疾患① 腎臓機能障害について学習する。(坂) 腎臓器疾患② (坂) 呼吸器分野① 呼吸器機能の基礎と呼吸器疾患全般について学ぶ。(高田) 呼吸器分野② (高田) 呼吸器分野③ (高田) 呼吸器分野④ (高田) 血液疾患 血液疾患について学ぶ。(近藤) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験 (90%)、小テスト (10%)							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野「内科学」第3版 (医学書院)							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		整形外科学			西本 裕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 運動器の外傷、疾患について、病因、経過、診断法、治療法を概説する。</p> <p><学修の到達目標> ① 骨、関節、靭帯、筋肉、末梢血管、脊髄、末梢神経の損傷、障害について述べるができる。 ② 筋、骨格系の感染症、腫瘍、先天異常、発育障害、関節リウマチ、骨粗鬆症を含む代謝疾患、退行性疾患など整形外科的疾患について述べるができる。 ③ 特に、脊椎固定術、人工関節置換術を中心に生体内人工材料にとって必要な条件、体内での経過について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 解剖学、生理学、病理学概論の知識の確認</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> 講義内容の整理と確認</p> <p><必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動器の外傷、障害 総論 ① 2. 上肢の外傷、障害 ① 3. 下肢の外傷、障害 ① 4. 区画症候群、複合性局所疼痛症候群 ① 5. 体幹の外傷、障害 ① 6. 脊髄損傷 ① 7. 骨関節感染症 ② 8. 関節リウマチ ② 9. 関節退行性疾患 ② 10. 循環障害、骨端症 ② 11. 先天異常、発育障害、神経筋疾患、側弯症 ② 12. 骨粗鬆症を含む代謝疾患 ② 13. 骨・軟部腫瘍 ② 14. 脊椎退行性疾患、絞扼性神経障害 ② 15. 生体内人工材料 ③ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
毎回のミニテスト（50%）、定期試験（50%）							
使用教科書				参考図書			
標準整形外科学 第13版 医学書院 ISBN978-4-260-02537-9							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		神経内科学			下畑享良、○木村暁夫、 林 祐一、山田 恵、 吉倉延亮、竹腰 顕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 神経内科で扱う神経疾患の病態・診断・治療法について学び、理解を深める。 個々の神経疾患における障害部位・認められる神経学的異常所見・異常検査所見に関し理解を深める。 個々の神経疾患の治療の現状およびリハビリテーションの意義・注意点を理解する。</p> <p><学修の到達目標> ①個々の神経疾患の疾患名と病態に関し理解し、診断・治療法に関して具体的に説明できる。 ②個々の神経疾患におけるリハビリテーションの必要性和施行時の注意点を理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1) 使用教科書の各授業に関連した項目に目を通す 2) 神経解剖に関する教材（参考図書参照）にあたり、中枢神経末梢神経、筋の構造や神経伝達路（錐体路・錐体外路・脊髄視床路など）の役割や場所を理解する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 1) 各授業で配布される添付資料に目を通し、関連する内容や不明な点に関し、参考図書などを用い学習する 2) 各授業内容に関連する国家試験問題に目を通す <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経変性疾患Ⅰ（パーキンソン病）（下畑） 2. 神経変性疾患Ⅱ（パーキンソン関連疾患）（下畑） 3. 神経変性疾患Ⅲ（脊髄小脳変性症）（林） 4. 神経変性疾患Ⅳ（運動ニューロン疾患）（下畑） 5. 認知症（アルツハイマー型認知症）（吉倉） 6. 認知症（非アルツハイマー型認知症）（吉倉） 7. 免疫性神経疾患（重症筋無力症など）（木村） 8. 免疫性神経疾患（多発性硬化症など）（木村） 9. 末梢神経障害Ⅰ（山田） 10. 末梢神経障害Ⅱ（山田） 11. 筋疾患Ⅰ（林） 12. 筋疾患Ⅱ（林） 13. 頭部外傷・脊髄損傷（竹腰） 14. 脳腫瘍（竹腰） 15. 脳炎・脳症（木村） <p>定期試験 筆記 到達目標①②は、すべての授業に関連する</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、授業への取り組み姿勢（20%）など総合的に判断							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 神経内科学（第4版）				<ul style="list-style-type: none"> ・臨床のための脳局所解剖学（中外医学社） ・神経内科ハンドブック 鑑別診断と治療第5版（医学書院） ・全ての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた、考え方とその対応（羊土社） 			
備考							
理学療法士 作業療法士国家試験問題解答と解説（医師薬出版編）							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		精神医学			宮地 幸雄	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 精神疾患についての基本的知識並びに精神疾患を罹患した人との基本的な援助方法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 臨床場面で援助方法の基本が活用できるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当部分を確認する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業の最後に毎回講師がまとめをするので、それを復習する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人が生きるということについてを考える。 2. 自殺について 3. 精神医学の歴史について 4. こころの発達と防衛機制について 5. 臨床心理検査について 6. よくみられる精神症状について－その1 7. よくみられる精神症状について－その2 8. 統合失調症について－その1 9. 統合失調症について－その2 10. 感情障害について 11. 心因性精神障害について 12. 知的障害・発達障害について 13. 心理療法について 14. チームアプローチについて 15. 医療従事者の姿勢について <p>定期試験</p>							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
定期試験（100%）で評価する							
使用教科書				参考図書			
上島国利ほか著「精神医学テキスト－精神障害の理解と治療のために」改訂第4版 南江堂 2017年							
備 考							
講師は臨床心理士。非医師であるが、精神科病院での事例を提示し臨床現場の話をしてみたい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病の成り立ち		小児科学			○近藤 直実 近藤 富雄 堀田 亮	教授 臨床教授 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>小児はただ単に体の小さな成人ではなく、つねに成長発達をする存在である。罹患しやすい疾患についても年齢によって異なる。このような小児の特徴を理解することが重要である。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①胎児・新生児期および小児特有の生理・病態生理を理解し、説明することができる。</p> <p>②胎児から子供の誕生、そして成長し次世代の子供を持つまでをひとつの Life cycle と捉え、この成長過程における生理と病態生理を理解し、説明することができる。</p> <p>③子供の Common Disease , 特有な疾患を理解し説明することができる。</p> <p>すなわち、子供がよく罹患する疾患、頻度は低い子供特有な疾患について病態・診断・治療、予防法を学ぶ。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>教科書などを読んで予習を行う。わからない点をピックアップしておく。</p> <p><必要時間>毎回30分</p>				<p><内容></p> <p>授業で習ったことをしっかり復習する。その際、教科書やノートを整理する。</p> <p><必要時間>毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 小児科概論 成長と発達 (近藤直、以下10まで) 成長と発達 新生児と疾患 先天異常 遺伝病 神経、筋疾患 神経、筋疾患 循環器疾患 消化器疾患、内分泌疾患 血液疾患、腫瘍性疾患 腎、泌尿器疾患、目、耳の疾患 等 呼吸器疾患 (近藤富) 感染症 (近藤富) アレルギー免疫疾患 (近藤富) こころの病気、障害 (堀田) 発達、心理検査 (堀田) <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験 (80%)、小テスト (20%)							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野「小児科学」 第5版 (医学書院)							
備考							
資料などにて補足説明を行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 障害の成り立ち		リハビリテーション医学			西本 裕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要></p> <p>① 疾病と障害の違い、障害のとらえ方を理解する (1, 2, 4)。 ② 脳血管障害のリハビリテーションについて理解する (3, 5-8)。 ③ 内部障害のリハビリテーションについて理解する (9, 10)。 ④ 運動器リハビリテーションについて理解する (11, 12)。 ⑤ 感覚器障害のリハビリテーションについて理解する (13)。 ⑥ リハビリテーションの根拠について考察し、創造的な思考を養う (14, 15)。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>医療、福祉の領域でリハビリテーション医学の立場を説明することができ、実践時にどのように応用されているかについて述べるができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>教科書の該当部分を確認</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容></p> <p>講義内容の整理と確認</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> リハビリテーションの実際 ① 運動学・生理学 ① 脳卒中のリハビリテーション (ADL 障害、QOL について) ② 障害分類、FIM (Functional Independence Measure) ① 高次脳機能障害 ② 運動療法 ② 嚥下障害のリハビリテーション ② 排尿障害のリハビリテーション ② 心疾患のリハビリテーション ③ 呼吸器のリハビリテーション ③ 切断と義足・義手 ④ 装具・杖と車椅子 ④ 平衡機能障害・聴力障害・視力障害 ⑤ 障害者スポーツ ⑥ 廃用症候群 ⑥ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
毎回のミニテスト (50%)、定期試験 (50%)							
使用教科書				参考図書			
リハビリテーション総論 改訂第3版 診断と治療社 椿原彰夫 ISBN 978-4-7878-2345-8				義肢装具のチェックポイント 第8版 医学書院 日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会 ISBN 978-4-260-01744-2			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 障害の成り立ち		老年医学			岡野 幸雄	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択		○					
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 老化と疾病は密接な関係にあり、その両面から障害を捉えなければならない。この講義では老化についての生理学的変化や能力的変化を整理し、老年期症候群、認知症、廃用症候群など高齢者特有の疾患について解説する。さらに種々の疾患について高齢者の特徴を概説するとともに、容易に寝たきりに移行しうる危険性が高いことについて触れる。</p> <p><学修の到達目標> ①高齢者の生理的・病的変化を理解し、老年症候群の症状を10以上挙げて説明できる。②高齢者に多い循環器・呼吸器・消化器・骨運動器・精神・神経・内分泌・血液免疫・腎泌尿器・皮膚口腔・耳鼻咽喉・眼疾患について、疾患を挙げて説明できる。③高齢者の医療・看護・介護・福祉について理解し、リハビリテーション・終末期医療について説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 講義当日のテーマを知り、教科書の該当部分を読むことを期待する。 <必要時間>各回20分程度</p>				<p><内容> 授業終了当日または次回までに、講義内容を振り返り、知識の習得を確認することを期待する。 <必要時間>各回45分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 老化と老年病の考え方、加齢に伴う生理機能の変化 2. 加齢に伴う運動機能・精神心理面の変化、性差医療からのアプローチ 3. 高齢者の定義および人口動態、高齢者との接し方、高齢者の機能評価 4. 高齢者の薬物療法の考え方、高齢者に多い症候と老年症候群 5. 老年症候群、循環器疾患 6. 循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、骨・運動器疾患 7. 呼吸器疾患、消化器疾患、骨・運動器疾患 8. 骨・運動器疾患、神経疾患 9. 精神疾患、内分泌代謝疾患 10. 内分泌代謝疾患、血液免疫疾患 11. 腎疾患、泌尿器疾患、皮膚・口腔疾患 12. 感染症、耳鼻咽喉疾患、眼疾患 13. 東洋医学・老年学からのアプローチ、社会学・経済学から見た高齢社会 14. 高齢者の医療、看護、介護・福祉、保健、高齢者のリハビリテーション 15. 高齢者の退院支援、高齢者の終末期医療 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
期末筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
大内尉義編 標準理学療法学・作業療法学－専門基礎分野－老年学（第4版）医学書院				適時紹介する。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		保健医療論			松岡 敏男	非常勤講師	
保健・医療・福祉の連携							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○		1年次 前学期	1単位 (15時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 現在、健康や医療に関する情報が氾濫している。多くの情報が正しいのか、自分に本当に役にたつのか、またどのようなことを取り入れ、実践すれば健康を維持、向上させることができるのか戸惑うばかりである。健康に良いとされていることであっても間違った方法を実践すれば健康を害することもある。また生活習慣により引き起こされる疾病も多く、日常生活の重要性を考えさせられる。学生時代に正しい健康観を学ぶことで、よりよいライフスタイルを身につけ、健康生活を実践できるようにすることと、医療に関するいろいろな問題について講義を行う。</p> <p><学修の到達目標> 学生として将来に継続できる健康感を身につける（知識）。よりよい生活習慣を身につけることを学び、実践できるように努力する。活力ある学生生活とはどのようなものかを理解する。医療制度に関心を持ち、自分で解決できることを考える。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 健康・医療に関することを事前に考えて、調べること。健康・医療に関して関連している色々な分野を自分なりに調べまとめる。講義を通じて自分なりの健康感を確立する努力をする。講義に対してどのような疑問点でも良いので、考えること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 健康・医療という身近な問題をテーマにしていますが、納得するだけの授業ではなく、関連することを積極的に調べ、実践する姿勢で学習（復習）を行うこと。また自分で関連事項に関して事後に纏め、幅広い知識にする。ぜひとも学び総合的に考えをまとめ、実践し活かせるようにすること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 健康について（健康感・医療・福祉など） 健康について（睡眠、日光浴、タバコ、温泉） 健康について ウォーキング・ジョギング 運動の効果 運動処方・療法 ダイエットの功罪 生活習慣病－肥満、糖尿病 生活習慣病－高血圧、脂質異常、高尿酸血症 高齢者・中年の健康・生活について 医療・保健に関して 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
テスト（100％）により評価する。							
使用教科書				参考図書			
教科書は使用しない。				毎回授業に関するプリントを配付する。シラバスに掲げている関係事項についていろいろな書物や参考に記事などを調べること。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		社会福祉学			竹内 章郎	非常勤講師	
保健・医療・福祉の連携							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 後学期	1単位 (15時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 現在、社会福祉を含む社会保障全体が、大きな転換点にある。それは、社会保障を支える福祉国家体制それ自体の「危機」という大きな問題からくるものであるが、同時に、社会保障の基盤である社会権（法）の基本的理解の問題や資本主義市場と社会保障との関係などにも及ぶ問題から生じていることもある。この講義ではそうした大きな問題を、社会福祉の現場実践と関係づけて捉えることを通じて、社会福祉・社会保障の本質を解明したい。</p> <p><学修の到達目標> 1. 社会福祉を含む社会保障の現実を、その基礎に立ち返って理解する。 2. 大きな制度的問題と社会福祉実践の現実とを結び付けて理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に配布する講義資料を熟読すること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 終了し講義ごとに、配布資料に基づいて必ず復習をすること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> ガイダンス（全体の進行について）、社会福祉と社会保障との関連について（善き生存としての福祉を中心に） 日本の社会保障・社会福祉の基礎：憲法25条（13条との関連）：プログラム規定・義務規定／行政裁量の理解 福祉国家体制の由来、措置制度と契約制度、福祉職と医療職、福祉の民営化・市場化問題 権利としての社会保障（1）：市民権と社会権との相違、私的所有と市民権 権利としての社会保障（2）：社会権の基礎、憲法14条との関連、申請主義の問題 福祉六法体制とそれ以降、戦後日本の社会保障制度の流れ 貧困問題と生活保護、社会手当制度、労災保険制度、雇用保険制度、年金保障制度 障害者福祉制度、子ども手当制度、高齢者福祉制度（公的介護保険制度） 							
評価基準・評価方法							
最終のレポートによって評価（100%）する。講義内容の正確な理解に加えて、内容を表現する文章力も評価の対象とする。							
使用教科書				参考図書			
教科書は使用せず、竹内が作成したレジюме及び資料にそって講義を行う。				必要に応じて、講義中に紹介する。			
備考							
資料及びレジюмеは、すべて、最初の講義時に配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		医療安全管理論			伊川 順子	非常勤講師	
保健・医療・福祉の連携							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 安全はあらゆる分野においても最も肝要な事である。特に近年、医療安全は医療界の最優先課題となっている。ここでは、医療安全と医療事故の問題に焦点をあて学習を進めたい。まず安全管理とは何かを理解し、その上で具体的な方法論を学ぶ。講義内容は、安全プログラムの中から感染防止・制御、環境安全・衛生、ヒューマンエラー、事故発生時の対応を取り上げる。</p> <p><学修の到達目標> 安全性の確保に結びつけられる知識と、リスク感性の向上につなげる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 医療に関するマスコミ報道（新聞・テレビ・ラジオ・ネット等の情報）に関心を持つ</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 振り返り学習（自分だったらどうするか？相手はどのように考えるか？）</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 医療安全の概要と動向 2. 医療における安全管理とは 3. 感染予防と安全管理 4. 医療従事者と個人情報保護法令 5. 看護実践と危険予防の必要性（KYT） 6. 医療者に必要な基礎的法知識 7. 医療安全管理とコミュニケーション 8. 医療安全を高める組織的な取り組み 9. 5S活動 SBAR（コミュニケーションスキル） 10. 医療安全対策：接遇 11. 事故発生時の体制づくり 12. 医療杏ン確保の考え方・手法（RCAの基礎知識） 13. 危機管理（クレイマー・クレーム対応） 14. 医療安全総集（新聞報道・医療安全かるた） 15. 課題検討（まとめ） 定期試験 							
評価基準・評価方法							
履修態度（20%）、筆記試験（80%）での総合評価							
使用教科書				参考図書			
特別使用しないが、必要時書籍紹介 毎回、パワーポイント使用				系統看護学講座 総合分野 医療安全（医学書院） RCAの基礎知識と活用事例、等その他適宜紹介 学研 e ナーシング 厚生労働省の医療安全研修資料			
備考							
関連する教科と結びつけて学習し、単に知識にとどまらず実践的能力として身につけてほしい。よって、積極的に学び取る姿勢で臨んでほしい。グループワークなども取り入れ出来るだけ参加型授業形態をとり、共に楽しく学べる授業としたい。（大声での雑談等で、授業を乱す学生は状況により退室）							

リハビリテーション学科

作業療法専攻

専門科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		作業療法総論			加藤 清人	教授	
基礎作業療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法士を目指す学生が、作業療法の発展過程を理解することで作業療法の役割を学ぶ。また、作業療法の骨子を構成する各専門領域の概観を理解し、その領域における作業療法士に必要な知識と技術を系統的に学習する。</p> <p><学修の到達目標> ①作業療法士に求められる資質、定義・歴史について説明することができる。 ②作業療法の対象や時期、過程について説明することができる。 ③分野別の作業療法について説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 初回時に、資料を配布するので事前にその内容を確認すること。また、作業療法の基礎のためできるだけ図書館で関連書籍を読むこと。 <必要時間> 毎回30分程度</p>				<p><内容> 講義を通して、重点箇所について説明する。その内容を中心に学習を深めること。 <必要時間> 毎回60分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 専門職に求められる資質と適正① 2. 作業療法の特徴・作業療法の定義・職域① 3. リハビリテーション職としての倫理・個人情報保護、法的位置づけ① 4. ノーマライゼーション・クリニカルパス① 5. 日本と世界の作業療法の歴史 (1) ① 6. 日本と世界の作業療法の歴史 (2) ① 7. 作業療法の原理・理論を理解し、疾患と病気をICFから概観する① 8. 作業療法評価・治療過程② 9. リハビリテーション・作業療法・役割② 10. 身体障害領域の作業療法③ 11. 精神障害領域の作業療法③ 12. 発達障害領域の作業療法③ 13. 老年期障害領域の作業療法③ 14. 作業療法の管理・運営③ 15. 保健・医療・福祉制度③ <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
小テスト（30%）、期末試験（70%）を総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
杉原素子、他：作業療法学全書〔改訂第3版〕 第1巻作業療法概論（協同医書出版社）				講義の際に適宜紹介する。ビデオと資料を使用する。			
備考							
次週の要点を説明するので、予習と復習を怠らないこと。 質問は随時受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門科目		作業療法研究方法論			○世良 龍哉 河村 章史		教授 教授
基礎作業療法学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 研究を实践するためのテーマの設定、情報収集、研究計画の立案、データ収集、データ解析、統合と解釈の基礎を学ぶ。他に研究の倫理・管理面についても学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①文献検索が自律的にできる。 ②主要な研究方法について概略を説明できる。 ③データ処理が自律的にできる。 ④研究デザイン・収集データに相応しい統計解析方法の選択・立案ができる。 ⑤研究の倫理・管理の概要がわかる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 指定教科書の内容に簡単に目を通しておくこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 「卒業研究」に備えて文献検索・データ処理を独力で行うこと。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、研究とは（世良） 2. 文献検索①（世良）・・・① 3. 文献検索①（世良）・・・① 4. 実験的研究方法（河村）・・・② 5. 統計処理法（統計処理ソフト）（河村）・・・③、④ 6. 統計処理法（基本統計量）（河村）・・・③、④ 7. 統計処理法（パラメトリックとノンパラメトリック）（河村）・・・③、④ 8. 統計処理法（差の検定）（河村）・・・③、④ 9. 統計処理法（相関係数）（河村）・・・③、④ 10. 統計処理法（その他の検定など）（河村）・・・③、④ 11. 質的研究①（世良）・・・② 12. 質的研究②（世良）・・・② 13. 調査的研究①（世良）・・・② 14. 調査的研究②（世良）・・・② 15. 研究の発表、研究の倫理／管理、論文の書き方（世良）・・・⑤ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
期末試験（60%）、小テスト（20%）、課題（20%）で評価・判定する。							
使用教科書				参考図書			
竹田徳則 他： 作業療法研究法第1版 医歯薬出版株式会社				適宜紹介する。			
備考							
授業内で質問の時間を設ける。また授業外でも適宜メール等で質問を受け付ける。 E-mail : akoumura@heisei-iryuu.ac.jp 小テストに関しては実施直後に解答提示と解説を行う。課題は添削したものを返却する。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名				
専門科目		基礎作業学			○坂田 崇好 村田 美貴		非常勤講師				
基礎作業療法学											
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態				
		理学	作業	視機能							
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)				
選択											
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標											
<p><概要> 作業療法士は「作業」を治療として扱うリハビリテーション専門職種である。故に、「作業」とは何なのかを理解し、それを対象者にどのように用いることが必要になるのかを、作業療法理論を用いて解釈する授業である。</p> <p><学修の到達目標> ①人間にとって「作業」は何なのかを知り、理解を深めることができる。 ②評価・治療手段としての「作業」の意味を考え、理解を深めることができる。 ③「作業」と健康について考え、対象者に「作業」が獲得する方法について理解を深めることができる。</p>											
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.22のカリキュラムマップを参照してください。						
事前学習				事後学習							
<p><内容> 2コマ目より、前回実施した授業の内容を復習し、言葉の意味の理解を深めるための自己学習を行う。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 授業で行った内容の復習を行い、知識を安定化させる。 <必要時間>各回60分</p>							
授業計画											
1. 「作業」とは？ (坂田) 2. 人間作業モデルについて (坂田) 3. 意志（興味）について (坂田) 4. 意志（価値）について (坂田) 5. 意志（個人的原因帰属）について (村田) 6. 役割（習慣）について (村田) 7. カナダ作業遂行モデルとの違いと COPM の活用 (坂田) 8. 遂行能力（運動技能と処理技能）について (坂田) 9. 遂行能力（コミュニケーションと交流技能）について (坂田) 10. 環境と作業 (坂田) 11. 作業的生活について（ナラティブ・アプローチを用いて） (村田) 12. 作業に基づく実践について (村田) 13. 世界の作業療法理論と日本の現状について (坂田) 14. 臨床場面での実践の紹介と方法について (坂田) 15. 作業バランスについて (村田) 定期試験						(目標①達成)		(目標②達成)		(目標③達成)	
評価基準・評価方法											
課題およびグループ活動への参加状況、課題への取組状況を加味して評定する。 具体的には、小テスト50%、定期試験50%の合計で算定する。											
使用教科書				参考図書							
山田孝編集：事例でわかる人間作業モデル改訂第4版、 協同医書出版社				必要に応じて、資料を配布する。							
備 考											
グループワークの際、実際に対象者へ行うことができるようにすることが目的であることを念頭において、練習すること。											

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門科目 基礎作業療法学		基礎作業学実習Ⅰ (和紙工芸、七宝、木工)			○世良 龍哉 永井 貴士 竹中 孝博		教授 准教授 准教授
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 前学期	1単位 (30時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法で用いられる手工芸などの「作業」について、治療的に活用できるように、様々な視点から分析し考察する。そのために、作業分析の実施、身体的効果・精神的効果、作業の段階付け等を考察する。</p> <p><学修の到達目標> ①作業分析が活用できる ②レポート・発表資料が適切に作成できる ③作業における治療的な活用を考えることができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に基づいて資料を配布するので、事前にその内容を確認すること。 <必要時間>各回15分程度</p>				<p><内容> レポート課題がある。授業で体験した事を内省し整理しておくこと。 <必要時間>各回15分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 作業分析とは（世良）・・・① 2. 作業分析（和紙工芸）①（世良）・・・① 3. 作業分析（和紙工芸）②（世良）・・・① 4. 作業実施 和紙工芸①（竹中・世良）・・・① 5. 作業実施 和紙工芸②（竹中・世良）・・・① 6. 作業体験の振り返り①（竹中・世良）・・・①② 7. 発表資料の作成（竹中）・・・①②③ 8. 発表（竹中）・・・①②③ 9. 作業の治療的応用①（永井）・・・③ 10. 作業の治療的応用②（永井）・・・③ 11. 作業の治療的応用③（永井）・・・③ 12. 作業の治療的応用④（永井）・・・③ 13. 作業の治療的応用⑤（永井）・・・③ 14. 作業の治療的応用⑥（永井）・・・③ 15. 作業の治療的応用⑦（永井）・・・③ 							
評価基準・評価方法							
評価方法は、受講態度（10%）、課題（90%）で評価し、総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
吉川ひろみ 「作業」ってなんだろう第2版 医歯薬出版 配布資料				作業療法学全書 基礎作業学 協同医書出版			
備考							
作業についての知識や理解を深めると共に、自分の作業体験を振り返り内省し考察できるようにすること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎作業療法学		基礎作業学実習Ⅱ (陶芸、革細工、手芸)			○加藤 清人 市田 博子 浅野 莉沙、他	教授 助教 助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	実習
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 作業療法で治療的に用いられる手工芸等の基本的技法（基礎作業学実習Ⅰで習得）を実際の対象者に提供していくなかで応用的実践を習得する。作業を治療的手段として用いるために、活動分析の実施、身体的効果・精神的効果、作業の段階付け等を考察し、対象者に提供する過程を学ぶ。そして、これらの内容を踏まえたうえで、岐阜市黒野末広地区の地域在住高齢者に対して、作業活動の立案・介入実線を行なうことで知識・技術の修得を図る。地域の高齢者との関わりは、健康高齢者の健康行動を知る機会となり将来障害者を自宅（地域）復帰に繋げるための一助となること、高齢者の外出の機会を増やす機会になるなど期待できる。</p> <p><学修の到達目標> ①手工芸等の基本的・応用的知識・技法を基に計画を立てることができる ②活動分析が活用できる ③作業における治療的な応用を説明できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画に基づいて資料を配布するので、事前にその内容を確認すること。 <必要時間>各回15分</p>				<p><内容> 課題がある。授業で体験した事を内省し整理しておくこと。 <必要時間>各回15分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 一般高齢者の特徴 3. 作業活動の抽出① 4. 作業活動の分析（身体的、精神的効果）① 5. 作業活動計画（作成の仕方）① 6. 作業活動実践（活動計画）(1) ① 7. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(1) ②③ 8. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(2) ②③ 9. 作業活動実践（活動計画）(2) ① 10. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(3) ②③ 11. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(4) ②③ 12. 作業活動実践（活動計画）(3) ① 13. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(5) ②③ 14. 作業活動実践（活動介入：末広地区）(6) ②③ 15. 活動報告会 							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
受講態度（10%）、グループワーク（30%）、課題（60%）で評価し、総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
配布資料				作業療法学全書 基礎作業学 協同医書出版			
備 考							
作品完成のための技術習得をするとともに、自分の体験を振り返り、内省し考察できるようにすること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名													
専門科目		卒業研究			○加藤清人、河村章史、永井貴士、世良龍哉、竹中孝博、市田博子、浅野莉沙	-													
基礎作業療法学																			
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態												
		理学	作業	視機能															
必修			○		3年次 前学期	2単位 (30時間)	演習												
選択																			
授業概要・学修の到達目標																			
<p><概要> 卒業研究では、研究に関わる一連の過程（研究テーマ、研究仮説の設定、先行研究資料・文献からの情報収集、実験および調査の実施、データ解析、その結果の整理と解釈・考察）を通じて探究心と理論的思考を深める。学生にとって卒業後の臨床を含めた研究において出発点となる重要な科目である。</p> <p><学修の到達目標> ①研究計画書を作成できる ②実験および調査を実施し、結果を整理できる ③論文作成を行い、研究成果をまとめることができる</p>																			
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。														
事前学習				事後学習															
<p><内容> 指導教員の指示に従い、事前に必要となる課題を進めていくこと。</p> <p><必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> 論文の作成までの流れのなかで、吟味・推敲の思考や文章の表現力など深められるよう日頃から文献等を読む習慣を身につけること。</p> <p><必要時間>課題の内容により変動</p>															
授業計画																			
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 60%; vertical-align: top;"> 1. 研究分野を考える 2. 文献の検索・収集 3. 研究テーマの決定 4. 研究仮説の設定 5. 研究計画書の作成 6. 研究説明書・同意書作成 7. 予備実験 8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3) 11. 結果の処理 12. 結果の整理 13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3) </td> <td style="width: 5%; text-align: center; vertical-align: middle;">} </td> <td style="width: 10%; text-align: center; vertical-align: middle;">目標①</td> <td style="width: 25%;"></td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3) </td> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">}</td> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">目標②</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3) </td> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">}</td> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">目標③</td> <td></td> </tr> </table>								1. 研究分野を考える 2. 文献の検索・収集 3. 研究テーマの決定 4. 研究仮説の設定 5. 研究計画書の作成 6. 研究説明書・同意書作成 7. 予備実験 8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3) 11. 結果の処理 12. 結果の整理 13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3)	}	目標①		8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3)	}	目標②		13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3)	}	目標③	
1. 研究分野を考える 2. 文献の検索・収集 3. 研究テーマの決定 4. 研究仮説の設定 5. 研究計画書の作成 6. 研究説明書・同意書作成 7. 予備実験 8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3) 11. 結果の処理 12. 結果の整理 13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3)	}	目標①																	
8. 実験・調査の実施 (1) 9. 実験・調査の実施 (2) 10. 実験・調査の実施 (3)	}	目標②																	
13. 論文執筆 (1) 14. 論文執筆 (2) 15. 論文執筆 (3)	}	目標③																	
評価基準・評価方法																			
卒業論文の完成。研究計画～論文執筆における取組状況など総合的に評価する。 卒業論文執筆に至るまでの取組状況（30%）、卒業論文（70%）																			
使用教科書				参考図書															
山田孝、他：標準作業療法学専門分野作業療法研究法 第2版、医学書院				必要に応じ資料を配布する。															
備考																			
担当教員の指導のもと、計画的に取り組むこと。 主体的に取り組むよう心がけること。																			

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業療法評価学		作業療法評価学概論			○竹中 孝博 世良 龍哉	准教授 教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法士に必要な種々の検査・測定の中でも、生理機能、バイタルサイン、形態測定、面接技法、観察、コミュニケーションなど基本的な知識、技術を習得することを目的とする。</p> <p><学修の到達目標> ①作業療法を行う上での必要な評価を理解し実践できる知識と能力を獲得する ②カルテの記載方法を理解し、正しく記入ができる ③コミュニケーションに必要な視点が理解できる ④面接技法が理解できる ⑤観察技法が理解できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業前にテキストの該当する内容を読み、分からない語句については調べ学習をする。 <必要時間>各回20分以上</p>				<p><内容> 授業の振り返りを必ず行い、分からないことは次の授業で質問できるようにする。 <必要時間>各回20分以上</p>			
授業計画							
1. 評価学総論1 ① (竹中) 2. 評価学総論2 ① (竹中) 3. 生理機能1 ① (竹中) 4. 生理機能2 ① (竹中) 5. 形態測定1 ① (竹中) 6. 形態測定2 ① (竹中) 7. 記録・報告の意義と特徴 ② (竹中) 8. 効果判定について ①② (竹中) 9. コミュニケーション (1) ③ (世良) 10. コミュニケーション (2) ③ (世良) 11. 面接 (1) ④ (世良) 12. 面接 (2) ④ (世良) 13. 観察 (1) ⑤ (世良) 14. 観察 (2) ⑤ (世良) 15. 観察 (3) ⑤ (世良) 定期試験							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（70%）、課題（30%）をもって総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
・標準作業療法学 専門分野 作業療法評価学 第3版 医学書院 2017				必要に応じ資料を配布する。			
備考							
講義によって使用する教室が異なる。適時、資料を配布する。 授業内容が分からないときはいつでも質問を受け付ける。 課題については適時フィードバックを行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業療法評価学		作業療法評価学Ⅰ（身体機能）			○浅野莉沙、加藤清人 竹中孝博、市田博子 柳生浩平	助教、教授 准教授、助教 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法の中でも主に身体機能に対する評価方法について、基礎知識と検査・測定方法を学ぶ。それぞれの検査・測定をどのような場合に用いるのか、どのように行うのかを学び、評価の意義や目的について理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①それぞれの評価項目に対し意義や目的を説明できる ②様々な疾患に対してどのような評価が必要なのか説明できる ③評価結果を解釈できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・徒手筋力検査やハンドセラピー、関節可動域検査では、関節の構造や筋の基礎知識について復習しておく ・筋緊張、反射、感覚、協調性、バランスについては、神経系の解剖・生理学を復習しておく <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> ・各評価項目の意義や目的について復習する ・どのような場合に有効な評価なのかディスカッションする ・症例を想定した実技練習を行う <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ハンドセラピーの病態評価（竹中） 2. ハンドセラピーの機能障害評価（竹中） 3. 関節可動域（ROM）：評価の概要と意義・目的、上肢（市田） 4. 関節可動域（ROM）：下肢（市田） 5. 関節可動域（ROM）：体幹、頸部（市田） 6. 筋緊張（柳生） 7. 反射（腱反射、病的反射）（柳生） 8. 徒手筋力検査法（MMT）：評価の概要と意義・目的（浅野） 9. 徒手筋力検査法（MMT）：上肢（浅野） 10. 徒手筋力検査法（MMT）：下肢、体幹（浅野） 11. 協調性（柳生） 12. バランス（柳生） 13. 感覚検査（柳生） 14. 上肢機能（STEF・MFT）（柳生） 15. 症例に基づいた評価の選択と実施（加藤） 定期試験（筆記試験） <p style="text-align: right;">（以下全て目標①②③に該当）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価方法：中間試験（50%）、期末試験（50%） 評価基準：中間、期末試験ともに指定した範囲の筆記試験を行う</p>							
使用教科書				参考図書			
『標準作業療法学 作業療法評価学』第3版、医学書院 『ベッドサイドの神経の診かた』改訂18版、南山堂				『新・徒手筋力検査法』第9版、協同医書出版			
備考							
動きやすい服装、髪を束ねる、爪を切る、装飾品を外す等、実技ができるように準備すること。質問等は講義中に随時受け付ける。また、オフィスアワーなど講義以外でも対応する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業療法評価学		作業療法評価学Ⅱ (精神機能・活動・環境)			○河村章史、他	教授、他	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 認知機能、興味・関心、バランス、上肢機能、感覚等に対する基本事項及びその評価方法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①認知機能評価の基本的知識を理解し検査の実施ができる。 ②修得した評価を臨床を模した場面で実施できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 次回講義予定に該当する部分の教科書を熟読する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 作業療法評価学演習Ⅱの対応する技能と擦り合せを行う。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 認知機能に関わる脳解剖 (1) (河村)・・・① 2. 認知機能に関わる脳解剖 (2) (河村)・・・① 3. 認知機能に関わる脳生理 (1) (河村)・・・① 4. 認知機能に関わる脳生理 (2) (河村)・・・① 5. 認知機能障害を引き起こす疾患 (1) (河村)・・・① 6. 認知機能障害を引き起こす疾患 (2) (河村)・・・① 7. 作業療法における認知機能障害の評価 (河村)・・・① 8. 注意障害とその評価 (1) (河村)・・・① 9. 注意障害とその評価 (2) (河村)・・・① 10. 臨床場面における評価の実施 (1) (全OT教員)・・・② 11. 臨床場面における評価の実施 (2) (全OT教員)・・・② 12. 臨床場面における評価の実施 (3) (全OT教員)・・・② 13. 臨床場面における評価の実施 (4) (全OT教員)・・・② 14. 臨床場面における評価の実施 (5) (全OT教員)・・・② 15. 臨床場面における評価の実施 (6) (全OT教員)・・・② 							
評価基準・評価方法							
課題 (60%)、小テスト (40%) により判定する。							
使用教科書				参考図書			
渚雅子 他：作業療法全書 第8巻 高次脳機能障害 改訂第3版 協同医書出版社 前田真治：脳画像 第1版 医学書院				適宜資料を配布する。			
備 考							
講義内で質問の時間を設ける。また講義外でも適宜メール等で質問を受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業療法評価学		作業療法評価学演習Ⅰ（身体機能）			○浅野莉沙、加藤清人 竹中孝博、市田博子 柳生浩平	助教、教授 准教授、助教 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法の中でも主に身体機能に対する評価方法について、基礎知識と検査・測定方法を学ぶ。評価の意義や目的を考慮しながら、各検査・測定の技術を修得する。この演習で扱う評価は、臨床実習で実際に対象者に実施するため、相手に配慮しながら正確かつ安全に評価ができることを目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①評価の意義・目的を説明できる ②正確に検査・測定ができる ③対象者に配慮した安全な検査・測定ができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・徒手筋力検査やハンドセラピー、関節可動域検査では、関節の構造や筋の起始・停止・神経・作用を復習しておく ・反射、協調性、筋緊張については、神経系の解剖・生理学を復習しておく <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> ・各評価項目の意義や目的について復習する ・どのような場合に有効な評価なのかディスカッションする ・症例を想定した実技練習を行う <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ハンドセラピーの病態評価（竹中） 2. ハンドセラピーの機能障害評価（竹中） 3. 関節可動域（ROM）：評価の概要と意義・目的、上肢（市田） 4. 関節可動域（ROM）：下肢（市田） 5. 関節可動域（ROM）：体幹、頸部（市田） 6. 筋緊張（柳生） 7. 反射（腱反射、病的反射）（柳生） 8. 徒手筋力検査法（MMT）：評価の概要と意義・目的（浅野） 9. 徒手筋力検査法（MMT）：上肢（浅野） 10. 徒手筋力検査法（MMT）：下肢、体幹（浅野） 11. 協調性（柳生） 12. バランス（柳生） 13. 感覚検査（柳生） 14. 上肢機能（STEF・MFT）（柳生） 15. 症例に基づいた評価の選択と実施（加藤） 定期試験（実技試験） <p style="text-align: right;">（以下全て目標①②③に該当）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価方法：期末試験（50%）、中間試験（50%） 評価基準：中間、期末ともに指定した範囲の実技試験を行う</p>							
使用教科書				参考図書			
『標準作業療法学 作業療法評価学』第3版、医学書院 『ベッドサイドの神経の診かた』改訂18版、南山堂				『新・徒手筋力検査法』第9版、協同医書出版			
備考							
動きやすい服装、髪を束ねる、爪を切る、装飾品を外す等、実技ができるように準備すること 質問等は講義中に随時受け付ける。また、オフィスアワーなど講義以外でも対応する							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業療法評価学		作業療法評価学演習Ⅱ (精神機能・活動・環境)			○河村章史、中村恵一、 大下伸子 他	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 認知機能をどのように評価するかを学ぶ。作業療法評価学Ⅱで学習した評価・検査について、臨床を模した場面で実際に行うことで知識に裏付けされた技術を修得する。</p> <p><学修の到達目標> ①認知機能評価を適正に実施できる、②切断の評価を適正に実施できる、 ③修得した評価を臨床を模した場面で実施できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 次回講義予定に該当する部分の教科書を熟読する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 作業療法評価学Ⅱの対応する技能と擦り合せを行う。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高次脳機能検査（CAT：標準注意検査）（河村）・・・① 2. 高次脳機能検査（WMS-R；ウェクスラー記憶検査、RBMT；リバーミード行動記憶検査）（河村）・・・① 3. 高次脳機能検査（BADS；遂行機能障害症候群の行動評価、FAB；前頭葉評価バッテリー）（河村）・・・① 4. 高次脳機能検査（BIT；行動生無視検査、WAB失語症検査の「行為」検査）（河村）・・・① 5. 高次脳機能検査（その他の検査）（河村）・・・① 6. 高次脳機能検査（評価の解釈、検査の組み合わせ方）（河村）・・・① 7. 上肢切断と義手（1）（中村）・・・② 8. 上肢切断と義手（2）（中村）・・・② 9. 上肢切断と義手（3）（中村）・・・② 10. 箱作り法の体験（1）（大下）・・・① 11. 箱作り法の体験（2）（大下）・・・① 12. 臨床場面における評価の実施（1）（全OT教員）・・・③ 13. 臨床場面における評価の実施（2）（全OT教員）・・・③ 14. 臨床場面における評価の実施（3）（全OT教員）・・・③ 15. 臨床場面における評価の実施（4）（全OT教員）・・・③ 							
評価基準・評価方法							
課題（60%）、小テスト（40%）により判定する。							
使用教科書				参考図書			
渚雅子 他：作業療法全書 第8巻 高次脳機能障害 改訂第3版 協同医書出版社 前田真治：脳画像 第1版 医学書院				適宜資料を配布する。			
備考							
演習内で質問の時間を設ける。また演習外でも適宜メール等で質問を受け付ける。 内容により実技ができる動きやすい服装を準備すること（事前に掲示ないし連絡する）							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		作業療法治療技術理論			○加藤清人、河村章史、永井貴士、竹中孝博、世良龍哉、市田博子、浅野莉沙	-	
作業治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法に必要な理論・評価・介入について、各教員が専門的に取り組んでいる分野の紹介をする。本講義は2年前期の選択授業、3年前期の卒業研究につながる位置づけとなっているため、本講義で得た知識を元にして在学中に自身が追求するテーマを得る。また、医療従事者に求められるコミュニケーション技法について理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①作業療法のサブカテゴリー領域の理論、研究の概略を知ることができる ②在学中に自身が追求するテーマを発見できる ③医療従事者に求められるコミュニケーション技術について習得できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業開始前に各教員から適宜指示を出す。</p> <p><必要時間>課題内容により変動</p>				<p><内容> 講義の全体像を俯瞰し、卒後の研究活動に活かす。また、興味・関心のある領域については、担当教員と相談しながらレビューとしてまとめ、卒業研究につなげる。</p> <p><必要時間>課題内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、作業療法の理論とは（河村） 2. 認知症予防に対する作業療法理論（加藤） 3. 神経系疾患に対する作業療法理論（河村） 4. 作業療法と作業行動理論（永井） 5. 精神障害に対する作業療法理論（世良） 6. 整形外科疾患に対する作業療法理論（竹中） 7. 作業科学と作業療法理論（市田） 8. 環境調整に関する作業療法理論（浅野） 9. OSCEのオリエンテーション 10. OSCEの演習（1） 11. OSCEの演習（2） 12. OSCEの実施（1） 13. OSCEの実施（2） 14. OSCEの実施（3） 15. OSCEのフィードバック <p>定期試験 筆記</p>							
				目標①②			
				目標③			
評価基準・評価方法							
期末試験（40%）、実技試験（40%）授業への取り組み姿勢（20%）で評価する。							
使用教科書				参考図書			
必要に応じ資料を配布する。				杉原素子編：作業療法学全書〔改訂第3版〕第1巻 作業療法概論（協同医書出版社）			
備考							
質問は適宜受け付ける。また講義中も適宜質問の時間を取る。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名								
専門科目 作業治療学		認知症予防論			加藤 清人	教授								
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態							
		理学	作業	視機能										
必修					2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義							
選択			○											
授業概要・学修の到達目標														
<p><概要> 認知症高齢者の増加が見込まれている高齢社会の現状を踏まえながら、認知症高齢者の健康増進に向けた介護予防支援について論じていく。一次予防（健康増進）、二次予防（早期発見・早期介入）を中心に、健康の増進に好ましいとされる行動と環境、その変容を促すための介入、認知症発症リスクと心理社会的側面などの関連について理解することを目指す。また、3年次科目の卒業研究にむけて、研究課題の抽出やデータ収集など研究方法についても理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①一次予防や二次予防について説明することができる。②健康増進を図るための行動と環境について知ることができる ③心理社会的側面を踏まえた作業療法の介入について理解を深めることができる ④卒業研究で必要となるデータ収集方法や介入（実験）をすることで研究力を高めることができる</p>														
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。									
事前学習				事後学習										
<p><内容> 毎回、講義終了時に次回の資料を配付しますので、事前に学習しておくこと。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 講義の際に、重点項目を伝えますのでその箇所を中心に学習しておくこと。 <必要時間>各回30分程度</p>										
授業計画														
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. オリエンテーション（学習の進め方） 2. わが国における高齢社会の現状 3. 介護予防事業の概要 4. 二次予防事業（特定高齢者施策）の概要 5. 一次予防事業（一般高齢者施策）の概要 6. 認知症発症に関わるリスク因子（1） 7. 認知症発症に関わるリスク因子（2） 8. 軽度認知障害について（定義・生活障害・評価） 9. 二次予防対象者に対する作業療法の介入 10. ソーシャルキャピタルとは 11. 健康を阻害する地域環境要因 12. 一次予防対象者に対する作業療法介入の可能性 13. 作業療法研究にむけての調査 14. 作業療法介入を考える 15. 今後期待される（求められる）作業療法の取り組み </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標①</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標②</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標③④</td> </tr> </table>								1. オリエンテーション（学習の進め方） 2. わが国における高齢社会の現状 3. 介護予防事業の概要 4. 二次予防事業（特定高齢者施策）の概要 5. 一次予防事業（一般高齢者施策）の概要 6. 認知症発症に関わるリスク因子（1） 7. 認知症発症に関わるリスク因子（2） 8. 軽度認知障害について（定義・生活障害・評価） 9. 二次予防対象者に対する作業療法の介入 10. ソーシャルキャピタルとは 11. 健康を阻害する地域環境要因 12. 一次予防対象者に対する作業療法介入の可能性 13. 作業療法研究にむけての調査 14. 作業療法介入を考える 15. 今後期待される（求められる）作業療法の取り組み	}	目標①	}	目標②	}	目標③④
1. オリエンテーション（学習の進め方） 2. わが国における高齢社会の現状 3. 介護予防事業の概要 4. 二次予防事業（特定高齢者施策）の概要 5. 一次予防事業（一般高齢者施策）の概要 6. 認知症発症に関わるリスク因子（1） 7. 認知症発症に関わるリスク因子（2） 8. 軽度認知障害について（定義・生活障害・評価） 9. 二次予防対象者に対する作業療法の介入 10. ソーシャルキャピタルとは 11. 健康を阻害する地域環境要因 12. 一次予防対象者に対する作業療法介入の可能性 13. 作業療法研究にむけての調査 14. 作業療法介入を考える 15. 今後期待される（求められる）作業療法の取り組み	}	目標①	}	目標②	}	目標③④								
評価基準・評価方法														
プレゼンテーション（30%）、レポート（50%）、授業の取り組み状況（20%）で評価する。														
使用教科書				参考図書										
資料を配付する。				○「医療クライシス」を超えて：イギリスと日本の医療・介護のゆくえ（医学書院） ○認知症の作業療法（医歯薬出版株式会社）										
備考														
オフィスアワー：講義中に随時質問を受け付ける。また、講義後でも対応する。														

科目区分		授業科目名			担当教員	職名							
専門科目		作業行動理論			永井 貴士	准教授							
作業治療学													
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態						
		理学	作業	視機能									
必修					2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義						
選択			○										
授業概要・学修の到達目標													
<p><概要> 基礎作業学で実施した「人間作業モデル」を基に、作業療法理論を学び、理解を深める。さらに、臨床実践につなげられる臨床力を高める。</p> <p><学修の到達目標> ①人間作業モデルに基づいた評価が理解できる。 ②作業に基づいた実践の考え方を主体的に活用できる。</p>													
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。								
事前学習				事後学習									
<p><内容> 1年次のカリキュラムである「基礎作業学」を授業前に復習しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 学んだ評価を実際に他者に用いて、活用できるように練習しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>									
授業計画													
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> 1. 作業行動理論の歴史と人間作業モデルについて 2. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の概要 3. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の実施 4. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の解釈 5. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の概要 6. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の実施 7. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の解釈 8. 事例検討その① 9. 事例検討その② 10. 事例検討その③ 11. 事例検討その④ 12. 事例検討のグループワークその① 13. 事例検討のグループワークその② 14. 人間作業モデルの研究論文の紹介 15. 人間作業モデルの実践の紹介 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">（目標①の達成）</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">（目標②の達成）</td> </tr> </table>								<ul style="list-style-type: none"> 1. 作業行動理論の歴史と人間作業モデルについて 2. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の概要 3. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の実施 4. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の解釈 5. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の概要 6. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の実施 7. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の解釈 8. 事例検討その① 9. 事例検討その② 10. 事例検討その③ 11. 事例検討その④ 12. 事例検討のグループワークその① 13. 事例検討のグループワークその② 14. 人間作業モデルの研究論文の紹介 15. 人間作業モデルの実践の紹介 	}	（目標①の達成）	<ul style="list-style-type: none"> 定期試験 	}	（目標②の達成）
<ul style="list-style-type: none"> 1. 作業行動理論の歴史と人間作業モデルについて 2. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の概要 3. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の実施 4. 作業に関する自己評価（OSA-Ⅱ）の解釈 5. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の概要 6. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の実施 7. 人間作業モデルスクリーニングツール（MOHOST）の解釈 8. 事例検討その① 9. 事例検討その② 10. 事例検討その③ 11. 事例検討その④ 12. 事例検討のグループワークその① 13. 事例検討のグループワークその② 14. 人間作業モデルの研究論文の紹介 15. 人間作業モデルの実践の紹介 	}	（目標①の達成）											
<ul style="list-style-type: none"> 定期試験 	}	（目標②の達成）											
評価基準・評価方法													
<p>課題およびグループ活動への参加状況、課題への取組状況を加味して評定する。 課題レポート（100%）をもって履修の可否を決定する。</p>													
使用教科書				参考図書									
山田孝編著：事例でわかる人間作業モデル 協同医書 出版社 2015年				必要に応じて、資料を配布する。									
備考													
事例を通した学びの場では、卒業後の自分の将来像を想定して、取り組むことを期待する。													

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		精神障害治療論			世良 龍哉	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択			○				
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法の対象となる精神障害について、障害構造論や回復段階に応じたリハビリテーションを理解し、精神の病とそれに伴う生活障害およびそれらに対する援助方法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①精神障害を抱えることでの生活上の困難さを理解できる ②精神障害領域で用いられる治療・リハビリを理解できる ③精神障害領域で用いられる、概念を理解できる ④自分の関心のある領域に気づき、研究計画が作成できる ⑤卒業研究で必要となるデータ収集方法や介入（実験）をすることで研究力の向上できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 特に「精神医学」、「精神障害学Ⅰ」における精神障害の疾患及び症状、障害者の置かれている現状を理解しておく。 <必要時間>各回15分程度</p>				<p><内容> 「卒業研究」を行う基盤となるため、本講義で得た知識を元に関連した論文等を読むこと。 <必要時間>各回15分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 精神障害に対するリハビリテーション (1) ① 3. 精神障害に対するリハビリテーション (2) ① 4. 精神障害と作業療法 (1) ② 5. 精神障害と作業療法 (2) ② 6. 精神障害と作業療法 (3) ② 7. 生きる力、SOC (1) ③ 8. 生きる力、SOC (2) ③ 9. 生きる力、SOC (3) ③ 10. 精神障害領域で用いられる概念 (1) ③ 11. 精神障害領域で用いられる概念 (2) ③ 12. 精神障害領域で用いられる概念 (3) ③ 13. 作業療法研究にむけての調査 ⑤ 14. 作業療法介入を考える ⑤ 15. 精神障害領域で行われる研究 ④ 							
評価基準・評価方法							
評価方法は、課題（100％）をもって判断する。							
使用教科書				参考図書			
山根寛：精神障害と作業療法 新版 三輪書店 堀田英樹：統合失調症の作業療法の進め方 中山書店				作業療法学全書第5巻 精神障害 第3版 協同医書出版			
備考							
授業中に随時質問を受け付ける。また、講義前後に対応する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名						
専門科目 作業治療学		ニューロリハビリテーション論			河村 章史	教授						
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態					
		理学	作業	視機能								
必修 選択			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義					
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標												
<p><概要> 主に運動麻痺をテーマとして、それに関連する文献を精読し、得られた知識を元に実験的に運動学習介入を実施し、その結果を解析し、効果検証をする。主にディスカッション形式で進める。 また、3年次科目の卒業研究にむけて、研究課題の抽出やデータ収集など研究方法についても理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ① Science based な思考を養い、それに基づいて文献の検索・読解ができる。 ② 自身の考えを論理的・科学的に展開し、卒業論文作成に向けたデータ収集・処理方法を構築できる。</p>												
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。							
事前学習				事後学習								
<p><内容> 「解剖学Ⅲ」「神経内科学」「研究方法論」の内容を復習すること。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 脳神経科学領域の文献を自律的に検索・読解する。 <必要時間>各回30分</p>								
授 業 計 画												
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> 1. ニューロリハビリテーションとは何か 2. 文献の検索 3. 文献レビュー（和文） 4. 文献レビュー（英文） 5. 運動麻痺に関する最新の研究 6. 運動学習に関する介入研究 7. 脳機能計測機器の概要 8. fNIRS の基礎 9. fNIRS の操作 10. fNIRS のデータ解析（1） 11. fNIRS のデータ解析（2） 12. 実験デザインの組み方（1） 13. 実験デザインの組み方（2） 14. fNIRS によるデータ収集 15. 統計処理ソフト R によるデータ解析 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> </table>								<ul style="list-style-type: none"> 1. ニューロリハビリテーションとは何か 2. 文献の検索 3. 文献レビュー（和文） 4. 文献レビュー（英文） 5. 運動麻痺に関する最新の研究 6. 運動学習に関する介入研究 7. 脳機能計測機器の概要 8. fNIRS の基礎 9. fNIRS の操作 10. fNIRS のデータ解析（1） 11. fNIRS のデータ解析（2） 12. 実験デザインの組み方（1） 13. 実験デザインの組み方（2） 14. fNIRS によるデータ収集 15. 統計処理ソフト R によるデータ解析 	}	到達目標①	}	到達目標②
<ul style="list-style-type: none"> 1. ニューロリハビリテーションとは何か 2. 文献の検索 3. 文献レビュー（和文） 4. 文献レビュー（英文） 5. 運動麻痺に関する最新の研究 6. 運動学習に関する介入研究 7. 脳機能計測機器の概要 8. fNIRS の基礎 9. fNIRS の操作 10. fNIRS のデータ解析（1） 11. fNIRS のデータ解析（2） 12. 実験デザインの組み方（1） 13. 実験デザインの組み方（2） 14. fNIRS によるデータ収集 15. 統計処理ソフト R によるデータ解析 	}	到達目標①	}	到達目標②								
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法												
課題（70%）、ディスカッションへの貢献度（10%）、確認小テスト（20%）で評価・判定する。												
使用教科書				参考図書								
適宜指示する（主に図書館・インターネット上から入手できる論文）				適宜紹介する。								
備 考												
授業内で質問の時間を設ける。また授業外でも適宜メール等で質問を受け付ける。 E-mail : a.koumura@heisei-iryuu.ac.jp												

科目区分		授業科目名			担当教員	職名										
専門科目 作業治療学		整形外科系障害治療論			竹中 孝博	准教授										
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態									
		理学	作業	視機能												
必修					2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義									
選択			○													
授業概要・学修の到達目標																
<p><概要> 整形外科系障害の基礎から最新知見、作業療法応用などについて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①各疾患に対する特徴や病態が説明でき、介入方法についてのディスカッションが出来る。 ②心理社会的側面を踏まえた作業療法の介入について理解し説明ができる。 ③卒業研究で必要となるデータ収集方法や介入（実験）をすることで研究力の向上が出来る。</p>																
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。											
事前学習				事後学習												
<p><内容> 授業内容を理解しやすくするため、解剖学や運動学などを復習しておくこと。適時指示する。 <必要時間>各回20分以上</p>				<p><内容> 授業時に配布するプリントの理解、事前学習時の疑問点の解決 <必要時間>各回20分以上</p>												
授業計画																
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. スポーツ外傷と ADL 2. 筋萎縮の定義と概念 3. 筋萎縮に対する治療トピックス 4. 肩関節周囲炎の作業療法 5. 痛みの基礎 6. 痛みに対する介入 7. 脊髄の興奮性変化 8. 上肢骨折の手術 9. 肩・肘骨折に対する作業療法研究 10. 橈骨遠位端骨折の作業療法研究 11. 運動イメージの応用 12. 作業療法研究にむけての調査 13. 作業療法介入を考える 14. グループディスカッション 15. グループディスカッション 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②③</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②③</td> </tr> </table>								1. スポーツ外傷と ADL 2. 筋萎縮の定義と概念 3. 筋萎縮に対する治療トピックス 4. 肩関節周囲炎の作業療法 5. 痛みの基礎 6. 痛みに対する介入 7. 脊髄の興奮性変化 8. 上肢骨折の手術 9. 肩・肘骨折に対する作業療法研究 10. 橈骨遠位端骨折の作業療法研究 11. 運動イメージの応用 12. 作業療法研究にむけての調査 13. 作業療法介入を考える 14. グループディスカッション 15. グループディスカッション 定期試験	}	到達目標①		}	到達目標②③		}	到達目標①②③
1. スポーツ外傷と ADL 2. 筋萎縮の定義と概念 3. 筋萎縮に対する治療トピックス 4. 肩関節周囲炎の作業療法 5. 痛みの基礎 6. 痛みに対する介入 7. 脊髄の興奮性変化 8. 上肢骨折の手術 9. 肩・肘骨折に対する作業療法研究 10. 橈骨遠位端骨折の作業療法研究 11. 運動イメージの応用 12. 作業療法研究にむけての調査 13. 作業療法介入を考える 14. グループディスカッション 15. グループディスカッション 定期試験	}	到達目標①														
	}	到達目標②③														
	}	到達目標①②③														
評価基準・評価方法																
口頭試問（80%）、課題の取り組み状況（20%）で評価する。																
使用教科書				参考図書												
配布資料				「整形外科運動療法ナビゲーション 上肢」整形外科リハビリテーション学会 MEDICAL VIEW、2014												
備考																
整形外科疾患に対する作業療法の知識と評価・治療の流れについて学ぶ。臨床において大切な教科であるが、短時間で非常に広い学習をするため、分からないときはいつでも質問を受け付ける。課題については適時フィードバックを行いながら進行状況を確認する。																

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																																
専門科目 作業治療学		日常生活・環境アセスメント論			○市田 博子 浅野 莉沙	助教																																
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																															
		理学	作業	視機能																																		
必修					2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義																															
選択			○																																			
授業概要・学修の到達目標																																						
<p><概要> 様々な状態にある対象者の日常生活活動について、作業や環境の側面より捉えられるよう理論や評価について学び、理解を深める。人の行う活動と周囲の環境（道具を含む）の関係性、人と作業の関係性について考察する。</p> <p><学修の到達目標> ①人、環境、作業について説明することができる ②人、環境、作業を関連づけ、必要な評価を説明することができる。 ③モデルケースに対して、作業療法介入目標とプログラムの立案ができる。</p>																																						
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																																	
事前学習				事後学習																																		
<p><内容> 次回行う内容について書籍や文献などを通して学習する。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 行った内容について再度復習し、考察を深める。 <必要時間>各回30分程度</p>																																		
授業計画																																						
<table border="0"> <tr> <td>1. オリエンテーション（市田、浅野）</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標①</td> </tr> <tr> <td>2. 作業と環境の関連性①（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>3. 作業と環境の関連性②（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>4. 人の評価①（市田、浅野）</td> <td rowspan="6">}</td> <td rowspan="6">到達目標②</td> </tr> <tr> <td>5. 人の評価②（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>6. 作業の評価①（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>7. 作業の評価②（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>8. 環境の評価①（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>9. 環境の評価②（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>10. 作業療法介入の流れ（市田、浅野）</td> <td rowspan="2">}</td> <td rowspan="2">到達目標②、③</td> </tr> <tr> <td>11. 作業療法の目標設定①（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>12. 作業療法の目標設定②（市田、浅野）</td> <td rowspan="4">}</td> <td rowspan="4">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>13. 作業療法プログラムの立案①（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>14. 作業療法プログラムの立案②（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td>15. デイスカッション（市田、浅野）</td> </tr> <tr> <td colspan="8">定期試験</td> </tr> </table>								1. オリエンテーション（市田、浅野）	}	到達目標①	2. 作業と環境の関連性①（市田、浅野）	3. 作業と環境の関連性②（市田、浅野）	4. 人の評価①（市田、浅野）	}	到達目標②	5. 人の評価②（市田、浅野）	6. 作業の評価①（市田、浅野）	7. 作業の評価②（市田、浅野）	8. 環境の評価①（市田、浅野）	9. 環境の評価②（市田、浅野）	10. 作業療法介入の流れ（市田、浅野）	}	到達目標②、③	11. 作業療法の目標設定①（市田、浅野）	12. 作業療法の目標設定②（市田、浅野）	}	到達目標③	13. 作業療法プログラムの立案①（市田、浅野）	14. 作業療法プログラムの立案②（市田、浅野）	15. デイスカッション（市田、浅野）	定期試験							
1. オリエンテーション（市田、浅野）	}	到達目標①																																				
2. 作業と環境の関連性①（市田、浅野）																																						
3. 作業と環境の関連性②（市田、浅野）																																						
4. 人の評価①（市田、浅野）	}	到達目標②																																				
5. 人の評価②（市田、浅野）																																						
6. 作業の評価①（市田、浅野）																																						
7. 作業の評価②（市田、浅野）																																						
8. 環境の評価①（市田、浅野）																																						
9. 環境の評価②（市田、浅野）																																						
10. 作業療法介入の流れ（市田、浅野）	}	到達目標②、③																																				
11. 作業療法の目標設定①（市田、浅野）																																						
12. 作業療法の目標設定②（市田、浅野）	}	到達目標③																																				
13. 作業療法プログラムの立案①（市田、浅野）																																						
14. 作業療法プログラムの立案②（市田、浅野）																																						
15. デイスカッション（市田、浅野）																																						
定期試験																																						
評価基準・評価方法																																						
<p>評価方法：時間外レポート（40%）、発表（30%）、確認テスト（30%）、とする 評価基準：理論の十分な理解とその活用を重視し、発表とレポート内容にて評価を行う。</p>																																						
使用教科書				参考図書																																		
吉川ひろみ：「作業」って何だろう 第2版、医歯薬出版、2017				吉川ひろみ：COPM・AMPS スターティングガイド、医学書院、2011 籾脇健司：高齢者のその人らしさを捉える作業療法、文光堂、2015																																		
備考																																						
オフィスアワー：火曜日14～17時、その他講義中に質問の時間を取り講義内または次回講義前に回答する。必要な資料や参考資料がある場合、講義の際に紹介・資料配布する。																																						

科目区分		授業科目名			担当教員	職名									
専門科目 作業治療学		老年期障害学			加藤 清人	教授									
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態								
		理学	作業	視機能											
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義								
選択															
授業概要・学修の到達目標															
<p><概要>老年期対象者の特徴（身体的、精神的、社会的側面）を理解したうえで、作業療法の実践に用いられる基礎的知識を修得する。具体的には、老年期の生理的、心理的な変化などを学ぶ。また、高齢者を取り巻く環境を含め、高齢者の生活変化についても学習を深めていく。そして、虚弱高齢者や障害高齢者に対する作業療法の評価、アプローチについて学習し知識を深める。さらに、これらの内容を踏まえたうえで、障害高齢者に対して、評価や介入実践を行うことで、知識・技術の修得を図る。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①高齢社会、高齢者の特徴や生活を説明することができる。</p> <p>②高齢期における作業療法の役割を理解し、作業療法介入について説明することができる。</p> <p>③認知症高齢者の特徴を理解し、作業療法実践を説明することができる。</p>															
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。										
事前学習				事後学習											
<p><内容></p> <p>事前に次回の範囲を指示する。該当箇所について教科書を読み予習を行う。わからないことがあればピックアップしておく。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容></p> <p>授業内で、重点箇所について触れるためしっかりと復習しておく。ノートを整理しておくことよい。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>											
授業計画															
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: middle;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢社会（高齢者の定義、社会施策の変化） 2. 高齢者の課題 3. 社会制度 4. 高齢者の特徴（生理的・身体的特徴） 5. 高齢者の特徴（心理社会的特徴） 6. 認知症の理解（定義・症状） 7. 認知症の理解（認知症疾患） 8. 高齢期作業療法の役割・目的 9. 高齢者に対する作業療法（生活のみかた） 10. 高齢者に対する作業療法（評価・援助） 11. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の位置づけ・評価） 12. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の視点、家族支援） 13. 介護予防の作業療法 14. 作業療法実践（レクリエーション立案） 15. 作業療法実践（レクリエーション実践） </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標③</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> </tr> </table> <p>定期試験 筆記</p>								<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢社会（高齢者の定義、社会施策の変化） 2. 高齢者の課題 3. 社会制度 4. 高齢者の特徴（生理的・身体的特徴） 5. 高齢者の特徴（心理社会的特徴） 6. 認知症の理解（定義・症状） 7. 認知症の理解（認知症疾患） 8. 高齢期作業療法の役割・目的 9. 高齢者に対する作業療法（生活のみかた） 10. 高齢者に対する作業療法（評価・援助） 11. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の位置づけ・評価） 12. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の視点、家族支援） 13. 介護予防の作業療法 14. 作業療法実践（レクリエーション立案） 15. 作業療法実践（レクリエーション実践） 	}	到達目標①	}	到達目標②	}	到達目標③	}
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高齢社会（高齢者の定義、社会施策の変化） 2. 高齢者の課題 3. 社会制度 4. 高齢者の特徴（生理的・身体的特徴） 5. 高齢者の特徴（心理社会的特徴） 6. 認知症の理解（定義・症状） 7. 認知症の理解（認知症疾患） 8. 高齢期作業療法の役割・目的 9. 高齢者に対する作業療法（生活のみかた） 10. 高齢者に対する作業療法（評価・援助） 11. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の位置づけ・評価） 12. 認知症高齢者に対する作業療法（作業療法の視点、家族支援） 13. 介護予防の作業療法 14. 作業療法実践（レクリエーション立案） 15. 作業療法実践（レクリエーション実践） 	}	到達目標①	}	到達目標②	}	到達目標③	}								
評価基準・評価方法															
小テスト（40%）、期末試験（60%）を総合的に評価する。															
使用教科書				参考図書											
標準作業療法学 専門分野「高齢期作業療法学」第3版（医学書院） 小川敬之・竹田徳則編著：認知症の作業療法 第2版（医歯薬出版株式会社）				必要に応じて資料を配布する											
備考															
次週の要点を説明するので、復習と予習を怠らないこと。 質問は随時受け付ける。															

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		中枢神経障害学			○河村 章史 竹中 孝博	教授 准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 中枢神経障害、特に脳血管疾患により出現する症状を理解し、それらに対する評価知識・技術を習得する。特に運動麻痺検査に関しては重点的に実施し、その技術習得を確実にする。</p> <p><学修の到達目標> ①脳血管疾患の病理や症状に精通し、脳画像読影が自律的にできる。 ②脳卒中片麻痺の運動麻痺評価を適切に実施できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 「解剖学Ⅲ」「神経内科学」の内容を復習すること。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 運動麻痺検査を適切に実施できるように復習すること。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、中枢神経障害を伴う疾患（河村） 2. 運動機能に関連する脳の解剖・生理（河村） 3. 運動機能に関連する脳画像読影（1）（河村） 4. 運動機能に関連する脳画像読影（2）（河村） 5. 運動機能障害を引き起こす疾患（1）（河村） 6. 運動機能障害を引き起こす疾患（2）（河村） 7. BRS の概念と実施方法（河村） 8. 上田式12段階ですとの概要と実施方法（河村） 9. 脳卒中片麻痺による運動麻痺の基本的病理（河村） 10. 脳卒中片麻痺の運動麻痺の評価（BRST（1））（河村） 11. 脳卒中片麻痺の運動麻痺の評価（BRST（2））（河村） 12. 脳卒中片麻痺の運動麻痺の評価（BRST（3））（河村） 13. 脳卒中片麻痺の運動麻痺の評価（BRST（4））（河村） 14. 脳卒中片麻痺に対する作業療法介入（1）（竹中） 15. 脳卒中片麻痺に対する作業療法介入（2）（竹中） <p>期末試験</p>							
到達目標①							
到達目標②							
到達目標①②							
到達目標②							
評価基準・評価方法							
課題（25%）、小テスト（25%）、期末試験（50%）で評価・判定する。							
使用教科書				参考図書			
前田眞治：脳画像 第1版 医学書院							
備考							
授業内で質問の時間を設ける。また授業外でも適宜メール等で質問を受け付ける。 E-mail : akoumura@heisei-iryuu.ac.jp 小テストは実施直後に解答提示・解説を行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名								
専門科目 作業治療学		高次脳機能障害学			河村 章史	教授								
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態							
		理学	作業	視機能										
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義							
選択														
授業概要・学修の到達目標														
<p><概要> 高次脳機能障害に関する基礎的な知識・技術を習得する。 症例情報からの症状の予測、評価の選択、介入の立案などについて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①注意障害, 記憶障害, 遂行機能障害, 半側空間無視, 失行, 失認に関する概要・評価方法・介入が理解できる。 ②診断名、画像所見などから出現する可能性の高い症状を予測し、その有無を明確にするための評価計画を立案できる。</p>														
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。									
事前学習				事後学習										
<p><内容> 「解剖学Ⅲ」で修得した脳の解剖について復習すること。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 脳画像所見から症状の予測・評価・介入まで繋げられること。 <必要時間>各回30分</p>										
授業計画														
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ul style="list-style-type: none"> 1. 高次脳機能障害とは何か 2. 記憶障害の概要と評価 3. 記憶障害に対する介入 4. 半側空間無視の概要と評価 5. 半側空間無視の介入 6. 前頭葉症状群の概要と評価 7. 遂行機能障害の概要と評価 8. 前頭葉症候群/遂行機能障害に対する介入 9. 失行症の概要と評価、介入 10. 失認の概要と評価、介入 11. 右半球症状の概要と評価、介入 12. 視覚認知障害の概要と評価、介入 13. 損傷部位と症状の考え方 14. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例1） 15. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例2） </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②</td> </tr> </table>								<ul style="list-style-type: none"> 1. 高次脳機能障害とは何か 2. 記憶障害の概要と評価 3. 記憶障害に対する介入 4. 半側空間無視の概要と評価 5. 半側空間無視の介入 6. 前頭葉症状群の概要と評価 7. 遂行機能障害の概要と評価 8. 前頭葉症候群/遂行機能障害に対する介入 9. 失行症の概要と評価、介入 10. 失認の概要と評価、介入 11. 右半球症状の概要と評価、介入 12. 視覚認知障害の概要と評価、介入 13. 損傷部位と症状の考え方 14. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例1） 15. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例2） 	}	到達目標①			}	到達目標①②
<ul style="list-style-type: none"> 1. 高次脳機能障害とは何か 2. 記憶障害の概要と評価 3. 記憶障害に対する介入 4. 半側空間無視の概要と評価 5. 半側空間無視の介入 6. 前頭葉症状群の概要と評価 7. 遂行機能障害の概要と評価 8. 前頭葉症候群/遂行機能障害に対する介入 9. 失行症の概要と評価、介入 10. 失認の概要と評価、介入 11. 右半球症状の概要と評価、介入 12. 視覚認知障害の概要と評価、介入 13. 損傷部位と症状の考え方 14. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例1） 15. 症例を通した評価の構築と解釈及び介入立案（症例2） 	}	到達目標①												
		}	到達目標①②											
評価基準・評価方法														
課題（50%）、小テスト（50%）で評価・判定する。														
使用教科書				参考図書										
渚雅子 他：作業療法全書 第8巻 高次脳機能障害 改訂第3版 前田真治：脳画像 第1版 医学書院				講義内で適宜紹介する。										
備考														
授業内で質問の時間を設ける。また授業外でも適宜メール等で質問を受け付ける。 E-mail : a.koumura@heisei-iryuu.ac.jp 小テストは実施直後に解答提示・解説を行う。														

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																	
専門科目 作業治療学		整形外科系障害学			○竹中 孝博 川本 徹	准教授 非常勤講師																	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																
		理学	作業	視機能																			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)																
選択																							
授業概要・学修の到達目標																							
<p><概要> 整形外科疾患に対する基礎知識と評価、作業療法介入の流れについて学ぶ。 講義の中で解剖学や運動学にも適時触れていく。</p> <p><学修の到達目標> ①各疾患の特徴や症状を説明できること、評価、治療の基本的な考え方を説明できる。 ②自ら進んで調べ活発に討論できる。</p>																							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																		
事前学習				事後学習																			
<p><内容> 事前に指定された教科書の範囲を読んで授業に臨むこと。基礎知識として1年次に履修した解剖学や運動学が理解できていることが前提となる。 <必要時間>各回20分以上</p>				<p><内容> 授業の振り返りを教科書や配布資料を基に必ず行い、知識の定着に努めること。 <必要時間>各回20分以上</p>																			
授業計画																							
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> <ol style="list-style-type: none"> 1. 手の機能解剖1 (竹中) 2. 手の機能解剖2 (竹中) 3. 腱損傷概論 (竹中) 4. 腱損傷の作業療法 (竹中) 5. 骨折概論 (川本) 6. 骨折の作業療法1 (川本) 7. 骨折の作業療法2 (川本) 8. 骨折の作業療法3 (川本) 9. 骨折の作業療法4 (川本) 10. 拘縮の作業療法 (川本) 11. 末梢神経損傷概論 (川本) 12. 末梢神経損傷の作業療法 (川本) 13. リウマチの作業療法 (竹中) 14. グループワーク (竹中) 15. グループ発表 (竹中) </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td colspan="3"></td> </tr> <tr> <td colspan="8">定期試験</td> </tr> </table>								<ol style="list-style-type: none"> 1. 手の機能解剖1 (竹中) 2. 手の機能解剖2 (竹中) 3. 腱損傷概論 (竹中) 4. 腱損傷の作業療法 (竹中) 5. 骨折概論 (川本) 6. 骨折の作業療法1 (川本) 7. 骨折の作業療法2 (川本) 8. 骨折の作業療法3 (川本) 9. 骨折の作業療法4 (川本) 10. 拘縮の作業療法 (川本) 11. 末梢神経損傷概論 (川本) 12. 末梢神経損傷の作業療法 (川本) 13. リウマチの作業療法 (竹中) 14. グループワーク (竹中) 15. グループ発表 (竹中) 	}	到達目標①	}	到達目標②				定期試験							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 手の機能解剖1 (竹中) 2. 手の機能解剖2 (竹中) 3. 腱損傷概論 (竹中) 4. 腱損傷の作業療法 (竹中) 5. 骨折概論 (川本) 6. 骨折の作業療法1 (川本) 7. 骨折の作業療法2 (川本) 8. 骨折の作業療法3 (川本) 9. 骨折の作業療法4 (川本) 10. 拘縮の作業療法 (川本) 11. 末梢神経損傷概論 (川本) 12. 末梢神経損傷の作業療法 (川本) 13. リウマチの作業療法 (竹中) 14. グループワーク (竹中) 15. グループ発表 (竹中) 	}	到達目標①	}	到達目標②																			
定期試験																							
評価基準・評価方法																							
定期試験 (50%)、授業中の小テスト (50%)																							
使用教科書				参考図書																			
齋藤慶一郎：リハ実践テクニック ハンドセラピー、株式会社メジカルビュー社、2014 医療情報科学研究所：病気がみえる vol.11 運動器・整形外科、メデックメディア、2017				中田真由美他：作業療法士のためのハンドセラピー入門 第2版 三輪書店、2006																			
備考																							
整形外科疾患に対する作業療法の基礎知識と評価・治療の流れについて学ぶ。臨床において大切な教科であるが、短時間で非常に広い学習をするため、分からないときはいつでも質問を受け付ける。毎回授業中に小テストを行い知識の確認を行う。																							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		内部機能障害学			長谷部武久 ○市田 博子	教授(理学療法) 助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 作業療法において対象となる代謝系疾患、循環器系疾患、慢性閉塞性肺疾患などの基本的な病態や発生機序、検査・評価、介入・治療方法について学び、理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①内部疾患についての基本的な知識を理解し修得できる。 ②内部疾患に対する作業療法士の役割や専門性を認識について述べるができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 次回講義予定に該当する部分の教科書を熟読し、調べ学習を行う。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 講義内容に関して理解を深めるために資料を見返し、必要に応じてシェア学習を行う。 <必要時間>各回30分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 糖尿病・メタボリックシンドロームの病態（長谷部） 2. 糖尿病の治療と評価（長谷部） 3. 代謝系疾患に対する作業療法の進め方（長谷部） 4. 呼吸器疾患の病態（市田） 5. 呼吸器疾患の病態とリハビリテーション（市田） 6. 呼吸器疾患に対する作業療法の進め方（市田） 7. 消化器疾患の病態（市田） 8. 消化器疾患の病態とリハビリテーション（市田） 9. 消化器疾患に対する作業療法の進め方（市田） 10. 循環器の解剖と生理（長谷部） 11. 心不全の病態と治療（長谷部） 12. 心不全に対する作業療法の進め方（長谷部） 13. 悪性腫瘍の病態（市田） 14. 悪性腫瘍の病態とリハビリテーション（市田） 15. 悪性腫瘍に対する作業療法の進め方（市田） <p>定期試験 筆記</p>				<p>到達目標① 到達目標① 到達目標② 到達目標① 到達目標①、② 到達目標② 到達目標① 到達目標①、② 到達目標② 到達目標① 到達目標① 到達目標② 到達目標① 到達目標① 到達目標①、② 到達目標②</p>			
評価基準・評価方法							
<p>評価方法：定期試験（90%）、小テスト（10%） 小テストは前講義内容に関して、国家試験過去問題を主に講義開始より5分間で実施する。</p>							
使用教科書				参考図書			
石川朗：理学療法テキスト内部障害理学療法学呼吸、中山書店、2015				石川朗：作業療法士のための呼吸ケアとリハビリテーション、中山書店、2010			
備 考							
<p>オフィスアワー：火曜日14～17時、その他講義中に質問の時間を取り、講義内または次回講義前に回答する。 作業療法対象として拡大してきた分野であり、十分な予習・復習、疾患の理解と専門性を重視した思考が必要である。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名									
専門科目 作業治療学		義肢装具学			○竹中 孝博 菅原 政範	准教授 非常勤講師									
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態								
		理学	作業	視機能											
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)								
選択															
授業概要・学修の到達目標															
<p><概要> 第1回から8回は義肢全般を切断者の術前評価・術後管理から各義肢の目的と機能をつかみ、義手使用が可能になるか知る事と、体幹装具・下肢装具の機能とその目的を知る。 第9回から15回は作業療法に必要な装具、スプリントについての基礎知識、装具の種類と適応、力学などについて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①義肢装具の評価方法や機能を理解し他者に説明できる。 ②素材の特徴や制作方法を学び、臨床に必要な技術を習得できる。</p>															
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。										
事前学習				事後学習											
<p><内容> 授業計画を確認し、教科書を一読しておくこと、講義の内容が理解しやすくなる。 <必要時間>各回20分以上</p>				<p><内容> 授業時に配布するプリントの理解、事前学習時の疑問点の解決をすること。 <必要時間>各回20分以上</p>											
授業計画															
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: middle;"> <ul style="list-style-type: none"> 1. 総論 (菅原) 2. 義肢 (菅原) 3. 義手 (菅原) 4. 義手と装具 (菅原) 5. 装具 (菅原) 6. 義肢と装具について (菅原) 7. 義肢と装具の採型 (菅原) 8. 義肢と装具の採型 (菅原) 9. 背側 cock-up splint (竹中) 10. 背側 cock-up splint (竹中) 11. 掌側 cock-up splint (竹中) 12. 掌側 cock-up splint (竹中) 13. joint jack (竹中) 14. thumb spica splint (竹中) 15. thumb spica splint (竹中) </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td style="vertical-align: middle; padding: 0 10px;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td colspan="3"></td> </tr> </table> <p>定期試験</p>								<ul style="list-style-type: none"> 1. 総論 (菅原) 2. 義肢 (菅原) 3. 義手 (菅原) 4. 義手と装具 (菅原) 5. 装具 (菅原) 6. 義肢と装具について (菅原) 7. 義肢と装具の採型 (菅原) 8. 義肢と装具の採型 (菅原) 9. 背側 cock-up splint (竹中) 10. 背側 cock-up splint (竹中) 11. 掌側 cock-up splint (竹中) 12. 掌側 cock-up splint (竹中) 13. joint jack (竹中) 14. thumb spica splint (竹中) 15. thumb spica splint (竹中) 	}	到達目標①	}	到達目標②			
<ul style="list-style-type: none"> 1. 総論 (菅原) 2. 義肢 (菅原) 3. 義手 (菅原) 4. 義手と装具 (菅原) 5. 装具 (菅原) 6. 義肢と装具について (菅原) 7. 義肢と装具の採型 (菅原) 8. 義肢と装具の採型 (菅原) 9. 背側 cock-up splint (竹中) 10. 背側 cock-up splint (竹中) 11. 掌側 cock-up splint (竹中) 12. 掌側 cock-up splint (竹中) 13. joint jack (竹中) 14. thumb spica splint (竹中) 15. thumb spica splint (竹中) 	}	到達目標①	}	到達目標②											
評価基準・評価方法															
期末試験 (60%)、小テストの結果 (20%)、宿題・時間外レポート (20%)															
使用教科書				参考図書											
<ul style="list-style-type: none"> ・日本整形外科学会(編)：義肢装具のチェックポイント 第8版 医学書院 2014 ・齋藤慶一郎：リハ実践テクニク ハンドセラピー、株式会社メジカルビュー社 2014 				<ul style="list-style-type: none"> ・配布資料 											
備考															
<p>講義によって使用する教室が異なる。適時、資料を配布する。 短時間で非常に広い学習をするため、分からないときはいつでも質問を受け付ける。 小テストは添削して返却する。レポートは適時フィードバックを行う。</p>															

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																																		
専門科目 作業治療学		発達機能障害学Ⅰ（総論）			渡邊 雄介	非常勤講師																																		
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																																	
		理学	作業	視機能																																				
必修 選択			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義																																	
授業概要・学修の到達目標																																								
<p><概要>発達機能障害学Ⅰでは、子どもの発達過程（誕生から1歳までの運動発達を中心に）を学び、各発達課題（寝返りや座位など）の獲得過程について理解を深める。また、脳性麻痺や筋ジストロフィー等の疾患について、症状・評価・治療を関連付けて理解する。さらに、発達過程や疾患の知識を統合し、実際のお子さんの映像（脳性麻痺）から、評価・治療を考える。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①各発達課題を獲得するために必要な能力について理解できる。 ②作業療法評価の過程や、発達検査・知能検査の概要について説明できる。 ③各疾患についての、症状・評価・治療を関連付けて説明できる ④お子さんの映像（脳性麻痺）から作業療法評価を行い、評価をもとにアプローチを考える事ができる。</p>																																								
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																																			
事前学習				事後学習																																				
<p><内容> 1年次科目の人間発達学や小児科学の復習をしておく事。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 説明した重要箇所を中心に、復習用プリントを用いて自己学習を行う事。次の授業開始時に答え合わせを行う。 <必要時間>各回60分</p>																																				
授業計画																																								
<table border="0"> <tr> <td>1. 運動発達 新生児～3か月</td> <td rowspan="4">}</td> <td rowspan="4">到達目標①</td> </tr> <tr> <td>2. 運動発達 4か月～6か月</td> </tr> <tr> <td>3. 運動発達 7か月～9か月</td> </tr> <tr> <td>4. 運動発達 10か月～12か月</td> </tr> <tr> <td>5. 巧緻動作の発達</td> <td rowspan="2">}</td> <td rowspan="2">到達目標②</td> </tr> <tr> <td>6. 作業療法評価 評価の過程</td> </tr> <tr> <td>7. 作業療法評価 発達検査・知能検査の概要</td> <td rowspan="3">}</td> <td rowspan="3">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>8. 分娩麻痺</td> </tr> <tr> <td>9. 二分脊椎</td> </tr> <tr> <td>10. 筋ジストロフィー</td> <td rowspan="5">}</td> <td rowspan="5">到達目標④</td> </tr> <tr> <td>11. 脳性麻痺</td> </tr> <tr> <td>12. 脳性麻痺</td> </tr> <tr> <td>13. 評価・治療の実際（脳性麻痺）</td> </tr> <tr> <td>14. 評価・治療の実際（脳性麻痺）</td> </tr> <tr> <td>15. 評価・治療の実際（脳性麻痺）</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td colspan="8">定期試験</td> </tr> </table>								1. 運動発達 新生児～3か月	}	到達目標①	2. 運動発達 4か月～6か月	3. 運動発達 7か月～9か月	4. 運動発達 10か月～12か月	5. 巧緻動作の発達	}	到達目標②	6. 作業療法評価 評価の過程	7. 作業療法評価 発達検査・知能検査の概要	}	到達目標③	8. 分娩麻痺	9. 二分脊椎	10. 筋ジストロフィー	}	到達目標④	11. 脳性麻痺	12. 脳性麻痺	13. 評価・治療の実際（脳性麻痺）	14. 評価・治療の実際（脳性麻痺）	15. 評価・治療の実際（脳性麻痺）			定期試験							
1. 運動発達 新生児～3か月	}	到達目標①																																						
2. 運動発達 4か月～6か月																																								
3. 運動発達 7か月～9か月																																								
4. 運動発達 10か月～12か月																																								
5. 巧緻動作の発達	}	到達目標②																																						
6. 作業療法評価 評価の過程																																								
7. 作業療法評価 発達検査・知能検査の概要	}	到達目標③																																						
8. 分娩麻痺																																								
9. 二分脊椎																																								
10. 筋ジストロフィー	}	到達目標④																																						
11. 脳性麻痺																																								
12. 脳性麻痺																																								
13. 評価・治療の実際（脳性麻痺）																																								
14. 評価・治療の実際（脳性麻痺）																																								
15. 評価・治療の実際（脳性麻痺）																																								
定期試験																																								
評価基準・評価方法																																								
小テスト（20％）とレポート課題（10％）定期試験70％で評価する。																																								
使用教科書				参考図書																																				
岩崎清隆：発達障害の作業療法【基礎編】（三輪書店） 岩崎清隆：発達障害の作業療法【実践編】（三輪書店）				資料を配布する。																																				
備考																																								
レポート課題は13～15で行う。講義時間内で終わらない場合は、時間外で行うこと。																																								

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		発達機能障害学Ⅱ（各論）			渡邊 雄介	非常勤講師	
作業治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 発達機能障害学Ⅱでは、セルフケア（食事、排泄）の発達や評価、アプローチについて学ぶ。 また、社会性、言葉、遊びの発達過程や、広汎性発達障害や注意欠陥多動性障害等の疾患について学び、それらを統合して子どもの発達に応じた遊びを考え、実施する力を身につける。</p> <p><学修の到達目標> ①摂食・嚥下の発達過程や、摂食・嚥下に問題がある方に対する評価やアプローチについて説明できる。 ②排泄の発達過程や、排泄に問題がある方に対する評価やアプローチについて説明できる。 ③社会性・言葉・遊びの発達過程について理解できる。 ④各疾患の、症状・評価・治療について、関連付けて説明できる。 ⑤子どもの発達段階に応じた遊びを考え、実施する事ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次科目の人間発達学や小児科学の復習をしておく事。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 講義の際に説明した重要箇所を自己学習を行う事。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 摂食・嚥下の発達 (1)		2. 摂食・嚥下の発達 (2)		} 到達目標①			
3. 排泄の発達 (1)		4. 排泄の発達 (2)		} 到達目標②			
5. 言葉・社会性の発達		6. 遊びの発達		} 到達目標③			
7. 精神発達遅滞		8. 広汎性発達障害		} 到達目標④			
9. 学習障害		10. 注意欠陥多動性障害					
11. 代表的治療理論		12. 評価・治療の実際 (遊びの計画1)		} 到達目標⑤			
13. 評価・治療の実際 (遊びの計画2)		14. 評価・治療の実際 (遊びの実施1)					
14. 評価・治療の実際 (遊びの実施1)		15. 評価・治療の実際 (遊びの実施2)					
定期試験							
評価基準・評価方法							
小テスト (20%)、レポート課題 (10%)、定期試験70%で評価する。							
使用教科書				参考図書			
岩崎清隆：発達障害と作業療法【基礎編】（三輪書店） 岩崎清隆：発達障害と作業療法【実践編】（三輪書店） 長崎重信監修：ゴールドマスターテキスト発達障害作業療法学改訂第2版（メジカルビュー）				資料を配布する。			
備考							
レポート課題は14～15で行う。講義時間内で終わらない場合は、時間外で行うこと。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																									
専門科目 作業治療学		日常生活活動学			浅野 莉沙	助教																									
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																								
		理学	作業	視機能																											
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義																								
選択																															
授業概要・学修の到達目標																															
<p><概要> 日常生活活動学では、人の日常生活動作（ADL）についての概念について理解を深める。また、日常生活動作の基盤となる基本動作について、動作分析を利用し、その仕組みを理解する。さらに、障がいとADLの関係や障害者の自立に向けてどのように問題解決を図るかを検討する。</p> <p><学修の到達目標> ①日常生活動作（ADL）の意味と内容を理解し、説明できる ②基本動作について、主体的に分析し、臨床に望むための土台が形成できる</p>																															
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																										
事前学習				事後学習																											
<p><内容> 1年次に学習した運動学と解剖学の復習を行っておくこと。動作分析が始まってからは、次の授業までに同じグループのメンバーと協業による自分の見解を持って臨むこと。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 概念および文や単語は、意味を解釈しながら記憶すること。動作分析が始まってからは、分析方法が個人で遂行ができるように繰り返し、練習すること。 <必要時間>各回30～60分程度</p>																											
授業計画																															
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. ADL とは 2. ADL と ICF・ICIDH 3. ADL の支援 4. 姿勢の評価 5. 姿勢や動作が安定するとは 6. 動作分析について（座位姿勢の分析） 7. 座位から立位へ立ち上がりの動作分析 8. 背臥位から寝返りの動作分析 その1 9. 背臥位から寝返りの動作分析 その2 10. 寝返りから起き上がりの動作分析 11. 歩行の動作分析 12. 机上での食事動作の分析 その1 13. 机上での食事動作の分析 その2 14. ベッド上での姿勢・活動援助 15. 車椅子上での姿勢・活動援助 定期試験（筆記試験） </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td colspan="4"></td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①②</td> <td colspan="4"></td> </tr> </table>								1. ADL とは 2. ADL と ICF・ICIDH 3. ADL の支援 4. 姿勢の評価 5. 姿勢や動作が安定するとは 6. 動作分析について（座位姿勢の分析） 7. 座位から立位へ立ち上がりの動作分析 8. 背臥位から寝返りの動作分析 その1 9. 背臥位から寝返りの動作分析 その2 10. 寝返りから起き上がりの動作分析 11. 歩行の動作分析 12. 机上での食事動作の分析 その1 13. 机上での食事動作の分析 その2 14. ベッド上での姿勢・活動援助 15. 車椅子上での姿勢・活動援助 定期試験（筆記試験）	}	到達目標①								}	到達目標②							}	到達目標①②				
1. ADL とは 2. ADL と ICF・ICIDH 3. ADL の支援 4. 姿勢の評価 5. 姿勢や動作が安定するとは 6. 動作分析について（座位姿勢の分析） 7. 座位から立位へ立ち上がりの動作分析 8. 背臥位から寝返りの動作分析 その1 9. 背臥位から寝返りの動作分析 その2 10. 寝返りから起き上がりの動作分析 11. 歩行の動作分析 12. 机上での食事動作の分析 その1 13. 机上での食事動作の分析 その2 14. ベッド上での姿勢・活動援助 15. 車椅子上での姿勢・活動援助 定期試験（筆記試験）	}	到達目標①																													
		}	到達目標②																												
		}	到達目標①②																												
評価基準・評価方法																															
<p>評価方法：期末試験（70%）、レポート（30%） 評価基準：期末試験は筆記試験を行い、講義内容全体についての理解度を問う レポートは採点して返却する</p>																															
使用教科書				参考図書																											
伊藤利之・鎌倉矩子：ADL とその周辺 第3版、医学書院 障害者福祉研究会：ICF 国際生活機能分類、中央法規 上田敏：ICF の理解と活用 萌文社				適宜紹介する																											
備考																															
グループワークによる課題が多く含まれるため、主体的に取り組み、分析能力の取得に臨むこと 質問や相談は、授業内やオフィスアワーで随時受け付ける																															

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																														
専門科目		生活技術学演習			○永井 貴士 浅野 莉沙	准教授 助教																														
作業治療学																																				
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																													
		理学	作業	視機能																																
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習																													
選択																																				
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標																																				
<p><概要> 作業療法の臨床場面では、日常生活活動（ADL）の改善・向上が主要な治療目標とされることも多い。 この授業では、まず ADL の概念や評価について理解し、その後実習等で必要になる介助技術や対象者への指導方法を修得する。 また、車いすや福祉用具、自助具についての知識なども含め、総合的に ADL 支援ができるよう学習する。</p> <p><学修の到達目標> ①日常生活活動（ADL）評価スケールが使用できる ②目的に応じた自助具を考案し、作成することができる ③起居動作、移乗（トランスファー）において適切な介助ができる</p>																																				
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																															
事前学習				事後学習																																
<p><内容> ・ADL、IADL などの用語の復習をしておく ・姿勢が安定する要因を運動学的に復習しておく ・その他適宜指定する <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> ・体感して気づいた介助のポイントをノート等にまとめておく ・実技練習を繰り返し行う <必要時間>各回60分</p>																																
授 業 計 画																																				
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 60%;">1. 総論・ADL スケールについて、ADL 評価スケールの演習①（永井）</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td>到達目標①</td> </tr> <tr> <td>2. ADL 評価スケールの演習②（永井）</td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td>到達目標②</td> </tr> <tr> <td>3. 福祉用具・自助具について（永井）</td> <td rowspan="5" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="5">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>4. 自助具の作成①（永井）</td> </tr> <tr> <td>5. 自助具の作成②（永井）</td> </tr> <tr> <td>6. 身体障害者に対する起居動作のポイントと介助技術（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>7. 起き上がり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>8. 長座位・いざり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="2">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>9. 座位・起立動作のポイントと介助技術（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>10. 車いすの基礎知識と操作方法（永井・浅野）</td> <td rowspan="3" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="3">到達目標②③</td> </tr> <tr> <td>11. 車いす姿勢を観るポイント（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>12. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術①（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>13. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術②（永井・浅野）</td> <td rowspan="2" style="font-size: 3em; vertical-align: middle;">}</td> <td rowspan="2">到達目標③</td> </tr> <tr> <td>14. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術③（永井・浅野）</td> </tr> <tr> <td>15. 歩行動作のポイントと介助技術（歩行補助具含む）（永井・浅野）</td> <td></td> <td>到達目標②③</td> </tr> </table> <p>定期試験 筆記・実技</p>								1. 総論・ADL スケールについて、ADL 評価スケールの演習①（永井）	}	到達目標①	2. ADL 評価スケールの演習②（永井）	}	到達目標②	3. 福祉用具・自助具について（永井）	}	到達目標③	4. 自助具の作成①（永井）	5. 自助具の作成②（永井）	6. 身体障害者に対する起居動作のポイントと介助技術（永井・浅野）	7. 起き上がり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）	8. 長座位・いざり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）	}	到達目標③	9. 座位・起立動作のポイントと介助技術（永井・浅野）	10. 車いすの基礎知識と操作方法（永井・浅野）	}	到達目標②③	11. 車いす姿勢を観るポイント（永井・浅野）	12. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術①（永井・浅野）	13. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術②（永井・浅野）	}	到達目標③	14. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術③（永井・浅野）	15. 歩行動作のポイントと介助技術（歩行補助具含む）（永井・浅野）		到達目標②③
1. 総論・ADL スケールについて、ADL 評価スケールの演習①（永井）	}	到達目標①																																		
2. ADL 評価スケールの演習②（永井）		}	到達目標②																																	
3. 福祉用具・自助具について（永井）	}		到達目標③																																	
4. 自助具の作成①（永井）																																				
5. 自助具の作成②（永井）																																				
6. 身体障害者に対する起居動作のポイントと介助技術（永井・浅野）																																				
7. 起き上がり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）																																				
8. 長座位・いざり動作のポイントと介助技術（永井・浅野）	}	到達目標③																																		
9. 座位・起立動作のポイントと介助技術（永井・浅野）																																				
10. 車いすの基礎知識と操作方法（永井・浅野）	}	到達目標②③																																		
11. 車いす姿勢を観るポイント（永井・浅野）																																				
12. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術①（永井・浅野）																																				
13. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術②（永井・浅野）	}	到達目標③																																		
14. 移乗動作（トランスファー）のポイントと介助技術③（永井・浅野）																																				
15. 歩行動作のポイントと介助技術（歩行補助具含む）（永井・浅野）		到達目標②③																																		
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法																																				
<p>評価方法：期末試験（60%）、レポート（30%）、グループ活動への参加状況（10%）※レポートは採点後に返却・フィードバックする。 評価基準：期末試験は筆記試験と実技試験を行う（詳細については講義内で連絡する） グループやペアで学習する場面を多く設けるので、積極的な発言や実技練習を期待する</p>																																				
使用教科書				参考図書																																
<ul style="list-style-type: none"> ・伊藤利之、鎌倉矩子：ADL とその周辺、医学書院 ・森田竜治、永井貴士：あっ！あぶない危険防止と安全な介護 [脳卒中編]、文溪堂 ・千野直一他：脳卒中の機能評価 SIAS と FIM、金原出版 				<ul style="list-style-type: none"> ・濱口豊太他：標準作業療法学 日常生活活動・社会生活行為学、医学書院 																																
備 考																																				
<p>適切な介助技術を身につけることは、自分の身を守ること（怪我をしない）ことにもつながるため重要である 後半は実習形式が多いため、実技に向けた服装の準備をしていくこと（事前に連絡する） 授業内容に関する質問や相談はオフィスアワー等で受け付ける</p>																																				

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		応用生活技術学演習			佐藤 篤史	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 応用生活技術学演習では、作業療法で主要に関わる日常生活活動の中でも重要なセルフケアを中心に、それに関する基本的身体機能、評価、動作分析、目標設定、治療方法、介入方法について学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①対象者の生活に沿ったリハビリテーションのあり方を理解できる。 ②入院生活から退院生活に向け、環境調整、充実した地域生活の支援まで総合的に考えることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 日常生活活動学を復習し、作業療法でのADLの意味を再度授業前に見なおし、自己学習を進めておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 授業で行った内容の復習と演習で実施したものの再学習を通して、知識・技術の安定化を図ること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 食事とは		}		到達目標①			
2. 摂食・嚥下障がい基礎知識				到達目標②			
3. 失語障害のあるものへのリハビリテーション				到達目標①			
4. 整容行為とは		}		到達目標②			
5. 整容行為の作業療法				到達目標①			
6. 排泄とは				到達目標②			
7. 排泄行為の作業療法		}		到達目標①			
8. 入浴とは				到達目標②			
9. 入浴行為の作業療法				到達目標①			
10. 動作分析 (1)		}		到達目標②			
11. 動作分析 (2)							
12. 動作分析 (3)							
13. 更衣とは		}		到達目標①			
14. 更衣動作の作業療法				到達目標②			
15. 退院前評価と住宅改修 定期試験				到達目標①②			
評価基準・評価方法							
<p>課題およびグループ活動への参加状況、課題への取組状況を加味して評定する。 課題提出により50%、定期試験で50%の合計で算定する。</p>							
使用教科書				参考図書			
伊藤利之・鎌倉矩子：ADLとその周辺、医学書院 森田竜治・永井貴士：あっ！あぶない危険防止と安全な介護 [脳卒中編]、文溪堂				必要に合わせて資料を配布する。			
備考							
実技形式が多いため、実技に向けた服装を準備しておくこと。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		精神障害学Ⅰ（総論）			世良 龍哉	教授	
作業治療学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 精神障害領域の作業療法についての総論を学ぶ。精神障害者の症状、取り巻く環境を考慮しながら作業療法との関連性、必要性について学んでいく。そのため、精神障害に対する処遇の歴史と法律、精神疾患に対する治療と生活支援、精神科作業療法の治療構造について学び、理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①精神障害の捉え方を理解できる ②精神障害に関する歴史を理解できる ③精神障害領域の作業療法の役割を理解できる ④精神障害領域の作業療法の治療構造を理解できる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業前にはテキストの該当する内容を読み、わからない語句については調べ学習をする。 <必要時間>各回15分程度</p>				<p><内容> 講義の際、重点箇所について説明する。その内容を中心に復習し、わからないことを質問出来るようにする。 <必要時間>各回15分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義のオリエンテーション 2. 精神障害者を理解するにあたっての基礎 3. 精神障害の捉え方 4. 精神障害者に対する治療処遇の歴史と法律 (1) 5. 精神障害者に対する治療処遇の歴史と法律 (2) 6. 精神障害に対する作業療法の視点 (1) 7. 精神障害に対する作業療法の視点 (2) 8. 精神障害に対する作業療法の視点 (3) 9. 精神障害に対する治療の流れ 10. 精神障害に対する治療・支援 11. 作業療法の構造と形態 (1) 12. 作業療法の構造と形態 (2) 13. 作業療法の構造と形態 (3) 14. 作業療法の構造と形態 (4) 15. 重要事項の確認 <p>定期試験</p>							
<p style="text-align: right;">} 到達目標①</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標②</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標③</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標④</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標①～④</p>							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（70%）、小テスト（30%）をもって総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
山根寛：精神障害と作業療法 新版 三輪書店 堀田英樹：統合失調症の作業療法の進め方 中山書店				作業療法学全書第5巻 精神障害 第3版 協同医書出版			
備考							
授業中に随時質問を受け付けます。また、講義前後に対応する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名			
専門科目 作業治療学		精神障害学Ⅱ（各論）			○世良 龍哉 片桐 正博	教授 非常勤講師			
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態		
		理学	作業	視機能					
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）		
選択									
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標									
<p><概要> 精神障害領域の作業療法について、評価と治療に関する知識を学ぶ。精神障害学Ⅰで学んだ事を踏まえ、精神科作業療法の治療理論、対象者理解の視点（ICFなど）や、作業療法評価、治療技術、臨床における評価・治療の流れ、症例を通しての評価・治療計画の立案について学び、理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①精神科作業療法の治療理論について理解できる ②精神科作業療法の治療因子について理解できる ③評価技術について理解できる ④治療技術について理解できる ⑤評価・治療計画の立案について理解できる</p>									
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。				
事前学習				事後学習					
<p><内容> 授業前にはテキストの該当する内容を読み、わからない語句については調べ学習をする。</p> <p><必要時間>各回15分程度</p>				<p><内容> 講義の際、重点箇所について説明する。その内容を中心に復習し、わからないことを質問出来るようにする。</p> <p><必要時間>各回15分程度</p>					
授業計画									
<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> 1. 精神障害領域の作業療法理論（世良） 2. 作業療法の実践（1）（世良） 3. 作業療法の実践（2）（世良） 4. 作業療法の実践（3）（世良） 5. 作業療法の実践（4）（世良） 6. 作業療法の実践（5）（世良） 7. 評価技術（興味チェックリスト）（世良） 8. 評価技術（行動観察）（世良） 9. 治療技術（SST）（世良） 10. 地域生活支援（世良） 11. 臨床における精神科作業療法の実践（1）（片桐） 12. 臨床における精神科作業療法の実践（2）（片桐） 13. 臨床における精神科作業療法の実践（3）（片桐） 14. 症例を通して評価・治療の立案（1）（片桐） 15. 症例を通して評価・治療の立案（2）（片桐） 定期試験 </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top; padding-left: 20px;"> 到達目標① } 到達目標② } 到達目標③ 到達目標④ 到達目標⑤ } 到達目標③④⑤ </td> </tr> </table>								1. 精神障害領域の作業療法理論（世良） 2. 作業療法の実践（1）（世良） 3. 作業療法の実践（2）（世良） 4. 作業療法の実践（3）（世良） 5. 作業療法の実践（4）（世良） 6. 作業療法の実践（5）（世良） 7. 評価技術（興味チェックリスト）（世良） 8. 評価技術（行動観察）（世良） 9. 治療技術（SST）（世良） 10. 地域生活支援（世良） 11. 臨床における精神科作業療法の実践（1）（片桐） 12. 臨床における精神科作業療法の実践（2）（片桐） 13. 臨床における精神科作業療法の実践（3）（片桐） 14. 症例を通して評価・治療の立案（1）（片桐） 15. 症例を通して評価・治療の立案（2）（片桐） 定期試験	到達目標① } 到達目標② } 到達目標③ 到達目標④ 到達目標⑤ } 到達目標③④⑤
1. 精神障害領域の作業療法理論（世良） 2. 作業療法の実践（1）（世良） 3. 作業療法の実践（2）（世良） 4. 作業療法の実践（3）（世良） 5. 作業療法の実践（4）（世良） 6. 作業療法の実践（5）（世良） 7. 評価技術（興味チェックリスト）（世良） 8. 評価技術（行動観察）（世良） 9. 治療技術（SST）（世良） 10. 地域生活支援（世良） 11. 臨床における精神科作業療法の実践（1）（片桐） 12. 臨床における精神科作業療法の実践（2）（片桐） 13. 臨床における精神科作業療法の実践（3）（片桐） 14. 症例を通して評価・治療の立案（1）（片桐） 15. 症例を通して評価・治療の立案（2）（片桐） 定期試験	到達目標① } 到達目標② } 到達目標③ 到達目標④ 到達目標⑤ } 到達目標③④⑤								
評価基準・評価方法									
評価方法は、定期試験（70%）、小テスト（30%）をもって総合的に判断する。									
使用教科書				参考図書					
山根寛：精神障害と作業療法 新版 三輪書店 堀田英樹：統合失調症の作業療法の進め方 中山書店				作業療法学全書第5巻 精神障害 第3版 協同医書出版					
備 考									
授業中に随時質問を受け付ける。また、講義前後に対応する。									

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		作業療法学総合演習Ⅰ（基礎）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、浅野、 花井、寺本、寺下、他	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法の実践に関わる分野について、基礎となる医学的な知識を確認しつつ、それらを実践に活用するまでの流れを修得する。病院（施設）から在宅まで作業療法の範囲が広がるなか、呼吸器疾患、がん疾患など作業療法の実践を学び知識・技術を深めていく。</p> <p><学修の到達目標> ①専門職に必要な基礎医学や臨床医学について説明できる。 ②専門職に必要な作業療法分野における知識について説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に資料を配布するので、その内容を確認し、わからないことをピックアップしておくこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> 演習の際、重点箇所について説明する。その内容を中心に学習すること。 <必要時間>課題の内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（授業計画、授業の進め方など） 2. 作業療法分野に必要とされる知識の整理作業（1）（加藤） 3. 作業療法分野に必要とされる知識の整理作業（2）（加藤） 4. 精神科デイケアにおける作業療法の実際（1）（花井） 5. 精神科デイケアにおける作業療法の実際（2）（花井） 6. 呼吸器疾患に対する作業療法の実際（1）（寺本） 7. 呼吸器疾患に対する作業療法の実際（2）（寺本） 8. 呼吸器疾患に対する作業療法の実際（3）（寺本） 9. 脊髄損傷患者に対する作業療法の実際（1）（中島） 10. 脊髄損傷患者に対する作業療法の実際（1）（中島） 11. がん患者に対する作業療法の実際（1）（寺下） 12. がん患者に対する作業療法の実際（2）（寺下） 13. 福祉用具の必要とされる知識とその活用（1）（船谷） 14. 福祉用具の必要とされる知識とその活用（2）（船谷） 15. 福祉用具の必要とされる知識とその活用（3）（船谷） 							
評価基準・評価方法							
課題（90%）、受講態度（10%）を総合的に評価する							
使用教科書				参考図書			
必要に応じて資料を配付する							
備考							
主体的に取り組むこと。グループワークでは、学生間の活発な討論を期待する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		作業療法学総合演習Ⅱ（専門）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、 浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法の実践に関わる専門的知識を網羅し、それらを実践応用するまでの流れを習得する。学生個々が情報の収集、選択、統合を能動的に行うことで、基本的知識・技術を深めていく。</p> <p><学修の到達目標> ①専門職に必要な基礎医学や臨床医学について説明できる。 ②専門職に必要な作業療法分野における知識について説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に資料を配布するので、その内容を確認し、わからないことをピックアップしておくこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> 演習の際、重点箇所について説明する。その内容を中心に学習すること。 <必要時間>課題の内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション（授業計画、授業の進め方など） 2. グループワーク（身体障害分野）(1) 3. グループワーク（身体障害分野）(2) 4. グループワーク（身体障害分野）(3) 5. グループワーク（身体障害分野）(4) 6. グループワーク（身体障害分野）(5) 7. グループワーク（身体障害分野）(6) 8. グループワーク（精神障害分野）(1) 9. グループワーク（精神障害分野）(2) 10. グループワーク（精神障害分野）(3) 11. グループワーク（精神障害分野）(4) 12. グループワーク（発達障害分野）(1) 13. グループワーク（発達障害分野）(2) 14. グループワーク（老年期障害分野）(1) 15. グループワーク（老年期障害分野）(2) 							
評価基準・評価方法							
受講態度（20%）、課題（80%）を総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
PT/OT 国試必須ポイント基礎医学2019 PT/OT 国試必須ポイント臨床医学2019 PT/OT 国試必須ポイント基礎 OT 学2019 PT/OT 国試必須ポイント障害別 OT 治療学2019				適時必要に応じて資料を配布する			
備考							
主体的に取り組むこと。グループワークでは、学生間の活発な討論を期待する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		作業療法総合セミナー I (評価)			○加藤、河村、永井 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 「臨床実習Ⅱ」の体験から得た知識や技術を整理し、学生相互間による討議を重ねることで情報を共有すること、より質の高い介入ができるよう考えること、について学習を深めていく。他学生の情報は、自身が体験していない内容を補うことにも繋がり臨床領域の奥深さなどについても学習する。また、臨床で必要とされる基礎医学に対する知識を深めていく。</p> <p><学修の到達目標> ①臨床の場で実施した作業療法プロセスを適切にまとめ報告・質疑に答えることができる。 ②作業療法的見地をもって質問および説明をすることができる。 ③臨床で必要とされた基礎医学について整理し、理解を深めることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> セミナー前にレジュメを配布するため、事前に読み質問項目を抽出しておくこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> セミナー発表で得られた課題に対して、自身の学習を深められるよう取り組むこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 4週間の作業療法プロセスをまとめたレポートよりセミナーでの検討資料を作成する。 セミナー発表と討論 (1) セミナー発表と討論 (2) セミナー発表と討論 (3) セミナー発表と討論 (4) 実習課題の抽出と対策 (1) 実習課題の抽出と対策 (2) 実習課題の抽出と対策 (3) 臨床実習で必要とされた技術学習 (1) 臨床実習で必要とされた技術学習 (2) 基礎医学における知識と技術の整理 (1) 基礎医学における知識と技術の整理 (2) 基礎医学における知識と技術の整理 (3) 基礎医学の統合学習 (1) 基礎医学の統合学習 (2) <p style="margin-left: 40px;">} 到達目標①②</p> <p style="margin-left: 40px;">} 到達目標③</p>							
評価基準・評価方法							
課題 (90%)、受講態度 (10%) を総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
「臨床実習要項」、実習で関連のあるテキスト。				適時必要に応じて配布する。			
備考							
学生間の活発な討議を期待する。質問は随時受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		作業療法総合セミナーⅡ (評価と介入①)			○加藤、河村、永井 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 「臨床実習Ⅲ」の体験から得た知識や技術を整理し、学生相互間による討議を重ねることで情報を共有すること、より質の高い介入ができるよう考えること、について学習を深めていく。他学生の情報は、自身が体験していない内容を補うことにも繋がり臨床領域の奥深さなどについても学習する。また、臨床で必要とされる専門分野に対する知識を深めていく。</p> <p><学修の到達目標> ①臨床場で実施した作業療法プロセスを適切にまとめ報告・質疑に応えることができる。 ②作業療法的見地をもって質問および説明をすることができる。 ③臨床場で必要とされた専門分野について整理し、理解を深めることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> セミナー前にレジュメを配付するため、事前に読み質問項目を抽出しておくこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> セミナー発表で得られた課題に対して、自身の学習を深められるよう取り組むこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 8週間の作業療法プロセスをまとめたレポートよりセミナーでの検討資料を作成する。 セミナー発表と討論 (1) セミナー発表と討論 (2) セミナー発表と討論 (3) セミナー発表と討論 (4) 実習課題の抽出と対策 (1) 実習課題の抽出と対策 (2) 実習課題の抽出と対策 (3) 臨床実習で必要とされた技術学習 (1) 臨床実習で必要とされた技術学習 (2) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (1) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (2) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (3) 基礎医学・専門分野の統合学習 (1) 基礎医学・専門分野の統合学習 (2) 							
<p style="text-align: right;">} 到達目標①②</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標③</p>							
評価基準・評価方法							
課題 (90%)、受講態度 (10%) を総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
「臨床実習要項」、実習に関連のあるテキスト。				適時必要に応じて配布する。			
備考							
学生間の活発な討議を期待する。質問は随時受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 作業治療学		作業療法総合セミナーⅢ (評価と介入②)			○加藤、河村、永井 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 「臨床実習Ⅲ」の体験から得た知識や技術を整理し、学生相互間による討議を重ねることで情報を共有すること、より質の高い介入ができるよう考えること、について学習を深めていく。他学生の情報は、自身が体験していない内容を補うことにも繋がり臨床領域の奥深さなどについても学習する。また、臨床で必要とされる専門分野に対する知識を深めていく。</p> <p><学修の到達目標> ①臨床の場で実施した作業療法プロセスを適切にまとめ報告・質疑に答えることができる。 ②作業療法的見地をもって質問および説明をすることができる。 ③臨床で必要とされた専門分野について整理し、理解を深めることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> セミナー前にレジュメを配付するため、事前に読み質問項目を抽出しておくこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> セミナー発表で得られた課題に対して、自身の学習を深められるよう取り組むこと。 <必要時間>課題の内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 8週間の作業療法プロセスをまとめたレポートよりセミナーでの検討資料を作成する。 セミナー発表と討論 (1) セミナー発表と討論 (2) セミナー発表と討論 (3) セミナー発表と討論 (4) 実習課題の抽出と対策 (1) 実習課題の抽出と対策 (2) 実習課題の抽出と対策 (3) 臨床実習で必要とされた技術学習 (1) 臨床実習で必要とされた技術学習 (2) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (1) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (2) 基礎医学・専門分野における知識と技術の整理 (3) 基礎医学・専門分野の統合学習 (1) 基礎医学・専門分野の統合学習 (2) 							
<p style="text-align: right;">} 到達目標①②</p> <p style="text-align: right;">} 到達目標③</p>							
評価基準・評価方法							
課題 (90%)、受講態度 (10%) を総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
「臨床実習要項」、実習で関連のあるテキスト。				適時必要に応じて配布する。			
備考							
学生間の活発な討議を期待する。質問は随時受け付ける。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門科目 地域作業療法学		地域作業療法学Ⅰ（制度・支援・連携）			○永井 貴士 市田 博子		准教授 助教
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 作業療法士が日本社会で生活するために、どのような活躍をすることができるのか、日本作業療法士協会が推進する「生活行為向上マネジメント（MTDLP）」を用いて、理解する。</p> <p><学修の到達目標> 「生活行為向上マネジメント（MTDLP）」を用いて、対象者を評価できる。 目標設定を通して関わり方を考えることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> Ⅱコマ目以降、前回の授業で学んだことを復習し、言葉の意味、評価の概要を理解した状態で臨めるようにしておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 言葉の概念を理解し記憶することと、演習の場合は、練習を通して、現象に対して深く考えることができるように繰り返し行っておくこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 日本作業療法士協会のねらいと、現在の日本の状況について 生活行為向上マネジメントとは 生活行為向上マネジメントの解説 その① 生活行為向上マネジメントの解説 その② 生活行為向上マネジメントを通じた事例の紹介 生活行為向上マネジメントの演習 その① 生活行為向上マネジメント 聞き取りシートの作成 生活行為向上マネジメント アセスメント演習シートの作成 生活行為向上マネジメント 生活行為向上プラン演習シートの作成 生活行為向上マネジメント サブシート 興味・関心チェックシートの作成 生活行為向上マネジメント サブシート 生活行為課題分析シートの作成 生活行為向上マネジメント 生活行為申し送り表の作成 生活行為向上マネジメントシート作成 (この時点で、目標をクリアすること) グループ発表 その① グループ発表 その② <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
<p>課題およびグループ活動への参加状況、課題への取組状況を加味して評定する。 課題提出により50%、定期試験で50%の合計で算定する。</p>							
使用教科書				参考図書			
日本作業療法士協会：事例で学ぶ生活行為向上マネジメント、医歯薬出版株式会社				必要に応じて、資料を配布する。			
備考							
卒業後、実践場面において必要であると日本作業療法士協会が提唱している技能である生活行為向上マネジメントが用いられるような能力を身につけられるよう、取り組むこと。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																									
専門科目 地域作業療法学		地域作業療法学Ⅱ（実践・就労支援）			加藤 清人 小森 健司	教授 非常勤講師																									
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																								
		理学	作業	視機能																											
必修			○		3年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）																								
選択																															
授業概要・学修の到達目標																															
<p><概要> 地域作業療法学Ⅱでは、通所施設や福祉施設、行政など地域で取り組まれている作業療法に対する理解を深める。また、就労支援をしていくために、職業や職業リハビリテーションの概略を学び、そのなかで作業療法の役割を考える。障害者の就労について理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①通所施設や福祉施設などの地域における作業療法の役割を説明できる。 ②職業リハビリテーションについて説明できる。 ③就労支援に対する評価・支援について説明できる。</p>																															
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																										
事前学習				事後学習																											
<p><内容> 授業計画を確認し、教科書を一読しておく。その際、わからないことを抽出しておくことよい。</p> <p><必要時間>課題の内容により変動</p>				<p><内容> 講義の際に、重点箇所について説明する。その内容を中心に学習すること。</p> <p><必要時間>課題の内容により変動</p>																											
授業計画																															
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. 地域作業療法を考える 2. 通所施設における作業療法の実際 3. 福祉施設における作業療法の実際 4. 行政・事業所レベルの作業療法の取り組み 5. 企業における作業療法の実際 6. 職業とは 7. 就労支援の原則と過程 8. 職業リハビリテーションとは 9. 職業リハビリテーションに関わる職種 10. 就労や職業に関する制度 11. 就労支援に関する評価（1） 12. 就労支援に関する評価（2） 13. 就労支援の実際（1）（小森） 14. 就労支援の実際（2）（小森） 15. キャリア発達の視点 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> <td colspan="4"></td> </tr> <tr> <td colspan="2"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標③</td> <td colspan="4"></td> </tr> </table>								1. 地域作業療法を考える 2. 通所施設における作業療法の実際 3. 福祉施設における作業療法の実際 4. 行政・事業所レベルの作業療法の取り組み 5. 企業における作業療法の実際 6. 職業とは 7. 就労支援の原則と過程 8. 職業リハビリテーションとは 9. 職業リハビリテーションに関わる職種 10. 就労や職業に関する制度 11. 就労支援に関する評価（1） 12. 就労支援に関する評価（2） 13. 就労支援の実際（1）（小森） 14. 就労支援の実際（2）（小森） 15. キャリア発達の視点	}	到達目標①								}	到達目標②							}	到達目標③				
1. 地域作業療法を考える 2. 通所施設における作業療法の実際 3. 福祉施設における作業療法の実際 4. 行政・事業所レベルの作業療法の取り組み 5. 企業における作業療法の実際 6. 職業とは 7. 就労支援の原則と過程 8. 職業リハビリテーションとは 9. 職業リハビリテーションに関わる職種 10. 就労や職業に関する制度 11. 就労支援に関する評価（1） 12. 就労支援に関する評価（2） 13. 就労支援の実際（1）（小森） 14. 就労支援の実際（2）（小森） 15. キャリア発達の視点	}	到達目標①																													
		}	到達目標②																												
		}	到達目標③																												
評価基準・評価方法																															
課題（90%）、受講態度（10%）																															
使用教科書				参考図書																											
・太田陸美、他：作業療法学全書〔改訂第3版〕第13巻 地域作業療法学（協同医書出版社）				必要に応じて資料を配布する																											
備考																															
質問は随時受け付ける。																															

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																									
専門科目		生活環境・福祉機器学			○市田 博子 中津川 匠 直井 圭佑	助教 非常勤講師 非常勤講師																									
地域作業療法学																															
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																								
		理学	作業	視機能																											
必修			○		2年次 後学期	2単位 (30時間)	講義 (オムニバス)																								
選択																															
授業概要・学修の到達目標																															
<p><概要> 障がい者の自立・社会参加を促すために、生活環境を物的・人的環境としてトータル的に捉え、調整する必要がある。その人らしい生活を送るためにどのような生活環境や福祉機器が必要かを学び、理解を深める。また、具体的なサポート内容を考察する。</p> <p><学修の到達目標> ①住宅の基本構造や介護保険等の住宅改修に関わる制度・法律について述べるができる。 ②福祉用具の構造や使用方法、ニーズに沿った選択ができるようになる。 ③モデルケースを通して、具体的改修案の立案を行い、地域生活支援を行う考え方を修得できる。</p>																															
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。																										
事前学習				事後学習																											
<p><内容> 次回講義予定に該当する部分の教科書を熟読する。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 住宅改修に必要な知識と作業療法の視点の復習をする。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>																											
授業計画																															
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. オリエンテーション、住環境整備とは（市田） 2. 住み慣れた地域で生活する重要性（市田） 3. 住環境に関わるニーズを探る（市田） 4. 環境整備に関わる制度と社会資源（市田） 5. 住宅・建築に関する基礎知識（市田） 6. 福祉用具の種類と選択①（中津川） 7. 福祉用具の種類と選択②（直井） 8. 住宅改修を考える①玄関（市田） 9. 住宅改修を考える②廊下（市田） 10. 住宅改修を考える③居室（市田） 11. 住宅改修を考える④トイレ（市田） 12. 住宅改修を考える⑤風呂（市田） 13. 発表準備（市田） 14. 発表①（市田） 15. 発表②（市田） 定期試験 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標①</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <td colspan="3"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標②</td> <td colspan="3"></td> </tr> <tr> <td colspan="3"></td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 2em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">目標③</td> <td colspan="3"></td> </tr> </table>								1. オリエンテーション、住環境整備とは（市田） 2. 住み慣れた地域で生活する重要性（市田） 3. 住環境に関わるニーズを探る（市田） 4. 環境整備に関わる制度と社会資源（市田） 5. 住宅・建築に関する基礎知識（市田） 6. 福祉用具の種類と選択①（中津川） 7. 福祉用具の種類と選択②（直井） 8. 住宅改修を考える①玄関（市田） 9. 住宅改修を考える②廊下（市田） 10. 住宅改修を考える③居室（市田） 11. 住宅改修を考える④トイレ（市田） 12. 住宅改修を考える⑤風呂（市田） 13. 発表準備（市田） 14. 発表①（市田） 15. 発表②（市田） 定期試験	}	目標①									}	目標②							}	目標③			
1. オリエンテーション、住環境整備とは（市田） 2. 住み慣れた地域で生活する重要性（市田） 3. 住環境に関わるニーズを探る（市田） 4. 環境整備に関わる制度と社会資源（市田） 5. 住宅・建築に関する基礎知識（市田） 6. 福祉用具の種類と選択①（中津川） 7. 福祉用具の種類と選択②（直井） 8. 住宅改修を考える①玄関（市田） 9. 住宅改修を考える②廊下（市田） 10. 住宅改修を考える③居室（市田） 11. 住宅改修を考える④トイレ（市田） 12. 住宅改修を考える⑤風呂（市田） 13. 発表準備（市田） 14. 発表①（市田） 15. 発表②（市田） 定期試験	}	目標①																													
			}	目標②																											
			}	目標③																											
評価基準・評価方法																															
<p>評価基準：レポートは、自宅環境でモデルケースを考えた場合に十分な基礎知識とアイデアで述べられることとする。発表は、態度やプレゼンテーション力、十分な知識・アイデアが含まれているかを評価対象とする。</p> <p>評価方法：定期試験（70%）、時間外レポート課題（20%）、発表・プレゼンテーション（各5%）</p>																															
使用教科書				参考図書																											
野村 歎他：OT・PTのための住環境整備論第2版、三輪書店、2016				福祉用具パンフレット（必要時に配布予定）																											
備考																															
<p>オフィスアワー：火曜日14～17時、その他講義中に質問の時間を取り、講義内または次回講義前に回答する。レポートは、評価後フィードバックを記載し返却する。</p> <p>住環境についての知識は膨大であり、予習・復習がなされ上で関心を持って考えることが重要な講義である。</p>																															

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅰ（基礎）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、浅野	—	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		1年次 後学期	1単位 (45時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床実習Ⅰ（基礎）の学習では、施設・病院での実習を3回実施する。「基礎演習」「作業療法概論」「作業療法治療技術理論」により学んだ作業療法士の役割、責任、医療人としてのマナーを経験する。それにより、自らの適性について考える。実習終了時には、学内報告会を実施する。</p> <p><学修の到達目標> 1. 作業療法士に必要とされる基本的態度を身につける。 2. 作業療法（士）に対する興味・関心、職業意識を高める。 3. 各領域（3領域）における作業療法について説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 実習前のオリエンテーションにて説明した内容を読み込んでおくこと。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 臨床実習を通して抽出された課題に対して、自己フィードバックの機会を持つこと。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：接遇に関する講義・実技を実施する。</p> <p>【身体障害領域】 施設実習（学外） 実習報告会（学内）</p> <p>【精神障害領域】 施設実習（学外） 実習報告会（学内）</p> <p>【老年期障害領域】 施設実習（学外） 実習報告会（学内）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>臨床実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果を基に総合的に判定する。 施設実習（80%）、実習報告会（20%）で評価する。</p>							
使用教科書				参考図書			
1年次に使用したすべてのテキスト 臨床実習要項				適時必要に応じて資料を配布する			
備考							
<p>社会（施設）での実習となる。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なるため、心がけること。実習では実習着（ケーシー服）を着用する。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		評価実習前セミナー			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、 浅野 他	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 評価実習前セミナーでは、臨床実習の準備段階として臨床実習に対応できる評価技術、知識の再確認を行う。学生は、模擬ケースを通して作業療法評価の流れを確認しながら知識・技術を経験する。また、レポート作成では、情報収集、作業療法評価、作業療法計画までの過程を通して症例の全体像を把握する。</p> <p><学修の到達目標> ①臨床実習にむけて基本的態度を身につけ意欲的に取り組むことができる。 ②臨床実習で対応できる評価技術を修得することができる。 ③症例（模擬症例）を担当し、作業療法評価を一通りまとめることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業計画を確認し、作業療法の過程について知識を深めておくこと。 <必要時間>課題内容により変動</p>				<p><内容> 技術の修得には反復練習が必要となる。演習が終了しても技術が身につくまで練習すること。 <必要時間>課題内容により変動</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. Advance OSCE オリエンテーション（授業計画、実習で求められる基本的態度） 2. Advance OSCE 評価計画 3. Advance OSCE 実施（1） 4. Advance OSCE 実施（2） 5. Advance OSCE 実施（3） 6. Advance OSCE 実施（4） 7. Advance OSCE 実施（5） 8. Advance OSCE 実施（6） 9. Advance OSCE ビデオフィードバック 10. 評価レポートの作成（1） 11. 評価レポートの作成（2） 12. 評価レポートの作成（3） 13. 評価レポートの作成（4） 14. 評価レポートの作成（5） 15. 評価レポートの作成（6） <div style="margin-left: 400px;">①②③</div>							
評価基準・評価方法							
受講態度（10%）、OSCE（60%）、レポート（30%）を総合的に評価する。 なお、AdvanceOSCE を行い、6割以下もしくは著しく評価の低い項目がみられた場合は確認試験を実施する。							
使用教科書				参考図書			
これまでに使用したすべてのテキスト 臨床実習要項 OSCEに関する配布資料				適時必要な資料は配布する。			
備 考							
臨床実習を想定して実施するため、学内ではあるが臨床実習で求められる基本的態度・マナーを心がけること。OSCE実施においては、実習に望ましい容姿・態度・服装（ケーシー服）にて臨むこと。実習は個々の臨床能力が要求されるため、主体的に取り組むこと、他学生と協力することを心がけること。担当教員の指示に従い、課題を進めること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅱ（評価）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		2年次 後学期	4単位 (180時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床実習Ⅱ（評価）の学習では、臨床実習指導者の指導のもと、基本的な評価方法を修得する。具体的には各検査の実施、検査結果を解釈し、問題点の抽出、ゴール立案までの流れを実践する。また、適切な記録、指導者への報告・連絡・相談といった作業療法士として必要な資質（態度）を身につけることを目指す。</p> <p><学修の到達目標> 1. 作業療法士としての基本的態度を身につける。 2. 対象者と良好な関係を築くことができる。 3. 作業療法評価の一連の流れを実践することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 作業療法評価、各治療学に関連するテキストを復習する。各評価測定の手順や解釈についても復習しておくこと。 <必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 各症例から得た検査結果を基に、どのような問題点（課題）が浮かび上がるのか一通り確認する。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：接遇に関する講義・実技を実施する。また、担当教員より実習で取り組む課題について随時指導を行う。 4週間（1月～3月の期間）の学外実習を実施する。 2年次までに必要な科目を修得した学生が、身体障害・精神障害・発達障害・老年期障害の分野から1学生1施設4週間の実習を行う。 臨床実習時間は、基本的には9：00～17：00であるが実習施設の就業時間に従う。 出席については、実習すべき全日数出席が原則で、何らかの事情で欠席を重ね、実習をすべき日数に満たない場合は評価不能とする。</p>							
評価基準・評価方法							
臨床実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果を基に総合的に判定する。評価表の項目として、社会的態度（20%）、作業療法評価の遂行度（80%）とする。							
使用教科書				参考図書			
これまでに使用したすべてのテキスト 臨床実習要項				適時必要に応じて資料を配布する			
備考							
臨床実習Ⅱ実施にあたり、事前オリエンテーションを行うので必ず出席すること。 社会（施設）での実習となる。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なるため、心がけること。実習では実習着（ケーシー服）を着用する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅲ（総合前期）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 前学期	7単位 (315時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床実習Ⅲ（総合前期）の学習では、これまでに学んだ基本的な評価方法を用い、作業療法計画立案、さまざまな医療現場の活動参加を实践する。また、必要に応じ作業療法計画の変更、他部門からの情報収集、記録・報告、医療従事者としての適切な人間関係の構築などより実践的な内容を臨床実習指導者のもとで学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対象者ならびに施設スタッフとの良好な人間関係を築くことができる。 2. 作業療法評価・アプローチを一通り実践することができる。 3. 施設の管理・運営について考えることができる。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 作業療法評価、各治療学に関連するテキストを復習する。 <必要時間>各回120分程度</p>				<p><内容> 「検査結果⇒課題の抽出」までのプロセスに加え、予後予測、リスク管理、治療法について修得する。 <必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報保護などの一通り確認する。実習に必要とされる実技練習を行う。また、担当教員より実習で取り組む課題について随時指導を行う。</p> <p>8週間（5月～7月の期間）の学外実習を実施する。</p> <p>臨床実習Ⅱを修得した学生が、身体障害・精神障害・発達障害・老年期障害の分野から1学生1施設8週間の実習を行う。</p> <p>具体的な内容として、1学生1～2名の症例を担当する。担当症例に関する情報収集、作業療法評価の実施、課題の抽出、実習指導者の指導を仰ぎながら作業療法治療計画の立案、実施を行う。</p> <p>臨床実習時間は、基本的には9：00～17：00であるが実習施設の就業時間に従う。</p> <p>出席については、実習すべき全日数出席が原則で、何らかの事情で欠席を重ね、実習をすべき日数に満たない場合は評価不能とする。</p> <p>実習報告会：学生間の報告と意見交換を実施する。レジュメを作成し発表を行う。</p>							
評価基準・評価方法							
臨床実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果を基に総合的に判定する。評価表の項目として、社会的態度（20%）、作業療法評価の遂行度（80%）とする。							
使用教科書				参考図書			
これまでに使用したすべてのテキスト 臨床実習要項				適時必要に応じて資料を配布する			
備考							
臨床実習Ⅲ実施にあたり、事前オリエンテーションを行うので必ず出席すること。 社会（施設）での実習となる。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なるため、心がけること。実習では実習着（ケシー服）を着用する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 臨床実習		臨床実習Ⅳ（総合後期）			○加藤、河村、永井、 世良、竹中、市田、浅野	-	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○		3年次 後学期	7単位 (315時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床実習Ⅳ（総合後期）の学習では、病院・施設においてゴール設定までの作業療法評価に加え、臨床実習指導者による指導のもと作業療法計画の作成とさまざまな医療現場の活動に参加する。また、これまでに学んだ臨床的な思考過程を更に発展させる。</p> <p><学修の到達目標> 1. 対象者ならびに施設スタッフとの良好な人間関係を築くことができる。 2. 作業療法評価・アプローチを実践することができる。 3. 施設の管理・運営について考えることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.21のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 作業療法評価、各治療学に関連するテキストを復習する。</p> <p><必要時間>各回120分程度</p>				<p><内容> 臨床実習Ⅲでの内容に加え、疾患や領域を加味して更に分析ができるように学習を進める。多様な臨床思考過程を磨けるようにすること。</p> <p><必要時間>各回60分程度</p>			
授業計画							
<p>実習前オリエンテーション（学内）：実習の目的、手順、心得、マナー、感染予防、個人情報保護などの一通り確認する。実習に必要なとされる実技練習を行う。また、担当教員より実習で取り組む課題について随時指導を行う。</p> <p>8週間（10月～12月の期間）の学外実習を実施する。 臨床実習Ⅱを修得した学生が、身体障害・精神障害・発達障害・老年期障害の分野から1学生1施設8週間の実習を行う。 具体的な内容として、1学生1～2名の症例を担当する。担当症例に関する情報収集、作業療法評価の実施、課題の抽出、実習指導者の指導を仰ぎながら作業療法治療計画の立案、実施を行う。 臨床実習時間は、基本的には9：00～17：00であるが実習施設の就業時間に従う。 出席については、実習すべき全日数出席が原則で、何らかの事情で欠席を重ね、実習をすべき日数に満たない場合は評価不能とする。 実習報告会：学生間の報告と意見交換を実施する。レジュメを作成し発表を行う。</p>							
評価基準・評価方法							
臨床実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果を基に総合的に判定する。評価表の項目として、社会的態度（20%）、作業療法評価の遂行度（80%）とする。							
使用教科書				参考図書			
これまでに使用したすべてのテキスト 臨床実習要項				適時必要に応じて資料を配布する			
備考							
臨床実習Ⅳ実施にあたり、事前オリエンテーションを行うので必ず出席すること。 社会（施設）での実習となる。身嗜み、言葉使い、規則などが学内とは異なるため、心がけること。実習では実習着（ケーシー服）を着用する。							

リハビリテーション学科

視機能療法専攻

◎リハビリテーション学科視機能療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ	
専門 基礎 科目	人体の構造	解剖学Ⅰ（骨・筋肉・循環・内分泌・消化器系）	1年次前学期	江村正一	193
		解剖学Ⅱ（神経系）	1年次後学期	松井康樹	194
	人体の機能	生理学Ⅰ（動物的機能）	1年次前学期	川島 卓	195
		生理学Ⅱ（植物的機能）	1年次後学期	川島 卓	196
	心身の発達	人間発達学	1年次前学期	大森正英	197
		保育学	1年次前学期	松野裕子	198
	疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進	病理学概論	1年次後学期	松井永子	199
		健康と保健 ※	1年次前学期	三品弘司、白田成之	200
		幾何光学	1年次後学期	仲澤和馬	201
		医療統計学	1年次前学期	山田雅博	202
		一般臨床医学 ※	2年次前学期	近藤直実、熊田ますみ、横井達夫、 伊藤八次、田辺久美子、山本容正	203
		神経内科学 ※	2年次前学期	下畑享良、木村暁夫、林 祐一、 山田 恵、吉倉延亮、竹腰 顕	204
		精神医学	2年次前学期	宮地幸雄	205
		臨床心理学	2年次前学期	高橋晋也	206
	視覚機能の基礎と 検査機器	視器の解剖と生理学Ⅰ（眼球・眼球付属器他）	1年次前学期	田中健司	207
		視器の解剖と生理学Ⅱ（視路・眼運動系他）	1年次後学期	田中健司	208
		視器の病理学	2年次前学期	大庭紀雄、河合健司	209
		視覚生理学Ⅰ（基礎）	1年次後学期	松井康樹	210
		生理光学Ⅰ（基礎）	1年次前学期	松田育子	211
		視機能検査学概論	1年次前学期	宮本安住巳	212
視機能検査学Ⅰ（眼科一般検査） ※		2年次前学期	丹沢慶一、松田育子、田中健司、 佐藤奈美	213	
視機能検査学Ⅱ（眼位検査）		2年次前学期	野原尚美	214	
視機能検査学Ⅲ（両眼視機能検査）		2年次後学期	野原尚美	215	
保健医療福祉と視能障害 のリハビリテーションの 理念	公衆衛生学	2年次後学期	大森正英	216	
	社会福祉学	1年次後学期	竹内章郎	217	
	医療安全管理学	1年次後学期	伊川順子	218	
	医学概論	1年次後学期	千田隆夫	219	
	障害者概論	1年次前学期	高平利男	220	
	視覚障害リハビリテーション ※	2年次後学期	棚橋公郎、池谷尚剛、川瀬和秀	221	

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

◎リハビリテーション学科視機能療法専攻

◆専門教育科目◆

科目区分	科目名	開講時期	教員名	ページ
基礎視能矯正学	視機能療法学概論	1年次前学期	宮本安住己	223
	基礎視機能矯正学Ⅰ（眼球運動、他）	1年次後学期	田中健司	224
	基礎視機能矯正学Ⅱ（眼位、両眼視）	1年次後学期	野原尚美	225
	視覚生理学Ⅱ（応用）	2年次前学期	松井康樹、枝川宏	226
	生理光学Ⅱ（眼球光学）	1年次後学期	松田育子	227
	生理光学Ⅲ（屈折・調整）	2年次前学期	松田育子、中村友昭、磯谷尚輝	228
	薬理学	2年次前学期	田中宏幸	229
	基礎視機能矯正学特論Ⅰ（解剖と生理、視覚生理）	3年次後学期	松井康樹	230
	基礎視機能矯正学特論Ⅱ（生理光学）	3年次後学期	松田育子	231
	視機能療法学実験研究	3年次後学期	大庭紀雄	232
	医療情報学	3年次後学期	大庭紀雄、可見一孝	233
視能検査学	視覚生理学演習Ⅰ（視野検査他）	2年次前学期	田中健司、松井康樹、佐藤奈美、丹沢慶一	234
	視覚生理学演習Ⅱ（電気生理）	2年次後学期	田中健司、丹沢慶一、松井康樹	235
	生理光学演習Ⅰ（屈折検査）	2年次前学期	松田育子、田中健司、丹沢慶一、佐藤奈美	236
	生理光学演習Ⅱ（屈折矯正）	2年次後学期	松田育子、田中健司、佐藤奈美、丹沢慶一	237
	眼薬理学	2年次前学期	大庭紀雄、河合健司	238
	視機能検査学演習Ⅰ（眼科一般検査）	2年次前学期	野原尚美、丹沢慶一、佐藤奈美	239
	視機能検査学演習Ⅱ（両眼視機能検査）	2年次後学期	佐藤奈美、松井康樹、丹沢慶一、野原尚美	240
	視機能検査学演習Ⅲ（眼位検査）	2年次後学期	松井康樹、野原尚美、松田育子、田中健司、佐藤奈美、丹沢慶一	241
	視機能検査学演習Ⅳ（眼運動系検査）	2年次後学期	松井康樹、宮本安住己、野原尚美、丹沢慶一	242
	画像診断学	2年次前学期	田中健司、松井康樹	243
視能障害学	眼疾病学Ⅰ（眼球、眼球付属器他）	2年次前学期	河合健司、望月清文、内田英哉、石澤聡子	244
	眼疾病学Ⅱ（遺伝性眼疾患、小児眼疾患他）	2年次後学期	河合健司、内田英哉、宇土一成、澤田 明	245
	神経眼科学	2年次後学期	大庭紀雄、丹沢慶一	246
	視機能障害学Ⅰ（神経疾患、前眼部疾患他）	2年次前学期	松井康樹	247
	視機能障害学Ⅱ（網脈絡膜疾患、視路疾患他）	2年次後学期	松井康樹	248
	視機能障害学特論	3年次後学期	説田雅典	249
視能訓練学	視機能療法関係法規	2年次前学期	宮本安住己	250
	視機能訓練学概論	1年次後学期	宮本安住己	251
	視機能訓練学Ⅰ（視機能訓練学、基礎）	2年次後学期	野原尚美	252
	視機能訓練学Ⅱ（視機能訓練学、斜視）	2年次後学期	丹沢慶一	253
	視機能訓練学Ⅲ（視機能訓練学、弱視）	2年次後学期	佐藤奈美	254
	視機能訓練学Ⅳ（視機能訓練学、ロービジョン）	3年次前学期	田中健司、丹沢慶一	255
	視機能訓練学Ⅴ（視機能訓練学、総括）	3年次後学期	大庭紀雄	256
	視機能訓練学演習	2年次前学期	松井康樹、野原尚美、松田育子、丹沢慶一、佐藤奈美、田中健司	257
	視機能訓練学特論Ⅰ	3年次後学期	宮本安住己	258
	視機能訓練学特論Ⅱ	3年次後学期	野原尚美	259
臨地実習	臨地実習Ⅰ	2年次後学期	野原尚美 他	260
	臨地実習Ⅱ	3年次通年	野原尚美 他	261

注) 科目名欄の後ろの※は、オムニバス方式の科目

リハビリテーション学科

視機能療法専攻

専門基礎科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の構造		解剖学Ⅰ (骨・筋肉・循環・内分泌・消化器系等)			江村 正一	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 医学の基礎である人体解剖学の基礎知識を学習する。人体の構造と機能を理解することは、今後の専門分野の科目を学ぶための基礎となる。解剖学Ⅰでは、細胞と組織・運動器・循環器・呼吸器・消化器・内分泌腺・泌尿器・生殖器について学習する。</p> <p><学修の到達目標> 細胞と組織・運動器・循環器・呼吸器・消化器・内分泌腺・泌尿器・生殖器について理解することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当する部分を丁寧に読み、それぞれの章で何を学ばよいか、何を学びたいかを、記録しておく。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 事前学習で疑問に思ったことは理解・納得できたかを確認する。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 解剖生理学総論、人体の素材としての細胞・組織について 2. 骨の構造Ⅰ／上肢・下肢骨について 3. 骨の構造Ⅱ／脊柱・骨盤・頭蓋骨について 4. 筋の構造Ⅰ／上肢・下肢の筋について 5. 筋の構造Ⅱ／体幹の筋について 6. 循環器系Ⅰ／心臓について 7. 循環器系Ⅱ／動脈について 8. 循環器系Ⅲ／静脈・門脈・リンパ管について 9. 呼吸器系／鼻・喉頭・気管・肺について 10. 消化器系Ⅰ／口腔・食道・胃・小腸・大腸について 11. 消化器系Ⅱ／肝臓・胆嚢・膵臓について 12. 内分泌腺／視床下部・下垂体・甲状腺・上皮小体・副腎について 13. 尿生殖器Ⅰ／泌尿器について 14. 尿生殖器Ⅱ／生殖器について 発生・男女生殖器について 15. 各器官が密接な関係にあることを理解する <p>筆記試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験結果（100%）							
使用教科書				参考図書			
入門人体解剖学 藤田恒夫著 改訂第5版 南江堂				適宜、参考資料を配布する。			
備考							
<p>試験の模範解答を掲示する。 E-mail s.emura@heisei-iryuu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		解剖学Ⅱ（神経系）			松井 康樹	教授	
人体の構造							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>解剖学Ⅱ（神経系）では、神経系を中心に学習する。神経系は脳（大脳、小脳、脳幹）と脊髄からなる中枢神経系と中枢からの指令を筋肉などの臓器に伝えたり、末梢からの情報（視覚、聴覚）を中枢に伝える末梢神経系（脳神経、脊髄神経）に分けられる。視能訓練士は、視覚システムの障害を検査する仕事であり、神経系について理解をすることが必要である。この科目では、脳と神経、視覚系のシステムについて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 脳（大脳、小脳、脳幹）の構造と機能についてわかる。 2. 12神経について知っている。 3. 中枢神経と末梢神経についてわかる。 4. 視覚系（膝状体視覚系と膝状体外視覚系）についてわかる。 5. 視覚に関する神経細胞、神経系について判る。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書を利用し、次回講義の内容を詳細に調べ、理解する。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 振り返り学習で疑問点等を解消すること</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経系の構成、脳（大脳、小脳、脳幹） 2. 中枢神経系、末梢神経系、脊髄、 3. 脳幹、小脳、間脳、大脳基底核、大脳皮質、辺縁系 4. 感覚系、体性感覚系、運動系 5. 神経細胞の種類、構造、機能 6. 神経細胞の生理（静止電位と活動電位）、神経伝達物質 7. 視覚入力系Ⅰ、網膜の細胞、網膜神経節細胞 8. 視覚入力系Ⅱ、神経線維の走行 9. 視覚入力系Ⅱ、視路、視覚連合野 10. 視知覚、認知統合系、Parvocellular system、Magnocellular system 11. 眼球運動神経、動眼神経、滑車神経 12. 眼球運動神経、三叉神経、外転神経、顔面神経、 13. 眼球運動神経経路、皮質中枢、皮質下中枢 14. 眼の自律神経、調節、対光反射 15. 眼の自律神経、調節、対光反射 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験80%、小テスト20%							
使用教科書				参考図書			
マーティン 神経解剖学 テキストとアトラス ジョン・H・マーティン 著（西村書店）							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 人体の機能		生理学 I (動物的功能)			川島 卓	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○	○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 生理学の外界に対して反応する機能(動物的功能)全般について講義する。 特に視覚・眼球運動を中心にそのほかの感覚・運動との関連に関しても基礎的知識の獲得を目指す。</p> <p><学修の到達目標> ①末梢神経系と中枢神経系の理解及び感覚情報から眼球運動・四肢運動を引き起こす生体機構・機能の理解ができる。 ②正常生理機能の理解と同時に、神経障害などに伴う各種病態症状についての原因を正しく理解することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間を利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 生理学について	細胞機能の基礎	体液組成、細胞の構造、細胞の物質移動					
2. 細胞の興奮発生	神経細胞	興奮移動	膜電位	興奮の伝導			
3. 筋の収縮	骨格筋の構造	筋肉の収縮	筋収縮力学	筋のエネルギー発生メカニズム			
4. シナプス伝達	神経筋伝達	平滑筋・中枢神経系の情報伝達	神経伝達物質	シナプスの可塑性			
5. 自立神経系	交感神経・副交感神経の内臓諸器官への作用	(散瞳・縮瞳との関連性)					
6. 脊髄 脳幹	脊髄反射	誘発筋電図	脳幹の姿勢反射	(視覚との関連性)			
7. 小脳①	小脳の神経回路	(視覚や眼球運動との関連)		小脳と大脳の協調	小脳学習		
8. 小脳② 大脳基底核	小脳障害	(眼球運動との関連等)		基底核の神経経路	基底核障害		
9. 大脳	運動の起動と出力	運動野	大脳の眼球運動領域		体性感覚		
10. 感覚	味覚 臭覚 聴覚 前庭感覚						
11. 視覚①	眼球の光学系	網膜と視物質					
12. 視覚②	網膜 視物質	視覚の中枢					
13. 視覚③	眼球運動	視覚誘発電位					
14. 脳の高次機能1	大脳の神経回路と機能	連合野機能	(特に視覚との関連)		言語機能		
15. 脳の高次機能2	大脳辺縁系	視床下部	記憶	睡眠	脳波	学習	
定期試験							
評価基準・評価方法							
定期試験の成績を主体(90%以上)に、授業中の質疑態度なども加えて成績評価をおこなう。							
使用教科書				参考図書			
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				・神経科学-脳の探求 ベヤーズ 他 西村書店 ・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著/理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院			
備 考							
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名																														
専門基礎科目 人体の機能		生理学Ⅱ（植物的機能）			川島 卓		非常勤講師																														
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態																														
		理学	作業	視機能																																	
必修			○	○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義																														
選択																																					
授業概要・学修の到達目標																																					
<p><概要> 生理学の生命維持に関する機能（植物的機能）全般について講義する。</p> <p><学修の到達目標> 生命機能維持にはどうしても必要な人体の植物的機能の知識と理解を深める。これを学ぶことにより病態症状の原因を正確に理解ができるようになる。同時にいろいろな専門科目の習得のための基礎知識となる。</p>																																					
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。																																
事前学習				事後学習																																	
<p><内容> 授業の予習として30分程度教科書と事前配布プリントを読んでおくこと。予備的知識を持っていることは授業内容の理解のためには、最も効果的である。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業後ノートを整理し、疑問点などを明らかにしておく。疑問点や不明な個所についてはその後の授業時間後の時間などを利用して遠慮なく質問する事。 <必要時間>各回60分</p>																																	
授業計画																																					
<table border="0"> <tr> <td>1. 血液①</td> <td>血漿と血漿タンパク質 赤血球</td> </tr> <tr> <td>2. 血液②</td> <td>白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解</td> </tr> <tr> <td>3. 心臓①</td> <td>心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節</td> </tr> <tr> <td>4. 心臓②</td> <td>心筋の収縮 心電図 心臓の収縮</td> </tr> <tr> <td>5. 循環①</td> <td>血管系の区分 血圧調節</td> </tr> <tr> <td>6. 循環②</td> <td>静脈系の循環 動脈血圧 循環調節 特殊部位の循環</td> </tr> <tr> <td>7. 呼吸①</td> <td>呼吸のメカニズム</td> </tr> <tr> <td>8. 呼吸②</td> <td>肺のガス交換 呼吸運動の調節</td> </tr> <tr> <td>9. 消化と吸収①</td> <td>消化管の構造と神経支配 消化管運動</td> </tr> <tr> <td>10. 消化と吸収②</td> <td>消化液の分泌 栄養素の分解吸収</td> </tr> <tr> <td>11. 内分泌①</td> <td>ホルモン 視床下部 下垂体の機能</td> </tr> <tr> <td>12. 内分泌②</td> <td>甲状腺 副腎 膵臓（特に糖尿尿に関連したインスリン機能） 性ホルモン</td> </tr> <tr> <td>13. 腎機能</td> <td>ネフロン構造 糸球体ろ過 体液調節</td> </tr> <tr> <td>14. 生殖</td> <td>男性・女性生殖生理 妊娠</td> </tr> <tr> <td>15. 酸塩基平衡・代謝と栄養・日常の生理学</td> <td></td> </tr> </table> <p>定期試験</p>								1. 血液①	血漿と血漿タンパク質 赤血球	2. 血液②	白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解	3. 心臓①	心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節	4. 心臓②	心筋の収縮 心電図 心臓の収縮	5. 循環①	血管系の区分 血圧調節	6. 循環②	静脈系の循環 動脈血圧 循環調節 特殊部位の循環	7. 呼吸①	呼吸のメカニズム	8. 呼吸②	肺のガス交換 呼吸運動の調節	9. 消化と吸収①	消化管の構造と神経支配 消化管運動	10. 消化と吸収②	消化液の分泌 栄養素の分解吸収	11. 内分泌①	ホルモン 視床下部 下垂体の機能	12. 内分泌②	甲状腺 副腎 膵臓（特に糖尿尿に関連したインスリン機能） 性ホルモン	13. 腎機能	ネフロン構造 糸球体ろ過 体液調節	14. 生殖	男性・女性生殖生理 妊娠	15. 酸塩基平衡・代謝と栄養・日常の生理学	
1. 血液①	血漿と血漿タンパク質 赤血球																																				
2. 血液②	白血球 免疫 血液型 血小板 血液凝固 線維素溶解																																				
3. 心臓①	心臓の構造 心臓内伝導系 自律神経による調節																																				
4. 心臓②	心筋の収縮 心電図 心臓の収縮																																				
5. 循環①	血管系の区分 血圧調節																																				
6. 循環②	静脈系の循環 動脈血圧 循環調節 特殊部位の循環																																				
7. 呼吸①	呼吸のメカニズム																																				
8. 呼吸②	肺のガス交換 呼吸運動の調節																																				
9. 消化と吸収①	消化管の構造と神経支配 消化管運動																																				
10. 消化と吸収②	消化液の分泌 栄養素の分解吸収																																				
11. 内分泌①	ホルモン 視床下部 下垂体の機能																																				
12. 内分泌②	甲状腺 副腎 膵臓（特に糖尿尿に関連したインスリン機能） 性ホルモン																																				
13. 腎機能	ネフロン構造 糸球体ろ過 体液調節																																				
14. 生殖	男性・女性生殖生理 妊娠																																				
15. 酸塩基平衡・代謝と栄養・日常の生理学																																					
評価基準・評価方法																																					
①定期試験の成績（90%以上）に授業中の質疑態度などを加えて総合的に判断して成績評価をおこなう。																																					
使用教科書				参考図書																																	
生理学テキスト第8版 大地陸男著 文光堂				<ul style="list-style-type: none"> ・コメディカル 専門基礎科目シリーズ 「生理学」 桑名俊一 荒田晶子 編著／理工図書 ・標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 岡田隆夫、長岡正範 医学書院 																																	
備考																																					
教科書以外に、関連項目のプリントを適宜配布する。																																					

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		人間発達学			大森 正英	非常勤講師	
心身の発達							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 人間の胎生期から老年期までの身体的発達と心理的発達の主要な現象を取り上げ講義する。新生児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、中年期、老年期の基本的な特徴について、生物学的な面のみならず社会とのかかわりの中で複雑に発達していく過程に関する理解を深め、医療関係者として必要な知識、応用技術を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①人間の発達段階の特徴を理解する②小児期の重要性を広く理解する③発達と環境、文化との関連を正しく認識する④青年期の特徴と重要性について理解を深める⑤中年期～老年期の変化の実態を把握する⑥学んだ知識を実生活ならびに医療関連の仕事に生かす この授業は卒業認定・学位授与に必要。カリキュラムマップを参照すること。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 特に指定した時以外は必要ないが、素早い書写能力を鍛えておくこと。板書したものをただ書き写すだけでなく、講義内容をもどんどん書き込んで充実したノートを作成することを望みたい。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> この講義は幅広く生物学、小児科学、医学、心理学、社会科学など多岐にわたる内容からなり、ノートに書く量も多いので、1回ごとに内容を確認し、復習しておくこと。 <必要時間>各回40分以上</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の発達の特徴 ①、⑥ 2. 人間の本能と行動 ①、③ 3. 胎生期から誕生へ ①、② 4. 乳幼児の発育と発達 ①、②、③ 5. 子どもの身体発育発達に影響する因子 ②、③ 6. 身体発育の指標 ①、②、③ 7. 子どもの心の発達 ①、②、③ 8. 幼児～学童の運動機能 ①、② 9. 小児栄養 ①、②、⑥ 10. 小児期の発達障害、疾病 ①、⑥ 11. 青年期の身体的、心理的発達 ①、④ 12. 中年期における心身の変化と人間としての成長、発達 ①、⑤ 13. 老年期における心身の変化と日常生活 ⑤、⑥ 14. 老化の進展と健康 ①、⑤、⑥ 15. 超高齢社会の人間発達学 ①、⑤、⑥ <p>定期試験</p>							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
<p>評価基準：専門的な知識の修得と講義内容の理解を重視。専門用語を用いて現象を理解し、説明する能力を評価する。従って、試験問題には、記述問題を半数出題する。評価方法：筆記試験ならびに適時提出を求める課題（レポート）によって行う。評価割合はそれぞれ90%、10%</p>							
使用教科書				参考図書			
竹下研三著：人間発達学 ヒトはどう育つのか 2009年 中央法規 ISBN978-4-8058-3096-3				その都度、講義時間に紹介する。			
備 考							
<p>修得すべき知識が多いので、個々の知識を体系化し、相互に関連づけて記憶するように努めること。課題や試験問題に対する解説はその都度行う。在学時の質問は随時、受け付ける。メール等による質問も歓迎するが、学務課経由でお願いしたい。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名																
専門基礎科目		保育学			松野 裕子	非常勤講師																
心身の発達																						
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態															
		理学	作業	視機能																		
必修				○	1年次 前学期	2単位 (30時間)	講義															
選択																						
授業概要・学修の到達目標																						
<p><概要>テーマ：子どもの多様な姿や育ちを知る。 子どもを取り巻く現代社会には、様々な問題が起こってきている。特に、医学の面では困難さを抱えた親子に対応するという臨床にならざるを得ない学生たちであるので、子ども自身の姿を理解し、その困難さに対応していく為には、子どもの理解だけではなく、子どもの生活そのものに関わる全ての領域について理解するために視野を広げていくことが求められる。 そのために、本授業では子どもを取り巻く様々な領域の学びから子どもとその保護者を温かいまなざしで包みこみながら治療していける医療人になることを視野に入れながら、子ども学を総合的に学んでいく。</p> <p><学修の到達目標> ①子どもの心と体や健康について理解を深める。②一人ひとりの子どもや保護者などの心に寄り添った対応ができる為のコミュニケーションスキルを学び実践できる。③子どもに関わる現場で、実際に視能訓練に関わる実習を体験し、早期発見・治療・予防の観点からの視機能スクリーニングの在り方を学び実践できる。</p>																						
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。																	
事前学習				事後学習																		
<p><内容> 下記の課題は、800字程度に自分の考えをレポートにしてまとめる。 1. 視能訓練士になるためには、なぜ、子どもを知ることが求められるのかについて考える。 2. 子どもの治療・訓練には、保護者との信頼関係が欠かせないことの意味を考える。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 実習終了後、その都度、学習したことをレポートにまとめ、考察する。 1. 初めて、子どもと保護者に接して、どのようなことに気がついたのかを明らかにし、今後の自分への課題を見出す。 2. 治療訓練の実習後、具体的にどのようなことから、その課題に到達したのかについて、第三者にも分かるように文章であらわし省察する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>																		
授業計画																						
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. はじめに（オリエンテーション） 2. 子どもとは（子ども観） 3. 子どもと法令（子どもと基本的人権） 4. 子どもと教育（学びの連続性） 5. 子どもと保護者の関係 6. 乳児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・対人関係の形成など） 7. 幼児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・社会性の発達など） 8. 学童期の子ども（思考の発達・学童期ならではの発達課題など） 9. 子どもと遊び（子どもと遊びの関係、遊び空間など） 10. 子どもにまつわる問題その1（子どもが育つ社会環境） 11. 子どもにまつわる問題その2（親子関係を含む対人関係） 12. 実習計画の立案 13. 保育現場での実地研修（A班・B班に分かれての実習） 14. 実習でのふりかえり その1 15. 実習でのふりかえり その2 </td> <td style="vertical-align: middle; font-size: 3em;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標①</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標②</td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">}</td> <td style="vertical-align: middle;">到達目標③</td> </tr> </table>								1. はじめに（オリエンテーション） 2. 子どもとは（子ども観） 3. 子どもと法令（子どもと基本的人権） 4. 子どもと教育（学びの連続性） 5. 子どもと保護者の関係 6. 乳児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・対人関係の形成など） 7. 幼児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・社会性の発達など） 8. 学童期の子ども（思考の発達・学童期ならではの発達課題など） 9. 子どもと遊び（子どもと遊びの関係、遊び空間など） 10. 子どもにまつわる問題その1（子どもが育つ社会環境） 11. 子どもにまつわる問題その2（親子関係を含む対人関係） 12. 実習計画の立案 13. 保育現場での実地研修（A班・B班に分かれての実習） 14. 実習でのふりかえり その1 15. 実習でのふりかえり その2	}	到達目標①	}	}	到達目標②	}	}	到達目標②	}	}	到達目標②	}	}	到達目標③
1. はじめに（オリエンテーション） 2. 子どもとは（子ども観） 3. 子どもと法令（子どもと基本的人権） 4. 子どもと教育（学びの連続性） 5. 子どもと保護者の関係 6. 乳児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・対人関係の形成など） 7. 幼児期の子ども（認知・思考の発達・情緒の発達・社会性の発達など） 8. 学童期の子ども（思考の発達・学童期ならではの発達課題など） 9. 子どもと遊び（子どもと遊びの関係、遊び空間など） 10. 子どもにまつわる問題その1（子どもが育つ社会環境） 11. 子どもにまつわる問題その2（親子関係を含む対人関係） 12. 実習計画の立案 13. 保育現場での実地研修（A班・B班に分かれての実習） 14. 実習でのふりかえり その1 15. 実習でのふりかえり その2	}	到達目標①																				
}	}	到達目標②																				
}	}	到達目標②																				
}	}	到達目標②																				
}	}	到達目標③																				
評価基準・評価方法																						
定期試験（70％）・レポート（20％）・授業の取り組み（10％）などを総合的に評価する。																						
使用教科書				参考図書																		
「実践を創造する演習・保育内容総論」豊田和子編著 第2版（株）みらい 2018年発行				「子ども学概論」稲垣由子著（株）丸善プラネット2012年初版発行																		
備考																						

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		病理学概論			松井 永子	臨床教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修			○	○	1年次 後学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 病気を引き起こす原因を、病気の捉え方の歴史的移り変わりとともに概論する。ついで、病気の状態を、退行性病変、進行性病変、代謝異常、循環障害、免疫、炎症、感染症、腫瘍、放射線障害、老化、先天異常に分類し、それぞれの病的状態にみられる変化を解説する。</p> <p><学修の到達目標> この講義により、担当する患者さんの病態を理解し、より効果的な作業療法、視機能訓練につながることを目標とする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の当該箇所を読み、概要を理解する。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>				<p><内容> 配布プリントを利用しながら、内容の理解と習得をはかる。</p> <p><必要時間>各回30分程度</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 病理学概論および病因論 2. 退行性病変 3. 進行性病変 4. 代謝異常① 5. 代謝異常② 6. 循環障害① 7. 循環障害② 8. 免疫 9. 炎症 10. 感染症 11. 腫瘍① 12. 腫瘍② 13. 放射線障害 14. 老化 15. 先天異常、奇形 定期試験 							
評価基準・評価方法							
期末試験（80%）および授業中のレポート（20%）で成績評価を行う。							
使用教科書				参考図書			
小林正伸著「なるほど なっとく！ 病理学病態形成の基本的なしくみ」 南山堂							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		健康と保健			○三品 弘司 白田 成之	教授 助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 学生が健康に関心を持ち理解を深めることで、健康に影響を及ぼす諸要因と日常生活における健康管理の具体的方法を学習する。</p> <p><学修の到達目標> ① 生涯にわたる健康管理に必要な基本的考え方を身につける ② 心身の健康に影響を及ぼす諸要因と対処方法を理解できる ③ 日頃の生活習慣を見直し、健康管理の具体的方法について検討することができる ④ 医療従事者として不可欠な一次救命処置に関する知識と技術を修得する</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・事前にテキストを読んてくること</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> ・プリントおよび教科書等で再度学習すること。</p> <p><必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
1. 健康的な生活習慣について（睡眠、食生活、運動習慣）①				(三品)		} 到達目標②	
2. 健康的な生活習慣について（睡眠、食生活、運動習慣）②				(三品)			
3. ストレスとストレスマネジメント				(白田)		} 到達目標①	
4. コミュニケーション、アサーション				(白田)			
5. 大学生によくみられるところの病気①(統合失調症、気分障害)				(白田)			
6. 大学生によくみられるところの病気②(摂食障害、アルコール依存症)				(三品)		} 到達目標④	
7. 大学生によくみられるところの病気③(適応障害、強迫性障害、その他の精神疾患)				(三品)			
8. 救急時の対応①				(三品・白田)			
9. 救急時の対応②				(三品・白田)		} 到達目標②	
10. 救急時の対応③				(三品・白田)			
11. 薬物乱用				(三品・白田)		} 到達目標③	
12. ギャンブル依存症、インターネット依存症、スマホ依存症				(白田)			
13. 性感染症				(白田)		} 到達目標②	
14. ひきこもり、不登校、いじめ問題				(三品)			
15. 自分の生活習慣を見直し、解決すべき健康課題を見つける 定期試験（筆記）				(三品)		} 到達目標③	
評価基準・評価方法							
レスポンスカード20%、授業中の参加状況10%、プレゼンテーション10%、筆記試験60%							
使用教科書				参考図書			
・山本真由美監修：大学生の健康ナビーキャンパスライフの健康管理<2018>-、岐阜新聞社、2018年。 ・救命救急テキスト（講義で配布）				・島悟：ストレスマネジメント入門、日本経済新聞出版社、2007年。 ・平木典子：改訂版 アサーショントレーニング さわやかな自己表現のために、金子書房、2009年。			
備考							
・本科目は学生の主体性を重視する。グループで1つのテーマについて調べ、授業でプレゼンテーションする。 プレゼンテーションについては、第1講で説明します。 ・「救急時の対応」では普通救命講習Ⅱの修了証が交付されます。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名							
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進		幾何光学			仲澤 和馬	非常勤講師							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態						
		理学	作業	視機能									
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義						
選択													
授業概要・学修の到達目標													
<p><概要> 近視や乱視の検査や、緑内障や白内障などの眼疾患に接し、眼底の写真を撮影する際に、光（目に見える可視光）がどのように振る舞うかについての知見は、大きな強みになる。講義では、まず光の反射・散乱・屈折の基本を理解し、鏡や球面レンズ、また複数枚重ねたレンズでできる像の位置を知る方法を修得する。その後、乱視の原因でもある収差について学修し、最後に偏光について理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①反射・散乱・屈折の性質を述べることができる。②鏡、球面レンズや複数枚重ねたレンズを通してできる像の位置を求められることができる。③収差の性質について説明できる。④偏光の性質を述べることができる。</p>													
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。								
事前学習				事後学習									
<p><内容> 講義の最後に提示する、次回の講義内容に対応する教科書の範囲を読み、わからないところ、わかりにくいところを拾い出しておくこと。</p> <p><必要時間>各回20分</p>				<p><内容> 毎時間の講義の最初に、前回の質問・要望等用紙に答える。その場でも質問できるように、復習しておくこと。その後、前回の講義内容の復習小テストを実施する。</p> <p><必要時間>各回90分</p>									
授業計画													
<ol style="list-style-type: none"> 光の色と明るさ（波動光学との相違）、単位、作られ方、および三角関数 [基礎・導入] 光の反射（フェルマーの原理）・散乱と像のでき方（平面鏡、凸面鏡、凹面鏡） 光の屈折（Snellの法則）と屈折率 複数の平面による光の屈折と像、プリズム 球面での屈折（実光源、虚光源、実像、虚像） 薄い凸レンズによる屈折と結像Ⅰ（焦点） 薄い凸レンズによる屈折と結像Ⅱ（作図） 薄い凸レンズによる屈折と結像Ⅲ（屈折力とvergence） 薄い凹レンズによる屈折と結像 薄いレンズの組合せによる屈折と結像Ⅰ（6主要点） 薄いレンズの組合せによる屈折と結像Ⅱ（作図、屈折力とvergence） 薄いレンズの組合せによる屈折と結像Ⅲ（望遠鏡の原理） 厚いレンズによる屈折と結像、像の倍率（[縦・横・角]倍率） サイデル5収差、色収差 偏光 <p>定期試験</p>								到達目標①		到達目標②		到達目標③ 到達目標④	
評価基準・評価方法													
定期試験（60%）、復習小テスト（40%）の成績で判断して評価する。													
使用教科書				参考図書									
西信元嗣 他2名、「新しい眼光学の基礎」、金原出版				随時、提示する。									
備考													
<p>毎回実施する復習小テストの中で見られた課題を、返却時に解説する。 質問等：講義時間中あるいは終了後に受け付ける。また、講義終了時に講義内容に関する質問・要望を記入する用紙を配布しますので、提出すること。次回の講義で回答する。 電子メールアドレス：nakazawa.kz@gmail.com</p>													

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		医療統計学			山田 雅博	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> この授業では、資料の整理や読み、分析などの初歩から学習を行う。後半は、具体的事例をもとに様々な推定や検定について学ぶ。毎回、毎時間においてプリントを配布し、前半は講義形式で、後半はプリントを用いた問題演習を行う。資料を分析しやすいように整理して、代表値を用いて吟味する方法について学ぶ。また、一部のサンプルをもとに全体の状況を推測する方法についても学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 様々な統計用語の意味を理解を着実にして欲しい。また、授業ノートを見ながら、実践的に使える統計学が身に付くことを目指す。具体的には、①統計用語について理解している。②代表値や統計量を求めることが出来る。また、それらを用いて資料を分析できる。③具体的な推定や検定が出来る。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 下記計画に沿って授業を進めるため、各ステップに該当する教科書の内容を事前に予習しておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 講義における演習について丹念に復習すること。また、授業ノートをきちんと作成、整理し、テキストとノートを見ながら学習した事柄を確実に身に付けるよう努力すること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 統計学の概要、度数分布表 2. 代表値、平均値（学修の到達目標①、②） 3. 標準偏差（学修の到達目標①、②） 4. 相関係数（学修の到達目標①、②） 5. 確率の基礎について 6. 同時確率分布 7. 平均の推定（学修の到達目標①、③） 8. 比率の推定、標準偏差の推定（学修の到達目標①、③） 9. 平均の検定、比率の検定（学修の到達目標①、③） 10. 片側検定による平均の検定（学修の到達目標①、③） 11. 等平均の検定（学修の到達目標①、③） 12. 適合度の検定（学修の到達目標①、③） 13. 独立性の検定（学修の到達目標①、③） 14. 相関係数の推定、検定（学修の到達目標①、③） 15. 相関の有無の検定（学修の到達目標①、③） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
授業中の演習問題における習熟の状態（30%）、期末試験結果（70%）をもって総合的に判断する。							
使用教科書				参考図書			
『新統計入門』（裳華房、小寺平治 著）				なし			
備考							
メールによる質問は、yamada33@gifu-u.ac.jp へお願いします。 また、対面での質問等を希望する場合は、先のアドレスへ連絡を下さい。時間を調整する。 授業中に電卓を使用させるが、どのような物を用意するかは、第1回目の授業において指示する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		一般臨床医学			○近藤直実、熊田ますみ 横井達夫、伊藤八次 田辺久美子、山本容正	教授 他	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要と学修の到達目標> 眼科の疾患の中には、内科的疾患が原因で眼に現れるものや、めまい眼振など耳鼻科と関係しているもの、また子供や高齢者の患者さんも多く、小児の病気、高齢者特有の疾患についての知識が必要になる事もある。また斜視になると頭を傾けて物を見る事もあり、これが首の筋肉の硬直で起こっているのか斜視によるものなのかを確認する事もある。そのために整形外科的知識も必要となる。さらには眼科手術は勿論、子供の検査には眠らせて行う場合もあり麻酔についての知識も必要である。このように臨床を行うにあたり、眼科領域以外にも幅広い知識が必要となるため、ここでは各専門分野の講師がそれぞれの基礎的内容を分かり易く説明し、眼科学以外の知識を身につける。</p> <p><学修の到達目標> 授業で修得した疾患と病態に関して理解し、病状・診断・治療法等に関して具体的に説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<内容> 教科書などを読んで予習を行う。わからない点をピックアップしておく。 <必要時間>各回30分				<内容> 授業で習ったことをしっかり復習する。その際、教科書やノートを整理する。 <必要時間>各回30分			
授業計画							
1. 看護学： 熊田ますみ （3回） ・総論（老年看護を含む。） 2. 小児病学： 近藤直実 （2回） ・成長発達・新生児・脳神経疾患・代謝疾患・呼吸・循環器疾患・運動器疾患・アレルギー疾患など 3. 内科学・老年医学： 近藤直実 （2回） ・循環器疾患・呼吸器疾患・代謝・内分泌疾患・腎・泌尿器疾患・生殖器疾患・アレルギー疾患、 膠原病、免疫病 など 4. 整形外科学： 横井達夫 （2回） ・整形基礎 ・斜頸について 5. 耳鼻咽喉学： 伊藤八次 （2回） ・前庭動眼反射 ・眼振、難聴とめまい 6. 麻酔科学： 田辺久美子 （2回） ・麻酔の基礎知識 ・全身麻酔 ・局所麻酔 ・ショック 7. 感染症及び感染対策： 山本容正 （2回） ・感染症と病原体、感染症の発症と防御機構、感染対策 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
定期試験							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野「小児科学」 「小児科学」第5版（医学書院）2018年 適宜、必要な資料を配布する。							
備 考							
資料、PCにて補足説明を行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		神経内科学			下畑享良、○木村暁夫 林 祐一、山田 恵 吉倉延亮、竹腰 顕	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 神経内科で扱う神経疾患の病態・診断・治療法について学び、理解を深める。 個々の神経疾患における障害部位・認められる神経学的異常所見・異常検査所見に関し理解を深める。 個々の神経疾患の治療の現状およびリハビリテーションの意義・注意点を理解する。</p> <p><学修の到達目標> ①個々の神経疾患の疾患名と病態に関し理解し、診断・治療法に関して具体的に説明できる。 ②個々の神経疾患におけるリハビリテーションの必要性和施行時の注意点を理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1) 使用教科書の各授業に関連した項目に目を通す 2) 神経解剖に関する教材（参考図書参照）にあたり、中枢神経末梢神経、筋の構造や神経伝達路（錐体路・錐体外路・脊髄視床路など）の役割や場所を理解する。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 1) 各授業で配布される添付資料に目を通し、関連する内容や不明な点に関し、参考図書などをを用い学習する 2) 各授業内容に関連する国家試験問題に目を通す <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経変性疾患Ⅰ（パーキンソン病）（下畑） 2. 神経変性疾患Ⅱ（パーキンソン関連疾患）（下畑） 3. 神経変性疾患Ⅲ（脊髄小脳変性症）（林） 4. 神経変性疾患Ⅳ（運動ニューロン疾患）（下畑） 5. 認知症（アルツハイマー型認知症）（吉倉） 6. 認知症（非アルツハイマー型認知症）（吉倉） 7. 免疫性神経疾患（重症筋無力症など）（木村） 8. 免疫性神経疾患（多発性硬化症など）（木村） 9. 末梢神経障害Ⅰ（山田） 10. 末梢神経障害Ⅱ（山田） 11. 筋疾患Ⅰ（林） 12. 筋疾患Ⅱ（林） 13. 頭部外傷・脊髄損傷（林） 14. 脳腫瘍（竹腰） 15. 脳炎・脳症（木村） <p>定期試験 筆記 到達目標①②は、すべての授業に関連する</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、授業への取り組み姿勢（20%）など総合的に判断							
使用教科書				参考図書			
標準理学療法学・作業療法学 神経内科学（第4版）				<ul style="list-style-type: none"> ・臨床のための脳局所解剖学（中外医学社） ・神経内科ハンドブック 鑑別診断と治療第5版（医学書院） ・全ての内科医が知っておきたい神経疾患の診かた、考え方とその対応（羊土社） 			
備考							
理学療法士 作業療法士国家試験問題解答と解説（医師薬出版編）							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進		精神医学			宮地 幸雄	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○		○	2年次 前学期	2単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 精神疾患についての基本的知識並びに精神疾患を罹患した人との基本的な援助方法を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 臨床場面で援助方法の基本が活用できるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書の該当部分を確認する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業の最後に毎回講師がまとめをするので、それを復習する。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人が生きるということについてを考える。 2. 自殺について 3. 精神医学の歴史について 4. こころの発達と防衛機制について 5. 臨床心理検査について 6. よくみられる精神症状について－その1 7. よくみられる精神症状について－その2 8. 統合失調症について－その1 9. 統合失調症について－その2 10. 感情障害について 11. 心因性精神障害について 12. 知的障害・発達障害について 13. 心理療法について 14. チームアプローチについて 15. 医療従事者の姿勢について <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験で評価する							
使用教科書				参考図書			
上島国利ほか著「精神医学テキスト－精神障害の理解と治療のために」改訂第4版 南江堂 2017年							
備考							
講師は臨床心理士。非医師であるが、精神科病院での事例を提示し臨床現場の話をしてみたい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		臨床心理学			高橋 晋也	非常勤講師	
疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨床心理学とは、精神疾患をはじめとする心理的問題やその結果としての不適応行動の予防・改善・援助、あるいはより一般的に人々の精神的健康の増進を追究する応用心理学の一領域であるが、本科目では、とくに視能訓練医療に関わりの深い諸問題に焦点を絞り、将来的に医療現場での実践に役立つ知識の習得と人間の理解を目指す。医療従事者同士の関係はもちろんのこと、医療従事者と患者の関係、あるいはとくに視能訓練医療で頻出する患児とその親を含めた三者間関係に適切に向き合うために理解しておくべき基礎的問題を中心に学習する。</p> <p><学修の到達目標> ①乳幼児期を中心とした人間の発達諸側面について理解し、相互に関連づけることができる。 ②生得的動機と習得的動機の特徴、とくに人間行動における両者の関係について適切に述べるができる。 ③不適応の日常的事例と、その対処行動の特徴について適切に述べるができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次開講の「心理学」を履修しておくことが望ましい。また、日々の事前学習としては、次回学習予定のトピックスについて書籍・WEB情報等で下調べすることに加え、日常生活における自らの体験に照らして問題の焦点化を行うことが有効である。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 学習した内容を深く理解し定着させるために、講義があったその日のうちに重要事項を再確認する。その際、クラスの友人と講義内容を確認し合い、理解の多視点化をはかるとよい。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 導入ならびに発達 (1)：発達の定義、発達段階区分 2. 発達 (2)：認知発達、運動技能の発達 3. 発達 (3)：言語発達、感情発達、親子関係の発達 4. 発達 (4)：視覚発達の理論（乳幼児の視覚能力測定法） 5. 発達 (5)：視覚発達の実際（空間分解能、コントラスト感度、分光感度、調節機能、奥行き視機能） 6. 発達 (6)：高齢者の心理と臨床場面での留意点 7. 発達 (7)：過去の国家試験における発達心理学関連の出題 8. 動機 (1)：マズローの動機階層説、生得的動機（生理的動機、性動機） 9. 動機 (2)：内発的動機（好奇動機、操作動機、感覚動機） 10. 動機 (3)：習得的動機（社会的動機、獲得性動機） 11. 適応と不適応 (1)：課題対処行動という視点から見た適応・不適応・擬似適応 12. 適応と不適応 (2)：欲求不満、葛藤、ストレス 13. 適応と不適応 (3)：フロイトの心的装置説 14. 適応と不適応 (4)：自我防衛機制 15. 適応と不適応 (5)：心身症、神経症、精神病 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
講義内容の理解度を測定する期末試験の成績（100%）により評価する。期末試験では一切の持ち込みを認めない。							
使用教科書				参考図書			
使用しない。（プリント資料を配付する。）				授業中に適宜紹介する。			
備考							
期末試験に対するフィードバックは、答案へ直接コメントを記入することにより行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視器の解剖と生理学 I (眼球・眼球付属器他)			田中 健司	助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 授業科目「視器の解剖と生理学」は、1年次に通年で学習する。視機能療法専攻に入学した学生にとっては、視覚について初めて学ぶ科目で、3年間の専門科目学習の基礎となる大切な科目である。眼球を中心において構造や機能を分かりやすく講義していく。類似の課題は学年進行とともに多くの専門科目で繰り返し学習することを念頭に置いて、ごく基本的な知識を修得することが大切である。</p> <p><学修の到達目標> 1. 眼球、眼球付属器の構造について、理解し、説明することができる。 2. 眼球、眼球付属器の機能について、理解し、説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に教科書の該当する項目を読んでくること。 前回の講義内容を復習し理解しておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 他の科目で学んだこととも関連付けて理解できるように、復習をしっかりとしていくこと。講義のノートを必ず見直して、修正や加筆など必要であれば行うこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 講義の概論 視器とは、解剖とは、生理とはなにか 2. 視覚器の構成と眼球について 3. 角膜の構造と機能 4. 強膜の構造と機能 5. 虹彩の構造と機能 6. 毛様体の構造と機能 7. 脈絡膜の構造と機能 8. 網膜の構造と機能 ① 9. 網膜の構造と機能 ② 10. 水晶体の構造と機能 11. 硝子体の構造と機能 12. 眼房・隅角の構造と機能 13. 眼瞼の構造と機能 14. 涙器の構造と機能 15. 結膜の構造と機能 定期試験							
評価基準・評価方法							
講義主体となるため知識の理解、定着を測定するため小テスト、筆記試験にて判定する。 定期試験80%、小テスト20%にて総合評価とする。							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集：丸尾敏夫 他） 現代の眼科学（金原出版）				適宜紹介する。 必要時にはプリントを配布する。			
備考							
講義主体で行う。毎回の講義の復習を欠かすことなく着実に自分の知識にしていくこと。 各講義のはじめに前回講義分の小テストを行い知識の定着度を確認し、講義終了後の定期試験とあわせて総合評価とする。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視器の解剖と生理学Ⅱ (視路・眼運動系他)			田中 健司	助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 授業科目『視器の解剖と生理学』は、1年次の前学期と後学期をとおして継続する。視覚に関わる視器の解剖と生理の全般を取り上げる。さまざまな専門科目の学習に必要な基盤的知識を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 1. 視路について、説明することができる。 2. 眼窩、外眼筋の構造と機能について説明することができる。 3. 眼の血管系、器官発生について説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に教科書の該当する項目を読んでもらうこと。 前回の講義内容を復習し理解しておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 他の科目で学んだこととも関連付けて理解できるように、復習をしっかりとしていくこと。講義のノートを必ず見直して、修正や加筆など必要であれば行うこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
授業科目『視器の解剖と生理学Ⅰ』に引き続いて科目の後半部分を講義する。 1. 講義の概論 2. 視路について（視神経の機能と構造） 3. 視路について（視交叉部、外側膝状体、視放線の構造と機能） 4. 視路について（後頭葉の構造と機能） 5. 眼窩の構造と機能 6. 外眼筋の構造と機能 ① 7. 外眼筋の構造と機能 ② 8. 外眼筋の種類と神経支配 9. 眼球運動神経と脳神経 10. 眼の血管系 ① 11. 眼の血管系 ② 12. 眼の器官発生 ① 13. 眼の器官発生 ② 14. 視器の解剖と生理学の総括 ① 15. 視器の解剖と生理学の総括 ② 定期試験							
評価基準・評価方法							
講義主体となるため知識の理解、定着を測定するため小テスト、筆記試験にて判定する。 定期試験80%、小テスト20%にて総合評価とする。							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集：丸尾敏夫 他） 現代の眼科学（金原出版）				適宜紹介する。 必要時にはプリントを配布する。			
備考							
講義主体で行う。毎回の講義の復習を欠かすことなく着実に自分の知識にしていくこと。 各講義のはじめに前回講義分の小テストを行い知識の定着度を確認し、講義終了後の定期試験とあわせて総合評価とする。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		視器の病理学			○大庭 紀雄 河合 健司	特任教授 非常勤講師	
視覚機能の基礎と 検査機器							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 視機能矯正や視機能訓練を遂行するために必要な眼疾患の病理や病態の基本知識を身につけるとともに、重要な疾病の病理的成因の考え方を学ぶ。「眼疾病学」や「神経眼科学」や「眼薬理学」を学習するための基盤となる知識を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 1. 眼疾患の病因、成因、病態の特徴点を説明することができる。 2. 眼疾患にみられる主要な病理学的成因を説明することができる。 3. 視能訓練士が遭遇する主要な眼疾患の病態生理、病理組織学的変化を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 前回講義後の事後学習によって整理した講義ノートを繰り返し読み込んで次回講義に備えること。 <必要時間>毎回60分</p>				<p><内容> 講義ノートを点検すること。授業中に書ききれなかったことを想起して補充すること。 <必要時間>毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 前眼部の病態生理：眼表面膜 ocular surface の病態 2. 透光体の病態生理：角膜混濁の成因と病因：白内障の成因と病因：硝子体混濁の成因と病因 3. 網膜の病態生理：視細胞の変性：網膜細小血管の病理学的変化：血液網膜柵の破綻：網膜血管増殖因子 4. 視路、視覚中枢の病態生理：視神経炎：同名半盲、黄斑回避 5. 角膜疾患、水晶体疾患（加齢白内障、風疹白内障）の病理組織学 6. 網膜疾患の病理組織学：網膜血管閉塞：網膜血管新生：脈絡膜血管新生、脈絡膜毛細血管増殖因子 7. 主要眼疾患の疫学、遺伝疫学、網膜色素変性、糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、加齢白内障 8. 感染性眼疾患と病原微生物、細菌、ウイルス、真菌 9. 眼と免疫、自己免疫疾患の成因と病態（重症筋無力症、甲状腺眼症、Vogt-小柳-原田症候群、視神経脊髄炎） 10. 網膜芽細胞腫：腫瘍抑制遺伝子、家族歴（家系図の書き方、読み方） 11. 眼瞼腫瘍、ぶどう膜悪性黒色腫（虹彩毛様体腫瘍、脈絡膜腫瘍） 12. 遺伝性眼疾患：網膜ジストロフィ（網膜色素変性、黄斑ジストロフィ）の分子病理、先天色覚異常の分子病理 13. 小児の遺伝性眼疾患と先天異常、眼疾患と生活習慣、環境汚染物質、全身疾患の眼症状、代謝症候群 14. 演習講義：眼疾患の病態と病理の総括 15. 演習講義：主要眼疾患の病理組織学 学期末：ノート点検、定期試験 							
評価基準・評価方法							
<p>折々の小テストおよび演習講義においては国試準拠問題を提示して、学習到達度を形成的に測定するとともに、講義内容の改善をはかる。講義終了時に、講義内容を理解しているかどうか、視能訓練士としての業務遂行に十分であるかどうかを、客観式問題による期末定期試験によって評価する。（定期試験の解答作成にあたり個人ノートを参照してよい）科目の成績は、定期試験の成績（60%）、個人ノート充実度（40%）を総合的に評価して決定する。</p>							
使用教科書				参考図書			
視能訓練士に向けて編集された眼疾病学の教科書は市販されていない。今回の講義録そのものが教科書である。各自が独自の教科書を作成する意欲をもって毎回の授業に臨むべきである。				配布印刷物を参考書とする。演習講義での国試準拠演習問題（および正解表）はB5サイズで配布するから、A4サイズのノートに添付固定すること。			
備 考							
講義のキーとなる内容は板書する。「学習ノート」に講義内容を正確にノートすることが大切である。箇条書きや項目の羅列は避けること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視覚生理学Ⅰ（基礎）			松井 康樹	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>ヒトが外界から得る情報の80%は視覚から得ていると言われている。「視覚生理学Ⅰ」では、視覚、つまり「見る」システムの基本的な知識を学ぶ。眼球の中の網膜にうつった光が電気信号に変換され、大脳の視中枢に至る視覚伝導路の生理、網膜と視覚中枢内での階層的な構造と機能に基づく形態覚、色覚、光覚、立体視、運動視といった各種属性の神経機構に加えて、視野、電気生理学の基本的なことについて学ぶ</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚の定義を知る 2. 見るシステムが判る（脳で見る）が判る 3. 角膜、強膜、ぶどう膜、水晶体、硝子体、房水、眼球附属器（眼瞼、結膜、涙器）の解剖と機能が理解できる 4. 神経細胞の集まりである網膜の解剖と生理が理解できる 5. 網膜神経節細胞の種類、機能が理解でき、大細胞系と小細胞系が理解できる 6. 視野の定義を理解し、視野検査の種類、視路による視野異常が理解できる 7. 色覚の生理、色覚に関する用語、先天色覚異常と後天色覚異常の違いが理解できる 8. 光覚の定義を理解し、光覚検査の結果が理解できる 9. 眼科における電気生理学的検査の種類が理解できる 10. 形態覚、受容野、奥行き知覚が理解できる 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>前期の視器の解剖と生理学Ⅰで習得した知識を確実にしておくこと。できれば、後期に開講している解剖学Ⅱ（神経系）と視器の解剖と生理学Ⅱについても理解しておくこと。プリントは次回分の講義まで配布することが多いので、予習をしておくこと。前回までの内容の見直しをして授業に参加すること。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容></p> <p>今後の視機能障害を起こす疾患を理解していく上で、必要な最低限の知識となる科目である。よって、内容はしっかり覚えるように努力すること。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚とは、見るシステム 2. 網膜内情報処理、視覚情報処理 3. 視覚入力刺激、視覚の反応 4. 光覚 網膜の光化学、明順応、暗順応 5. 色の性質、色覚の学説 6. 色覚異常の種類と検査 7. 網膜部位と視力 8. 形態覚の生理、受容野、奥行き知覚 9. 視野の概念、動的視野と静的視野 10. 視野異常の種類 11. 視路と視野異常 12. 眼球運動の種類 13. 電気生理検査 14. ERG、VEP、EOG 15. 奥行き知覚 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験80%、小テスト20%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 文光堂 現代の眼科学 第12版 金原出版				毎回授業中にプリントを配付する。 視能矯正理論と実際			
備考							
Power pointwにて講義を行う。資料などを使用し、説明を行う。 次回の予習をすること。復習をすること。そして質問し不明な点はなくすこと。 休み時間やオフィスアワーを活用し、自主学習にも力を注いで理解してください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		生理光学Ⅰ（基礎）			松田 育子	准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 可視光とは何かから始まり、レンズ系を介した眼球の結像特性の基本的知識を学ぶ。具体的には、屈折に要する眼内諸要素（角膜、水晶体など）、静的屈折と動的屈折（調節）にかかわる眼内諸臓器の構造と機能、眼球全体としての光学特性、さらには屈折異常（近視、遠視など）について学ぶ。また、眼科で使用されるレンズの特性について理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> 眼科で使用されるレンズについて理解し、使うことができるようになる。 正視と屈折異常について理解し、その矯正方法の原理がわかるようになる。 眼球全体の光学特性について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 眼科で使用されるレンズと眼球光学系の分野です。コースバケットを配布しますので、その中の課題を予め解いて授業に参加してください。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 生理光学Ⅱ、2年次の生理光学Ⅲ、各演習につながる授業です。毎回、理解して欲しい重要ポイントに関する課題を出題しますので、クラスの仲間とともに課題解決し、必ず自分の理解につなげて下さい。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 可視光 眼科臨床で使用するレンズ 球面レンズと円柱レンズ 2. 円柱レンズの特徴と表記法 3. 球面レンズと円柱レンズの焦点距離計測 4. トーリックレンズの表示法（4方法） 5. トーリックレンズの表示法（4方法）と度数転換 6. 正視と屈折異常 角膜屈折力、水晶体屈折力と眼軸長のバランス 7. 屈折異常と矯正 眼の屈折力と屈折度 レンズの矯正効果 8. 屈折異常 遠視の分類と近視の分類 9. 屈折異常 乱視眼における焦線と最小錯乱円 10. 屈折異常 乱視の分類 11. 乱視眼の網膜像の作図 矯正レンズによる網膜像の変化 12. 乱視眼の網膜像の分析 等価球面度数のレンズ 13. 屈折の異常 不正乱視、不同視、不等像視、無水晶体眼、偽水晶体眼 14. 屈折検査の意義 他覚的屈折検査と自覚的屈折検査 15. 自分の屈折異常について分析し、どのような屈折状態か分析する 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集：丸尾敏夫他）				適宜紹介する。			
備考							
まずは復習すること。復習に基づいた質問は大歓迎です。授業中の質問時間やオフィスアワーを活用し、自主的に行動すること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視機能検査学概論			宮本 安住己	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>視能訓練士の業務の中で視機能検査は重要な位置を占める。医学の進歩とともに眼科領域でもさまざまな疾患の治療が可能となって来た。早期発見早期治療には視能訓練士の精度の高い検査結果が不可欠である。この講義では視機能検査学を理解するために必要な計算や単位の基本事項を学ぶとともに、これから3年間で詳しく学ぶ視機能検査学を概観する。また、特別な器具を使わない検査の演習も行って理解を深める。講義開始までに入学前課題程度の計算ができることが望ましい。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①視機能検査に必要な基本的な単位を理解し基本的な計算ができる。</p> <p>②簡便な視力検査ができる。</p> <p>③視力検査に用いるランドルト環の形状が理解できる。</p> <p>④さまざまな視機能検査の概要を理解し、簡潔に説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>必要ときは指示する。前回講義の理解を前提に講義を進める。必要に応じて、前回講義の確認テストを行う。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容></p> <p>講義で学んだことは、その日のうちに復習することが望ましい。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視機能検査学概論について。視機能検査に必要な基本的計算1 2. 視力とは 3. 視力検査 4. 光とレンズと単位 5. 屈折検査 6. 視標作成 7. 視力検査、眼位の検査練習 8. 視野検査 9. 外眼部の検査 10. 細隙灯顕微鏡検査 11. 角膜検査、類液検査 12. 眼圧検査、隅角検査 13. 眼底検査 14. 超音波検査 15. 眼窩画像検査 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
授業中の小テストと課題（50%）、定期試験（50%）							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫他編集（文光堂）							
備考							
オフィスアワーは、原則授業終了後。そのほかについては初日に説明する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視機能検査学Ⅰ（眼科一般検査）			○丹沢慶一、松田育子 田中健司、佐藤奈美	講師、准教授 助教、助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 眼科検査で一般的に実施される各種検査の意義、検査法、疾病への適応を次の到達目標を設定して学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ・眼疾患の検査法は、形態検査と機能検査に大別されることが具体的な事例を挙げて説明することができる。 ・視機能検査としての視力検査や視野検査の実際を説明することができる。 ・形態検査として細隙灯顕微鏡検査、眼底検査、画像検査の意義や検査の原理を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 他の科目の授業で学んだ検査に直接的に、間接的に関わる知識を作成したノートや配布資料などを参照して復習しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 毎回の授業で学んだ事項について作成したノートを見て、内容の修正や追加とともに、単なる項目の羅列ではなく文章スタイルに書き直し充実させていくこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
1. 屈折検査 1 (松田) 2. 屈折検査 2 (松田) 3. 屈折検査 3 (松田) 4. 眼鏡検査 1 (松田) 5. 眼鏡検査 2 (松田) 6. 眼底検査 1 (丹沢) 7. 眼底検査 2 (丹沢) 8. 眼底検査 3 (丹沢) 9. 眼底検査 4 (丹沢) 10. 静的視野検査 1 (田中) 11. 静的視野検査 2 (田中) 12. 静的視野検査 3 (田中) 13. 動的視野検査 1 (田中) 14. 動的視野検査 2 (田中) 15. 眼圧検査 (佐藤) 定期試験 筆記							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫編集 文光堂 眼科検査ガイド第2版 文光堂				適宜紹介する また、必要時にはプリントを配布する			
備考							
まずは復習すること。復習に基づいた質問は大歓迎です。 授業中の質問時間やオフィスアワーを活用し、自主的に学んでください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と 検査機器		視機能検査学Ⅱ (眼位検査)			野原 尚美	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視能訓練士の専門分野である斜視の診断をするために最も重要な検査法である眼位検査について学ぶ。眼位検査の原理、方法、注意点、検査結果の解釈を重点的に学ぶ。また眼位は眼球運動・両眼視機能とも密接に関係するため眼球運動の検査や両眼視機能検査についてもあわせて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①眼位検査の種類を挙げその方法を理解できる。 ②両眼視の検査の方法が理解できる。 ③眼位を判定し、その両眼視機能を評価することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年後期で学習した視機能訓練学概論、基礎視機能矯正学Ⅱの講義内容を復習し理解しておくこと。毎回の講義の終わりに、次回の講義の予習となる内容を提供するので、調べ学習を行うこと。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 毎回の講義の後に、授業の内容を確認しながら、配布したノートを作成すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 斜視の定義と病因論（斜視とは何か。またどうして斜視になるのだろうか）斜視にはどのようなものがあるのか） 斜視の分類と検査（斜視にはどのような種類があるか。眼位を知るためにはどのような検査があるか） 眼位定性検査Ⅰ 角膜反射による方法（手順、方法、判定の仕方について） 眼位定性検査Ⅱ Cover-Uncover Testの方法と判定（正位と斜位と斜視をどう判定するか） 眼位定量検査Ⅰ 定量検査の種類 Hirschberg法、Krimsky法について（手順、方法、判定の仕方について） Prismについて 作用、保持方法、プリズムジオプトリーと度の関係、取り扱い、使用上の注意（定性検査の小テスト） 眼位定量検査Ⅱ Prism Cover Test（Single Prism Cover Test、Simultaneous Prism Cover Testの方法と判定） 眼位定量検査Ⅲ Prism Cover Test（Alternate Prism Cover Testの方法と判定） 眼位定量検査Ⅳ 回旋偏位測定法（大型弱視鏡、Maddox二重杆試験、ニューサイクロテスト、眼底写真撮影法） 眼球運動検査Ⅰ 単眼（ひき運動）検査 両眼（向き運動）検査、眼性頭位異常の検査 網膜対応検査の概要（重複眼の概念を用いて網膜対応検査を理解する） 網膜対応検査Ⅰ バゴリーニ線上ガラス試験、赤フィルター法 立体視検査の概要（ホロプター、パナムの融像感覚圏を用いて立体視検査のしくみを理解する） 立体視検査Ⅰ Titmus stereotest、TNO stereotest、Lang stereotest 斜視検査の実際（今まで学んだ検査をどのように組み立てて斜視患者に実施していくか） 定期試験 							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（70%）、事前調べ学習と事後のノート作成（20%）、小テスト（10%）							
使用教科書				参考図書			
視能学（第2版） 分光堂 視能学エキスパート視能訓練学 日本視能訓練士協会 監修 医学書院 この講義で使用するノートを事前に配布する				視能矯正理論と実際 金原出版 眼科検査ガイド 視能矯正学 金原出版			
備考							
事後学習でノートを作成する際は、授業中に書き取ったノートの写しだけでなく、調べ学習を取り入れたノートにすること。例えば、授業で出てきた内容に関係することや、分からなかったところなどを図書室を利用して参考図書などで調べ、その内容を加えて書くと授業内容が更に深められる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 視覚機能の基礎と検査機器		視機能検査学Ⅲ（両眼視機能検査）			野原 尚美	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 斜視は眼位の異常だけでなく両眼視機能も異常となる。斜視の種類によって眼位ずれの性質や両眼視機能の有無が異なる。そのため、斜視は眼位検査と両眼視機能検査を行って、どのような斜視かを診断し、両眼視機能の獲得を目指して正しく治療することが大切である。この講義では、斜視の種類と、それぞれの斜視の両眼視機能をどのように調べるのかを学ぶ。両眼視機能の検査には網膜対応検査と立体視検査があり、それぞれの検査の原理、方法、注意点、検査結果の解釈を重点的に学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①内斜視、外斜視を分類しそれぞれの斜視の特徴を挙げることができる。 ②両眼視機能検査の方法が理解できる。 ③斜視の症例について両眼視の判定をすることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年後期で学習した視機能訓練学概論、基礎視機能矯正学Ⅱ、2年生前期の視機能検査学Ⅱ（眼位検査）の講義内容を復習し理解しておくこと。毎回の講義の終わりに、次回の講義の予習となる内容を提供するので、調べ学習を行うこと。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 毎回の講義の後に、授業の内容を確認しながら、配布したノートを作成すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 内斜視の分類、視機能の発達 2. 先天内斜視について（臨床的特徴） 3. 先天内斜視の眼位検査と眼球運動検査と両眼視検査の方法と検査結果 4. 調節性内斜視について（輻湊角・4種類の輻湊と関連づけて） 5. 屈折性調節性内斜視について（臨床的特徴） 6. 非屈折性調節性内斜視について（臨床的特徴） 7. 部分調節性内斜視について（臨床的特徴） 8. 調節性内斜視の眼位検査と眼球運動検査と両眼視検査の方法と検査結果 9. 非調節性内斜視について（臨床的特徴） 10. 非調節性内斜視の眼位検査と眼球運動検査と両眼視機能検査の方法と検査結果 11. 間歇性外斜視について（臨床的特徴） 12. 間歇性外斜視の眼位検査と眼球運動検査と両眼視機能検査の方法と検査結果 13. 間歇性外斜視の真の開散過多型と見かけ上開散過多型の見分け方 14. 恒常性外斜視について（臨床的特徴） 15. 斜視の分類と検査の方法並びに結果の記載法についてのまとめ 定期試験 筆記 							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
評価方法は、定期試験（80%）、事前調べ学習と事後のノート作成（20%）							
使用教科書				参考図書			
視能学（第2版） 分光堂 この講義で使用するノートを事前に配布する				視能矯正理論と実際 金原出版 眼科検査ガイド 視能矯正学 金原出版			
備 考							
事後学習でノートを作成する際は、授業中に書き取ったノートの写しだけでなく、調べ学習を取り入れたノートにすること。例えば、授業で出てきた内容に関係することや、分からなかったところなどを図書室を利用して参考図書などで調べ、その内容を加えて書くと授業内容が更に深められる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 保健医療福祉と視能障害 のリハビリテーションの理念		公衆衛生学			大森 正英	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 公衆衛生学は社会や集団を対象とした医学であり、個人の心身の疾病予防、健康の保持増進に止まらず、高齢社会対策、社会福祉、環境保全ならびに環境汚染防止など、社会全体、時に全地球をも対象とした多岐にわたる内容から構成されている。個人の健康を対象とした臨床医学とはまた異なる面からも人間および社会と健康との関わりについて考えるとともに、その実践に必要な知識と技術を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①公衆衛生学とは何か、その内容と適応範囲について理解する。②近代社会になぜ公衆衛生学が必須なのか理解する。③日本の健康の現状を知り、公衆衛生学が時代とともに変化、発展していくことを学ぶ。④疾病の予防について公衆衛生学の面から考える。⑤環境問題について環境衛生学の立場から理解を深める。⑥健康増進活動の実態と効果について公衆衛生的な視野からの考え方を身に付ける。⑦公衆衛生学で学んだことを実生活や実務に役立てる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>特に指定した時以外には必要ないが、素早い書写能力を鍛えておくこと。板書したものをただ書き写すだけでなく、講義内容をもとに書き込んで充実したノートを作成することを望みたい。</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容></p> <p>この講義は幅広く多岐にわたる内容からなり、ノートに書く量も多いので、1回ごとに内容を確認し、ノートと教科書、配布プリント等を照らし合わせて復習しておくこと。特に配布プリント類は最新のデータの意味を理解するようにする。</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 公衆衛生学概論 公衆衛生学とは何か? ① 2. 健康の概念 健康の定義、健康の指標 ② 3. 健康阻害要因 社会の変化と人間の健康 ②、③ 4. 健康の現状 疾病構造の変化と健康の現状 ③ 5. 人口と寿命 平均寿命、平均余命、高齢化 ②、③ 6. 疫学 (1) 疾病予防と疫学、疫学の手法 ①、②、③、④ 7. 疫学 (2) 感染症の特徴とその予防対策 ①、②、③、④ 8. 疫学 (3) 慢性感染症の予防：STD、結核他 ①、②、③、④ 9. 疫学 (4) 難病対策、歯科疾患他 ①、③、④ 10. 環境衛生学 (1) 大気、水 ②、⑤ 11. 環境衛生学 (2) 廃棄物処理、環境汚染の現状と防止対策 ②、⑤ 12. 環境衛生学 (3) 食環境—食品衛生学と栄養学 ②、③、⑤ 13. 生活習慣と健康 飲酒、喫煙習慣と健康他 ②、④、⑥ 14. 生活習慣病の特徴とその予防対策 ②、③、⑥、⑦ 15. 公衆衛生活動の展開、健康増進医学 ①、②、③、⑦ <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>評価基準：公衆衛生学に関する基礎的知識、理解度および公衆衛生的思考法の確立の度合いを評価する。</p> <p>評価方法：筆記試験ならびに適時提出を求める課題（レポート）によって行う。評価割合はそれぞれ90%、10%</p>							
使用教科書				参考図書			
「イラスト 公衆衛生学」第5版 石川哲也 他著 東京教学社 2017				適時、紹介する			
備考							
課題や試験問題に対する解説はその都度行う。在学時の質問は随時、受け付ける。メール等による質問も歓迎するが、教務経由でお願いしたい。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		社会福祉学			竹内 章郎	非常勤講師	
保健医療福祉と視能障害の リハビリテーションの理念							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修	○	○	○	○	1年次 後学期	1単位 (15時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 現在、社会福祉を含む社会保障全体が、大きな転換点にある。それは、社会保障を支える福祉国家体制それ自体の「危機」という大きな問題からくるものであるが、同時に、社会保障の基盤である社会権（法）の基本的理解の問題や資本主義市場と社会保障との関係などにも及ぶ問題から生じていることもある。この講義ではそうした大きな問題を、社会福祉の現場実践と関係づけて捉えることを通じて、社会福祉・社会保障の本質を解明したい。</p> <p><学修の到達目標> 1. 社会福祉を含む社会保障の現実を、その基礎に立ち返って理解する。 2. 大きな制度的問題と社会福祉実践の現実とを結び付けて理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に配布する講義資料を熟読すること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 終了し講義ごとに、配布資料に基づいて必ず復習をすること。</p> <p><必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス(全体の進行について)、社会福祉と社会保障との関連について(善き生存としての福祉を中心に) 2. 日本の社会保障・社会福祉の基礎：憲法25条(13条との関連)：プログラム規定・義務規定 / 行政裁量の理解 3. 福祉国家体制の由来、措置制度と契約制度、福祉職と医療職、福祉の民営化・市場化問題 4. 権利としての社会保障 (1)：市民権と社会権との相違、私的所有と市民権 5. 権利としての社会保障 (2)：社会権の基礎、憲法14条との関連、申請主義の問題 6. 福祉六法体制とそれ以降、戦後日本の社会保障制度の流れ 7. 貧困問題と生活保護、社会手当制度、労災保険制度、雇用保険制度、年金保障制度 8. 障害者福祉制度、子ども手当制度、高齢者福祉制度（公的介護保険制度） 							
評価基準・評価方法							
最終のレポートによって評価する。講義内容の正確な理解に加えて、内容を表現する文章力も評価の対象とする。							
使用教科書				参考図書			
教科書は使用せず、竹内が作成したレジюме及び資料にそって講義を行う。				必要に応じて、講義中に紹介する。			
備 考							
資料及びレジюмеは、すべて、最初の講義時に配布する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目 保健医療福祉と視能障害 のリハビリテーションの理念		医療安全管理論			伊川 順子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修		○	○	○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 安全はあらゆる分野においても最も肝要な事である。特に近年、医療安全は医療界の最優先課題となっている。ここでは、医療安全と医療事故の問題に焦点をあて学習を進めたい。まず安全管理とは何かを理解し、その上で具体的な方法論を学ぶ。講義内容は、安全プログラムの中から感染防止・制御、環境安全・衛生、ヒューマンエラー、事故発生時の対応を取り上げる。</p> <p><学修の到達目標> 安全性の確保に結びつけられる知識と、リスク感性の向上につなげる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 医療に関するマスコミ報道（新聞・テレビ・ラジオ・ネット等の情報）に関心を持つ <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 振り返り学習（自分だったらどうするか？相手はどのように考えるか？） <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 医療安全の概要と動向 2. 医療における安全管理とは 3. 感染予防と安全管理 4. 医療従事者と個人情報「保護法令 5. 看護実践と危険予防の必要性（KYT） 6. 医療者に必要な基礎的法知識 7. 医療安全管理とコミュニケーション 8. 医療安全を高める組織的な取組み 9. 5S活動 SBAR（コミュニケーションスキル） 10. 医療安全対策：接遇 11. 事故発生時の体制づくり 12. 医療杏ン確保の考え方・手法（RCAの基礎知識） 13. 危機管理（クレーマー・クレーム対応） 14. 医療安全総集（新聞報道・医療安全かるた） 15. 課題検討（まとめ） 定期試験 							
評価基準・評価方法							
履修態度（20%）、試験（80%）での総合評価							
使用教科書				参考図書			
特別使用しないが、必要時資料配布 毎回、パワーポイント使用				系統看護学講座 総合分野 医療安全（医学書院） RCAの基礎知識と活用事例、等その他適宜紹介 学研 e ナーシング 厚生労働省の医療安全研修資料			
備考							
関連する教科と結びつけて学習し、単に知識にとどまらず実践的能力として身につけてほしい。よって、積極的に学び取る姿勢で臨んでほしい。グループワークなども取り入れ出来るだけ参加型授業形態をとり、共に楽しく学べる授業としたい。（大声での雑談等で、授業を乱す学生は状況により退室）							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		医学概論			千田 隆夫	非常勤講師	
保健医療福祉と視能障害の リハビリテーションの理念							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 医療に携わる様々な職種の人たちが共通して知っていなければならない知識や、医療を実践する上での心構え、態度、考え方などを学ぶ。「医学概論」では、医学とは何か、医学はどのように発達してきたか、生命とは何か、なぜ病気になるのか、病気はどのように進行するのか、病気をどのように診断して治療するのか、どのように病気を予防するのか、医療従事者になるには何が必要か、わが国の医療のしくみはどういう特徴があるのか、国や地方自治体は医療にどのように関わっているのか、など広い範囲のことを扱う。</p> <p><学修の到達目標> 1) 医学・医療の歴史と現状を正しく理解・認識できる。2) 病気の原因、発症、経過、予後、診断、治療、予防について、総論的に理解する。3) わが国の医療システムと国民衛生の動向を理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 医学・医療に関するテレビ報道、新聞記事、ネットでの様々な情報に興味を持ち、広く知識を得るように心がけよう。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 講義で聞いた話を思い出しながら、資料と教科書を通読すること。さらに日常遭遇する医療関係の事柄に注意し、講義内容と関連付けて考える癖をつけよう。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 医学をどのようにとらえるか 2. 医学の発達のすがた－古代・中世の医学 3. 医学の発達のすがた－近世・近代・現代の医学 4. 健康・病気・医学の体系 5. 病気の原因 6. 病気による身体の変化－血行障害・進行性変化・退行性変化・炎症 7. 病気による身体の変化－腫瘍の原因 8. 病気による身体の変化－腫瘍の症状・経過・治療 9. 病気の診断 10. 病気の治療とリハビリテーション 11. 病気の予防－感染症の予防 12. 病気の予防－健康診断・人間ドック・生活習慣病 13. 新しい医療システム 14. 生命へのアプローチ 15. 衛生統計 <p>定期試験（筆記）</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）と授業態度（20%）を総合的に判断して評価する。							
使用教科書				参考図書			
系統看護学講座別巻 医学概論第8版、日野原重明著、医学書院							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門基礎科目		障害者概論			高平 利男	非常勤講師	
保健医療福祉と視能障害のリハビリテーションの理念							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義・実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 障がいを受けている人々について最小限知っておくべき障がいの種類と程度、障がい者のライフサイクルと支援の概要を知る。 障がい児の療育や教育の現場を見学し、障がい児の実情を肌で感じレポートにまとめる。 障がいを受けている人々の問題を自分とのかかわりでとらえる。</p> <p><学修の到達目標> 障がい者の特性や症状、支援について理解を深め、障がいの種別と障がいの程度を説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> ・新聞、テレビなどのニュースで障がい者に関するものに関心を持つ。 ・文庫本、宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」を回覧し読む。 ・キーワード、関連用語をリストアップする。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> ・障がい者への理解を深め、配慮と支援を考える。 ・キーワード、関連用語をまとめる。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 障がいについて 定義、分類、障がい種別と程度、障がいの理解 障がい児のライフサイクルと支援 身体障がい児・者 視覚制約、聴覚制約、言語・コミュニケーション制約、特性や症状、教育と福祉 身体障がい児・者 運動制約、健康制約、特性や症状、教育と福祉 知的障がい児・者 知的機能に関する制約、特性や症状、教育と福祉 発達障がい児・者 学習活動制約（LD）、社会性制約（広汎性）、注意行動制約（ADHD）、特性や症状、教育と福祉、精神障がい者の制約と支援、特性や症状、教育と福祉 障がい児・者福祉関係法 宣言、条約、法規 障がい者の就労と高齢化に対する支援、障がい児とのかかわり方と施設見学、レポートの書き方 施設見学① 児童発達支援センター「ポッポの家」 見学レポート 同上 施設見学② 岐阜県立岐阜盲学校 見学レポート 同上 施設見学③ 岐阜市立岐阜特別支援学校 見学レポート 同上 医療従事者論 宮沢賢治「セロひきのゴーシュ」から定期試験 							
評価基準・評価方法							
筆記試験（80%）と施設見学のレポート（20%）で評価する。							
使用教科書				参考図書			
教科書 なし 毎回レジメを配布				全国特別支援学校長会編著「フィリア」 ジアース教育新社2009 橋本創一他編著「障害児の理解と教育・支援」金子書房2008			
備考							
個々のレポートの誤りの訂正、疑問への回答など、添削し、4段階評価し返却する。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門基礎科目 保健医療福祉と視能障害 のリハビリテーションの理念		視覚障害リハビリテーション			○棚橋 公郎 池谷 尚剛 川瀬 和秀		非常勤講師
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 医療の発達により高齢社会となっている現在、生活習慣病や疾病により、中途視覚障害が増加している。そのため、眼科においてこの視覚障害者（ロービジョン）に対してのケアの重要度も増している。この視覚障害リハビリテーション学では、視覚入力系のしくみや視覚以外の情報の取り入れを理解し、視覚障害者（全盲・弱視）のリハビリテーション、ロービジョンケアのあり方、眼鏡の基礎と処方テクニックを学習する。</p> <p><学修の到達目標> 視覚障害と患者さまの状況を理解し、支援を行動に移すことができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 新聞等で、視覚障害者の記事に注意を配ること。</p> <p><必要時間> 毎回30分</p>				<p><内容> ロービジョンケアの理解と実践 配布資料の理解に努めること</p> <p><必要時間> 毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚障害者の現状①【川瀬】 2. 視覚障害者の現状②【川瀬】 視覚障害者・児の現状を理解し、医学的見地から視覚障害の課題に気づく。 また重複障害における検査の留意点を理解する。 3. 点字学習①【棚橋】 4. 点字学習②【棚橋】 点字を学習することにより視覚障害の理解を深める。 課題の提出 5. 視覚障害の制度①【池谷】 6. 視覚障害の制度②【池谷】 視覚障害者・児を取り巻く福祉の制度について理解し、医学リハの基本を習得する。 7. 視覚障害の制度③【棚橋】 8. 視覚障害の制度④【棚橋】 制度における補装具や日常生活用具について理解する。 9. 視覚障害者・児の支援法①【池谷】 10. 視覚障害者・児の支援法②【池谷】 11. 視覚障害者・児の支援法③【池谷】 12. 視覚障害者・児の支援法④【池谷】 視覚障害（全盲）疑似体験を通じて、医療現場における視覚障害当事者への支援の在り方を理解する。 13. 社会資源の理解①【棚橋】 14. 社会資源の理解②【棚橋】 15. 社会資源の理解③【棚橋】 視覚障害に関係する施設の見学と視覚障害当事者の心理を理解する。 定期試験 							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、課題提出（10%）、授業態度等（10%）総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
講師が適宜配布する				同行援護従事者養成研修テキスト（中央法規出版）			
備 考							

リハビリテーション学科

視機能療法専攻

専門科目

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎視能矯正学		視機能療法学概論			宮本 安住己	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 従来の視能訓練士の業務は主に斜視弱視の検査・訓練であった。視機能療法学概論では、この狭義の視能矯正についての基礎を学ぶとともに、現代の視能訓練士の業務としての広義の視能矯正の基礎も学修する。現在の視能訓練士の業務は眼科で扱うすべての疾患に関連している。1年生の前期科目であり、視機能療法を理解するため基本的知識も身につけることができるよう、講義を進める。視機能検査学概論で学んだ内容を理解しておくこと。</p> <p><学修の到達目標> ①視器の構成・機能の基礎的事項について説明できる。 ②眼を理解するために必要な基礎医学知識を身につける。 ③視機能療法の種類と適応を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 前回の講義内容を理解していることが最低限必要である。 毎回の事前学習は必要に応じて講義内で指示する。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 講義のはじめに前回の講義内容の確認テストを行う。 講義内容の復習の助けになる課題や練習問題を提供する。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視能訓練士に必要な視機能療法学概論 2. 眼球と付属器の構造 3. 角膜、虹彩、毛様体、水晶体、網膜、脈絡膜の生理 4. 視覚伝導路の概要 5. 眼球運動の基本と神経支配 6. 眼球模型作成 7. 斜視の基本的知識 8. 前半小テスト。視機能療法に必要な基礎医学知識1 9. 視機能療法に必要な基礎医学知識2 10. 視機能療法とインフォームドコンセント 11. 視機能療法と安全管理 12. 屈折矯正と弱視の基本的知識 13. 光学的な視機能療法 14. 視機能訓練による視機能療法 15. 訓練以外の視機能療法。小テスト 定期試験 							
評価基準・評価方法							
講義中の小テスト（50%）、定期試験（50%）							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫他編集 視能学エキスパート視能訓練学 監修 医学書院				文光堂 日本視能訓練士協会			
現代の眼科学							
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		基礎視機能矯正学Ⅰ（眼球運動、他）			田中 健司	助教	
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 物を見るときには両眼の視線をそろえ対象物を捉えることが大切である。 基礎視機能矯正学Ⅰでは、眼を動かすのに必要な筋肉の構造、仕組みについて、また両眼の視線が整う仕組みについて学び、視機能訓練や視機能矯正につなげる。</p> <p><学修の到達目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・単眼、両眼での眼球運動の種類を説明することができる ・眼を動かすのに必要な筋肉の構造、仕組み、それぞれの筋肉を支配する神経について説明することができる ・それぞれの筋肉を支配する神経や筋肉に麻痺が起きた場合の症状、所見について考え説明することができる 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 眼球の解剖や付属器の知識も必要となるため「視器の解剖と生理学ⅠおよびⅡ」で学んだことも事前にしっかり復習しておくこと。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容> 他の科目で学んだこととも関連付けて理解できるように毎度の復習をしっかりとしていくこと。講義のノートを必ず見直して、修正や加筆など必要であれば行うこと。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 外眼筋 外眼筋の名称、外眼筋の構造・特性について 2. 眼球運動 眼球運動の種類と法則 Fick座標系について：各ひき運動の方向、名称 3. 眼球運動 両眼の相互の位置関係：Listing平面、Dondersの法則 4. 外眼筋 各外眼筋の走行1：起始部 総腱輪 5. 外眼筋 各外眼筋の走行2：外眼筋の停止部 神経支配 6. 外眼筋 各外眼筋の作用 主作用・副作用 7. 外眼筋 単眼の眼球運動について：ひき運動 ともひき筋 正常範囲 8. 外眼筋 両眼での眼球運動について：むき運動 ともむき筋 眼球運動の法則① 9. 外眼筋 両眼での眼球運動について：むき運動 ともむき筋 眼球運動の法則② 10. 脳神経 外眼筋の神経支配1 各神経の核の位置・走行・作用：動眼神経の走行 11. 脳神経 外眼筋の神経支配2 各神経の核の位置・走行・作用：外転神経の走行 12. 脳神経 外眼筋の神経支配3 各神経の核の位置・走行・作用：滑車神経の走行 13. 脳神経 各神経麻痺 それぞれの神経麻痺の場合の症状・所見 外転神経 14. 脳神経 各神経麻痺 それぞれの神経麻痺の場合の症状・所見 動眼神経 15. 脳神経 各神経麻痺 それぞれの神経麻痺の場合の症状・所見 滑車神経 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
講義主体となるため知識の理解、定着を測定するため小テスト、筆記試験にて判定する。 定期試験80%、小テスト20%にて総合評価とする。							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集：丸尾敏夫 他） ビジュアルテキスト脳神経（医学書院：監訳 高倉公朋） 視能学エキスパート視能訓練学 日本視能訓練士協会 監修 医学書院				神経解剖学 テキストとアトラス（西村書店 ジョン・H・マーティン）			
備考							
講義主体で行う。毎回の講義の復習を欠かすことなく着実に自分の知識にしていくこと。 各講義のはじめに前回講義分の小テストを行い知識の定着度を確認し、講義終了後の定期試験とあわせて総合評価とする。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎視能矯正学		基礎視機能矯正学Ⅱ (眼位、両眼視)			野原 尚美	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 物を見るときには両眼の視線が同じ所に向くことが必要である。さらに、両眼でとらえた画像を脳で同時に受け取り、ひとつにすることで、物が立体的に見える。この両眼の像がひとつにならないと、物が二つに見える複視が生じる。ここでは正常眼位と正常両眼視機能、さらには斜視と異常両眼視機能の基礎について学び、理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①正常両眼視機能が理解できる。 ②異常な両眼視について考える事ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 毎回の講義の終わりに、次回の講義の予習となる内容を提供するので、調べ学習を行うこと。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 毎回の講義の後に、授業の内容を確認しながら、配布したノートを作成すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 両眼で見ることは（眼位の定義、単眼視野と両眼視野） 2. 正常両眼視とは（定義） 3. 眼位の成り立ち（緊張性輻輳 調節性輻輳 近接性輻輳 融像性輻輳について） 4. 眼位の種類（自然状態による眼位、向き眼位による種類） 実際空間と視空間） 5. 網膜対応について（正常網膜対応の定義、重複眼の概念） 6. 両眼視成立の生理学的機序（ホロプター、パナムの融像感覚圏、同時視、融像） 7. 深径覚、立体視と遠近感、生理的複視の体験と原理 8. 立体視（静的立体視と動的立体視）、視覚情報の処理（M経路とP経路）、両眼視成立の条件 9. 正常両眼視についてグループワーク①（小テスト） 10. 正常両眼視についてグループワーク② 11. 異常両眼視機能（複視の種類：単眼複視と両眼複視、生理的複視と病的複視の違い、方向による複視の種類） 12. 病的複視の起こり方（外斜視と交叉性複視、内斜視と同側性複視、真像と仮像） 重複眼の概念を用いて 13. 病的複視の起こり方（上下斜視と複視） 病的複視の体験：プリズム装用にて（正位にプリズムを当てるとどうなるか） 14. 抑制、混乱視、網膜対応異常（異常対応と対応欠如） 15. 背理性複視（異常対応の斜視を手術して眼位を整えた時の見え方を考えてみよう 重複眼の概念を使って） 定期試験 							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（70%）、事前調べ学習と事後のノート作成（20%）、小テスト（10%）							
使用教科書				参考図書			
視能学（第2版） 文光堂 この講義で使用するノートを事前に配布する。				視能矯正理論と実際 金原出版 視能矯正マニュアル メディカル葵出版 視能矯正学 金原出版			
備考							
事後学習でノートを作成する際は、授業中に書き取ったノートの写しだけでなく、調べ学習を取り入れたノートにすること。例えば、授業で出てきた内容に関係することや、分からなかったところなどを図書室を利用して参考図書などで調べ、その内容を加えて書くと授業内容が更に深められる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視覚生理学Ⅱ（応用）			○松井 康樹 枝川 宏	教授 非常勤講師	
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>1年次履修の視覚生理学Ⅰの発展編で、視機能が成立する生理的メカニズムについて学習をする。視機能が成立するためにどのようなメカニズムが働いているか、視覚入力統合において視器の各部分の活動で光学的画像が神経信号に変換されて認識されゆく機能を学ぶ。また自覚的視機能検査である光覚、色覚、形態覚、視野、すについても学ぶ</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚のシステムを理解する 2. 網膜内情報処理について理解する 3. 網膜部位と視力の関係について理解する。視覚情報処理に関係する空間周波数特性と時空間周波数特性を理解する 4. 色覚のメカニズム、異常の分類・特徴、色覚検査の種類と特徴・方法について理解する 5. 光覚検査の手技・測定結果の解釈を理解する 6. 視野異常の種類を理解し、視路による視野異常を理解する 7. 電気生理検査の電位と時間軸が理解でき、周波数とフィルター特性を理解する 8. 網膜電図、眼球電図、視覚誘発電位、眼振電図の測定方法と正常波形、異常波形を理解する 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>1年次の解剖学Ⅱ（神経系）、神経生理学、視器の解剖と生理学Ⅰ、視器の解剖と生理学Ⅱ、視覚生理学Ⅰについて理解しておくこと。プリントは次回分の講義まで配布することが多いので、予習をしてくること。前回までの内容の見直しをして授業に参加すること。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容></p> <p>受講した内容はしっかり覚えること。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚の成り立ち、神経生理学（松井康樹） 2. 網膜内視覚情報処理特性、網膜部位と視力、空間周波数特性、時空間周波数特性（松井康樹） 3. 色覚：メカニズム、正常色覚と色覚異常（松井康樹） 4. 色覚検査：種類と各特徴、方法について（松井康樹） 5. 順応Ⅰ：明順応と暗順応、光覚検査：方法、対象疾患及び波形の見方（松井康樹） 6. 視路における神経線維の走行の特徴を理解する（松井康樹） 7. 視野検査：方法・種類、視野異常：種類（松井康樹） 8. 疾患、視路における視野異常（松井康樹） 9. 電気生理Ⅰ：電位と周波数、増幅器とフィルター、電極とノイズ対策（松井康樹） 10. 電気生理Ⅱ：網膜電図の原理と方法、結果の見方、視覚誘発電位の原理と方法、結果の見方（松井康樹） 11. 電気生理Ⅲ：眼球電図の原理と方法、結果の見方、眼振電図の原理と方法、結果の見方（松井康樹） 12. 動体視力（枝川宏） 13. 視機能とスポーツ選手（枝川宏） 14. スポーツ眼科1（枝川宏） 15. スポーツ眼科2（枝川宏） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験80%、小テスト20%							
使用教科書				参考図書			
「現代の眼科学」第12版 金原出版、「視能学」第2版 文光堂 スポーツ眼科A to Z (Monthly Book OCULISTA, No.58) 視能学エキスパート視能訓練学 日本視能訓練士協会 監修 医学書院				毎回授業中にプリントを配付する。			
備考							
資料、スライド、プロジェクターなどを使用し、説明を行う。 オフィスアワー：授業中に質問の時間を取るほか、質問紙による質問には、次回の授業時に回答する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎視能矯正学		生理光学Ⅱ（眼球光学）			○松田 育子	准教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義・演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 生理光学Ⅰの発展編。眼球光学系について学習する。 眼科検査の基本である視力検査について、評価法、視力の種類、影響を及ぼす因子、そして視力検査法の実際を学び、視力検査の演習を通して理解を深める。 次に、「生理光学Ⅰ」で学んだ屈折異常を矯正する方法と矯正レンズによる屈折異常の変化の知識を理解した上で、自覚的屈折検査（レンズ交換法、乱視矯正法）の実際について学習し、実践できるようになる。</p> <p><学修の到達目標> 自覚的屈折検査の中のレンズ交換法、放射線乱視表を使った乱視検査の原理が理解できる。レンズ交換法、乱視表を使った乱視検査の手技ができる。検査の説明をしながら検査を進めることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次後期に学んだ「生理光学Ⅰ」の知識を振り返りながら授業を進めます。あらかじめ復習しておいてください。 毎回、自己学習のための課題を出題しますので、作成してください。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 2年次前期で学ぶ「生理光学Ⅲ」「生理光学演習Ⅰ」「生理光学演習Ⅱ」に発展していきますので、何度も振り返って知識を深めること。 演習後にレポート課題が出題されます。「学んだこと」「自分のものにしたこと」「省察」「自分に対する次への課題」をまとめ、次につなげる癖をつけて下さい。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視力の定義 視力の単位、表示法 視力検査法と留意点 2. 字づまり視力 0.1以下の視力、0.01以下の視力 結果の記載法 実習室の心得 3. 身だしなみのチェック 視力検査 4. 検査条件 視力に影響を与える因子① 5. 視力の種類 視力に影響を与える因子② 6. レンズ交換法、球面レンズの矯正（S面ベスト矯正） 7. 裸眼視力 S面ベスト矯正 8. 裸眼視力 S面ベスト矯正 演習 9. 乱視矯正 / フローチャートの確認 雲霧する → 乱視表 10. 乱視矯正 / 乱視表の見え方と乱視軸の決定 11. 乱視矯正 / 乱視度の決定 → 最終ベスト 12. 乱視矯正 / フローチャートの理論確認 1 13. 乱視矯正 / フローチャートの理論確認 2 14. 自覚的屈折検査（乱視表） 演習 15. 自覚的屈折検査（乱視表） 演習 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫編集 文光堂				視力検査・屈折検査 また、必要時にはプリントを配布する			
備考							
まずは復習すること。復習に基づいた質問は大歓迎です。授業中の質問時間やオフィスアワーを活用し、自主的に行動すること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 基礎視能矯正学		生理光学Ⅲ（屈折・調節）			○松田 育子 中村 友昭 磯谷 尚輝	准教授 非常勤講師 非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 眼科で最も重要で、視機能矯正を実践する上で、まず行う必要があるのが屈折・調節検査である。生理光学Ⅲでは、屈折・調節の種類、メカニズム、異常を学習する。そして屈折検査、屈折矯正方法、調節検査について学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ・各屈折異常、病態について説明することができる ・検査に関連する各種計算、法則について理解することができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 生理光学Ⅰ、Ⅱの知識を基に学習することも多いので、しっかり復習をしておいてください。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 2年次での各演習、実習にも必要な知識になります。しっかり復習をしてください。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 調節のメカニズム 遠点と近点 年齢と調節力 屈折異常と調節域 装用レンズと調節域の変化 30cmを見るために必要なレンズ度数（付加度数） プリズム偏角とプリズムディオプトリー フレネル膜プリズムの構造 レンズのプリズム効果、不同視と上下プリズム効果 厚いレンズの主要点、バージェンスによるレンズの屈折力と結像、面屈折力 バージェンス演習 横倍率、縦倍率、角倍率 遠点と矯正原理、レンズの矯正効果、頂点間距離の変化と矯正効果の変化 眼鏡の光学、コンタクトレンズの光学、コンタクトと眼鏡での調節力 強度屈折異常 不同視、無水晶体眼の眼光学 像の拡大縮小 Knappの法則 眼球光学、角膜、前房、水晶体、虹彩、瞳孔、硝子体、網膜 プルキンエサンソン 眼と軸 光軸、視軸、瞳孔中心線、γ角、κ角、stiles Crowford 効果 屈折矯正手術 レーシックについて（中村友昭） 収差・高次収差について（磯谷尚輝） 望遠鏡の仕組み、ロービジョン関係の光学 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集 丸尾敏夫他） 屈折異常とその矯正（金原出版 編集：所 敬）				適宜紹介する 必要時にはプリントを配布する			
備 考							
まずは復習すること。復習に基づいた質問は大歓迎です。授業中の質問時間やオフィスアワーを活用し、自主的に行動すること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		薬理学			田中 宏幸	非常勤講師	
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 薬理学は、薬がどこに作用してどのようなメカニズムで効果を発揮するかを研究する学問であり、生理学、解剖学、生化学などの基礎的な知識とともに病態生理、薬物治療に関連する重要な科目である。 まずは体の仕組み、各臓器や器官の働きを理解し、その上で生体内のホルモン・神経伝達物質・オートコイドなどの物質の働き、それらの刺激を受容する受容体を理解し、薬物による作用・拮抗作用について学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①自律神経系・感覚神経系による神経支配が説明できる。②免疫とアレルギーについてが説明できる。③生体の恒常性（ホメオスタシス）を維持するための薬物療法が説明できる。④眼科領域で使用される薬の作用機序ならびに副作用が説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 感覚神経・自律神経・免疫について復習すること。各回、教科書および授業プリントを事前に読んで授業に出席すること。 <必要時間>各回60分以上は解剖生理学を中心に復習し、教科書およびプリント記載内容を熟読してくること。</p>				<p><内容> 毎回、講義当日中に授業ノートおよび教科書・プリントを用いて復習すること。 <必要時間>各回60分程度、教科書およびプリント記載内容を復習すること。できれば、まとめノートを作成できると良い。</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 薬理学の基礎：薬物とは、薬物療法 薬理学の基礎：受容体・作用薬・拮抗薬 薬理学の基礎：神経伝達物質・ホルモン・オートコイド 薬理学の基礎：用量（濃度）作用曲線、作用薬と拮抗薬の作用点・作用機序 薬理学の基礎：薬物の効果に影響を及ぼす要因（投与量、治療係数、性差、年齢、プラセボ、耐性、依存、アレルギー） 薬理学の基礎：薬物の適用方法、体内動態（吸収・分布・代謝・排泄）、副作用、処方箋、新薬開発の流れ、ジェネリック 末梢神経系：神経とは、静止膜電位、活動電位の発生、神経興奮の伝導、シナプス、局所麻酔薬の作用機序 末梢神経系：筋の種類、骨格筋の収縮機構、筋弛緩薬の薬理作用 末梢神経系：自律神経、交感神経、副交感神経、節前線維、節後線維、神経節、シナプス 末梢神経系：交感神経、副交感神経系に作用する薬物（作用薬・拮抗薬・疾患） 免疫系：免疫とは、アレルギー・自己免疫疾患・感染症、自己と非自己、アレルギーの仕組み 免疫系：アレルギー治療薬、オートコイド、解熱鎮痛薬、感染とは、細菌の種類、耐性菌 免疫系：抗生物質、抗生物質の薬理作用 眼科薬理学：視覚の仕組み（復習：角膜、水晶体、毛様体、毛様体筋、シュレム管、網膜、視神経乳頭など） 眼科薬理学：薬物の適用方法、動態（吸収・分布・排泄）、緑内障と治療薬、白内障と治療薬、アレルギーと治療薬 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
<p>中間試験（50％）と期末試験（50％）を用いて評価する。 8回の講義が終了した時点で中間テストを実施する。 15回の講義が終了した時点で期末テストを実施する。</p>							
使用教科書				参考図書			
系統看護学講座 専門基礎分野 薬理学 第14版(医学書院)				解剖生理学がわかる 飯島治之著 技術評論社			
備考							
<p>外部講師のため、質問などはメールにて連絡ください。その際は件名に「平成医療短期大学視能訓練学科薬理学」についてと記してください。メールは携帯のメールアドレスではなく、大学のメールアドレスから送信すること。本講義を受講して、薬の作用と副作用の概論、点眼薬の目的と作用・副作用を理解すること。 メールアドレス：hirotnk@gifu-pu.ac.jp</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		基礎視機能矯正学特論Ⅰ (解剖と生理、視覚生理)			松井 康樹	教授	
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 最終学年となって、視能訓練士に必要な知識の基礎固めをし、また臨床の場において必要な視機能検査、病態などの専門的知識の整理をするとともに、その知識を確実なものとする必要がある。 基礎視機能矯正特論では、視機能障害、視機能検査、視機能訓練を実践する際に必要な知識を結びつけ、さらに深めることを目的とする。ここでは、解剖と生理、視覚生理について、より理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> 眼疾患、視機能障害の理解に必要な解剖と生理を身につけ、視覚生理の知識を身につける</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 過去に学習した視器の解剖・生理と視覚生理についてまとめておくこと。 <必要時間>毎回240分</p>				<p><内容> 判らないことがないように、復習をし、知識を確実なものとするために、事後学習に励むこと。 <必要時間>毎回240分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚器の構成、発生、神経生理 2. 眼球付属器（眼瞼、涙器、視神経他）の解剖と生理 3. 眼球付属器（眼瞼、涙器、視神経他）の解剖と生理 4. 角膜、強膜、ぶどう膜、水晶体、硝子体の解剖と生理 5. 角膜、強膜、ぶどう膜、水晶体、硝子体の解剖と生理 6. 網膜の解剖と生理 7. 眼科に関する血管 8. 網膜内情報処理 9. 脳、中脳、小脳 10. 視覚伝導路、視覚中枢、視覚連合野 11. 視野異常 12. 形態覚、受容野 13. 色覚、光覚 14. 電気生理 15. 眼球運動、瞳孔運動、調節 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（100％）により評価する。							
使用教科書				参考図書			
現代の眼科学（第12版）金原出版 視能学第2版 文光堂				プリントを配付する。			
備考							
資料、スライド、プロジェクターなどを使用し、講義を行う。 復習すること。そして質問し不明な点はなくすこと。休み時間やオフィスアワーを活用し、自主学習にも力を注いで理解してください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名			
専門科目 基礎視能矯正学		基礎視機能矯正学特論Ⅱ (生理光学)			松田 育子	准教授			
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態		
		理学	作業	視機能					
必修				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義		
選択									
授業概要・学修の到達目標									
<p><概要> 基礎視機能矯正学特論として、3年間の知識を結びつけ、さらに深めることを目的とする。ここでは、生理光学について、より理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> 眼鏡、コンタクトレンズ、光学的補助具など、症状や眼所見に対応するためにどの知識が必要となるか関連づけることができる。 国家試験問題の解答を、必要な知識を使って導き出すことができる。</p>									
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。				
事前学習				事後学習					
<p><内容> 生理光学の中の特に苦手な分野を明らかにして、再度学ぶつもりで授業に臨むこと。 <必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 国家試験過去問題を数多く説いて、理解を深める。 <必要時間>各回90分</p>					
授業計画									
<table border="0"> <tr> <td style="vertical-align: top;"> 1. 基本的な光の性質 2. レンズの光学 (1) 3. レンズの光学 (2) 4. レンズの光学 (3) 5. レンズの光学 (4) 6. レンズの光学 (5) 7. レンズの光学 (6) 8. 眼鏡光学 (1) 9. 眼鏡光学 (2) 10. 眼鏡光学 (3) 11. 眼鏡光学 (4) 12. 眼鏡光学 (5) 13. 眼鏡光学 (6) 14. 視力に関する光学 (1) 15. 視力に関する光学 (2) </td> <td style="vertical-align: top;"> 可視光、屈折率、反射・屈折の法則 レンズの光学、面屈折力、焦点、節点、主点 薄いレンズの屈折力、厚いレンズの屈折力、頂点屈折力 バージェンス：光線の発散・収束度、レンズ屈折力と結像式 レンズの収差、視覚生理学に関係する収差 屈折異常と矯正レンズ、遠点と矯正原理 調節機能、調節力 頂点間距離と補正、レンズの矯正効果 眼鏡の光学、コンタクトレンズの光学、眼内レンズの光学、みかけの調節力 不同視・不等像視、無水晶体眼の眼光学、眼鏡レンズによる拡大と縮小 プリズム、プリズムの強さを表す単位、レンズのプリズム効果、フレネル膜プリズム プリズムによる誤差、角膜反射像の結像位置、眼と軸 ロービジョン関係 拡大を目的とした光学的補助具の光学 ランドルト環の大きさと網膜像の大きさ、対数視力 編視標 コントラスト感度 文字対比感度 側方抑制、光の単位 </td> </tr> </table> <p>定期試験 筆記</p>								1. 基本的な光の性質 2. レンズの光学 (1) 3. レンズの光学 (2) 4. レンズの光学 (3) 5. レンズの光学 (4) 6. レンズの光学 (5) 7. レンズの光学 (6) 8. 眼鏡光学 (1) 9. 眼鏡光学 (2) 10. 眼鏡光学 (3) 11. 眼鏡光学 (4) 12. 眼鏡光学 (5) 13. 眼鏡光学 (6) 14. 視力に関する光学 (1) 15. 視力に関する光学 (2)	可視光、屈折率、反射・屈折の法則 レンズの光学、面屈折力、焦点、節点、主点 薄いレンズの屈折力、厚いレンズの屈折力、頂点屈折力 バージェンス：光線の発散・収束度、レンズ屈折力と結像式 レンズの収差、視覚生理学に関係する収差 屈折異常と矯正レンズ、遠点と矯正原理 調節機能、調節力 頂点間距離と補正、レンズの矯正効果 眼鏡の光学、コンタクトレンズの光学、眼内レンズの光学、みかけの調節力 不同視・不等像視、無水晶体眼の眼光学、眼鏡レンズによる拡大と縮小 プリズム、プリズムの強さを表す単位、レンズのプリズム効果、フレネル膜プリズム プリズムによる誤差、角膜反射像の結像位置、眼と軸 ロービジョン関係 拡大を目的とした光学的補助具の光学 ランドルト環の大きさと網膜像の大きさ、対数視力 編視標 コントラスト感度 文字対比感度 側方抑制、光の単位
1. 基本的な光の性質 2. レンズの光学 (1) 3. レンズの光学 (2) 4. レンズの光学 (3) 5. レンズの光学 (4) 6. レンズの光学 (5) 7. レンズの光学 (6) 8. 眼鏡光学 (1) 9. 眼鏡光学 (2) 10. 眼鏡光学 (3) 11. 眼鏡光学 (4) 12. 眼鏡光学 (5) 13. 眼鏡光学 (6) 14. 視力に関する光学 (1) 15. 視力に関する光学 (2)	可視光、屈折率、反射・屈折の法則 レンズの光学、面屈折力、焦点、節点、主点 薄いレンズの屈折力、厚いレンズの屈折力、頂点屈折力 バージェンス：光線の発散・収束度、レンズ屈折力と結像式 レンズの収差、視覚生理学に関係する収差 屈折異常と矯正レンズ、遠点と矯正原理 調節機能、調節力 頂点間距離と補正、レンズの矯正効果 眼鏡の光学、コンタクトレンズの光学、眼内レンズの光学、みかけの調節力 不同視・不等像視、無水晶体眼の眼光学、眼鏡レンズによる拡大と縮小 プリズム、プリズムの強さを表す単位、レンズのプリズム効果、フレネル膜プリズム プリズムによる誤差、角膜反射像の結像位置、眼と軸 ロービジョン関係 拡大を目的とした光学的補助具の光学 ランドルト環の大きさと網膜像の大きさ、対数視力 編視標 コントラスト感度 文字対比感度 側方抑制、光の単位								
評価基準・評価方法									
筆記試験100%									
使用教科書				参考図書					
視能学第2版 丸尾敏夫編集 文光堂 屈折異常とその矯正 第6版 所 敬著 金原出版				適宜紹介する また、必要時にはプリントを配布する					
備考									
まずは復習すること。復習に基づいた質問は大歓迎です。授業中の質問時間やオフィスアワーを活用し、自主的に行動すること。									

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能療法学実験研究			大庭 紀雄	特任教授	
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能療法の授業の到達目標が視能訓練士としての医療の実務に必要な知識、手技、態度を習得することは過言を要しないが、研究の一端にふれることも大切である。この授業においては視機能療法に関わる研究テーマを見出す能力を獲得するとともに、一定の仮説を検証するために実験的研究を進める。</p> <p><学修の到達目標> 視機能療法に関わる研究テーマを見出し、一定の仮説を検証するために実験的研究を進めることができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 3年次前期までの講義や演習や臨地実習を振り返って、研究の余地のある問題を考究しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 毎回の授業で行った実験データを整理分析して、次の授業における実験について考察しておく。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 研究の意義、研究の進め方について検討する。 2. 研究主題を選定、関連するこれまでの研究成果について国内外の文献を調査する。 3. 既知の成果の発展、修正、追認といった研究目的を具体的に企画し、新しい仮説を設定する。 この授業における研究環境を勘案して、視機能に関する各種測定を正常ヒト（学生自身、学生同士）を対象として行う。測定方法は自身の工夫、専攻の備品（各種視機能検査機器）を使うことになる。こうした制約のもとで考えられる研究主題を下記にいくつか例示する。 研究テーマは学生各人が独自に選定することが大切である。 <ul style="list-style-type: none"> ・片眼視力と両眼視力の恒常性、両者の関係性 ・眼位づれ（斜視角）がどの程度あれば視認によって同定できるか ・Stiles-Crawford 効果についての自己体験的観察、その意義の考察（細隙灯顕微鏡検査使用） ・レイリー均等の日内リズム（アノマロスコープ使用） ・網膜血管の分枝の内視現象としての自己観察、網膜血管の解剖学（直像検眼鏡、倒像眼底検査鏡） ・定量視野計の背景輝度を低下させた場合にみられる視野の形状の変化（ゴールドマン視野計使用） ・背景輝度と空間周波数特性 <p>4-10 観察や測定の実施 11-13 観察データ、測定値の分析、解釈、考察 14-15 研究成果（レポート、論文）のまとめと発表 学期末：研究成果発表会、研究レポート（論文）提出、定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
研究計画の策定、文献の読解と考察、研究主題の選定、仮説の妥当性、実験データの取得、結果の解釈、レポート内容の7項目について各10%、定期試験の成績（30%）を総合して成績評価する。							
使用教科書				参考図書			
関連文献の検索と検討に必要な資料を適宜配布する。				参考文献は適宜説明する。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門科目		医療情報学			○大庭 紀雄 可児 一孝		特任教授 非常勤講師
基礎視能矯正学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修					3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択				○			
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視能訓練士としての業務を実践するためには、患者の診療に関わる知識と技能に加えて、医療の動向や研究情報まで広く活用する必要がある。この授業科目は、医療情報の獲得（受信）、分析、発信（発表）に必要な知識と技法を学ぶことである。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 医療情報の一般情報とは異なる側面 +A55 について説明することが出来る。 2. 医の倫理、医学研究の倫理を踏まえた医療情報の獲得の方法を理解し、必要な情報の獲得に対応することが出来る。 3. 医療の倫理と診療情報の特殊性を熟知し、情報の獲得、記録、分析、利用に必要な知識と能力を身に付けることが出来る。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> パソコン、多機能携帯端末（smartphone,iPAD など）の使用に習熟しておくこと、適当な検索エンジン（例：Google）を用いて、医学、医療に関するデータベース（医学中央雑誌、Pubmed など）への幕背すを体験しておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 毎回の授業において作成したノートを読み返して、文章形式で分かりやすい形式で整理すると共に、加筆、修正、削除を行って内容を充実させること。授業で坂書した「図」をきちんと書き直して後利用に備えること。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<p>視能訓練士としての業務の現場で必要なら医学・医療の情報の取得（受信）、分析と解釈、報告（発信）について説明する。授業形態は講義と視、具体的事例を提示する。坂書とハンドアウト（配布印刷物）を活用する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. この授業科目のシラバス（目標、計画）、進め方（学習ノート充実度点検、演習講義）、専用ノートの活用を説明する。 2. 医の倫理（ヘルシンキ宣言、リスボン宣言）患者との情報交換、医療面接、眼疾患主訴の特徴、検査情報 3. 診療録Ⅰ. 診療情報の守秘義務、診療録の保存と活用、電子カルテ（診療録に係る医療法規） 4. 診療録Ⅱ. 診療録（電子カルテ）の書き方、読み方、視機能検査所見（視力、屈折、視や、眼位）の標準的記載法 5. 視能訓練士と意思、看護師、医療従事者との情報交換 6. 医療情報の取得（受信）Ⅰ. 日本視能訓練士協会：日本視能矯正学会。関連学会（弱視斜視角学会、神経眼科学会） 7. 医療情報の取得（受信）Ⅱ. 雑誌（視能矯正学、眼科学）、関連国際雑誌、医療情報の国際化（小テスト、ノート点検） 8. 医療情報の受信Ⅲ. データベース：医学中央雑誌、PubMed、Google scientific 9. 医療情報の受信Ⅳ. 医学情報の質的評価：open study、randomized controlled trial（臨床治験、二重盲検試験） 10. 医学、医療情報のデータベース化：情報の検索法、整理法、分析と考察 11. 医療における日本語と英語：分権の検索法、文献の読み方 12. 視能訓練士が必要とする専門用語（和文、英文）：視能矯正、視能訓練関連用語集 13. 視能矯正、視能訓練関連 専門英語の語源、略語 14. 情報の発信Ⅰ. 各種報告書の書き方、研究会、学会における発表（プレゼンテーション：展示発表、講演発表） 15. 情報の発信Ⅱ. 学術論文（日本語、英語）のまとめ方と書き方、出版の方法。（小テスト、ノート点検） <p>授業計画終了直後：ノートの充実度評価、テイク試験（筆記試験、客観試験、選択5肢、ノート持ち込み可）</p>							
評価基準・評価方法							
<p>授業形態が講義主体であることから、知識と理解の到達度の測定を評価基準とする。授業計画中に3回の小テスト、2回のノート点検を行うが、いずれも授業改善の参考にするための形成的意義を持つものである。課目の成績は、授業系アック終了後の「定期試験結果評価点：60%配分」および「学修ノートの充実度評価点（40%配分）を総合評価した結果とする。</p>							
使用教科書				参考図書			
特になし				特になし			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視覚生理学演習Ⅰ（視野検査他）			○田中健司、松井康樹 佐藤奈美、丹沢慶一	助教、教授 助教、講師	
視能検査学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義、演習(オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> この科目は、1年次の「視覚生理学Ⅰ」、2年次の「視覚生理学Ⅱ」、「視機能検査学Ⅰ」で習得した知識を用い、演習形式によって、視覚生理学検査法について学ぶ。診療で実際に使用される検査機器を用いて、各器械の使用方法、検査結果の分析と解釈を習得する。視覚生理学演習Ⅰでは、視野検査、色覚検査、眼圧検査を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 視野検査のゴールドマン視野計、平面視野計、ハンフリー視野計について、測定方法を理解し測定ができる。視野異常について理解し、測定ができる。 2. 眼圧について理解し、各測定機器の特徴、測定方法、測定値について解る。 3. 色覚検査の種類と測定方法、結果の判断ができる。 4. 眼球運動検査ができ、診断ができる。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次「視覚生理学Ⅰ」「視覚生理学Ⅱ」「視機能検査学Ⅰ」の知識を基に演習を進める。必要な知識を復習しておくこと。 <必要時間>毎回90分</p>				<p><内容> 演習によって習得した検査対象、方法、注意点、検査結果の分析など理解するために、レポートを書き、理解すること。 <必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ゴールドマン視野計Ⅰ（田中健司） 2. ゴールドマン視野計Ⅰ（田中健司） 3. 平面視野計（丹沢慶一） 4. 眼圧検査講義（佐藤奈美） 5. 眼圧検査（佐藤奈美） 6. 眼球運動検査（佐藤奈美） 7. 眼球運動検査（佐藤奈美） 8. ハンフリー視野計Ⅰ（田中健司） 9. ハンフリー視野計Ⅰ（田中健司） 10. ハンフリー視野計Ⅱ（田中健司） 11. ハンフリー視野計Ⅱ（田中健司） 12. 色覚検査講義（松井康樹） 13. 色覚検査講義（松井康樹） 14. 色覚検査（松井康樹） 15. 色覚検査（松井康樹） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
演習態度、試験（筆記と実技）で総合判定する。							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する 適時必要に応じて資料を配付する							
備考							
質問は各教員に随時してください。 演習の自習をする際は教員に申し出てください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		視覚生理学演習Ⅱ（電気生理）			○田中健司、丹沢慶一 松井康樹	助教、講師 教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義、演習
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>この科目は、1年次の「視覚生理学Ⅰ」、2年次の「視覚生理学Ⅱ」、「視機能検査学Ⅰ」で習得した知識を用い、演習形式によって、視覚生理学検査法について学ぶ。診療で実際に使用される検査機器を用いて、各器械の使用法、検査結果の分析と解釈を習得する。視覚生理学演習Ⅱでは、電気生理検査、視野検査、超音波検査、CFFを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 電気生理検査のERG、VEPについて理解し、測定ができる。 また正常波形と異常波形の区別ができ、疾患についても理解する。 2. 超音波検査、光学的眼軸長計測装置について理解し、Aモードを中心に測定方法、測定値について解る。 3. ゴールドマン視野計は視覚生理学演習Ⅰに続き早く正確に測定ができる。 また異常視野の測定ができる。 4. Amsler char、M-chartについて、測定方法を理解し、測定ができる。 5. CFFは、検査方法を理解し、測定ができる。また測定値について判る。 6. スペキュラーマイクロスコープについて理解し、測定ができる。結果についての判定ができる。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>1年次「視覚生理学Ⅰ」「視覚生理学Ⅱ」「視機能検査学Ⅰ」の知識を基に演習を進める。必要な知識を復習をしておくこと。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容></p> <p>演習によって習得した検査対象、方法、注意点、検査結果の分析など理解するために、レポートを書き、理解すること。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. ゴールドマン視野計Ⅱ（田中健司） 2. ゴールドマン視野計Ⅱ（田中健司） 3. ゴールドマン視野計Ⅲ（田中健司） 4. ゴールドマン視野計Ⅲ（田中健司） 5. ERG 講義（松井康樹） 6. ERG（松井康樹） 7. ERG（松井康樹） 8. VEP 講義（丹沢慶一） 9. VEP（丹沢慶一） 10. VEP（丹沢慶一） 11. 超音波検査、光学的眼軸長計測、スペキュラーマイクロスコープ講義（田中健司） 12. 超音波検査、光学的眼軸長計測、スペキュラーマイクロスコープ（田中健司） 13. 超音波検査、光学的眼軸長計測、スペキュラーマイクロスコープ（田中健司） 14. CFF（丹沢慶一） 15. Amsler chart（丹沢慶一） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
出席、演習態度、試験（筆記と実技）で総合判定する。							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する 適時必要に応じて資料を配付する							
備考							
質問は各教員に随時してください。 演習の自習をする際は教員に申し出てください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		生理光学演習Ⅰ (屈折検査)			○松田育子、田中健司 丹沢慶一、佐藤奈美	准教授、助教 講師、助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 講義で学んだ屈折・視力検査法並びに眼光学に関する知識について、診療で実際に使用される検査機器を用いて検査の方法を具体的に演習し、得られた検査結果の分析と解釈を学ぶ。あわせて、疾病の病状検査の異常すなわち評価や診断に向けての応用を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 他覚的屈折検査・自覚的屈折検査を、眼光学に関する知識に基づいてできるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 屈折・視力検査に関する演習の事前に、関連科目で得た知識について、作成したノートを中心として復習しておくこと。この科目の専用ノートを用意すること。演習中に学んだこと、気づいたことなど随意記入して学習成果の向上につなげること。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 演習によって習得した検査の目的や検査手技に関する知識を関連各科目の学習に生かしていきたい。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 他覚的屈折検査：オートレフラクトメーター（松田） 自覚的屈折検査Ⅰ：レンズ交換法（乱視表による乱視矯正） 瞳孔間距離測定（松田） 自覚的屈折検査Ⅱ：クロスシリンダーの原理（松田） 自覚的屈折検査Ⅱ：レンズ交換法（クロスシリンダーによる乱視矯正）（松田） レンズメーター測定法、眼鏡の種類（松田） 演習1<演習は180分（4時間）で行う> 自覚的屈折検査Ⅰ：レンズ交換法（乱視表による乱視矯正） 全員参加 演習2<演習は180分（4時間）で行う> 角膜形状解析検査Ⅰ ケラトメーター（佐藤） 演習3<演習は180分（4時間）で行う> 自覚的屈折検査Ⅱ：レンズ交換法（クロスシリンダーによる乱視矯正） 演習4<演習は180分（4時間）で行う> レンズメーターⅠ：単焦点レンズ測定（丹沢） 演習5<演習は180分（4時間）で行う> レンズメーターⅡ：累進多焦点レンズ測定（丹沢） <p>定期試験 筆記、実技</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験70%、実技試験30%							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する。				参考文献は適宜説明する。			
備考							
グループ演習です。自分が行った検査を振り返り、その日に学んだことを10個以上ノートにまとめていきましょう。上手いかなかったことは、グループ内で話し合っって課題を明確にし、次のステップへとつなげていきましょう。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		生理光学演習Ⅱ (屈折矯正)			○松田育子、田中健司 佐藤奈美、丹沢慶一	准教授、助教、 助教、講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 講義で学んだ眼光学に関する知識について、診療で実際に使用される検査機器を用いて検査の方法を具体的に演習し、得られた検査結果の分析と解釈を学ぶ。あわせて、疾病の病状検査の異常すなわち評価や診断に向けての応用を学ぶ。ここでは、検影法、コントラスト感度、対数視力などについて学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 眼光学に関する知識に基づいて、検査ができるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 角膜、コンタクトレンズに関する演習の事前に、関連科目で得た知識について、作成したノートを中心として復習しておくこと。この科目の専用ノートを用意すること。演習中に学んだこと、気づいたことなど随意記入して学習成果の向上につなげること。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 演習によって習得した検査の目的や検査手技に関する知識を関連各科目の学習に生かしていきたい。 <必要時間>各回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 検影法の原理（佐藤） 2. 検影法の実際（佐藤） 3. 対数視力検査、縞視力検査、コントラスト感度検査（松田） 4. 演習1<演習は180分（4時間）で行う> 5. 他覚的屈折検査Ⅰ： 検影法（模型眼を使って測定）（佐藤） 6. 演習2<演習は180分（4時間）で行う> 7. 他覚的屈折検査Ⅱ： 検影法（実際）（佐藤） 8. 演習3<演習は180分（4時間）で行う> 9. 調節検査： 調節近点、遠点測定（丹沢） 10. 演習4<演習は180分（4時間）で行う> 11. 他覚的屈折検査+自覚的屈折検査：眼科一般検査の進め方1、および、近見視力矯正（松田） 12. 演習5<演習は180分（4時間）で行う> 13. 他覚的屈折検査+自覚的屈折検査：眼科一般検査の進め方2、および、字ひとつ視力検査（松田） 14. 演習6 15. 他覚的屈折検査+自覚的屈折検査：眼科一般検査の進め方3、および、安全への配慮（松田） <p>定期試験 筆記、実技</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験70%、実技試験30%							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する。				参考文献は適宜説明する。			
備考							
グループ演習です。自分が行った検査を振り返り、その日に学んだことを10個以上ノートにまとめていきましょう。上手くいかなかったことは、グループ内で話し合っって課題を明確にし、次のステップへとつなげていきましょう。							

科目区分		授業科目名			担当教員		職名
専門科目		眼薬理学			○大庭 紀雄 河合 憲司		特任教授 非常勤講師
視能検査学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 眼科の診療や視能矯正や視能訓練の対象となるさまざまな疾病や病態の検査・診断・治療のために用いられる薬剤、薬物のあらましを学習する。具体的には、各種点眼薬、内服薬、注射薬に加えて各種の検査に用いられる薬剤の薬理や薬効、投与方法、副作用について講義する。</p> <p><学修の到達目標> 1) 点眼薬の作用、使用法の特徴について説明することができる。 2) 散瞳薬、調節麻痺薬の代表的薬剤の作用機序、点眼方法、薬効、適応疾患、副作用を述べることができる。 3) 点眼、結膜下注射、眼内注射、球後注射による薬剤投与方法の調書・短所、適応疾患を説明することができる。 4) 点眼麻酔薬の代表的薬剤、適応を述べるができる。 なお、授業の開始時に「学習ノート」を配布する。常時携行して学習成果をあげていくことが大切である。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 他科目のノートを点検して、薬剤関連事項を復習する。本科目の「講義ノート」を繰り返し読み込むこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> レポートなどは課さない。「学習ノート」を読んで講義内容を再確認すると共に、修正、加筆などで内容を充実させること。 <必要時間>各回60分</p>			
授 業 計 画							
<p>ここに記載したシラバスに基づいて、薬剤の効果、作用機序、適応となる検査や病態、副作用を学習する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 眼疾患における薬剤投与Ⅰ. 局所投与（点眼、局所注射） 眼疾患における薬剤投与Ⅱ. 全身投与 瞳孔薬（自律神経薬）：眼底検査と散瞳薬：トロピカミド、エピネフリン 屈折・調節検査と薬剤（自律神経薬）：塩酸シクロペントラート、硫酸アトロピン：副作用 眼圧下降薬：ベータブロッカー：プロスタグランジン製剤：炭酸脱水酵素阻害薬：高浸透薬 抗菌薬、抗ウイルス薬（アシクロビル）。抗アレルギー薬、副腎皮質ステロイド薬、非ステロイド系抗炎症薬 代謝拮抗薬、免疫抑制薬、抗血管因子増殖薬 麻酔薬：塩酸オキシプロカイン、生体染色用薬剤：フロレセイン染色、ローズベンガル染色 蛍光眼底造影検査：フルオレセインナトリウム、インドシアニングリーン 演習講義：瞳孔薬、調節麻痺薬 演習講義：眼圧降下薬、抗菌薬、抗ウイルス薬 薬効評価、臨床試験、薬剤の副作用、有害効果 演習講義 薬剤の処方、投薬のコンプライアンス 環境汚染物質と眼 <p>授業終了時に「学習ノート」の点検評価、定期試験を行う。</p>							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
<p>折にふれて形成的評価を行って学習成果の向上をはかる。講義終了時には、単位認定試験として眼の薬理学や主要な薬剤について十分に理解しているかどうかを評価する。試験はノート持ち込み可能で、客観式問題を出題する。試験の範囲は講義で扱った部分に限る。「学習ノート」の評価・(40%) 定期試験の成績 (60%)</p>							
使用教科書				参考図書			
特になし				特になし			
備 考							
<p>講義のキーとなる内容は板書する。この科目の「学習ノート」に講義内容をノートすることが大切である。箇条書きではなく、独自の文章を作成すること。自分だけのノートを創作したいものである。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		視機能検査学演習Ⅰ（眼科一般検査）			○野原尚美、丹沢慶一 佐藤奈美	教授、講師 助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能検査の種類は多岐にわたる。各種の視機能検査の演習を通して、各講義で学んだ内容の理解を深める。また、検査原理、方法、検査の解析を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①各検査の原理を理解し、説明することができる ②各検査の方法を習熟し実施することができる ③各検査の正常値を理解し実施した検査結果の分析を行うことができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 行う内容を大まかに理解しておく。既習した他科目の関連事項は復習しておく</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 演習後のレポートを作成する。自分が行った方法について適切な方法であったか、結果から何が言えるか、医学的、科学的に分析する</p> <p><必要時間>各回180分</p>			
授業計画							
1. 細隙灯顕微鏡講義（野原） 2. } 3. } 涙液検査（シルマーテスト、綿糸法）（佐藤） 4. } 5. } 眼位定性検査（角膜反射法、cover test）（佐藤） 6. } 7. } 眼位定量検査Ⅰ（Hirschberg法 Krimsky法 ・ prism cover test）（野原） 8. } 9. } 眼位定量検査Ⅱ（prism cover test）（野原） 10. } 11. } 眼位定量検査Ⅲ（応用）（野原） 12. } 13. } 大型弱視鏡検査Ⅱ（丹沢） 14. } 15. } 大型弱視鏡検査Ⅱ（丹沢） 定期試験 筆記・実技試験							
評価基準・評価方法							
実習開始時の身だしなみの悪い者は実習を行う資格がなくなるので注意すること。毎時間の実習態度（積極性、言葉遣い、声の大きさ、真剣さ、丁寧な取り扱い、レポート提出）が悪い場合は受験資格を与えない。科目終了後に筆記試験（80%）と実技試験（20%）で評価する。							
使用教科書				参考図書			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		視機能検査学演習Ⅱ (両眼視機能検査)			○佐藤奈美、松井康樹 丹沢慶一、野原尚美	助教、教授 講師、教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習・講義
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 両眼視機能検査に関わる内容の検査を演習し、検査原理、方法、結果の解析を学ぶ。また各講義で学んだ内容の理解を深める。病院見学では、眼科に関する眼科スタッフの業務内容、外来の流れを学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> 今まで学んだ両眼視機能や眼位の基本的理論を理解した上で、専門的な分野のひとつである両眼視機能検査を正しく検査を行い、検査結果を分析することができる。 実際眼科で働く視能訓練士の姿から将来の姿を明確にし、視能訓練士として務める意欲がもてることを望む。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 行う演習の内容を大まかに理解しておく。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 演習後のレポート作成。行った演習について適切な方法であったか、結果から何がわかるか医学的、科学的に分析する。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<p>1回の演習は180分（4時間）で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 演習1. 立体視検査 説明（佐藤） (原理、分離方法、判定方法 等) 立体視検査 演習 (偏光フィルタを用いる検査、赤緑眼鏡を用いる検査、眼鏡なしの立体視検査) 演習2. 網膜対応検査 説明（佐藤） (原理、判定方法 等) 網膜対応検査 演習 (Bagolini 線条ガラス検査、worth4灯、残像検査 等) 演習3. 大型弱視鏡 説明（丹沢） (同時視、融像、立体視、9方向眼位、γ角測定、回旋偏位測定 等) 演習4. 大型弱視鏡 演習（松井） (訓練 等) 演習5. 平野病院見学ガイダンス（野原） 平野病院見学 平野病院見学 <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験70%、実技試験30%							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する。				参考文献は適宜説明する。			
備考							
演習授業・病院見学に適した身だしなみで出席すること。 質疑は演習中はもちろん、オフィスアワーにて対応する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能検査学		視機能検査学演習Ⅲ（眼位検査）			○松井康樹、野原尚美 松田育子、田中健司 佐藤奈美、丹沢慶一	教授、教授 准教授、助教 助教、講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	演習
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨地実習Ⅰを目前に控え、基本的な眼科検査を総合的に実践することにより、実習生としての心構えを養う。また、模擬患者との関わりを通して患者への接遇を身につける。</p> <p><学修の到達目標> ① 模擬患者さんに対して、基本的な眼科一般検査、眼位検査、両眼視機能検査が正確にできる。 ② 臨地実習の心得を理解し、実習態度、言葉遣い等の接遇を身につけ、報告、連絡、相談ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今までに学んだ、眼科一般検査および視能矯正関連の各検査について、検査目的、対象、原理、方法、評価、留意点を振り返り、実践できるように準備する。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 実習後に、各自振り返りと今後の課題に向けての目標設定、課題解決のための行動計画策定を行う。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床現場を想定した実習を行うにあたっての目的、方法、心得の説明 2. 0.01以下の視力測定、ヒヤリハットの確認 3. } 臨地実習要項の確認 4. } 5. 模擬患者さんに対する実技演習：課題内容の確認と実習 6. } 模擬患者さんに対する実技演習、ポートフォリオ作成 7. } 8. } 模擬患者さんに対する実技演習の振り返り、今後の課題に向けての目標設定と課題解決のための計画 9. } 10. } 眼科一般検査（他覚的屈折検査、眼圧検査、自覚的屈折検査、眼鏡検査 など）の実施 11. } 12. } 眼位検査、眼球運動検査、両眼視機能検査の実施 13. } 14. } 視野検査、光干渉断層計（OCT）の実施 15. } 定期試験（実技） 							
評価基準・評価方法							
実技演習評価70%、報告会、ポートフォリオ、振り返りの課題30%。							
使用教科書				参考図書			
備考							
毎時間の身だしなみ、実習態度（積極性、言葉遣い、声の大きさ、真剣さ、丁寧さ など）について、注意を受けても改善しない場合は、模擬患者さんへの実技演習が受けられないので注意すること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能検査学演習Ⅳ (眼運動系検査)			○松井康樹、宮本安住己 野原尚美、丹沢慶一	教授、非常勤講師 教授、講師	
視能検査学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義・演習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> この科目は、主に眼運動系の検査について学ぶ。眼球運動検査としてHess赤緑試験、眼球電図、そして眼位に関わる輻湊検査の検査原理、方法、結果の分析を演習を行うことで理解する。また外来業務をする上で、扱うことがでてくる車椅子について正しく理解する。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Hess赤緑試験について原理、方法、注意点、判定方法を理解しすべて実践できる。 2. AC/A比について理解し、測定手技の種類、方法、検査結果の特徴などを理解し、AC/A比を求めることができる。 3. EOGについて由来細胞、網膜機能と眼球運動検査、眼振等の検査方法を知る。検査を行い、判定できる。 4. 車いすの扱いが適切にできる。 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 行う演習の内容を大まかに理解しておく。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容> 演習後のレポート作成。 行った演習について適切な方法であったか、結果から何がわかるか医学的、科学的に分析する。</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<p>1回の演習は180分（4時間）で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 演習1. Hess赤緑検査 原理（松井康樹） 2. 演習1. Hess赤緑検査 測定方法（松井康樹） 3. 演習1. Hess赤緑検査（松井康樹） 4. 演習1. Hess赤緑検査（松井康樹） 5. 演習2. AC/A比の検査 原理（丹沢慶一） 6. 演習2. AC/A比の検査 方法（丹沢慶一） 7. 演習2. AC/A比の検査（丹沢慶一） 8. 演習2. AC/A比の検査（丹沢慶一） 9. 演習3. EOG（眼球運動検査） 原理（野原尚美） 10. 演習3. EOG（眼球運動検査） 方法（野原尚美） 11. 演習3. EOG（眼球運動検査）（野原尚美） 12. 演習3. EOG（眼球運動検査）（野原尚美） 13. 演習4. 車椅子指導 説明（宮本安住己） 14. 演習4. 車椅子指導（宮本安住己） 15. 演習4. 車椅子指導（宮本安住己） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
適宜紹介する。				参考文献は適宜説明する。			
備考							
演習授業に適した身だしなみで出席すること。 質疑は演習中はもちろん、オフィスアワーにて対応する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		画像診断学			○田中 健司 松井 康樹	助教 教授	
視能検査学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>視機能療法に必要な検査として眼部、眼窩及び脳の画像検査と画像診断の基礎的知識を学ぶ。具体的には眼底写真と蛍光眼底血管造影写真を重点項目として学ぶ。さらに OCT、CT、MRI、超音波の諸検査の原理と臨床的意義、適応疾患を学び、必要に応じて検査手技を習得する。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. カメラの種類、特性、露出、撮影の基本的方法を理解できる 2. 眼底カメラ(散瞳型・無散瞳型)の構造と撮像の仕組み、撮影方法(アライメントとピント合わせ)を理解できる 3. 眼底写真を見て、撮像時のアライメントとピントの状態の判断ができる 4. 眼底カメラを用いた立体撮影、特殊撮影方法(FAG、ICG、FAF)の種類と原理が理解できる 5. 眼底カメラを使用し、アライメントとピント合わせを正確にし、眼底写真を撮影できる 6. 前眼部写真、UBM、他、スペキュラーマイクロスコープの原理、撮影部位、対象疾患が理解できる 7. OCT、HRA、HRT、Optos、超音波検査、光学的眼軸長計測装置の原理、検査対象が理解できる 8. X-P、CT、MRI、SPECT、PET それぞれの特性、長所・短所、撮影部位、撮影方法、対象が理解できる 							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容></p> <p>頭部・眼窩・眼球の解剖を理解しておくこと。 視器の解剖と生理Ⅰ及びⅡを理解しておくこと。 眼底写真演習は実際に撮影を行うため、方法を覚えておくこと。 <必要時間>毎回60分</p>				<p><内容></p> <p>写真については演習を行うため、方法、写真のアライメント状態を判断できるようにすること。 演習後はレポートを提出すること。 <必要時間>毎回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 写真の基礎 2. 写真総論、眼底カメラ 3. 眼底写真の見方 4. 眼底写真演習Ⅰ 5. 眼底写真演習Ⅱ 6. 眼底写真演習Ⅲ 7. 眼底写真演習Ⅳ 8. 眼底写真演習Ⅴ 9. 眼底写真演習Ⅵ 10. 特殊写真：フルオレセイン蛍光眼底造影(FAG) 11. 特殊写真：インドシアニングリーン赤外蛍光造影(ICG)、自発蛍光眼底撮影(FA) 12. 前眼部写真、UBM、スペキュラーマイクロスコープ 13. OCT、HRA、HRT 14. Optos、超音波検査 15. 光学的眼軸長計測装置、X線撮影、CT、MRI、SPECT、PET 定期試験 							
評価基準・評価方法							
定期試験(50%)、演習レポート(50%)							
使用教科書				参考図書			
眼科検査ガイド第2版 文光堂							
備考							
講義の際にはプリントを配布する。演習についてはレポートを提出すること。 眼底写真演習には散瞳して演習を行う。よってコンタクトレンズ使用者はコンタクトレンズケースとメガネを持参すること。演習についてはレポートを提出すること。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能障害学		眼疾病学Ⅰ（眼球、眼球付属器他）			○河合憲司、望月清文 内田英哉、石澤聡子	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義（オムニバス）
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 1年次の「視器の解剖と生理で修得した知識に基づいて、視能訓練士としての業務に必要な多種多様の眼疾患の原因、病態検査、診断の全般を学ぶ。特に視機能矯正学や視機能訓練学に直結する疾病を重点的にとりあげる。</p> <p><学修の到達目標> 1) 視力をはじめ視機能の障害をきたす重要な疾病を列挙し、原因、病態、症候、検査、診断、治療を説明することができる。 2) 小児期に起こりやすい疾病の検査法や訓練法の特殊性を理解し、検査や訓練の実際を説明することができる。 3) 加齢に伴う眼疾患の臨床像、検査、治療を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 視器の解剖と生理、視覚生理学Ⅰ、視機能検査学概論を理解しておくこと。 事後学習にて不明な点は次回までに解決しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 当日中にノートに、各疾患についてまとめること。不明な点を明らかにし、次回までに明確にしておくこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 眼瞼・結膜・涙器・角膜疾患（望月清文） 2. 眼瞼・結膜・涙器・角膜疾患（望月清文） 3. 眼の構造と機能の検査（河合憲司） 4. 眼の構造と機能の検査（河合憲司） 5. 麻酔（河合憲司） 6. 麻酔（河合憲司） 7. 眼外傷（河合憲司） 8. 眼外傷（河合憲司） 9. 視神経疾患（石澤聡子） 10. 視神経疾患（石澤聡子） 11. 視神経疾患（石澤聡子） 12. 眼感染症（内田英哉） 13. 眼感染症（内田英哉） 14. 眼感染症（内田英哉） 15. 眼感染症（内田英哉） <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
なし				プリントを配布する場合あり			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能障害学		眼疾病学Ⅱ (遺伝性眼疾患、小児眼疾患他)			○河合憲司、内田英哉 宇土一成、澤田 明	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義 (オムニバス)
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 1年次の「視器の解剖と生理で修得した知識に基づいて、視能訓練士としての業務に必要な多種多様の眼疾患の原因、病態検査、診断の全般を学ぶ。特に視機能矯正学や視機能訓練学に直結する疾病を重点的にとりあげる。</p> <p><学修の到達目標> 1) 視力をはじめ視機能の障害をきたす重要な疾病を列挙し、原因、病態、症候、検査、診断、治療を説明することができる。 2) 小児期に起こりやすい疾病の検査法や訓練法の特殊性を理解し、検査や訓練の実際を説明することができる。 3) 加齢に伴う眼疾患の臨床像、検査、治療を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針 (ディプロマ・ポリシー) と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 視器の解剖と生理、視覚生理学Ⅰ、視機能検査学概論、病理学、眼疾病学Ⅰ、視機能障害学Ⅰを理解しておくこと。 事後学習にて不明な点は次回までに解決しておくこと。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 当日中にノートに、各疾患についてまとめること。不明な点を明らかにし、次回までに明確にしておくこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 水晶体疾患 (宇土一成) 2. 水晶体疾患 (宇土一成) 3. 眼圧・緑内障 (澤田明) 4. 眼圧・緑内障 (澤田明) 5. 眼圧・緑内障 (澤田明) 6. 問診と眼疾患 (内田英哉) 7. 問診と眼疾患 (内田英哉) 8. 眼底疾患・網膜剥離 (河合憲司) 9. 眼底疾患・網膜剥離 (河合憲司) 10. 眼底疾患・網膜血管系 (河合憲司) 11. 眼底疾患・網膜血管系 (河合憲司) 12. 眼底疾患・糖尿病網膜症 (河合憲司) 13. 眼底疾患・糖尿病網膜症 (河合憲司) 14. ブドウ膜炎 (河合憲司) 15. 眼内腫瘍 (河合憲司) <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
筆記試験100%							
使用教科書				参考図書			
なし				プリントを配布する場合あり			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		神経眼科学			○大庭 紀雄 丹沢 慶一	特任教授 講師	
視機能障害学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 視能矯正や視能訓練に必要な神経眼科学の知識を習得する。視神経から第1次視覚野、視覚連合野までの感覚知覚系両眼視機能や眼球運動系、瞳孔調節系の疾病に関わる解剖と生理と病理と検査法と治療法を学ぶ。1年次後学期「解剖（神経系）」に基礎をおいて、2年次「眼疾病学」に繋がる科目である。</p> <p><学修の到達目標> 1) 視覚刺激の入力と応答にかかわる視神経、視路、視覚野の構造と機能を説明することができる。 2) 眼球運動の発現制御靭帯機構、脳神経や外眼筋の構造と機能を説明することができる。 3) 瞳孔、調節に関わる自律神経の構造と機能、虹彩や毛様体の構造と機能を説明することができる。 4) 眼瞼の運動に関わる神経、筋およびその病態を説明することができる。 5) 神経眼科疾患の病態、臨床事項について視能訓練士が直面する問題を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 「講義ノート」を繰り返し読み込むこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 「学習ノート」を充実させることにつきる。</p> <p><必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 授業計画（シラバス）の説明。学習目標、到達目標、当該科目の医療、特に眼科における位置を説明する。 瞳孔の解剖と生理；虹彩の平滑筋、自律神経、対光、近見、精神の各反射経路。Edinger-Westphal 核 瞳孔の検査法と瞳孔異常：相対的求心性瞳孔反応異常（RAPD）；瞳孔不同；Horner 症候群；瞳孔緊張症 視神経の解剖・生理・病理：視神経炎、虚血性視神経症；レーベル遺伝性視神経症、多発性硬化症、視神経脊髄炎+A53 視交叉部の解剖・生理・病理：両耳側半盲（脳下垂体腺腫） 視路の解剖・生理・病理：視野検査（同名半盲）、黄斑回避 第1次視覚野、連合野の解剖・生理・病理：視覚情報処理の背側経路と腹側経路。 演習講義：視覚系異常：視力、視野、色覚、瞳孔、電気生理学（網膜電図、視覚誘発脳波）、神経画像検査 演習講義：眼球運動系の解剖・生理・病理：脳神経（動眼神経、滑車神経、外転神経）、外眼筋 演習講義：眼球運動異常 1. 末梢神経障害（核下性麻痺）。麻痺性斜視。大型弱視鏡、Hess 赤緑試験 演習講義：眼球運動異常 2. 核上性眼球運動障害：注視麻痺（共同運動異常）、Parinaud 症候群 機械的 eyeball 運動障害：強度近視性固定斜視、甲状腺眼症、Brown 症候群、眼窩底骨折 全身疾患と神経眼科：多発性硬化症、脳血管障害、脳腫瘍、心因性視覚障害 神経眼科疾患の診断と治療 総括 神経眼科学の総括、学習到達度評価 授業終了直後：ノート充実度点検評価、定期試験 							
評価基準・評価方法							
<p>授業形態は講義であるから、知識獲得の到達度測定値を評価基準とする。「演習講義」は、国試準拠客観試験問題10題ほどへの回答を求めてから各問を解説する。いずれも成的意義をもつものである。単位認定と成績判定には、授業計画終了直後の「学習ノート内容充実度評価点」（40%配分）および「定期試験結果評価点」（60%配分）を総合して行う。</p>							
使用教科書				参考図書			
<p>視能訓練士に向けた神経眼科学の教科書は存在しない。今回の講義録そのものが教科書とみなして、独自の教科書を作成する意欲をもって毎回の授業に臨むべきである。</p>				<p>配布印刷物を参考書とする。国試準拠演習問題（および正解表）などはB5サイズで配布するから、A4のノートにセロテープで添付すること。</p>			
備 考							
<p>「学習ノート」の記述は、単なる項目の羅列ではいけない。授業中に書ききれない部分は加筆、訂正、考察、資料補充を付け加えて文章形式で書き改めて内容の充実を図ることが大切である。こうした趣旨から、レポート作成などはいっさい課さない。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能障害学		視機能障害学Ⅰ (神経疾患、前眼部疾患他)			松井 康樹	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能障害を起こす疾患は多種多様である。視能療法を行う視能訓練士は、主訴、現病歴、既往歴、症状や所見から原因を考え、鑑別するための検査の選択し、その結果の判定ができることが必要である。その結果から診断がつき、治療をすることになるので、その治療方法についても知る必要がある。そのためには各組織の特徴を理解していることが必須である。よって、この科目では、解剖学、視覚生理学、眼疾病学、視能検査学、視能訓練学と総合的に理解することを目的とする。「視能障害学Ⅰ」では、神経疾患、前眼部疾患、透光体疾患について学ぶ。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 視覚器の構造を理解できる 2. 自律神経について理解できる 3. 動眼神経、滑車神経、外転神経の核の位置、走行の特徴を理解し、支配する組織とその作用を理解する 4. 外眼筋の解剖と生理、走行と作用を理解する。また、支配神経を理解し、各神経・各筋または重複障害の症状、原因部位を診断できる 5. 脳内と視器に関係する血管系について理解できる 6. 眼窩・眼瞼・涙器・強膜・結膜・角膜の構造と疾患の原因、症状、検査、鑑別診断、治療方法について理解できる 7. 眼感染症の種類と各疾患の原因、症状、検査、鑑別診断、治療方法について理解できる 8. 眼科に関係する薬剤名と作用・副作用について理解できる。また医原性の眼科疾患について理解できる 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 視覚器の構造について理解をしておくこと全身と頭部の神経、血管系について理解しておくこと <必要時間>毎回90分</p>				<p><内容> 視覚器の構造・生理を理解し、視能障害を来す疾病について、しっかり理解するようにする <必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 自律神経、動眼神経、滑車神経 2. 外転神経、三叉神経、顔面神経、神経眼科 3. 視器の構造と発生 4. 外眼筋の解剖・生理、外眼筋疾患とその検査、麻痺性斜視 5. 脳内と目の血管 6. 眼窩・眼瞼・涙器、強膜 7. 虹彩、毛様体Ⅰ 8. 虹彩、毛様体Ⅱ 9. 結膜・角膜疾患Ⅰ 10. 結膜・角膜疾患Ⅱ 11. 眼感染症疾患Ⅰ 12. 眼感染症疾患Ⅱ 13. 眼感染症疾患Ⅲ 14. 問診と疾患 15. 医原性疾患、眼薬理 定期試験 							
評価基準・評価方法							
定期試験80%、小テスト20%							
使用教科書				参考図書			
現代の眼科学第12版 金原出版、 視能学第2版 文光堂、 英和・和英 眼科辞典 医学書院							
備考							
復習すること。そして質問し不明な点はなくすこと。休み時間やオフィスアワーを活用し、自主学習にも力を注いで理解してください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能障害学Ⅱ (網脈絡膜疾患、視路疾患他)			松井 康樹	教授	
視能障害学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>視機能障害を起こす疾患は多種多様である。視能療法を行う視能訓練士は、主訴、現病歴、既往歴、症状や所見から原因を考え、鑑別するための検査の選択し、その結果の判定ができることが必要である。その結果から診断が付き、治療をすることになるので、その治療方法についても知る必要がある。そのためには各組織の特徴を理解していることが必須である。よって、この科目では、解剖学、視覚生理学、眼疾病学、視能検査学、視能訓練学と総合的に理解することを目的とする。「視能障害学Ⅱ」では、網脈絡膜疾患、視神経疾患、視路の疾患、頭蓋内疾患について学び、必要な検査とその結果を予想できるようにする。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 水晶体、網膜、硝子体、視神経について各組織の構造と疾患の原因、症状、検査、鑑別診断、治療方法について理解できる 2. 緑内障の分類、原因、症状、検査とその解釈、治療方法について理解できる 3. 視路を理解し、各部位による視野異常の違いを理解できる。視野異常の種類を理解できる 4. 虹彩の構造と神経支配を理解し、瞳孔の異常を示す疾患名と各疾患の原因、特徴、症状、鑑別診断を理解する 							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 視覚器の構造について理解をしておくこと</p> <p><必要時間>毎回90分</p>				<p><内容> 視覚器の構造・生理を理解し、視能障害を来す疾病について、しっかり理解できるようにする</p> <p><必要時間>毎回90分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 水晶体の解剖・生理と疾患・検査Ⅰ 2. 水晶体の解剖・生理と疾患・検査Ⅱ 3. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅰ 4. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅱ 5. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅲ 6. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅳ 7. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅴ 8. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅵ 9. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅶ 10. 網膜・硝子体の解剖・生理と疾患・検査Ⅷ 11. 緑内障、視神経疾患Ⅰ 12. 緑内障、視神経疾患Ⅱ 13. 緑内障、視神経疾患Ⅲ 14. 視路・視野異常 15. 瞳孔の異常 <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験80%、小テスト20%							
使用教科書				参考図書			
現代の眼科学第12版 金原出版、 視能学第2版 文光堂							
備考							
復習すること。そして質問し不明な点はなくすこと。休み時間やオフィスアワーを活用し、自主学習にも力を注いで理解してください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能障害学特論			説田 雅典	非常勤講師	
視能障害学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能障害学特論として、3年間の知識を結び、より理解を深め国家試験に対応できる事を目的とする。ここでは、眼疾病、診断に必要な検査、検査結果解析や治療法、また視覚障害に関する知識を深める。特に、臨地実習で習得した知識技術を生かし、患者の主訴や状態から導き出せる疾患や必要な検査、治療を関連づけて理解する。</p> <p><学修の到達目標> 1) 眼疾病について必要な知識を整理し、特徴ある所見を列挙する事ができる。 2) 個々の疾患に必要な検査は何か、またその検査結果、治療法はどうかを導き出す事ができる。 3) 国家試験に求められる知識を身につける事ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今までに学んだことを復習すること。その授業に関連する内容の過去の国家試験問題を解いておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 国家試験に向けて知識を整理し、確実に身につけること。また授業で解けなかった問題の誤答処理を行うこと。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 網膜の解剖・生理について 2. 光学的機器（OCT/IOL マスター）に関する検査について 3. 視覚障害について 4. 身体障害者手帳や視覚補助具について 5. 眼循環の検査について 6. 眼循環障害1 7. 眼循環障害2 8. 黄斑部疾患 9. 角膜疾患1 10. 角膜疾患2 11. 小児疾患1 12. 小児疾患2 13. ぶどう膜疾患1 14. ぶどう膜疾患2 15. 生理光学 調節検査 視力検査について 定期試験 							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（100%）							
使用教科書				参考図書			
視能学 第2版 丸尾敏夫他編集 文光堂 2011 現代の眼科学 第12版 所敬ほか編集 金原出版 2015年				OCT アトラス 第1版 吉村長久、他著 医学書院 2012 イラスト眼科 第7版 渡辺郁緒、他著 文光堂 2003			
備考							
授業中に内容が書き取れない場合や、不明な点は授業後に時間を設けます。授業内容は、日程により変わる場合があります。その際は事前に伝えます。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能療法関係法規			宮本 安住己	非常勤講師	
視能訓練学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 前学期 (30年度は開講しない)	1単位 (15時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>視能訓練士の業務を行う上で視能訓練士法をはじめ関連法規を理解する必要がある。1年次に学習した視能訓練士としての科目や福祉の科目の理解が必要である。それをふまえて、社会における視能訓練士の役割についても考える。グループでの調べ学習や発表を行う予定である。</p> <p><学修の到達目標></p> <p>①視機能療法に関係する種々の法規について、自グループの担当した項目について自ら情報を収集することができる</p> <p>②グループのメンバーと協力して収集した情報をまとめることができる。</p> <p>③グループでまとめた内容を自分ひとりで他のグループに説明することができる。</p> <p>④視能訓練士の業務と関連する種々の法規について説明することができる</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> グループで決めたテーマについて、下調べをしておく。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 授業中に話し合ったことはまとめて、不明点は調べる。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 講義の進め方。視機能療法関係法規とは。 眼科医療に関するコ・メディカル職種と法規 視能訓練士と保健医療施設、感染症、臓器移植に関する法律 視能訓練士と母子保健法、高齢者の医療に関する法律、 視能訓練士と学校保健安全法、労働安全衛生法、 視能訓練士と生活保護法、児童福祉法、身体障害者福祉法 視能訓練士法 視機能療法関係法規に関するグループ発表と相互評価 定期試験 							
評価基準・評価方法							
講義内の調査・発表・相互評価（50点）、定期試験（50点）							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫他編集 文光堂							
備考							
オフィスアワーは、主に授業終了後、そのほかメールや掲示板については授業初日に説明する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能訓練学概論			宮本 安住己	非常勤講師	
視能訓練学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	1年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 視能訓練士はリハビリテーション職種に分類される。視能訓練士が行う訓練は、多岐にわたる。現在、早期発見のための検査も重視されているが、視能訓練士はもともと訓練を行う職種として誕生した。医学の進歩により、訓練の内容も変化してきた。視機能訓練に関する基本的知識を学ぶ。</p> <p><学修の到達目標> ①斜視と斜位の違いが説明できる。 ②両眼視機能の簡便な検査の原理を理解し、行うことができる。 ③ロービジョンケアはどのようなことを行うか説明できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 最も必要な事前学習は、前回の講義内容の理解である。それ以外に必要なときは、講義内で指示する。 <必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 適宜、復習課題を提供するので取り組むこと。実際に行った検査は、何回も練習してください。 <必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 視能訓練士が行う訓練について 斜視の検査と訓練に必要な用具。固視目標と遮閉具作成。 斜視と斜位。遠見眼位と近見眼位 両眼視機能の基本的知識。 両眼視機能の簡便な検査。輪通し法。Two pencils 法。 立体感が得られる画像作成。 両眼視機能の訓練に用いる用具。棒読書器。輻湊訓練。 前半小テスト。網膜正常対応。 弱視の基本的知識。医学的弱視、社会的弱視。 弱視の訓練の基本。屈折矯正と健眼遮閉。 家庭訓練の用具作成。 両眼視機能の異常と訓練。 ロービジョンケア ロービジョンに対する検査・補装具・訓練 視能訓練士としての訓練まとめ。 定期試験 							
評価基準・評価方法							
講義内の課題・小テスト（50%）、定期試験（50%）							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫他編（文光堂）							
備 考							
オフィスアワーは原則、講義終了後であるが、それ以外については、講義初日に連絡する。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学Ⅰ (視機能訓練学,基礎)			野原 尚美	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 斜視・弱視に対する訓練の知識と技術を学ぶ。具体的には視力増強訓練、両眼視訓練、眼球運動訓練、光学的視能矯正、薬理的視能矯正、などの視能訓練について学ぶ。また、症例ごとにどのような治療や訓練を取り入れていくのか症例を呈示しながら理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①斜視・弱視の診断ができる。 ②視能訓練を理解し、斜視や弱視のタイプによって、適切な治療法、訓練方法が選択できるようにする。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今までに学んだ視能矯正学について復習し、斜視・弱視の分類を理解しておくこと。また屈折異常は斜視と関係が強い特に関係が強い遠視と近視や、調節について理解しておく事。毎回の講義の終わりに、次回の講義の予習となる内容を提供するので、調べ学習を行うこと。 <必要時間>各回90分</p>				<p><内容> 毎回の講義の後に、授業の内容を確認しながら、配布したノートを作成すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 斜視の治療方法について（どんな治療方法があるのか） 調節性内斜視の症例呈示（必要な検査、検査結果の見方） 調節性内斜視の症例呈示（診断、今後の経過、治療） 斜視の光学的矯正（内斜視と遠視の屈折矯正） 間歇性外斜視の症例呈示（診断、今後の経過、治療） 斜視の光学的矯正（外斜視と近視の屈折矯正） 輻輳不全型間歇性外斜視の症例呈示（必要な検査、検査結果の見方） 輻輳不全型間歇性外斜視の訓練（抑制除去訓練、生理的複視認知法、3点カード、融像カード、フレミングカードなど） 観血療法（手術時期、適応） 観血療法（術式） 不同視弱視の症例呈示（必要な検査、検査結果の見方、今後の経過、治療） 弱視の視能矯正（完全矯正と遮蔽法） 弱視の視能矯正（ペナリゼーション・モアジョンソン法） その他の訓練（日常視下での両眼視訓練） 斜視の光学的矯正（眼振のプリズム矯正） <p>定期試験 筆記</p>							
評価基準・評価方法							
評価方法は、定期試験（80%）、事前調べ学習と事後のノート作成（20%）							
使用教科書				参考図書			
視能学（第2版） 文光堂 この講義で使用するノートを事前に配布する。				視能矯正理論と実際 金原出版 眼科検査ガイド 視能矯正学 金原出版			
備 考							
事後学習でノートを作成する際は、授業中に書き取ったノートの写しだけでなく、調べ学習を取り入れたノートにすること。例えば、授業で出てきた内容に関係することや、分からなかったところなどを図書室を利用して参考図書などで調べ、その内容を加えて書くと授業内容が更に深められる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		視機能訓練学Ⅱ (視機能訓練学、斜視)			丹沢 慶一	講師	
視能訓練学							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 斜視に対する視能訓練を学ぶ。斜視を分類する検査法とその結果からの判定をし、その治療・訓練法を学ぶ。 具体的には、麻痺性斜視、筋原性斜視、機械的斜視について、臨床的な特徴と必要な検査、そして検査結果の評価ができるようになることを目指す。 また、眼鏡処方のための検査は、光学的治療の基本であり、今まで学んだ知識を総合的に活用できることを目指す。 <学修の到達目標> A-V型斜視、麻痺性斜視、筋原性斜視、機械的斜視について、臨床的な特徴と必要な検査が何故必要なのか理解できるようになる。 眼鏡処方のための検査を実際にどのように進めるか、今まで学んだ生理光学的な知識、眼疾患の知識、斜視・弱視の知識を総合的に活用できるようになる。また、患者から多くの情報を引き出すことがポイントなることを理解できるようになる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 1年次後期「基礎視機能矯正学Ⅰ」「基礎視機能矯正学Ⅱ」「視器の解剖と生理学Ⅰ」「視器の解剖と生理学Ⅱ」の知識を基に授業を進める。必要な知識を振り返りながら授業を行います。あらかじめ復習をしておくこと。 <必要時間> 毎回90分</p>				<p><内容> 理解を深めるために、早いうちからノートを整理しておくことを勧める。 <必要時間> 毎回90分</p>			
授 業 計 画							
1. A-V型斜視		臨床所見、上方視、下方視、頭位異常					
2. A-V型斜視		水平筋説、斜筋説、上下直筋説、手術					
3. 眼球運動障害		分類、経路、各神経の走行					
4. 眼球運動障害		麻痺性斜視の定義、眼筋麻痺の他覚的・自覚的症狀					
5. 核上性障害、核間麻痺							
6. 核・核下性障害		動眼神経麻痺、滑車神経麻痺					
7. 核・核下性障害		外転神経麻痺、全眼筋神経麻痺					
8. 全外眼筋麻痺、神経筋接合部障害							
9. 筋原性障害、機械的斜視、眼窩内病変							
10. 斜視手術							
11. 斜視手術							
12. 屈折矯正		レンズの種類					
13. 屈折矯正		屈折矯正における留意点					
14. 眼鏡		眼鏡の名称、プリズム眼鏡、フレネル膜プリズム					
15. 眼鏡処方の実際、眼鏡処方の手順、注意点 定期試験							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
定期試験90%、小テスト10%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫編集 文光堂 視能学エキスパート視能訓練学 日本視能訓練士協会 監修 医学書院				適宜紹介する。 必要時にはプリントを配布する。			
備 考							
復習すること。そして質問し不明な点はなくすこと。休み時間やオフィスアワーを活用し、自主学習にも力を注いで理解してください。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学Ⅲ (視機能訓練学、弱視)			佐藤 奈美	助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能訓練学Ⅲでは、主に弱視について専門知識と訓練を学ぶ。弱視にはいろいろな種類と原因があり、治療法も異なる。弱視の分類する検査法とその結果からの判定を理解し、その治療・訓練法について学ぶ。視能訓練士にとって、重要な分野であるので、随時確認問題を行うことで復習を行いながらひとつずつ理解を深める。</p> <p><学修の到達目標> ①弱視の定義を説明することができる。 ②弱視の種類と特徴を説明することができる。 ③弱視の検査法の理論が理解でき結果を分析することができる。 ④治療法の適応と限界を説明することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 教科書にて「弱視」の分野に目を通し、過去に習った項目は理解して授業に臨めるよう準備しておく。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 授業の内容を復習し、次の授業内容につなげられるよう理解を深めておくこと。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 弱視総論、小児視力の発達と特性 2. 弱視の病因・定義・分類 3. 弱視の視力検査 4. 固視の検査 5. 弱視の鑑別診断 6. 不同視弱視、屈折異常弱視 7. 斜視弱視、微小斜視弱視、形態覚遮断弱視 8. 小テスト、弱視の基本的事項まとめ 9. 弱視の検査1（固視検査） 10. 弱視の検査2（屈折検査、調節麻痺薬、4プリズム基底外方試験） 11. 弱視の検査3（両眼性固視検査） 12. 弱視の治療1 13. 弱視の治療2 14. 弱視視能矯正 15. 心因性視覚障害 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
定期試験（80%）、小テスト・レポート（20%）							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫他編集 文光堂 視能学エキスパート視能訓練学 日本視能訓練士協会 監修 医学書院				適宜紹介する 必要時にはプリントを配布する			
備考							
復習をきちんと行って下さい。質問等があれば、随時受け付けます。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学Ⅳ (視機能訓練学、ロービジョン)			○田中 健司 丹沢 慶一	助教 講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 前学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 臨地実習を前に、2年生までに修得した知識をより臨床に即し適応させることを目的とし、総合的に考えることができるようにする。</p> <p><学修の到達目標> ①主訴からどんな疾患が疑われるか、問診を行うことができる。 ②眼科一般検査の検査目的、原理、方法、正常値を答えることができる。 ③各検査項目や検査結果を関連付けて考えることができる。 ④視能訓練、ロービジョンについて理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 2年生までに習ったことを総復習しておくこと。 前回の講義内容を復習し理解しておくこと。</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 臨床現場において、実際の症例と知識・技術が結びつくように、学んだことが活用できるようにノートを整理すること。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 眼の構造と機能（田中健司） 2. 眼疾患の問診 全身病と眼（田中健司） 3. 症状と検査の進め方 眼瞼、涙器、結膜、角膜、強膜疾患（田中健司） 4. 症状と検査の進め方 水晶体疾患（田中健司） 5. 症状と検査の進め方 網膜硝子体疾患（田中健司） 6. 症状と検査の進め方 緑内障（田中健司） 7. 症状と検査の進め方 瞳孔の異常（丹沢慶一） 8. 症状と検査の進め方 核上性眼球運動異常（丹沢慶一） 9. 症状と検査の進め方 視神経・視路の疾患（丹沢慶一） 10. 症状と検査の進め方 外眼筋疾患（丹沢慶一） 11. 症状と検査の進め方 小児の眼疾患（丹沢慶一） 12. 症状と検査の進め方 斜視（丹沢慶一） 13. 症状と検査の進め方 弱視（丹沢慶一） 14. ロービジョンの定義と範囲（田中健司） 15. ロービジョン患者に対する視覚補助具の選定と誘導方法（田中健司） 							
評価基準・評価方法							
課題レポート、課題ノート、講義時の発言により総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版（文光堂 編集：丸尾敏夫 他） 現代の眼科学第12版（金原出版）				適宜紹介する。 必要時にはプリントを配布する。			
備考							
講義のはじめに症例を提示する。その症例に対してグループで、疑われる疾患やその特徴、必要な検査や検査結果についてディスカッションをし、発表してもらう。最後に教員がフィードバックを行う。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学Ⅴ (視機能訓練学、総括)			大庭 紀雄	特任教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視機能不良や視機能障害やロービジョンを訓練によって改善する方策の重点事項について、2年次に行った講義を繰り返し行うことによって学習成果の向上をはかる。</p> <p><学修の到達目標> 視能訓練士としての業務遂行に十分な知識を身につけ、機器操作を実践することができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> この講義の学習のためのノートを一冊用意すること（サイズは任意）。ルーズリーフは認めない。 <必要時間>各回60分</p>				<p><内容> 各専門科目の眼病理学関連事項についてノートを参照すること。 <必要時間>各回60分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 視機能訓練学総論 2. ロービジョン総論 3. 視力不良改善策Ⅰ：斜視弱視 4. 視力不良改善策Ⅱ：不同視弱視 5. 視力不良改善策Ⅲ：形態覚遮断弱視 6. 両眼視機能改善Ⅰ：斜視の検査 7. 両眼視機能改善Ⅱ：斜視の光学的矯正 8. 両眼視機能改善Ⅲ：斜視の視機能矯正 9. コミュニケーション訓練（点字、カナタイプ、パソコン訓練） 10. 職種開発（あんま、はり、きゅう） 11. 日常生活訓練、調理、裁縫、身辺処理、白杖歩行） 12. 視覚補助具：拡大読書器、光学的補助具、単眼鏡、弱視眼鏡 13. 遺伝性眼疾患の遺伝相談（genetic counseling） 14. 身体表現性障害（心因性視覚障害） 15. 視機能訓練の脳内基礎、脳の可塑性 定期試験 筆記 							
評価基準・評価方法							
<p>講義開始時のプリテスト、中間における中間テストによって学習到達度を測定し、講義内容のさらなる改善をはかる。講義終了時においては、視機能訓練学のあらましについて講義内容を理解しているかどうか、視能訓練士としての業務遂行に十分であるかどうかを、客観式問題による筆記試験によって評価する。単位認定試験においては学生独自のノートを参照させることとする。</p>							
使用教科書				参考図書			
適宜説明する。				参考文献は適宜説明する。紙資料は原則として使用しない。			
備考							
<p>講義のキーとなる内容は板書する。この科目の専用ノートを用意すること。とにかく講義内容をノートすることである。箇条書きや良くない、日本語で独自の文章を作成すること。生涯活用できる自分だけのノートを創作したいものである。講義中の質疑を歓迎する。良質の質疑応答は聴講者すべてに裨益するところが大きい。良質質問は評価の対象とする。</p>							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学演習			○松井康樹、野原尚美 松田育子、丹沢慶一 佐藤奈美、田中健司	教授、教授 准教授、講師 助教、助教	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	3年次 前学期	1単位 (30時間)	演習
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 視能訓練士としての業務は多岐にわたる。今まで学んできたことを実践につなげるよう、グループで演習に取り組む。臨床現場を想定して実践力を基礎から積み上げるよう積極的な参加を求める。</p> <p><学修の到達目標> ①視機能訓練に必要な基本的知識を身につける。 ②症状によって適切な検査と治療を理解する。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に配布プリントの練習問題を自分で解く。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 必要に応じて練習問題を配布する。 講義内で随時確認テストを行う。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 視力検査 他覚的屈折検査 自覚的屈折検査 眼科一般検査（レンズメータ、色覚検査、CFF） 眼科一般検査（眼圧検査、涙液検査、スペキュラーマイクロスコープ） 視野検査（動的視野） 視野検査（静的視野） 眼底写真、光干渉断層計 遮閉法の種類と適応 眼位検査 眼球運動検査 両眼視機能検査（立体視検査、網膜対応検査） 斜視の視機能訓練 弱視の視機能訓練 大型弱視鏡 定期試験 							
評価基準・評価方法							
実技試験（30%）、筆記試験（50%）、レポート（20%）で総合的に評価する。							
使用教科書				参考図書			
なし				視能学第2版、丸尾敏夫他編集 文光堂			
備考							
オフィスアワーは学期初めに掲示する							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学特論Ⅰ（基礎）			宮本 安住己	非常勤講師	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 斜視に関しての基礎的知識を統合し、理解を深める。練習問題を取り入れ実践力を養う。</p> <p><学修の到達目標> ①斜視の各型、眼球運動異常の各型の原因や特徴、治療法が簡潔に説明できる。 ②斜視の症状による適切な検査と治療を説明することが出来る。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 事前に配布プリントの練習問題を自分で解く。</p> <p><必要時間>各回30分</p>				<p><内容> 必要に応じて練習問題を配布する。 講義内で随時確認テストを行う。</p> <p><必要時間>各回30分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 両眼視機能と眼球運動 2. 向き眼位と上下筋の作用 3. 眼筋麻痺と向き眼位による眼位異常の関係 4. 共同性斜視の種類 5. 共同性斜視の検査 6. 共同性斜視の治療 7. 非共同性斜視の種類と原因 8. 非共同性斜視の検査と治療 9. 斜視の非観血的治療法 10. 斜視の非観血的治療法 11. 訓練の方法と適応 12. 斜視の観血的治療法 13. 偏心固視弱視の治療 14. 一般的な斜視の検査と治療まとめ 15. 特殊な斜視の検査と治療まとめ <p>定期試験</p>							
評価基準・評価方法							
定期試験（100%）							
使用教科書				参考図書			
なし				視能学第2版、丸尾敏夫他編集 文光堂			
備考							
オフィスアワーは原則授業終了後、それ以外については、講義の初めに伝える。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目 視能訓練学		視機能訓練学特論Ⅱ（応用）			野原 尚美	教授	
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修 選択				○	3年次 後学期	1単位 (30時間)	講義
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要> 斜視・弱視に関しての知識のみならず、他の疾患や解剖の知識を統合し、臨床で通用する視機能訓練を身につける。</p> <p><学修の到達目標> ①眼球運動障害による麻痺性斜視について理解できる（眼球運動の経路、種類、治療まで）。 ②視路障害と瞳孔障害を理解できる（神経線維の走行、対光反応経路、障害部位による視力、視野、瞳孔反応の異常まで）。 ③眼科で使用される薬剤について理解できる。 ④斜視・弱視の視能矯正について理解できる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 今まで学んだ知識を総合的に活用できることを目指すため 3年前期までに学んだことを復習しておくこと。 <必要時間>各回120分</p>				<p><内容> 国家試験に向けて知識を整理し確実に身につけると共に、国家試験問題にも取り組む。 <必要時間>各回180分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 眼球運動異常（眼球運動の種類と経路） 2. 眼球運動障害（核上性・核性障害） 3. 眼球運動障害（核下性障害・麻痺性斜視） 4. 眼球運動障害（神経筋接合部、筋性、機械的、異常神経支配による特殊な斜視） 5. 視路と対光反射異常（神経線維の走行と対光反射の経路） 6. 網膜、視神経炎、うっ血乳頭、視交叉とその近傍の疾患、外側膝状体、視放線、後頭葉の異常と視野 7. 病的散瞳、病的縮瞳、対光反射異常および近見反射異常、点眼試験 8. 眼科で使用される薬剤について（自律神経の解剖を含む） 9. 薬物の投与方法 10. 抗菌薬・真菌薬・抗ウイルス薬 11. 副腎皮質ステロイド 12. 染色剤・麻酔薬 13. 斜視の視能訓練と治療（非観血療法） 14. 斜視の視能訓練と治療（観血療法） 15. 弱視の視能訓練 							
評価基準・評価方法							
定期試験100%							
使用教科書				参考図書			
視能学第2版 丸尾敏夫編集 文光堂				適宜紹介する また、必要時にはプリントを配布する			
備考							
国家試験に向けて知識を整理し確実に覚えるようにすること。講義だけでなく、自ら積極的に学び、自主学習をおこなうこと。3年間の総まとめとなる。							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		臨地実習 I			野原 尚美 他	教授	
臨地実習							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	2年次 後学期	3単位 (135時間)	実習
選択							
授業概要・学修の到達目標							
<p><概要>「臨地実習 I」は2年次後期(例年2月)に4週間にわたって実施する。目的は、視能訓練士の役割、責任、医療人としてのマナーを見聞して自己を啓発するとともに、自己の適性について考えることである。加えて、視能訓練士の職能について、視機能に問題を抱える患者と関わりながら、今まで学んできた知識が診療現場でどう生かされているかを体験学習して、3年次に策定される臨地実習 II が充実したものとなるよう準備することも目的とする。</p> <p><学修の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 当該の医療施設における診療の仕方・検査器機・施設の組織運営を理解する。 2) 医療チームにおける視能訓練士の役割を把握し、視能訓練士が関わる業務の目的や専門性を理解する。 3) 学内の講義や演習で学んだ知識や手技が診療現場において活用されているかを把握し、実習終了後に学ぶ専門的知識を効果的に獲得できるよう基盤づくりに努める。臨地実習 II を有意義にするための準備作業とする。 							
卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 臨地実習要項をしっかりと読み、把握する。 (20時間程度)</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> その日の実習によって学んだことをノートに整理する。指導者からの助言や指導に対する対策を学び、自分にとっての新たな発見や見聞、問題の提起、その翌日の実習計画などの項目について、指導者との対話を参考として系統立てた文書を作成する。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授業計画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習前オリエンテーション(学内) : 臨地実習 I の目的、手順、心得、マナー、個人情報などの指導を行う。 2. 4週間の学外実習を実施する 3. 内容 : 自己紹介、カンファレンス参加、担当患者などの情報収集、実習指導者の指導・監督の下で検査の実施 4. 症例レポートの作成 : 臨地実習で自分が何を学んだのかを振り返りながらレポートを作成する 5. 実習報告会 : 学生間の報告と意見交換を実施する。レジュメを作成し発表を行う。 							
評価基準・評価方法							
臨地実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果、学内での症例検討会の内容をもとに学内で認定する。							
使用教科書				参考図書			
これまで使用した全てのテキスト 臨地実習要項				図書館に多くの専門書が揃えてあるので、所持している教科書で調べても分からない場合は、実習のない日などに図書室を利用するとよい。			
備考							

科目区分		授業科目名			担当教員	職名	
専門科目		臨地実習Ⅱ			野原 尚美 他	教授	
臨地実習							
区分	看護学科	リハビリテーション学科			配当年次	単位数 (時間数)	開講形態
		理学	作業	視機能			
必修				○	3年次 通年	11単位 (495時間)	実習
選択							
授 業 概 要 ・ 学 修 の 到 達 目 標							
<p><概要> 「臨地実習Ⅱ」においては、2年次の「臨地実習Ⅰ」で学んだことに基づいて、指導者の下、現場にさらに接近して診療の実践に参画して、国家資格取得後に直ちに業務を遂行できるレベルの視能訓練士を目指して様々な実習を行う。</p> <p><学修の到達目標> 1) 医療専門職にふさわしい、責任ある態度・積極的な行動を身につけ業務を遂行することができる。 2) 患者の問題点、その原因を掴むために、必要かつ適切な検査を行うことができる。 3) 視能訓練士として、必要な記録および報告ができる。</p>							
卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）と授業科目の関連					P.24のカリキュラムマップを参照してください。		
事前学習				事後学習			
<p><内容> 臨地実習要項をしっかりと読み、把握する。 (20時間程度)</p> <p><必要時間>各回60分</p>				<p><内容> その日の実習によって学んだことをノートに整理する。指導者からの助言や指導に対する対策を学び、自分にとっての新たな発見や見聞、問題の提起、その翌日の実習計画などの項目について、指導者との対話を参考として系統立てた文書を作成する。</p> <p><必要時間>各回120分</p>			
授 業 計 画							
<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習前オリエンテーション（学内）：臨地実習Ⅰの反省のもとで、臨地実習Ⅱの目的、手順、心得、マナー、個人情報などの指導を行う。 2. 11週間の学外実習を実施する 3. 内容：自己紹介、カンファレンス参加、担当患者などの情報収集、実習指導者の指導・監督の下で検査の実施 4. 症例レポートの作成：個々の患者について一連のデータを整理して診療録に相当するレポートを作成する きちんとした症例報告書を作成することによって診療現場での検分では得られない医療情報を素材として、視能訓練士としての視点から観察、洞察、表現、分析の力が開発されることが期待される。 5. 実習報告会：学生間の報告と意見交換を実施する。レジュメを作成し発表を行う。 							
評 価 基 準 ・ 評 価 方 法							
臨地実習の評価表を用いる。担当実習指導者の判定結果、学内での症例検討会の内容をもとに学内で認定する。							
使用教科書				参考図書			
これまで使用した全てのテキスト 臨地実習要項				図書館に多くの専門書が揃えてあるので、所持している教科書で調べても分からない場合は、実習のない日などに図書室を利用するとよい。			
備 考							

